ISBN 978-4-86337-017-3
Studia Culturae Islamicae No.94
MEIS Series No.10

ČINGĪZ-NĀMA

Ötämiš Ḥājī

Introduction, Annotated Translation, Transcription
and Critical Text
by
Takushi KAWAGUCHI, Hiroyuki NAGAMINE
Supervision: Mutsumi SUGAHARA

**Research Institute for
Languages and Cultures of Asia and Africa
(ILCAA)**

『チンギズ・ナーマ（*Čingīz-nāma*）』　正誤表（Corrigenda）

頁（page）・行（line）	誤（error）	正（correction）
p. ix, l. 4	qaranġġü	qaranġġu
p. xxiv, n. 43, l. 2	ペルシア語史書	ペルシア語文献
p. xxxiv, l. 7	Highnes	Highness
p. xxxiv, l. 21	occuping	occupying
p. xxxv, l. 12	Stepp	Steppe
p. xxxviii, l. 1 p. xxxix, l. 12	magin	margin
p. 3, l. 24	ムハージールーン	ムハージルーン
p. 9, n. 22, l. 15	исследвание	исследование
p. 9, n. 22, l. 22	*1975*	*2005*
p. 15, l. 6-7	一万人のキヤト［部族］とユラルダイ［部族］	キヤト・ユラルダイ［配下］の一万人
p. 18, l. 16	—カラ・キョルを	—はカラ・キョルを
p. 37, n. 87, l. 6-7	*Ḥāfiẓ Abrū*; text	*Ḥāfiẓ-i Abrū*; texte
p. 43, n. 105, l. 6	可能	可能性
p. 80, l. 2	Külük	Külüg
p. 83, l. 5; p. 86, l. 4-5 p. 88, l. 1	Mengä; mengä	Manga; manga
p. 93, l. 5	Begkä	Beggä

『チンギズ・ナーマ（*Čingīz-nāma*）』

ウテミシュ・ハージー（Ötämiš Ḥājī）著

解題・訳註・転写・校訂テクスト

川口琢司・長峰博之編　菅原睦校閲

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
2008

ČINGĪZ-NĀMA

Ötämiš Ḥājī

Introduction, Annotated Translation, Transcription and Critical Text

by
Takushi KAWAGUCHI, Hiroyuki NAGAMINE
Supervision: Mutsumi SUGAHARA

RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA
ILCAA 2008

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa
Tokyo University of Foreign Studies

3-11-1 Asahi-cho Fuchu-shi
Tokyo 183-8534
Japan

ISBN 978-4-86337-017-3

Studia Culturae Islamicae No.94
The Research and Educational Project for Middle East and Islamic Studies (MEIS) Series No.10

Printed by Fujiwara Printing co., Ltd

序

本書は、16世紀半ばまでにジョチ・ウルス[1]の継承政権である「ヒヴァ・ハン国」においてウテミシュ・ハージーがアラビア文字チャガタイ語で著した史書『チンギズ・ナーマ』の解題・訳註・転写・校訂テクストである。

遊牧政権は文字史料をあまり残さなかったため、これまで多くのジョチ・ウルス史研究はおもに外部（ティムール朝、マムルーク朝、ロシアなど）の同時代史料の断片的な記述に依拠してきた。そのため、ジョチ・ウルス史研究には依然として不明な部分が多く、ときに研究上の混乱が生じてきた。一方、後代になると、ジョチ・ウルスの継承政権において独自の情報を含む諸史料が著されるようになる。これらは、遊牧社会の口頭伝承の伝統を背景にしている部分もあるが、英雄叙事詩とは異なり、記述史料を利用した史書としての性格を有するものである。なかでも、『チンギズ・ナーマ』は、ジョチ・ウルス史研究において高い史料的価値を持つ文献であり、すでにV.P. ユーヂンによるタシュケント写本のファクシミリ・ロシア語訳・キリル文字転写が刊行されている[2]。しかし、その重要性にもかかわらず、『チンギズ・ナーマ』の史料的価値は多くの先行研究において必ずしも正確には認識されてこなかった。また、ユーヂンの研究もいまとなっては問題点が少なくなく[3]、加えて、校訂テクストはいまだ出版されていない。以上の状況を鑑み、ここに『チンギズ・ナーマ』の解題・訳註・転写・校訂テクストを刊行し、今後のジョチ・ウルス史研究の発展に少しでも益することを願うものである。

---

[1] キプチャク草原を中心にチンギス（チンギズ）・ハンの長男ジョチの子孫が支配した遊牧政権であり、大きくは、ジョチの次男バトゥの子孫が支配する右翼ウルスと、長男オルダの子孫が支配する左翼ウルスに分かれていた。しかし、14世紀後半にはじまる混乱のなかで、断絶したオルダ家とバトゥ家にかわってジョチの五男シバンと十三男トカ・テムルの子孫が台頭し、15～16世紀にかけて、トカ・テムル家はキプチャク草原東部に「カザク・ハン国」、西部に「カザン・ハン国」「アストラハン・ハン国」、クリミア半島を中心に「クリミア・ハン国」を樹立し、シバン家は西シベリアの「シベリア・ハン国」を継承する一方、マー・ワラー・アンナフルに南下しティムール帝国を滅ぼして「シャイバーン朝（アブールハイル朝）」、ホラズムに「ヒヴァ・ハン国」を樹立した。

[2] Утемиш-хаджи, *Чингиз-наме*, Факсимиле, перевод, транскрипция, текстлогические примечания, исследование В.П. Юдина, Подготовила к изданию Ю.Г. Баранова, Комментарии и указатели М.Х.Абусеитовой, Алма-Ата, 1992.

[3] 例えば、36aのキリル文字転写の欠落、ロシア語訳の誤り、そして校訂註・キリル文字転写・ロシア語訳の不一致などの問題点などが見受けられる。

本書を上梓するにあたり、東京外国語大学の菅原睦准教授には本書の校閲と主として言語学の視点からの序文をお願いし、数々の貴重な助言や御意見をいただいた。また、本書を刊行することができたのは、ひとえに東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の近藤信彰准教授の御尽力によるものである。さらに、近藤氏からは本書の内容全体に関わる貴重な助言をもいただいた。ここに記して謝意を表したい。

川口琢司　長峰博之

校閲者序

13世紀に中央ユーラシアから西アジアの大部分がモンゴルの支配を受けるようになったことは、テュルク諸語の歴史にとって、それに先立つイスラーム化とは違った意味で重要な出来事であったと言うことができる。即ち、モンゴル支配によって引き起こされた人口移動と言語状況の変化を契機として、いくつかの地域に新しい文章語が現れ始めたのである。これら新しく登場した文章語からは、既にそれぞれの方言的基盤の相違を認めることができ、それゆえこの時代のテュルク語文献は現代テュルク諸語との関連においても重要なデータを提供するものである。

従来、中央ユーラシア地域におけるこの時期のテュルク語文章語は、いわゆる「チャガタイ語」によって代表され、その「チャガタイ語」はまたナワーイーやバーブルらティムール朝宮廷文人がその作品で用いた言語、すなわち「古典時代チャガタイ語」で代表される傾向にあった。しかしながら、「古典時代チャガタイ語」成立の背景にどのような文章語の伝統や口語の状況が存在したのか、言い換えればこの言語の文章語としてのあり方という問題をめぐっては、いまだ解明されていない点が多く残されている。同様にまた、しばしば言われるチャガタイ語の地理的な広まりということに関しても、今後再吟味が必要であると思われる。

ここに校訂テクストおよび訳註を提出するウテミシュ・ハージー著『チンギズ・ナーマ』は、ティムール朝以後の時代に、上記の文人たちの主な活動舞台からはやや離れた地域で書かれたチャガタイ語散文文献のひとつとして、内容面ばかりでなく言語面からも注目されるものである。残念なことに、今回我々が参照することができたのはタシュケントに所蔵される一写本のみであり、そこに原著者ウテミシュ・ハージー自身の言語特徴がどの程度忠実に反映されているかを確定することは容易ではない。以下では、このタシュケント写本から窺い知ることができる範囲内で、この作品の言語特徴について述べてみたい。

まず最初に気付くのは、この作品の言語が、いわゆる古典時代チャガタイ語に比べてより古風と見なされる要素を含んでいる点である。例えば動詞 te-「言う」や後置詞 teg「～のような」は、いずれも対応する古典時代チャガタイ語 de-, dek に比べてより古い形である。また teyür「言う」、yüriyür (yorïyur)「歩む」に見られる動詞アオリスト形の接尾辞 -yür や、bilmäyin「知らずに」、teyü「～と言って」などに見

られる副動詞接尾辞 -mäyin, -yü も、古典時代チャガタイ語においては既に用いられなくなっていたか、あるいは用法が限られていた要素である。さらに erdi「～であった」、ermäs「～でない」などにおけるコピュラ動詞 er- や、後置詞 birlä「～とともに、～によって」についても、『バーブル・ナーマ』（16世紀前半）においてそれぞれ edi, emäs, bilä がより優勢であったことを考え合わせるならば、『チンギズ・ナーマ』の言語の古風な性格の表れと言ってよい。

一方 yaġmur「雨」では古典時代チャガタイ語 yamġur と異なり -ġm- > -mġ- の音位転換が見られない。また3人称所有接尾辞と格接尾辞とのあいだのいわゆる pronominal -n- に関しては、aniṅg xānlïqïnġa「そのハン位に対して」、közlärindin「その両目から」のようにこれを維持した形と、iki qollarïġa「その両手に」、atasïdïn「その父よりも」のようにこれを消失させた形とが並存しており、特に散文において pronominal -n- の消失が進んでいた古典チャガタイ語との相違点となっている。しかしこれらの特徴はまた地域的な方言差にも対応しているため、『チンギズ・ナーマ』の言語が同時代の口語要素を取り入れた結果である可能性もある。実際『チンギズ・ナーマ』タシュケント写本の言語に、少数ではあるが barman「私は行かない」、bilmän「私は知らない」、dägül「～でない」といった、テュルク語オグズ（南西）語群の特徴を示す例が見出されることから考えるならば、yaġmur や pronominal -n- の維持が同じくオグズ語群の言語に由来する可能性も否定できないであろう。

ところで、『チンギズ・ナーマ』の特徴のひとつは、それがジョチ・ウルス継承政権において著された史書であるという点にある。かつてロシアのサモイロヴィッチは、ジョチ・ウルスにおいて用いられたテュルク語文語を、後のティムール朝時代の（狭義の）「チャガタイ語」と区別して扱うことを提唱した。さらに彼は、このジョチ・ウルス文語に由来するいくつかの要素が、ホラズムをはじめとする地域のテュルク語文献において20世紀に至るまで保たれていたことを示唆した。このことは言い換えれば、ティムール朝宮廷文学で知られる狭義の「チャガタイ語」が、それ以前に存在していた中央アジア・テュルク語文章語に完全に取って代わったのではないことを意味する。もしそうであれば、上で見た『チンギズ・ナーマ』タシュケント写本に見られる「古風な」言語特徴とは、いずれもかつてのジョチ・ウルス文語から直接受け継がれたものであるという推定が可能となろう。またオグズ語群の要素が見られることも、ジョチ・ウルス文語（または「ホラズム・テュルク語」）がオグズ語群（およびキプチャク語群）の影響を明確に受けていたこととも何ら矛盾しない。さらにここで用いられているアラビア文字正書法にも注目すべき特徴が見られる。すなわち aṭ「馬」、aṭlan-「出馬する」に見られる強調音文字 ṭ の使用、bärü「～以来」の第1音節母音 ä の文字アリフによる表示、qaranġġü「暗闇」における綴り字 -NKĠ- は、いずれも古典時代チャガタイ語の一般的な綴り字とは異なるが、一方でこれらは『天国への道』、『預言者たちの物語』といった14世紀テュルク語文献の現存写本に見られる綴り字と共通しているのである。以上のことを考え合わせるならば、『チンギズ・ナーマ』タシュケント写本の言語には、かつてのジョチ・ウルスにおける文章語の伝統がある程度まで反映されており、それらはおそらく著者であるウテミシュ・ハージーに由来するものと考えてよいであろう。

中央ユーラシアにおいては、オスマン語のような国家権力と結びついた「強力な」テュルク語文章語が現れなかったこともあり、各地域における文章語の使用状況はかなり複雑であったと推定される。その実態の解明のためには、『チンギズ・ナーマ』に代表される各種文献資料が言語面からも詳しく分析されることが不可欠である。本出版がその契機となれば幸いである。

菅原　睦

目次（Contents）

解題

研究史

『チンギズ・ナーマ』の写本は、不完全なタシュケント写本と、タシュケント写本より優れているとされるが所在不明となっているA.Z.V.トガンの私蔵写本の二種類しか現在確認されていない。このうち、前者のタシュケント写本の最初期の書誌情報は1889年のカリの写本カタログに見られるが[1]、この写本にもとづいて『チンギズ・ナーマ』を最初に学術的に紹介したのは旧ソ連の碩学V.V.バルトリドであった。バルトリドは、1904年の論文「トルキスタン出張報告」において、テクストの一部を紹介しながらいくつかの考察を行った[2]。バルトリドの考察は、一方で『チンギズ・ナーマ』の記述の伝承的要素を指摘しつつも[3]、基本的にその史料的価値を認めるものであった。しかし、A.Yu.ヤクボフスキーやM.G.サファルガリエフなどの旧ソ連のその後のジョチ・ウルス史研究においては、『チンギズ・ナーマ』が用いられることはなかった。

一方、トガンは1915年の論文「フェルガナ地方の東洋学の諸写本」において、オレンブルグでタタール語の雑誌『シューラー』の編集長であったR.ファフレッディン[4]から入手したという、タシュケント写本よりも「比べものにならないほど完全な」写本について報告している[5]。その後、トガンはこの写本とともにトルコ共和国に亡命したため、このトガンの私蔵写本を利用した研究はもっぱらトルコ共和国の研究者によってなされた。そのような研究として、トクタミシュまでのジョチ・ウルスの政治史・国制を考察したM.カファルの研究[6]やA.イナンの研究[7]が挙げられる。ま

---

[1] Е.Ф. Каль, *Персидскія, арабскія и тюркскія рукописи Туркестанской публичной библіотеки*, Ташкентъ, 1889, p. 52. タシュケント写本の書誌情報としては、*Собрание восточных рукописей академии наук Узбекской ССР*, т. 1, ed. A.A. Семенов, Ташкент, 1952, p. 65; H.F. Hofman, *Turkish Literature: A Bio-Bibliographical Survey*, section III (Chaghatai), part I (Authors), 6 vols., Utrecht, 1969, vol. 6, pp. 72-74も参照。

[2] В.В. Бартольд, "Отчет о командировке в Туркестан," *Сочинения,* т. 8, Москва, 1973, pp. 165-169.

[3] В.В. Бартольд, "Шейбаниды," *Сочинения,* т. 2, ч. 2, Москва, 1964, p. 545.

[4] 小松久男「《シューラー》」「ファフレッディン」『中央ユーラシアを知る事典』小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編, 平凡社, 2005.

[5] А.-З. Валидовъ, "Восточныя рукописи въ Ферганской области," *Записки Восточного отделенія (Имп.) Русского археологического общества*, т. 22, ч. 2, 1915, p. 320.

[6] M. Kafalı, *Altın Orda Hanlığının Kuruluş ve Yükseliş Devirleri,* İstanbul, 1976.

[7] A. İnan, ""Kitab-i Dede Korkut" hakkında," *Türkiyat Mecmuası*, I, 1925, pp. 213-219.

た、ドイツのB.シュプーラーもジョチ・ウルス史研究[8]のためにトガンの私蔵写本を閲覧したが、その重要性に気づかず、極めて部分的な利用にとどまった。トガンはこの私蔵写本の公刊を計画していたが、残念ながら実現されないままに終わり[9]、現在この写本は所在不明となっている。わずかに、トガン自身やカファルなどの研究からある程度この写本の内容を窺い知ることができるのみである。

このような状況において、遊牧社会の口頭伝承の重要性に注目したユーヂンは、「遊牧民の口承による歴史的知識を記録」したものとして、『チンギズ・ナーマ』をはじめとしたジョチ・ウルスの継承政権内部で著された諸史料[10]を「草原の口承史料（степная устная историография / историология）」と定義し、その史料性を高く評価した[11]。ユーヂンはタシュケント写本にもとづく一連の論文において、『チンギズ・ナーマ』がジョチ・ウルス史研究の争点であった「アク・オルダ（白帳）」と「キョク・オルダ（青帳）」の問題、オロスの系譜の問題などの解決に大きく寄与することを示した[12]。さらにユーヂンは『チンギズ・ナーマ』のロシア語訳・キリル文字転写を準備していたが、それは彼の死後（1983年没）10年近くも経た1992年にタシュケント写本のファクシミリ、そして彼の一連の論文とともに刊行された[13]。『チン

---

[8] B. Spuler, *Die Goldene Horde: Die Mongolen in Rußland 1223-1502*, Leipzig, 1943.

[9] cf. Ç. Uluçay and M.B. Dickson, "Unpublished Works of Prof. Z.V. Togan," *Zeki Velidi Togan'a Armağan*, İstanbul, 1950-55, pp. xlvii-xlviii.

[10] このような史料として、ユーヂンは、16世紀初頭のシャイバーン朝史料である無名氏の『選史・勝利の書』、17世紀初頭にカシモフでカーディル・アリーにより著された『集史』、17世紀にホラズムでアブールガーズィーにより著された『テュルク系譜』を挙げている。また、18世紀にクリミアでアブデュルガッファールにより著された『諸情報の要諦』に注目したU.シャミルオグルは、ジョチ・ウルスの継承政権下で編纂された諸史料を「テュルク語叙述史料（the Turkic narrative sources）」と呼んでいる（U. Schamiloglu, "The *Umdet ül-Ahbar* and the Turkic Narrative sources for the Golden Horde and the Later Golden Horde," *Central Asian Monuments*, ed. by H.B. Paksoy, Istanbul, 1992, pp. 81-93）。

[11] В.П. Юдин, "Орды: Белая, Синяя, Серая, Золотая...," *Чингиз-наме*, pp. 25-26; В.П. Юдин, "Переход власти к племенным биям и неизвестной династии Токатимуридов в казахских степях в XIV в. (К проблеме восточных письменных источников, степной устной историографии и предыстории Казахского ханства)," *Чингиз-наме*, p. 57.「草原の口承史料」という用語について、ユーヂンは最初"историография（記述される歴史）"という単語を用いていたが、のちに口頭伝承性を重んじて"историология（語られる歴史）"という単語を用いるようになった。

[12] 訳註22、25参照。

[13] 本書には、「オルダ：白色、青色、灰色、金色・・・」「14世紀のカザフ草原における部族のビーへの権力移行とトカ・テムル家の知られざる王朝（東方の記述史料、草原の口承史料、そしてカザフ・ハン国の前史の問題によせて）」「ウルス・ハンの戦死についての知られざる説（14世紀の東キプチャク草原の政治史から）」「キプチャク草原

ギズ・ナーマ』を本格的にジョチ・ウルス史研究に導入し、その史料的価値を広く知らしめた点、そしてタシュケント写本にもとづくロシア語訳・キリル文字転写を発表した点でも、ユーヂンの功績は大きい。しかし、口頭伝承性を強調するあまり、ユーヂンは『チンギズ・ナーマ』をはじめとしたジョチ・ウルスの継承政権の内部史料を「草原の口承史料」と定義し、とくに『チンギズ・ナーマ』について「記述史料をウテミシュ・ハージーはほとんど利用しなかった」としてしまったことは、後述するように、『チンギズ・ナーマ』の史料的性格に関して大きな誤解を与えることとなった[14]。

ユーヂンの研究によってタシュケント写本の利用が可能になったことにより、『チンギズ・ナーマ』をジョチ・ウルス史研究の重要史料として利用した研究が現れてきている。そのような研究として、ベルケのイスラームへの改宗伝承に関わる諸史料の記述を分析したI.ヴァーシャーリの研究[15]、ウズ・ベグのイスラームへの改宗伝承に関わる情報を網羅的に考察したD.デウィースの研究（『チンギズ・ナーマ』のウズ・ベグの改宗に関わる部分のテクスト・英語訳が付されている）[16]、ジョチ・ウルスの解体と再編の歴史を再構築しようとしたわれわれの研究[17]などが挙げられよう[18]。また、近年、カザフスタンで刊行されている『カザフスタン史に関

の歴史に関する14世紀のシル・ダリヤにおけるキヤト・ジル・クトゥル廟の建設について」の四編の論考が収録されている。

[14] Юдин, "Орды: Белая, Синяя," p. 25.『チンギズ・ナーマ』が口頭伝承のみにもとづいて書かれたという誤解は、A.A.セミョーノフ監修のウズベク社会主義ソヴィエト共和国科学アカデミー東洋学研究所の写本目録にも見られる（*Собрание восточных рукописей академии наук Узбекской ССР*, т. 1, p. 65）。また、ユーヂンの研究書の編者となったB.A.アフメドフや、口頭伝承の研究者である坂井弘紀も、同様の誤解をしている（Б.А. Ахмедов, "От ответственного редактора," *Чингиз-наме*, p. 6; 坂井弘紀「語り継がれる『記憶』」『イスラーム地域研究叢書　8　記録と表象－史料が語るイスラーム世界－』東京大学出版会, 2005, pp. 39-40）。

[15] I. Vásáry, ""History and Legend" in Berke Khan's Conversion to Islam," *Aspects of Altaic Civilization III: Proceedings of the Thirtieth Meeting of the Permanent International Altaistic Conference Indiana University, Bloomington, Indiana June 19-25, 1987*, ed. by D. Sinor, Bloomington, 1990, pp. 230-252.

[16] D. DeWeese, *Islamization and Native Religion in the Golden Horde: Baba Tükles and Conversion to Islam in Historical and Epic Tradition*, Pennsylvania, 1994.

[17] 川口琢司「キプチャク草原とロシア」『岩波講座世界歴史　11　中央ユーラシアの統合－9-16世紀－』岩波書店, 1997, pp. 275-302.

[18] 北川誠一は『チンギズ・ナーマ』を利用してベルケとウズ・ベグの改宗伝承を紹介しているが（『世界の歴史　9　大モンゴルの時代』中央公論社, 1997, pp. 325-352）、そこではウズ・ベグの改宗譚が性急に集団としてのウズベグの形成と結び付けられており、賛同できない。

するテュルク語諸資料』と題するシリーズの第一巻としてユーヂンの研究がカザフ語訳で復刊され、また、第三巻として『チンギズ・ナーマ』の言語学的研究とともに語彙集が刊行されている[19]。

ところで、『チンギズ・ナーマ』が16世紀前半における歴史認識を知るための手がかりとして、また、16世紀前半の同時代史料としての価値を有することはいうまでない。赤坂恒明はその点を強調する一方で、『チンギズ・ナーマ』のモンゴル帝国期の記述の史実性について疑問を呈している。すなわち、シバン家の支配するヒヴァ・ハン国において著された『チンギズ・ナーマ』には「シバン裔中心主義」が認められ[20]、「史料編纂時における同時代的状況を過去に仮託したものが存在し、それらの情報はモンゴル帝国期の史実を伝えたものと見做すべきではない」というのである[21]。しかし、誤解を恐れずにいうならば、そのような政治的傾向は他の少なからぬ史料にも認められるものであり、この一事をもってモンゴル帝国期に関する『チンギズ・ナーマ』の記述をすべて否定するのは極論である。『チンギズ・ナーマ』には独自の情報が多く含まれているが、同時に、他の諸史料によって史実と確認される記述も少なからず存在しているのである。肝要なのは、厳密な史料批判によって史実および史実の反映、そして伝承的要素を見極めることであろう。そして、そのような史料批判をへたうえでなお、われわれは『チンギズ・ナーマ』におけるウズ・ベグの即位前後の事情、ベルディ・ベグ死後のジョチ・ウルスの情勢、トクタミシュに関する情報などに高い史料的価値を見出すのである。

最後に、『チンギズ・ナーマ』の書名について検討しておこう。タシュケント写本には『チンギズ・ナーマ』という書名が付されており、バルトリドやユーヂンはこれを採用している。同写本のなかで著者ウテミシュ・ハージーが書名を明言している箇所はなく、『チンギズ・ナーマ』という書名は書写を含めたどこかの段階で付された仮題であるという可能性は皆無ではない。しかしながら、内容的にはチンギ

[19] *Қазақстан тарихы деректемелерi, I том,* Өтемiс қажы, *Шыңғыс-наме*, Алматы, 2005; *Қазақстан тарихы деректемелерi, III том, Өтемiс қажының "Шыңғыс-намесi" тiлiнiң көрсеткiш-сөздiгi*, Алматы, 2006. また、『チンギズ・ナーマ』の専論として、Д.Ж. Касымова, ""Чингиз-наме" Утемиш-хаджи как этнокультурологический источник," *SHYGYS*, No. 1, 2005, pp. 203-207もある。

[20] 『チンギズ・ナーマ』の記述が著者の庇護者であるシバン家を讃える傾向にあることは、すでにバルトリド、デウィースが指摘している（Бартольд, "Отчет о командировке в Туркестан," pp. 167-169; DeWeese, *Islamization and Native Religion*, p. 148）。

[21] 赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』風間書房, 2005, p. 111-116, 118.

ス（チンギズ）・ハンの物語で始まるため、『チンギズ・ナーマ』という書名にはそれほど違和感がないように感じる。

一方、タシュケント写本より優れているとされる写本を私蔵したトガンは、『ドスト・スルターン史（*Tārīx-i dost sulṭān*）』という書名を用いている[22]。また、カファルは便宜的に『ウテミシュ・ハージー史（*Ötemiş Hacı Tarihi*）』としている[23]。トガンが『ドスト・スルターン史』とした理由は明確ではないが、われわれには知りえない私蔵写本の情報を根拠にしてこのような書名を用いた可能性があり、大きな注目に値する。著者ウテミシュ・ハージーは情報源とした文献として「ドゥースト・スルターン殿下の諸史書（tawārīẖlar）」あるいは「ドゥースト・スルターン殿下のもとにある書冊（daftar）」[24]を挙げており、『ドスト・スルターン史』という書名はこれにちなんだ可能性もある[25]。ここで興味深いのは、18世紀半ば頃にクリミアのアブデュルガッファールによってオスマン語で著された『諸情報の要諦』が、情報源とした文献として「ウズベグのドゥースト・スルターンの史書（Tārīẖ-i Dūst Sulṭān-i Ūzbekī）」「ドゥースト・スルターン殿下の高名なる史書（ḥażrat-i Dūst Sulṭānïng tārīẖ-i mu'tabarī）」「ドゥースト・スルターンの史書（tārīẖ-i Dūst Sulṭān）」に言及していることである[26]。この『諸情報の要諦』に現れる文献は、ウテミシュ・ハージーが情報源とした文献と同一のものとも考えられるが、これがウテミシュ・ハージーの著作そのものを指している可能性もある。しかし、トガンの私蔵写本が所在不明である現時点では、最終的な判断は留保せざるを

[22] A.Z.V. Togan, *Tarihde Usul*, İstanbul, 1950, p. 241. シュプーラー、シャミルオグル、デウィースなどはこの書名を用いている。

[23] Kafalı, *Altın Orda Hanlığının Kuruluş*, p. 154.

[24] Ötämiš Ḥājī, *Čingīz-nāma*, рукопись ИВ АН Р. Узбек., No. 1552/V, facsimile, Утемиш-хаджи, *Чингиз-наме*, pp. II-XLVIII, ff. 43a, 54a; cf. Бартольд, "Отчет о командировке в Туркестан," p. 166. ドゥースト・スルターンについては、訳註50参照。

[25] H.F. ホフマンとデウィースは、本書がドゥースト・スルターンに献呈されたと推測しているが（Hofman, *Turkish Literature*, p. 72; DeWeese, *Islamization and Native Religion*, p. 144）、後述するように、本書はイシュ・スルターンの命によって執筆されたものであり、イシュ・スルターンに献呈された可能性が高い。

[26] 'Abd ül-Ġaffār, *'Umdet ül-Aẖbār*, MS., Süleymaniye Kütüphanesi, Esad Efendi 2331, ff. 2a, 260b, 271b. 本史料については、Schamiloglu, "The *Umdet ül-Ahbar* and the Turkic Narrative sources," pp. 88-93; 川口琢司「ジョチ・ウルスにおけるコンクラト部族」『ポストモンゴル期におけるアジア諸帝国に関する総合的研究』平成11年度～平成13年度科学研究費補助金研究成果報告書, 2002, p. 91参照。本史料については、杜撰な出来だが、校訂本もある（Qïrïmī al-Ḥājj 'Abd ül-Ġaffār, *'Umdet ül-Tawārīẖ*, ed. by Najīb 'Āṣim Bek, İstanbul, 1343）。

えない。ユーヂンの研究により『チンギズ・ナーマ』という書名が定着しつつあること、また、われわれもタシュケント写本を底本にしていることもあり、ここでは『チンギズ・ナーマ』を書名としておく。

著者ウテミシュ・ハージーと『チンギズ・ナーマ』執筆をめぐる状況

『チンギズ・ナーマ』の著者ウテミシュ・ハージーについては、その「ハージー(ハーッジー)」という尊称からマッカ巡礼を果たしたことがわかるが、『チンギズ・ナーマ』に含まれる情報以外にはほとんど何も知られておらず、不明な点が多い。以下、その微細な情報をたどりながら、著者ウテミシュ・ハージーと『チンギズ・ナーマ』執筆をめぐる状況を見ていこう。

ウテミシュ・ハージーは、『チンギズ・ナーマ』の序文なかで自らについて以下のように語っている。

> この卑しき私め、マウラーナー・ムハンマド・ドゥースティーの息子ウテミシュ・ハージーは、主人たる今は亡きハカン陛下ヤードガール・ハンの一門の下僕の子孫たちにして古くからの奉公人の一人である。その地で、私は、慈悲深き主の恩寵によって召されたもっとも偉大なるスルターンにしてもっとも尊敬すべきハン陛下、アブールマンスール・イル・バルス・バハドゥル・ハン―神よ彼の墓を芳しくしたまえ、楽園が彼の住処とされますように―にお仕えしていた。[27]

ここから、ウテミシュ・ハージーの父の名がムハンマド・ドゥースティーであること、シバン家のうちヤードガールの一族に代々仕えてきたこと、そしてウテミシュ・ハージー自身はヒヴァ・ハン国の初代君主とされるイルバルスに仕えていたことがわかる。

さらに、次の記述は、ウテミシュ・ハージーがチンギス家の歴史に精通していたことを窺わせるものとして興味深い。

> これらの者たち[=ウテミシュ・ハージーが仕えていたシバン家]がチンギズ・ハンの子孫たちであり、私はこの王族の恩恵に浴していたので、以下のことをあるがままに知りたいと思った。すなわち、チンギズ・ハンのオグランたちのうち、その草原地方において誰がハンとなったあとに誰がハンとなったか、その後いつまで、またどのような順序で誰々がハンとなってきたのか、これらの者たちのあいだでどのような戦いと出来事が起こったか、これらのすべてをあるがままに知りたいと思った。[しかし、]私が見た諸史書は、これらの者たちのうちのわずかな名前を書きとめたものにすぎなかった。どのような出来事と状況で彼らがハンとなったかは言及されておらず、多くの[者たちの]名前もまた言及されてはいなかった。[しかし、]私はこれらの者たちの状況についてあるがままに知りたいと願っていたので、古い話をよく知っているという人物がいるといえば、必ずその人物のもとに出向き、問い質した。理性の天秤にかけ、受け入れられるものを心に留め、受け入れがたいものは考慮しなかった。そうして、いかなる集まりにおいても古の帝王たちの話に及んで問題が生じると、彼らは私めのもとにやって来て、問い質すようになった。そして、私はこの[話を]語ることによって[人々に]知られるようになった。[28]

すなわち、チンギス家の歴史に強い関心を持ったウテミシュ・ハージーは、諸史書の記述には満足せず、古い話をよく知っている人物のもとに出向いて歴史的知識を得るようになり、ついにはチンギス家の歴史に精通するに至った人物であった。

次に、『チンギズ・ナーマ』執筆をめぐる状況について検討してみよう。

> [イシュ・スルターンは]ヨチ・ハン[=ジョチ・ハン]の子孫たちの諸状況と諸事情、順番に誰から誰のあとに誰がハンとなったか、このときにいたるまでどのような出来事と事情で彼らのあいだにどのような種類の戦いと出来事が起こったか、すべてを明らかにして記憶に留めることを願われた。このため、この卑しき私めを呼んで来させ、このようにして慈悲と哀れみを施しくださり、これらの諸状況についてお尋ねになった。[イシュ・スルターンは、]話が長大であったため聞いただけでは記憶することはできないと思い、ついには「私のためにこれらの話を書き与えよ」とお命じになった。私めはこの者たちの下僕の子たち[の一人]であったので、その命令に背くことはできず、否応なくこの記録の命令を受け入れた。(中略)この序文の意図は、この写しを私めから読み聞きした親愛なる者たち、有力・卑小な者、友人たちへの以下のような要

[27] Ötämiš Ḥājī, *Čingīz-nāma*, f. 36b.

[28] Ötämiš Ḥājī, *Čingīz-nāma*, f. 36b.

> 望にある。すなわち、この写しに書かれたこれらの言葉や話はいかなる記録や史書にもないものであり、そのすべてを私が聞いて書いているが、周知のように、耳にする言葉の大半は偽りと言われている。そこで、もし間違いや誤りが生じたならば、その誤りを取り除き、その間違いを正してほしい。[29]

ここでは、ウテミシュ・ハージーがシバン家のイシュ・スルターン[30]の命令によって『チンギズ・ナーマ』を執筆したことが語られている。さらに、ウテミシュ・ハージーは、ここに書かれたことはいかなる記録や史書にもないものなので、間違いがあったら正してほしい、と謙虚な姿勢も吐露している。

このように見てくると、ウテミシュ・ハージーが『チンギズ・ナーマ』を執筆したのは、イルバルスの死後（1517年没）であり、イシュ・スルターン（1558年あるいは1559/60年没）の生前ということになる。アフメドフは『チンギズ・ナーマ』の執筆年代を16世紀前半とし[31]、ホフマンは1550年[32]、カファルは1551年[33]、トガンとデウィースは1550年代[34]としている。また、赤坂はイシュ・スルターンの兄ドゥースト・スルターンの「スルターン」という称号から、その即位以前としている[35]。残念ながら、正確な執筆年代は確定できないが、1550年代というのは有力な説のように思われる。

『チンギズ・ナーマ』執筆以後のウテミシュ・ハージーについてはほとんど知られていないが、16世紀末のシャイバーン朝（アブールハイル朝）史料である『アブドゥッラー・ナーマ』の記述に注目したトガンは、ウテミシュ・ハージーが1583年にも存命であったと指摘している[36]。それによれば、1583年にシャイバーン朝の君主アブドゥッラー（1598年没）はホラズムのヒヴァ・ハン国との軋轢の仲裁をウテミシュ・ハージーに依頼したという。ここで興味深いのは、ウテミシュ・ハージーがホラズムではなくブハラ周辺にいたと思われることである。あくまで推測であるが、かつての主君であるイシュ・スルターンとドゥースト・スルターンが殺害されたのち、ウテミシュ・ハージーはホラズムを離れたのかもしれない。

---

[29] Ötämiš Ḥājī, *Čingīz-nāma*, f. 37a-b.
[30] イシュ・スルターンについては、訳註13参照。
[31] Ахмедов, “От ответственного редактора,” p. 5.
[32] Hofman, *Turkish Literature*, p. 72.
[33] Kafalı, *Altın Orda Hanlığının Kuruluş*, p. 5.
[34] Togan, *Tarihde Usul*, p.241; DeWeese, *Islamization and Native Religion*, p. 144.
[35] 赤坂『ジュチ裔諸政権史の研究』, p. 278.
[36] A.Z.V Togan, *Bugünkü Türkili Türkistan ve Yakın Tarihi*, cilt I, Batı ve Kuzey Türkistan, 2 baskı, İstanbul, 1981, p. 148.

『チンギズ・ナーマ』の史料的性格

同時代史料の乏しいジョチ・ウルス史研究において、ジョチ・ウルスの継承政権であるヒヴァ・ハン国で著された『チンギズ・ナーマ』は、ジョチ・ウルス史に関して独自の情報を含む重要な史料であり、また当然、16世紀の同時代史料として、遊牧社会内部の歴史認識を探るうえでも、大きな価値を持つものである。『チンギズ・ナーマ』の史料性については否定的な評価も行われてきたが、前述したように、遊牧社会の口頭伝承の重要性に注目したユーヂンが、「遊牧民の口承による歴史的知識を記録」したものとして、『チンギズ・ナーマ』をはじめとしたジョチ・ウルスの継承政権内部で著された諸史料を「草原の口承史料」と定義し、その史料的価値を明らかにした。しかし、ユーヂンの研究が、口頭伝承性を強調するあまり、のちの研究に大きな誤解を与えてしまったことは否定できない。ここでは、これまでの研究で看過されてきた、『チンギズ・ナーマ』の史料的性格に関する重要な側面について考察しよう。

まず、ユーヂンをはじめとした諸研究が、『チンギズ・ナーマ』は口頭伝承のみにもとづくものであり、「記述史料をウテミシュ・ハージーはほとんど利用しなかった」としてきたのは大きな誤解である。上述したように、ウテミシュ・ハージーは、『チンギズ・ナーマ』のなかで情報源とした文献として「ドゥースト・スルターン殿下の諸史書」あるいは「ドゥースト・スルターン殿下のもとにある書冊」を挙げているからである。残念ながら、「ドゥースト・スルターン殿下の史書」については不詳であるが、たとえば、ラシードゥッディーンの『集史』における『黄金秘冊（アルタン・デプテル）』[37]のように、ヒヴァ・ハン国の支配王家であるシバン家（ヤードガール家）に伝わる史書に関連するものが想定される。いずれにせよ、『チンギズ・ナーマ』は記述史料を利用した史書としての性格を有しているのである。

次に、ウテミシュ・ハージーが情報源とした人物を見てみよう。ウテミシュ・ハージーは情報源とした人物として、彼が仕えていたシバン家のイルバルス、トカ・

---

[37] 『黄金秘冊（アルタン・デプテル）』については、小林高四郎「ラシード・エッディーンに見えたる『アルタン・デプテル』について」『モンゴル史論考』雄山閣, 1983, pp. 69-100参照。

テムル家のシャイフ・アフマド、ハージー・タルハン（現アストラハン）地方のハージー・ニヤーズ、「アストラハン・ハン国」の君主アブドゥルカリームの大ベグであったヒタイ・ババ・アリーなどの名を明言している[38]。これらの人物は、素性がはっきりしないハージー・ニヤーズをのぞいて、すべてジョチ・ウルスの継承政権の中枢およびその周辺にいた人物である。すなわち、ウテミシュ・ハージーが得た情報の信憑性の高さが窺われるのである。加えて、これらの人物からの情報は文献の形でもたらされた可能性も大きい。なぜならば、『諸情報の要諦』によれば、これらの人物はみな何らかの著述活動を行っていたことがわかるからである[39]。

さらに、『チンギズ・ナーマ』の記述にはウテミシュ・ハージーの史料批判的態度を読み取れる箇所がある。前述したように、ウテミシュ・ハージーは古い話をよく知っている人物のもとに出向いて歴史的知識を得たわけだが、その際、「理性の天秤にかけ、受け入れられるものを心に留め、受け入れがたいものは考慮しなかった」という。ここには、ウテミシュ・ハージーの真摯な史料批判的態度が如実に現れている[40]。また、ウテミシュ・ハージーは、しばしば「人々が語るには」とか「ウズベグたちが言うには」という言い回しを用いてさまざまな伝承を紹介している。つまり、ウテミシュ・ハージーは、信頼できる情報源にもとづく記述と、そうではない伝承を区別しているのである。ここにも、ウテミシュ・ハージーの慎重な史料批判的態度を見ることができよう。

以上、『チンギズ・ナーマ』の史料的性格について、これまでの研究が看過してきた重要な側面について検討してきた。著者ウテミシュ・ハージーは、少なくとも「ドゥースト・スルターン殿下の諸史書」という文献を利用したうえで『チンギズ・ナーマ』を著したのであり、また、他の文献を参照した可能性も大きい。他の情報

[38] Ötämiš Ḥājī, *Čingīz-nāma*, ff. 51b, 41a, 42b, 54b; cf. Бартольд, "Отчет о командировке в Туркестан," pp. 166-167. これらの人物については、訳註8、40、46、114、115参照。

[39] イルバルスには『ホラズム史』という著作があり、シャイフ・アフマドも何らかの著述を行っていた（'Abd ül-Ġaffār, *'Umdet ül-Aḫbār*, ff. 259a, 264b）。また、ハージー・ニヤーズは「著作家（muwarriḫ）」として知られ、ヒタイ・ババ・アリーは「高名な知の遍歴者（affāq）」なる異名で知られる一方、史書を編纂し、そこではガーズィー・スルターン殿下（イルバルスの息子）から求められたことについて語っているという（'Abd ül-Ġaffār, *'Umdet ül-Aḫbār*, ff. 259b, 266b）。

[40] 赤坂は、『チンギズ・ナーマ』の当該部分の記述をもって「多様な口承伝承のうちから、シバン裔ホラズム王家に都合の良い情報のみを、自身の価値基準であるシバン裔中心主義に従って選択した可能性が高い」としているが（『ジュチ裔諸政権史の研究』, pp. 110-111）、これはまったく根拠のない曲解といわざるをえない。

源を見ても、アストラハン・ハン国などのジョチ・ウルスの継承政権の中枢に保持されていた情報にもとづいていたと思われる。また、口頭伝承の情報にせよ、記述史料の情報にせよ、ウテミシュ・ハージーは慎重な史料批判的態度をもってそれらに臨んでいたことも『チンギズ・ナーマ』の記述から読み取ることができる。すなわち、『チンギズ・ナーマ』は、遊牧社会の口頭伝承の伝統を背景としつつも、あくまで史書としての性格を有するものであり、他の諸史料には見られない独自の情報を含むものとして、ジョチ・ウルス史研究における重要史料として位置づけることができるのである[41]。

『チンギズ・ナーマ』の史料的系譜

最後に、『チンギズ・ナーマ』の史料的系譜について検討しておきたい。

チャガタイ語およびチャガタイ文学は15世紀にティムール朝治下に成立したとされ、マー・ワラー・アンナフルやホラズムから東トルキスタンや北インド、さらにはクリミアやヴォルガ・ウラル地方などへと広まった。韻文作品を中心とした前古典時代（15世紀前半）を経て、古典時代（15世紀後半～16世紀）には詩人ナヴァーイーや自叙伝『バーブル・ナーマ』を著したバーブルが活躍し、シャイバーン朝治下のマー・ワラー・アンナフルでは無名氏の『選史・勝利の書』、ムハンマド・サリーフによる韻文の『シャイバーニー・ナーマ』などのチャガタイ語による史書が著された。後古典時代（17世紀～20世紀初頭）にチャガタイ文学の中心がヒヴァやコーカンドに移ると、ヒヴァにおいてはアブールガーズィーの史書『テュルク系譜』『テュルクメン系譜』（17世紀半ば）、ムーニスとアーガヒーの史書『繁栄の楽園』（19世紀前半）などが著された[42]。また、マー・ワラー・アンナフル、ヴォルガ・

[41] 誤解のないように断っておくが、われわれは『チンギズ・ナーマ』の記述のすべてを史実とみなしているわけではない。『チンギズ・ナーマ』には、他の諸史料と矛盾する記述や、著者ウテミシュ・ハージーの誤解にもとづく記述などもみられる。ただし、それは多くの史料にもありうることであり、『チンギズ・ナーマ』の史料的性格に起因するものではないということである。

[42] 菅原睦「チャガタイ語・文学」『中央ユーラシアを知る事典』小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編, 平凡社, 2005. わが国におけるチャガタイ語文献の主要な研究としては、M. HAMADA, "L'*Histoire de Ḫotan* de Muḥammad A'lam (I)(II)(III)," *Zinbun; Memoirs of the Reseach Institute for Humanistic Studies*, Kyoto University, 15, 16, 18, 1979, 1980, 1982、間野英二『バーブル・ナーマの研究　I～IV』松香堂, 1995-2001、濱田正美『東トルキスタン・チャガタイ語聖者伝の研究』（ユーラシア古語文献研究叢

ウラル地方、東トルキスタンなどにおいてペルシア語文献のチャガタイ語への翻訳も盛んに行われた。

そのなかで、『チンギズ・ナーマ』は、チャガタイ文学の中心がホラズムに移る前の古典時代、すなわち16世紀半ばまでにホラズムにおいて著されたチャガタイ語の史書として注目される。さらに、『チンギズ・ナーマ』は口頭伝承の伝統を背景としつつも、ホラズムのヒヴァ・ハン国の「ドゥースト・スルターン殿下の諸史書」を情報源としたことに加え、アストラハン・ハン国などのジョチ・ウルスの継承政権の中枢に保持されていた情報をもとに著されたと思われ、のちのキプチャク草原の諸史書に大きな影響を与えた。

前述したように、『チンギズ・ナーマ』と共通の情報源を持つ、あるいはこれを参照した可能性の高い史書として、18世紀半ば頃にクリミアのアブデュルガッファールによってオスマン語で著された『諸情報の要諦』がある[43]。内容的には、15世紀前半以前に関して『チンギズ・ナーマ』と類似した部分が多く、『諸情報の要諦』を利用することによって、『チンギズ・ナーマ』のタシュケント写本に欠落している部分をある程度推測することができる。

さらに、17世紀初頭にカシモフにおいてカーディル・アリーによって著されたチャガタイ語の史書『集史』[44]も注目に値する。この史書は、ラシードゥッディーンの『集史』のチャガタイ語抄訳に続けて、14〜16世紀のキプチャク草原について独自の情報を伝えるものだが、ここにも『チンギズ・ナーマ』の影響、もしくは情報源を同じくするような記述が少なからず見られる[45]。また、カーディル・アリーの『集史』にあるエディギュをはじめとしたマングト部に関する記述が、17世紀末に

書4）, 京都大学大学院文学研究科, 2006、久保一之「ナヴァーイー（ミール・アリーシール）の社会観—*Maḥbūb al-qulūb*第1章日本語訳（付. ローマ字転写校訂テキスト）—」『京都大学文学部研究紀要』47, 2008, pp. 183-295などがある。

[43] 『諸情報の要諦』の著者や構成、参照文献などを検討した研究として、川口琢司「18世紀クリミアのオスマン語史書『諸情報の要諦』における歴史叙述—ペルシア語史書からの影響を中心に—」『ペルシア語が結んだ世界』森本一夫・前田弘毅編, 北海道大学出版会（近刊）がある。

[44] この史料については、M.A. Усманов, *Татарские исторические источники XVII-XVIII вв.*, Казань, 1972, pp. 33-96; 長峯博之「『キプチャク草原の港』スグナク—1470〜90年代のトルキスタン地方をめぐる抗争とカザクのスグナク領有を中心に—」『史朋』36, 2003, p. 9参照。

[45] そのような例として、エディギュの系譜やトカ・テムル家によるテンギズ・ブガ殺害の記述などが挙げられる。訳註76、98参照。

成立した無名氏のチャガタイ語文献『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』[46]に編入されている点も興味深い。

このように、これらの『チンギズ・ナーマ』をはじめとする諸史料は内容的に共通する要素を持つわけだが、さらに、歴史認識のあり方において一つの共通する特徴を持っている。『チンギズ・ナーマ』の記述においては、イスラーム的要素も認められるが[47]、全体的には、チンギス家の権威が重んじられ、チンギス家の男系子孫以外はハン位につくことができないという、いわゆる「チンギス統原理」が強く認識されていたことを看取することができる[48]。こうした認識はアブデュルガッファールの『諸情報の要諦』やカーディル・アリーの『集史』にも共通して見られ、ジョチ・ウルスの「イスラーム化」、そしてジョチ・ウルスの解体と再編以後も、ジョチ・ウルスの継承政権が成立したキプチャク草原において「チンギス統原理」が脈々と受け継がれていったことが確認されるのである。

このように見てくると、マー・ワラー・アンナフルやホラズムとは異なる、独自の情報源にもとづくキプチャク草原における歴史叙述の体系というものが浮かびあがってくるのであり、『チンギズ・ナーマ』がそのなかで重要な位置を占めていたことが明らかになろう。このことは、『チンギズ・ナーマ』をはじめとしたジョチ・ウルスの継承政権の内部で著された諸史料の史料的性格を考えるうえで、非常に重要な視座を提供するものである。これらの諸史料は、多くの独自の情報を含むと同時に、キプチャク草原の歴史認識のあり方を鮮明に伝えるものである。これらの諸史料を精査・比較検討することによって、今後、ジョチ・ウルスやその継承政権の歴史、すなわち、キプチャク草原の歴史の再構築が可能となるであろう。

[46] この史料については、小林高四郎「Çengiz nameについて—書誌学的紹介—」『モンゴル史論考』, pp. 195-213; Усманов, *Татарские исторические источники XVII-XVIII вв.*, pp. 97-133参照。

[47] 北川は、『チンギズ・ナーマ』にあるベルケとウズ・ベグの改宗伝承の記述から、ジョチ家の歴史がイスラームの枠に組み込まれ、「16世紀のジョチ家の君主には、すでに自らの王朝の正統性をチンギス・ハンの子孫であることによって主張する必要」はなくなったとしているが（『世界の歴史　9　大モンゴルの時代』, pp. 331-333）、『チンギズ・ナーマ』の記述からはそういった傾向を読み取ることはできず、まったくの憶測である。

[48] 例えば、ハン位を簒奪したカラ・キシ（非チンギス家）のトク・ブガを討ってウズ・ベグが即位する話（Ötämiš Ḥājī, *Čingīz-nāma*, f. 44a-47b）、キヤト部族のテンギズ・ブガを討ってトカ・テムル家のカラ・ノガイが即位する話（Ötämiš Ḥājī, *Čingīz-nāma*, ff. 50b-53a）などにこうした「チンギス統原理」が強く反映されている。

『チンギズ・ナーマ』の写本・校訂本および訳本

1. 写本

- タシュケント写本：ウズベキスタン共和国東洋学研究所蔵の写本（Ötämiš Ḥājī, *Čingīz-nāma*, рукопись ИВ АН Р. Узбек., No. 1552/V, ff. 36a-59a）

現在確認できる唯一の写本。『チンギズ・ナーマ』という書名が付され、他の諸作品とともに合冊されており、ユーヂンの研究書にそのファクシミリが収められている[49]。写本の文字はすべて黒一色で記されており、朱の文字などは見られない。残念ながら、トクタミシュの物語の途中で中断する不完全な写本であり、55a左上部（表）と55b右上部（裏）に大きな破損もある。また、書写の状況も良好ではなく、明らかな間違いや不必要な繰り返し、乱雑な訂正の跡などが散見される[50]。しかし、現時点では本写本に依拠するほかないため、本書もこれを底本としている[51]。

- トガンの私蔵写本

タシュケント写本より「比べものにならないほど完全な」写本というが、現在は所在不明となっている。トガンによれば、書写年代はヒジュラ暦1019（1610-11）年、全75葉の写本で、タシュケント写本はこの写本の15b-46bにあたるという[52]。そうだとすると、タシュケント写本の二倍強の分量を持っていることが想定される。このような価値ある写本が所在不明なのははなはだ残念なことである。ただし、前述したように、トガンの研究やこの写本を利用したカファルらの研究からある程度その内容を窺い知ることができる[53]。

2. 校訂本および訳本

---

[49] Утемиш-хаджи, *Чингиз-наме,* pp. II-XLVIII.

[50] タシュケント写本では、訂正の際には誤った字句に線を引いて削除し、その語句の後や上下に正しい表記を記している。その書体を見ると、本文を筆写した人物の書体と同一のように思われる。

[51] われわれはタシュケントのウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所で本写本を実見調査し、写本状況や破損箇所の確認、字句の確定などを行った。ただし、本書の作成にあたっては、基本的にはユーヂンの研究書に付されたファクシミリを利用した。

[52] А.-З. Валидовъ, "Восточныя рукописи въ Ферганской области," p. 320.

[53] およそ15世紀前半までの記述があり、最後に補遺としてチンギス家の系譜が付されているようである。

- バルトリドによる部分的な校訂テクスト・ロシア語訳（В.В. Бартольд, "Отчет о командировке в Туркестан," *Сочинения,* т. 8, Москва, 1973, pp. 165-169）

タシュケント写本を底本とした、序文、ヒタイ・ババ・アリーに関する記述、ベルケ軍とフラグ軍の戦闘、シバンに関する記述の部分的な校訂テクスト・ロシア語訳。

- ユーヂンによるロシア語訳・キリル文字転写（Утемиш-хаджи, *Чингиз-наме,* Факсимиле, перевод, транскрипция, текстлогические примечания, исследвание В.П. Юдина, Подготовила к изданию Ю.Г. Баранова, Комментарии и указатели М.Х. Абусеитовой, Алма-Ата, 1992, pp. 87-219）

タシュケント写本を底本にした、これまででは唯一の完訳・転写であり、ユーヂンによる校訂註、M.Kh. アブーセイトワによる訳註が付されている。

- デウィースによるウズ・ベグの改宗に関する部分の校訂テクスト・英語訳（D. DeWeese, *Islamization and Native Religion in the Golden Horde: Baba Tükles and Conversion to Islam in Historical and Epic Tradition*, Pennsylvania, 1994, pp. 533-565）

タシュケント写本の48a-49bを底本としたもので、デウィースによる訳註が付されている。

凡例

校訂テクスト

- 綴り字法については、原則的には底本であるタシュケント写本の綴り字にできるだけ忠実に従った。例えば、短母音を表す文字の有無（例えば、بک / بیک beg、بلا / بلا bilä ）、pを表すب、čを表すج、gを表すک、同じ単語につく接尾辞の不統一（例えば、غه ġaとکا gäの混在）、またその他、پیداをفیدا、قلعهをقلقهと表わすなどの特殊な表記法も散見するが、底本の綴り字をそのまま採用した。ただし、所有格の接尾辞nïng/ningについては、نیک / نک / ننک など綴り字の不統一が著しいため、ننکで統一した。
- 原則としては底本の綴り字に従ったが、明らかにںやیの点が省略されていると考えられる場合には補った。
- كوبのように単語の語頭が語末形のكとなっている、あるいは、طائفهのようにハムザとیが混在している変則的な表記が散見するが、これは通常の表記に訂正した。
- 底本としたタシュケント写本は、不完全であることに加えて、残念ながら良質な写本とは言い難く、明らかな単語・文章の繰り返し、誤字・脱字を訂正した箇所などが非常に数多く見られる。このような場合、煩雑さを避けるためにも、とくに註記せずに訂正・削除した。
- 底本としたタシュケント写本は、55aの左上（55bの右上）が破損しているため、四行にわたってテクストの一部が欠落している。
- 底本の葉数、底本の訂正・補足を示すために校訂テクストで用いた記号は以下である。なお、われわれの判断で底本を補足・訂正した箇所については、とくに記号を付さずに註で底本の原形を示した。

  （ ）　底本の葉数を示している。

  ［ ］　底本を補足した箇所を示している。その際、底本の欄外に補足がある場合には＃を、ユーヂンの校訂註を参照した場合には＊を付した。

  ＊　ユーヂンの校訂註を参照して訂正・補足した箇所を示している。その際、訂正した箇所については註で底本の原形を示した。

［Юдин］　底本の表記をそのまま採用した際、またはわれわれの判断で訂正・補足した際に、ユーヂンが校訂註で異なる解釈を示している場合には、その解釈を註で示して［Юдин］と付した。

［Бартольд］　底本の表記をそのまま採用した際、またはわれわれの判断で訂正・補足した際に、バルトリドが異なる解釈を示している場合には、その解釈を註で示して［Бартольд］と付した。

［DeWeese］　底本の表記をそのまま採用した際、またはわれわれの判断で訂正・補足した際に、デウィースが異なる解釈を示している場合には、その解釈を註で示して［DeWeese］と付した。

● ユーヂンが校訂註を付して正しい読みを提示している箇所のなかには、そもそも底本の原形がユーヂンの提示したように読める箇所がある。このような場合、煩雑さを避けるためにもとくに註記しなかった。

転写

● 転写は、われわれが作成したアラビア文字校訂テクストにもとづいて作成した。ただし、語幹と接尾辞のあいだはあけずに続けて表記した。

● 転写法については、子音については以下の規則に従った。

ب b　پ p　ت t　ث s̱　ج j　چ č　ح ḥ
خ ḫ　ذ ẕ　ر r　ز z　ژ ž　س s　ش š
ص ṣ　ض ż　ط ṭ　ظ ẓ　ع ʻ　غ ġ　ف f
ق q　ک k/g/ng　ل l　م m　ن n　ه h　و v/w
ی y

母音については、以下の表記を用いた。

ا آ a/ä/ā　ه a/ä　و o/ö/u/ü/ō/ū　ی e/ï/i/ē/ī

また、写本においてpを表すب、čを表すج、gを表すکなどが用いられている語については、それぞれp、č、gの音で表記した。

● クルアーンの引用や祈願文などアラビア語で書かれた部分は、アラビア語の一般的な転写法に従った。

● 底本としたタシュケント写本は、55aの左上（55bの右上）が破損しているため、四行にわたってテクストの一部が欠落している。

● 転写テクストにおいて用いた記号は以下である。

（　）　底本の葉数を示している。

［　］　校訂テクストにおいて底本を補足した箇所を示している。その際、底本の欄外に補足がある場合には＃を付した。

“　”　会話文を示している。

● ユーヂンのキリル文字転写と相違点がある箇所については、註でユーヂンのキリル文字転写を示した。

訳註

● 固有名詞などのカタカナ表記については、原則的にわれわれが作成したテクストに従った。その際、例えば一人の人物に対して二通りの表記があるような場合には、註記したうえで統一した。また、一般的な用語については『岩波イスラーム辞典』大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編, 岩波書店, 2002、『中央ユーラシアを知る事典』小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編, 平凡社, 2005も参照した。

● （　）の数字は底本の葉数を示している。

● ［　］内の語句は、文意の理解を助けるためにわれわれが補足したものである。

● クルアーンの引用については、引用箇所を標準エジプト版の章番号・節番号で註記した（訳註においては、Q 章番号: 節番号の形で示した）。訳は井筒俊彦訳『コーラン』, 上中下, 岩波文庫, 1964に従った。ただし、一部訳語を改めたところがある。

● ユーヂンのロシア語訳、アブーセイトワの訳註を参照した場合、もしくはそれと相違点がある場合には、とくに頁数は示さずに註記した。

Introduction

This is a critical text of a historical writing called *Čingīz-nāma* written by Ötämiš Ḥājī in Chagatai language using Arabic alphabet in Khiva Khanate, a successor state of the Golden Horde (also known as Jöči Ulus), by the middle of 16th century, with introduction, annotated translation and transcription.

The nomadic state did not leave much in the way of written histories and the studies on the history of Golden Horde mainly relied upon fragmented descriptions of the state by the contemporary outside sources (literatures in Timurid dynasty, Mamuluk Sultanate, Russia etc) leaving many gaps and sometimes causing academic confusion. Later in the period, however, saw the history of Golden Horde written in its successive states, whose historical writings include original information. Among these the *Čingīz-nāma* is of a high historical value with information regarding the events before and after the coronation of Öz Beg, the situation of Golden Horde after the death of Berdi Beg and information regarding Toqtamiš. Its facsimile edition of the Tashkent manuscript with a Russian translation and Cyrillic alphabet transcription by V. P. Yudin has been published in the past[1]. However, contrary to its importance, the historical value of the *Čingīz-nāma* was not rightly recognized in previous studies. Yudin's studies also raise questions these days but there has been no critical text published yet. Against this background, it was hoped to contribute to the development of the historical study of Golden Horde by publishing this critical text of the *Čingīz-nāma* with introduction, annotated translation and transcription.

Yudin, who took notice of and highly rated the oral tradition of nomad society, defined the historical texts[2] including the *Čingīz-nāma* written in the

---

[1] Утемиш-хаджи, *Чингиз-наме,* Факсимиле, перевод, транскрипция, текстлогические примечания, исследование В.П. Юдина, Подготовила к изданию Ю.Г. Баранова, Комментарии и указатели М.Х. Абусеитовой, Алма-Ата, 1992.

[2] As for the example of this kind of historical texts, Yudin listed *Tawārīḫ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma* (The Selected History, The Book of Victory), anonymous and written in

successive states of Golden Horde as "oral history of the Steppe"[3]. However, His emphasis on oral tradition led him to state that "Ötämiš Ḥājī scarcely used written sources", the comment misled later scholars and researchers on the historical nature of the *Čingīz-nāma*.

On writing the *Čingīz-nāma*, the author, Ötämiš Ḥājī, must at least have used a text called *Ḥażrat-i Dōst Sulṭānnïng tawārīḫlarï* (History Books of His Highnes Dōst Sulṭān)and he may well have used other historical writings. Judging from the biographical data of information providers in the *Čingīz-nāma*, Ötämiš Ḥājī, seems to have used information heldat the center of successive governments of Golden Horde such as Astrakhan Khanate. Whether it is an oral source or written material, it is also seen from the *Čingīz-nāma* that Ötämiš Ḥājī dealt with the sources with care and a critical attitude. Using the oral tradition of a nomad society as background, the *Čingīz-nāma* certainly possess the characteristics of historical texts with original information which cannot be seen in other texts, and thus can be positioned as one of the most important historical writings in the historiography of Golden Horde.

Further, the *Čingīz-nāma* influenced heavily the later historical writings of the world of the Kipchak Steppe (Dašt-i Qipčāq), such as *Jāmi' al-Tawārīḫ* (Collected History) by Qādir 'Alī written in the early 17th century in Kasimov as well as *'Umdet ül-Aḫbār* (The Paramount Summary of Information) by 'Abd ül-Ġaffār of 18th century in Crimea, occuping an important position in the

---

early 16th century for Shaybanid dynasty, *Jāmi' al-Tawārīḫ* (Collected History) by Qādir 'Alī written in early 17th century in Kasimov and *Šajara-yi Turk* by Abū al-Ġāzī Ḫān written in Ḫʷārazm in 17th century. U. Shamiloglu, who took notice of *'Umdet ül-Aḫbār* (The Paramount Summary of Information) by 'Abd ül-Ġaffār of 18th century's Crimea, coined historical texts written and compiled under a successive state of Golden Hordethe "Turkic narrative sources"(U. Schamiloglu, "The *Umdet ül-Ahbar* and the Turkic Narrative sources for the Golden Horde and the Later Golden Horde," *Central Asian Monuments*, ed. by H.B. Paksoy, Istanbul, 1992, pp. 81-93).

[3] В.П. Юдин, "Орды: Белая, Синяя, Серая, Золотая...," *Чингиз-наме*, pp. 25-26; В.П. Юдин, "Переход власти к племенным биям и неизвестной династии Токатимуридов в казахских степях в XIV в. (К проблеме восточных письменных источников, степной устной историографии иnредыстории Казахского ханства)," *Чингиз-наме*, p. 57.

historic narrative of the world of Kipchak Steppe supported by original information sources which are different from that of the Mā warā' al-Nahr and Ḫʷārazm regions. These historical writings, not only have common contextual elements but also share distinctive historiographical characteristic, namely "the Chingisid Principle". They confirm that the Chingisid Principle survived the "Islamization", disintegration and re-organization of Golden Horde and was handed down to the world of Kipchak Steppe where the successor states of the Golden Horde were established .

The historical texts written within the successor governments of Golden Horde, such as *Čingīz-nāma*, contain much original information and at the same time vividly demonstrate the historical perspective of the world of Kipchak Stepp. By scrutinizing, comparing and analyzing these writings, the whole picture of the history of the world of Kipchak Steppe including Golden Horde and its successor states is hoped to reveal itself.

Explanatory Notes

Critical Text

- As for spelling, we followed as faithfully as possible to the spelling of the copytext, the Tashkent manuscript. Though inconsistencies are observed in the manuscript , such as the expression of short vowels (for example, بک / بیک beg, بلا / بیلا bilä), interchange of suffixes in a same word (for example, غه ġa and کا gä), as well as peculiar notation such as using ب for p, ج for č, ک for g, and فیدا for پیدا, قلقه for قلعه, we adopted the same spellings of the copytext, with the exception of possessive suffix ning / nïng, which we spelt نک whether it was spelt نیک / نک / نىک in the copytext.
- As a principal we followed the spelling of the copytext, we added dots for ن and ی where we judged they were omitted.
- We corrected irregular notations in the copytext, such as كوب, whose beginning is replaced with final form ك, and طائفه, where ی and hamza are intermingled.
- The copytext, the Tashkent manuscript, is not only incomplete but also a rather poor manuscript with many an obviously unnecessary repetition of words and phrases as well as corrections for erroneous and omitted letters. In these cases, for the sake of avoiding complexity, we amended and erased the words or sentences without special notations.
- Left upper side of 55a (right upper side of 55b) of the Tashkent manuscript as the copytext was torn, so a part of the text lacks four lines.
- The following symbols and keys were used in the critical text in order to show the sheet number, correction and supplement of the copytext. The supplements and corrections to the copytext made by us are shown without any symbols or keys but the original copytext is shown in the notes.

  ( ) shows the sheet number of the copytext.

  [ ] shows the parts omitted in the copytext but supplemented by

us. # indicates the part where there are supplements in magin of the copytext. * indicates the part where Yudin's notes were referred.

* indicates the parts where corrections and/or supplements were made using Yudin's notes. The original copytexts are shown in the notes.

[Юдин] When the original copytexts were used as they are or corrections and supplements were made by us while Yudin's interpretation differs from those, Yudin's interpretations were shown in the notes with [Юдин].

[Бартольд] When the original copytexts were used as they are or corrections and supplements were made by us while Bartol'd's interpretation differs from those, Bartol'd's interpretation were shown in the notes with [Бартольд].

[DeWeese] When the original copytexts were used as they are or corrections and supplements were made by us while DeWeese's interpretation differs from those, DeWeese's interpretation were shown in the notes with [DeWeese].

- Among those parts where Yudin showed the correct way of reading, there are parts which can be read in that way anyway from the original copytexts. In these cases we did not make special notes in order to avoid complication.

Transcription

- The transcription was made based on the Arabic alphabet text criticized by us. The suffixes of bases are noted without spaces.
- Transcription of the consonants was made following the rules below:

ب b　پ p　ت t　ث s̱　ج j　چ č　ح ḥ

خ ḫ　ذ ẕ　ر r　ز z　ژ ž　س s　ش š

ص ṣ　ض ż　ط ṭ　ظ ẓ　ع ʻ　غ ġ　ف f

ق q　ک k/g/ng　ل l　م m　ن n　ه h

و v/w　ی y

As for the vowels, following notation were used.

ا آ a/ä/ā　ه a/ä　و o/ö/u/ü/ō/ū　ی e/ï/i/ē/ī

ب for p, ج for č and ک for g are used in the copytext. In these cases we used p, č and g respectively.

- Quotes from the Qur'an and prayers were transcribed as Arabic.
- Left upper side of 55a (right upper side of 55b) of the Tashkent manuscript as the copytext was torn, so a part of the text lacks four lines.
- Symbols and keys used for the transcribed texts are as follows:

( ) shows the sheet number of the copytext.

[ ] shows the parts supplemented by us in the critical text. # indicates the part where there are supplements in magin of the copytext.

" " shows conversation.

- Where there are differences from Yudin's Cyrillic alphabet transcription, Yudin's Cyrillic alphabet transcription was shown in the notes.

Annotated Translation

- Katakana notation for proper nouns was followed basically by the text we created. If, for example, a person's name was spelt in two ways in the copytext, it was unified in one way with explanation in the notes. As for common terminology, *Iwanami Islam Dictionary* (Iwanami Shoten, 2002) and *Cyclopedia of Central Eurasia* (Heibonsha, 2005) was referred.
- ( ) shows the sheet number of the copytext.
- The expressions and phrases within [ ] are the supplement we made to the copytext or addition we made to facilitate the understanding of the copytext.
- As for the quotes from the Qur'an, the numbers of chapters and sections in the standard Egyptian edition were used (in the main body text, the format [Q chapter number : section number] was used). As for the translation

of the Qur'an, *The Qur'an,* vol.1.2 and 3 translated by Toshihiko Izutsu (Iwanami Shoten, 1964) was used, however, we made alteration for certain words.

- Notes were made when the Russian translation by Yudin or the translator's note by M.Kh. Abuseitova were referred or differences were found, without showing the page number of respective texts.

『チンギズ・ナーマ（*Čingīz-nāma*）』

ウテミシュ・ハージー（Ötämiš Ḥājī）著

訳註（Annotated Translation）

(36a) チンギズ・ナーマ

慈悲深く慈愛あまねき神の御名において。限りない賞賛と賛美はかの崇拝されし帝王［＝神］に。［神は］世界とアダムを無から創造され、無から生じさせた。また、アダム―彼に平安あれ―をあらゆる被造物より尊重され、天使たちの羨望の的、地上の代理者とした。以下のように古の言葉で、「さておまえの主が天使らに向かって『わしは今から地上に［治国の］代理者を設置しようと思う』」[1]という節を仰った。あなたさまは全世界を無から創造した唯一にして絶対［の存在］であり、すべての罪を覆い隠す創造者にして［罪を］包み隠す者である。そして、神が唯一であること、絶対であることを被造物［＝人間］に知らせ、掟を広めるために、アダムの子孫たちのうち若干の者を預言者・使徒たちとした。［神は］また、一団を帝王および統治者たちとした。真実をもって人間たちのあいだで統治し、偽善の欲望を持たず、互いに圧政を増大させることのないように［するためであった］。至高なる神が仰るには、「我らはここにおまえを地上の摂政に任ずる。さ、人々のあいだを裁いてやれ。公正を旨として。やたらと欲気なぞおこして、神の道を踏みはずすでないぞ」[2]と。

敬虔な祈りと清らかな挨拶が、神に望まれ永遠なる神に愛されしかの神の使徒ムハンマド―神よ、彼に祝福と平安を与えたまえ―の上にありますように。世界とアダムを創造することの目的は、彼［＝ムハンマド］の本質的な聖性と優美さ［を創造すること］であった。至高なる神が仰るには、「もしそなたがいなければ、余は天を創らなかった[3]。そなたは両世界の灯であり、愛されし者である[4]」と。「余は現世と来世をそなたへの愛情ゆえに創造した」と。また、教導の道における証の星にして光り輝く灯火であった彼の一族と教友たちにも［敬虔な祈りと清らかな挨拶がありますように］。預言者［＝ムハンマド］[5]―彼に平安あれ―が仰るには、「我が教友たちは星々のようであり、彼らのうち誰であれ、従えば導かれる」。また、裁きの日まで、敬虔で善良な者たちである他のムハージールーン、アンサール、タービウー

---

[1] Q 2: 30.
[2] Q 38: 26.
[3] law lāka la-mā-ẖalaqtu al-aflāka. ユーヂンは「もしそなたがいなければ、余は天と河を創らなかった」と訳しているが、原文には「河」に相当する単語はない。
[4] iki jahān čirāġï ḥabīb sen. ユーヂンは文中の“ḥabīb”を“jīb”と読んだため、「そなたは両世界の灯の容器である」と訳している。
[5] ユーヂンは誤って「預言者［＝ムハンマド］」を「至高なる神」と訳している。

ンたち[6]にも［敬虔な祈りと清らかな挨拶がありますように］。

さて、神への賛美と理性の所有者たる使徒への祝福のあと、(36b)［以下のことが］下僕たちのあいだで知られるであろう。すなわち、この卑しき私め、マウラーナー・ムハンマド・ドゥースティーの息子ウテミシュ・ハージーは、主人たる今は亡きハカン陛下ヤードガール・ハン[7]の一門の下僕の子孫たちにして、古くからの奉公人の一人である。その地で、私は、慈悲深き主の恩寵によって召されたもっとも偉大なるスルターンにしてもっとも尊敬すべきハン陛下、アブールマンスール・イル・バルス・バハドゥル・ハン[8]—神よ彼の墓を芳しくしたまえ、楽園が彼の住処とされますように—にお仕えしていた。これらの者たちがチンギズ・ハンの子孫たちであり、私はこの王族の恩恵に浴していたので、以下のことをあるがままに知りたいと思った。すなわち、チンギズ・ハンのオグランたち[9]のうち、その草原地方において誰がハンとなったあとに誰がハンとなったか、その後いつまで、またどのような順序で誰々がハンとなってきたのか、これらの者たちのあいだでどのような戦いと出来事が起こったか、これらのすべてをあるがままに知りたいと思った。［しかし、］私が見た諸史書は、これらの者たちのうちのわずかな名前を書きとめたものにすぎなかった。しかも、どのような出来事と状況で彼らがハンとなったかは言及されておらず、多くの［者たちの］名前もまた言及されてはいなかった。私はこれらの者たちの状況についてあるがままに知りたいと願っていたので、古い話をよく知っているという人物がいるといえば、必ずその人物のもとに出向き、問い質した。理性の天秤にかけ、受け入れられるものを心に留め、受け入れがたいものは考慮しなかった。そうして、いかなる集まりにおいても古の帝王たちの話に及んで問題が生じると、彼らは私めのもとにやって来て、問い質すようになった。そして、私はこの［話を］語ることによって［人々に］知られるようになった。

さて[10]、このとき、王権の拠り所たる至高なるハン陛下、(37a) 神の影、信仰のスルターンたちの指導者にして戦場の案内人、［神の］代理人たちの玉座のカイ・ホスロウ[11]、勇敢さ［においては］戦場のロスタム—彼［＝イシュ・スルターン］は戦場において毎日ダスターンの息子ロスタムである[12]—、シル河のようなスルター

---

[6] ムハージルーン（「移住者」）とはムハンマドとともにマッカからマディーナに移住した集団のことであり、アンサール（「援助者」）とはムハージルーンを受け入れたマディーナのムスリムのことである。タービウーンとは「後に続く者たち」を意味し、ムハンマドに直接に接した教友からムハンマドの言行を間接的に聞いた者たちを指す。

[7] シバン家のうち、後述のアラブ・オグラン（アラブシャー）の子孫。一般には、「ヒヴァ・ハン国」の初代君主は1511年あるいは1512年にホラズム地方を征服したイルバルス（ヤードガールの孫）とされるが、『チンギズ・ナーマ』がここで「ヒヴァ・ハン国」の王統の祖をヤードガールと認識している点は興味深い。17世紀初頭にカーディル・アリーによって著された『集史』や、19世紀前半にムーニスとアーガヒーによって著された『繁栄の楽園』などにも同様の認識が見られる（Qādir ‘Alī Beg, *Jāmi‘ al-Tawārīḫ*, рукопись ВОНБ Казанский государственный универстет, T. 40, f. 65a; Šīr Muḥammad Mīrāb Mūnis and Muḥammad Rižā Mīrāb Āġahī, *Firdaws al-Iqbāl, History of Khorezm*, ed. by Yu. Bregel, Leiden and New York, København, Köln, 1988, p. 102）。欧米の研究では、この政権はしばしば「アラブシャー朝（‘Arabšahids）」もしくは「ヤードガール朝（Yadgarids）」と呼ばれる（Yu. Bregel, "‘Arabšāhī,", *Encyclopaedia Iranica*, ed. by E. Yarshater, London and Boston, 1982-; Yu Bregel, *An Historical Atlas of Central Asia*, Leiden and Boston, 2003, p. 48）。ヤードガールおよびその息子ブルゲ（ブレケ）はマングト部のムーサーと結び、15世紀半ばにキプチャク草原東部を統一したシバン家のアブールハイルの死（1468年）の前後から活発な活動を展開していた（cf. B.B. Трепавлов, *История Ногайской Орды,* Москва, 2001, pp. 101-103; 長峯博之「『キプチャク草原の港』スグナク—1470～90年代のトルキスタン地方をめぐる抗争とカザクのスグナク領有を中心に—」『史朋』36, 2003, p. 14）。

[8] アブーセイトワは訳註においてこの人物を比定できないとしているが、ヒヴァ・ハン国の初代君主とされるイルバルスであろう。イルバルスに付された祈願文からは『チンギズ・ナーマ』執筆時にはイルバルスが故人（1517年没）であったことがわかる。『チンギズ・ナーマ』と共通の情報源を持つ、あるいは『チンギズ・ナーマ』を参照して書かれたアブデュルガッファールの『諸情報の要諦』によれば、『チンギズ・ナーマ』の著者ウテミシュ・ハージーの情報源の一人であったイルバルスには『ホラズム史』という著作があったという（‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, MS., Süleymaniye Kütüphanesi, Esad Efendi 2331, f. 264b）。

---

[9] オグル（息子）の複数形であるオグランは一般に「少年」を意味するが、「皇子」の意味でも用いられ、モンゴル時代においてはチンギス家のハンの息子たちに対して用いられた（G. Doerfer, "oġlān," "oġūl," *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen: unter besonderer berücksichtigung älterer neupersischer geschichtsquellen, vor allen der mongolen und timuridenzeit,* 4 bande, 1963-75, Bd. II; G. Clauson, "oġul," *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford, 1972）。

[10] Basa.『チンギズ・ナーマ』では"Basa"は十七箇所で見られる。多くの場合、話題を変えるときに使われ、「さて」「ところで」くらいの意味だが、前の文章を受けて「そこで」「だから」「つまり」という意味で使われる場合もある。

[11] ḫilāfat taḫtïnïng Kay Ḫusrawï. ユーヂンは文中の「カイ・ホスロウ」を人名とは取らずに"кі хусрәві"と読み、「カリフの美徳の［象徴である］玉座に君臨する君主」と訳している。

[12] ここにはフィルダウスィーがペルシア語で著したイランの一大民族・英雄叙事詩『王書（シャー・ナーマ）』に登場する人物の名前が見える。カイ・ホスロウはイランの伝説的なカヤーニー朝の君主。ダスターン（別名ザール）とその息子ロスタムはカヤーニー朝からザーブリスターン（スィースターン）の統治権を委ねられ、ことあるごとにイランを窮地から救った。ロスタムは象の体と獅子の力を持つ超人的な勇者・英雄で、七百年の生涯のあいだに、たびたびトゥーラーン王や悪鬼・怪物と戦った。とくに、カイ・ホスロウ時代のトゥーラーン王アフラースィアーブとの戦いは『王書』の圧巻の一つである。

ンたちの庇護者、世界のある限り彼の高貴なる性質はその寛容さの鉱脈であり、恩恵の源であるイシュ・スルターン[13]—至高なる神よ、彼の支配を永遠たらしめよ、彼の統治を確固たらしめよ—は、[以下のことを]お望みになった。すなわち、ヨチ・ハン[14]の子孫たちの諸状況と諸事情、順番に誰から誰のあとに誰がハンとなったか、このときに至るまでどのような出来事と事情で彼らのあいだにどのような種類の戦いと出来事が起こったか、すべてを明らかにして記憶に留めることを願われた。このため、この卑しき私めを呼んで来させ、このようにして慈悲と哀れみを施しくださり、これらの諸状況についてお尋ねになった。[イシュ・スルターンは、] 話が長大であったため聞いただけでは記憶することはできないと思い、ついには「余のためにこれらの話を書き与えよ」とお命じになった。私めはこの者たちの下僕の子たち[の一人]であったので、その命令に背くことはできず、否応なくこの記録の命令を受け入れた。課せられた者は[神の前で]許されるのである。

さて、この序文の意図は、この写しを私めから読み聞きした親愛なる者たち、有力・卑小な者、友人たちへの以下のような要望にある。すなわち、この写しに書かれたこれらの言葉や話はいかなる記録や史書にもないものであり、そのすべてを私が聞いて書いているが、(37b) 周知のように、耳にする言葉の大半は偽りと言われている[15]。そこで、もし間違いや誤りが生じたならば、その誤りを取り除き、その間違いを正してほしい。また、この私めの仕事—課せられた者は[神の前で]許されるーを知ってくれるならば、神の前で無駄にはならないであろう。「まこと、神は、功労者の御褒美は絶対にお忘れになりはせぬ」[16]。

---

[13] 後述のドゥースト・スルターンの弟。アブールガーズィーの『テュルク系譜』や『繁栄の楽園』によれば、兄のドゥーストがヒヴァで即位したのちに従兄弟ハージー・ムハンマド(アブールガーズィーの祖父)の支配するウルゲンチを占領したが、のちに反撃を受けて1558年もしくはヒジュラ暦967(1559/60)年に戦死した(*Histoire des Mogols et des Tatares par Aboul-Ghâzi Bèhâdour Khan*, Publiée, traduite et annotée par Le Baron Desmaisons, tome I, texte, St. Pètersbourg, 1871, pp. 234-236; Mūnis and Āġahī, *Firdaws al-Iqbāl*, pp. 118-119)。

[14] チンギス・ハン(チンギズ・ハン)の長男ジョチのこと。『集史』では“Jūčī”と表記されるが、ジュワイニーの『世界征服者史』では“Tūšī”、アブールハサン・アリー b. アフマド・アンナサウィーの『スルターン・ジャラールッディーン・マンクビルティー伝』では“Dūšī”と表記される。一方、無名氏のチャガタイ語史書『選史・勝利の書』では、『チンギズ・ナーマ』と同じように“Yöči”と表記される。「ウルス(またはウルシュ)・イディ(=くにたみの主)」の異名でも知られる。

[15] 著者が謙遜しながら述べるこの記述からは、『チンギズ・ナーマ』がもっぱら口頭伝承のみに依拠していたようにも受け取れる。しかし、実際にはウテミシュ・ハージーは少なくとも「ドゥースト・スルターン殿下の諸史書」という文献を利用したうえで『チンギズ・ナーマ』を著したのであり、また、他の文献を参照した可能性も大きい。この問題については、解題を参照。

チンギズ・ハンの物語の始まり

チンギズ・ハンが諸地方を征服したとき、一方はバグダード、一方はヒンドゥースターン、一方はキプチャク草原、イディル河[=ヴォルガ河]であった。これらの地方を四、五人の息子たちに贈った。イラク地方をフレグ・ハンに与えた。ウゲデイ・ハンを自身の領地に置いた。トゥル・ハン[17]を自身のそばにとどめた。チャガタイ・ハンにブハラ、サマルカンド、ホラーサーン、ヒサールの諸地方を与えた。さて、ヨチ・ハンはすべてのオグランたちより年長であった。[そのため、] 大軍を委ね、キプチャク草原の地方に遣わした。「おまえの馬どもの飼葉とせよ」と言って、ホラズム地方を与えた。ヨチ・ハンがキプチャク草原の地方に向かったとき、有名なウルグ・タグに到達した。ある日、山のなかで狩をしていた。[そのとき、] 彼は一群の鹿に出くわした。それを追いかけ矢を射掛けているとき、落馬して首を折り、亡くなった[18]。

エジェン・ハンとサイン・ハンの物語の始まり

エジェン・ハンとサイン・ハンはよく知られている。トゥラル・ハンの娘で、彼[=ヨチ]の妻から生まれた[19]。また、他の妻から生まれた十七人の息子がいた[20]。

---

[16] Q 9: 120.

[17] チンギス・ハンの末子で、モンケ、クビライ、フレグ、アリク・ブケ四兄弟の父であるトゥルイのこと。ジュワイニーの『世界征服者史』では『チンギズ・ナーマ』と同じように“Tūlī/Tulī”と表記されるが、ラシードゥッディーンの『集史』では“Tūlūy”と表記される。また、「ウルグ・ノヤン」「イェケ・ノヤン」(どちらも「偉大な貴顕」の意)の尊称でも知られる。

[18] ラシードゥッディーンの『集史』では、ジョチの死は明示されているわけではないが、病死したものと理解される。『諸情報の要諦』では、ジョチは狩猟中に落馬して背骨が折れて死んだということになっている(‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 258a)。

[19] この部分の記述によれば、トゥラル・ハンは、エジェン(=オルダ)とサイン(=バトゥ)の母方の祖父に当たることになるが、これは理解しがたい。そもそもエジェンの母はコングラト部族のサルタク、サインの母は同じくコングラト部族のアルチ・ノヤンの娘オキ・フジンであるから、エジェンとサインは同じ母から生まれた兄弟では

このエジェンとサインは（38a）ハン位を互いに譲り合った。サイン・ハンが年下であり、［彼は］兄エジェンに「あなたは私の父に代わる兄である。まさにあなたは私の父である。私は他所の牧地に去りましょう。あなたがハンになってください」と言った。エジェンは、「私がおまえより年長であることは確かである。しかし、父はおまえを非常に愛し、大事に育ててきた。いままで、私はおまえの［父の］寵愛と立場を尊重してきた。もし私がハンとなったら、おそらく以前のようにおまえの立場を尊重することはできないだろう。また、われわれのあいだに争いと敵意が生じるだろう。おまえこそがハンとなれ。おまえの統治に私は甘んじよう。しかし、私のハン位におまえは甘んじないだろう」と言った。［サイン・ハンは、］「何を言うのですか。ヤサクにより［ハンとなるべき］兄[21]がいるのに、どうして私がハンになることがふさわしいのでしょうか」と言って、兄に強く［ハンになるよう］勧めた。［エジェン・ハンは］同意せず、「それならば、こうしよう。われわれの偉大な祖父チンギズ・ハンのもとへ行こう。私は私の意見を申し上げるので、おまえはおまえの言葉を申し上げる［とよい］。どのような祖父のご命令であれ、それに従おう」と言ったので、［サイン・ハンは］この言葉に納得して同意した。一人の母から生まれた二人の息子と、別の母から生まれた十七人の息子は、全員集まって、偉大なるハンへの謁見へと赴いた。ハンは、ハンのお側に至ったこれらの者たちのために三つの天幕を建てた。金の入口の白い天幕をサイン・ハンのために、銀の入口の（38b）

ない（川口琢司「ジョチ・ウルスにおけるコンクラト部族」『ポストモンゴル期におけるアジア諸帝国に関する総合的研究』, 2002, pp. 76-77）。サルタクの父の名前がわからないため、サルタクの父がトゥラル・ハンであるかどうかは不明である。

[20] エジェンとサイン以外のジョチの十七人の息子の名前は『チンギズ・ナーマ』には現れない。ジュワイニーの『世界征服者史』にはジョチの息子として八人の名前しか挙がっていない（*The Ta'ríkh-i-Jahán-gushá of 'Alá'u 'd-dín 'Aṭá Malik-i-Juwayní (composed in A.H. 658 = A.D. 1260)*, part I, ed. by Mīrzā Muḥammad ibn 'Abdu'l-Wahhāb-i Qazwīnī, "E.J.W. Gibb Memorial" Series, vol. XVI, I, Leyden and London, 1912, pp. 145, 221-222）。ラシードゥッディーンの『集史』には、ジョチの息子として十四人の名前が挙がる（Rašīd al-Dīn Fażl Allāh Hamadānī, *Jāmi' al-Tawārīḫ*, ed. by Muḥammad Rawšan and Muṣṭafā Mūsawī, vol. I, Tehran, 1373, p. 730）。モンゴルに関する二種の系図集のうち、『五族譜』にはジョチの息子として十五人（Anonym., *Šu'ab-i Panjġāna*, MS., Topkapï Sarayï Müzesi Kütüphanesi, Ahmet 2937, f. 108b）、『ムイッズルアンサーブ』には十八人の名前が挙がっている（Anonym., *Mu'izz al-Ansāb fī Šajarat Salāṭīn Muġūl*, MS., Bibliothèque Nationale, Ancien fonds, Persan 67, f. 18b）。

[21] これは、ヤサク、つまりチンギス・ハンのヤサに年長者がハンになるという規定があったことを示唆している。

青い天幕をエジェンのために、鉄の入口の灰色の天幕をシバンのために建てた[22]。

さて、三つの点で、シバン・ハンのオグランたちはトクタミシュ・ハン[23]とテムル・クトル[24]、オロス・ハン[25]のオグランたちに「われわれはおまえたちよりも勝っ

[22] ここに見られる天幕の色についての記述は、ジョチ・ウルス史における「アク・オルダ（白帳）」と「キョク・オルダ（青帳）」の問題に関する重要史料となっている。1227年のジョチの没後、ジョチ・ウルスは、大きくは長男オルダの左翼ウルスと、ジョチの後継者となった次男バトゥの右翼ウルスに分かれた。ティムール帝国史料の『ムイーン史選』およびこれを情報源とする諸史料は左翼ウルスを「アク・オルダ」、右翼ウルスを「キョク・オルダ」と伝えており、ヤクボフスキーなどはこれに依拠していた（Б.Д. Греков, А.Ю. Якубовский, *Золотая Орда и её падение*, Москва-Ленинград, 1950, pp. 261-262）。しかし、サファルガリエフ以後の研究によって実際には逆であったことが明らかにされており（М.Г. Сафаргалиев, *Распад Золотой Орды*, Саранск, 1960, pp. 14-15; Г.А. Федоров Давыдов, *Общественный строй Золотой орды*, Москва, 1973, pp. 141-144; 堀川徹「遊牧ウズベグ史研究（1）」『COSMICA』20, 1990, pp. 165-177）、とくにユーヂンが『チンギズ・ナーマ』の記述を用いてこの問題を論じている（В.П. Юдин, "Орды: Белая, Синяя, Серая, Золотая...," Утемиш-хаджи, *Чингиз-наме*, Факсимиле, перевод, транскрипция, текстлогические примечания, исследвание В.П. Юдина, Алма-Ата, 1992, pp. 26-28）。『チンギズ・ナーマ』の記述には伝承的要素も認められるが、ジョチ・ウルスの継承政権内部で著された『チンギズ・ナーマ』において、サイン・ハンが「白い天幕」、エジェンが「青い天幕」に関連付けられている意味は大きいだろう。「アク・オルダ」と「キョク・オルダ」の問題については、『ムイーン史選』の記述の合理的解釈やシバン家のウルスの位置づけをめぐって諸説が展開されているが（cf. *История Казахской Литературы в трех томах*, т. 2, Алма-ата, 1997, pp. 106-116, К. Ускенбай, "Улусы первых Джучидов. Пробрема терминов *Ак-Орда* и *Кок-Орда*," *Тюркологический сборник 1975, Тюркские народы России и Великой степи*, Москва, 2006, pp. 365-382）、そもそも『ムイーン史選』の記述そのものを疑う必要があるように思われる。また、「灰色の天幕」については、Юдин, "Орды: Белая, Синяя," pp. 30-32参照。

[23] 『チンギズ・ナーマ』には「トクタミシュ（Toqtamïš）」と「トフタミシュ（Toḫtamïš）」の二つの表記が見られるが、ティムール帝国史料などで一般的な「トクタミシュ」の表記で統一した。

[24] 14世紀末にジョチ・ウルスのハンとなったトカ・テムル家のテムル・クトルクのこと。『チンギズ・ナーマ』には「テムル・クトルク（Temür Qutluq）」という表記も見られるが、「テムル・クトル（Temür Qutlï）」で統一した。

[25] オロスの系譜についてはオルダ系とトカ・テムル系の二説が議論されてきたが（cf. 堀川徹「ウズベグ族とカザク族の『分離』について」『宋元代の社会と文化に関する総合的研究』昭和54年度科学研究費補助金研究成果報告書, 1980, pp. 57-59）、オルダ系説をとるヤクボフスキーやサファルガリエフなどの研究は系譜や年代に問題の多い『ムイーン史選』に依拠するものであった（Греков, Якубовский, *Золотая Орда и её падение*, pp. 310; Сафаргалиев, *Распад Золотой Орды*, p. 129）。これに対して、ユーヂンは『チンギズ・ナーマ』の記述も用いてトカ・テムル系説をとっており（В.П. Юдин, "Переход власти к племенным биям и неизвестной династии Токатимуридов в казахских степях в XIV в. (К проблеме восточных письменных источников, степной устной историографии и предыстории Казахского ханства)," *Чингиз-наме*, 1992, p. 67）、現在ではトカ・テムル系説がほぼ定説とされている（cf. 川口琢司「キプチャク草原とロシア」『岩波講座世界歴史　11　中央ユーラシアの統合—9-16世紀—』岩波書店, 1997, p. 289; 赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』風間書房, 2005, pp. 83-84）。

ている」と自慢し、誇っている。その一つは、天幕である。彼らが言うには、「われわれの祖先ヨチ・ハンが亡くなったあとに、われわれの祖先たちが偉大なる父祖チンギズ・ハンのもとに赴くと、［チンギズ・ハンは］エジェンとサインのあとにわれわれの祖先シバン・ハンのために天幕を建てた。おまえたちの祖先のためには［天幕などを運ぶ］荷馬車[26]さえもつくらなかった」と。また二つめは、「ウズ・ベグ・ハンは激怒し、キヤト・イサタイ[27]に編成した軍［の一部］を分け与え[28]、すべてのオグランたちを民とともにコシュン[29]として与えたときに、彼はまたわれわれに敬意を示し、『剣を振るい、牧地を切り開いた者は、勇者シバンのオグランたちである』と言って、二つの服属した民をわれわれに与えた［ことである］。一つはカルルク［部族］、一つはボイレク［部族］である。われわれはこの二つの民を取り、サイン・ハンの定めたわれわれの牧地において、［サイン・ハンは］われわれの自由にさせたのである。われわれは、［他のオグランたちが］かのジル・クトルの館[30]のために石と

[26] telägän. この単語を、バルトリドは「天幕」(В.В. Бартольд, “Отчет о командировке в Туркестан,” *Сочинения*, т. 8, Москва, 1973, p. 168)、赤坂は「望むもの」(『ジュチ裔諸政権史の研究』, p. 113) と訳している。しかし、この単語は56aにも「一台の荷馬車 (telägän) に二頭の馬を繋ぎ」として現れており、ユーヂンが訳しているように、これは「四輪馬車」「荷馬車」を意味している。

[27] トクタ、ウズ・ベグに仕えたキヤト部族出身のベグ（またはアミール）。イブン・バットゥータはその旅行記において、彼をアミール・イーサーと呼び、ジョチ・ウルスを訪れた1333年当時彼が存命であったことを伝える（イブン・バットゥータ著, イブン・ジュザイイ編, 家島彦一訳注『大旅行記4』平凡社, 1999, pp. 43-44)。また、彼が国政の最高責任者たるウルスのアミールの地位にあったこと、彼がウズ・ベグの娘イト・キュチュクを娶る（このため、しばしば彼の名前にハンの女婿を意味する「キュレゲン」の称号が付される）代わりに、自分の娘オルドチャをウズ・ベグに嫁がせていたことなど、彼のウルスにおける政治的立場や婚姻を通じたハンとの結びつきからは、彼がウルスにおいてきわめて有力な人物であったことが窺われる。なお、ウルスのアミールについては、B. Spuler, *Die Goldene Horde. Die Mongolen in Rußland 1223-1502*, Leipzig, 1943, pp. 301-302; 本田実信『モンゴル時代史研究』東京大学出版会, 1991, pp. 95-96参照。

[28] örüm češip. ユーヂンは“әрүм четіб”と読み、「慈悲を示し」と訳している。

[29] qošun. アブーセイトワは訳註において「百人隊」とするが、バルトリドが指摘しているように (В.В. Бартольд, “Улугбек и его время,” *Сочинения*, т. II, ч. 2, Москва, 1964, pp. 50)、正しくは千人隊より小さな人数不定の部隊である。

[30] ジル・クトルは前述のキヤト・イサタイの息子。ヤクボフスキーはスグナクの遺跡調査において近郊にある「キョク・ケセネ（青い建物）」という遺跡について報告しており（А.Ю. Якубовский, “Развалины Сыгнака (Сугнака),” *Сообщения Гос. Академии истории матер. Культуры*, т. 2, Ленинград, 1929, pp. 157-158)、それを16世紀初頭のイブン・ルーズビハーンの『ブハラ客人の書』に見られるウズベグのハンたち（シバン家）の墓に関連付けている（Fażl Allāh b. Rūzbihān Ḫunjī Iṣfahānī, *Mihmān-nāma-yi Buḫārā*, ed. by M. Sutūda, Tehran, 1341, p. 201; Греков, Якубовский, *Золотая Орда и её*

煉瓦を積んだとき、また彼［＝ジル・クトル］の息子テンギズ・ブガ[31]の［天幕の］入口に立って控え、天幕に［向かって］跪いたときにも、われわれはそのようなことはしていない」と、彼らは言う。サイン・ハンのオグランたちがベルディ・ベグ・ハンのときに途絶えたとき、ジャーン・ベグ[32]・ハンの母タイ・トゥグル・ベギム[33]は、「いまや、牧地とハン位はシバン・ハンの子孫たちのものである」と言って、マングタイの息子ヒズル・ハンを呼び寄せ、サライ地方においてハンとした[34]。「サイン・ハンの子孫（39a）たちの後、そのハン［＝サイン・ハン］の玉座におけるハン

падение, pp. 309-310)。しかし、ユーヂンはこの「キョク・ケセネ」こそ『チンギズ・ナーマ』に現れるジル・クトルの館ではないかとしている（В.П. Юдин, “Переход власти к племенным биям,” p. 62; cf. 長峯「『キプチャク草原の港』スグナク」, p. 14)。

[31] ユーヂンは、テンギズ・ブガを、『選史・勝利の書』に現れるアブールハイル配下のキヤト・イサタイの子孫ブダンチャル・ベグ（Budančar Beg）に比定しているようである（Anonym., *Tawārīḫ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, MS. British Library, Or. 3,222, f. 119a; Юдин, “Переход власти к племенным биям,” p. 62)。

[32] 14世紀中葉のジョチ・ウルスの君主。『チンギズ・ナーマ』には「ジャーン・ベグ（Jān Beg)」と「ジャーニー・ベグ（Jānī Beg)」の表記が見られるが、前者の表記で統一した。

[33] ここでは「タイ・ドゥアル・ベギム（Tay Dualï begim)」と表記されているが、『チンギズ・ナーマ』後段ではしばしば「タイ・トゥグル・ベギム（Tay Tuġlï begim)」として多く現れるため、こちらの表記で統一した。ロシア年代記では、タイダラなどと表記される。表記とその意味について、詳しくはP. Pelliot, *Notes sur l'histoire de la Horde d'Or: Suivies de quelques noms turcs d'hommes et de peoples finissant en “ar”*, Paris, 1950, pp. 101-105を参照。ウズ・ベグの第一の正室（ハトゥン）で、ジャーニー・ベグとティーニー・ベグの母。イブン・バットゥータは旅行記の中でタイトゥグリー（Ṭayṭuġlī）と記し、彼女がソロモン王から王権を奪ったシドン王の皇女ジャラーダの子孫であるという伝承を伝える（イブン・バットゥータ『大旅行記4』, pp. 40, 110-111)。

[34] 『ムイッズルアンサーブ』によれば、マングタイはシバンの曾孫である（Anonym., *Mu'izz al-Ansāb*, f. 23a)。『チンギズ・ナーマ』でヒズルをマングタイの息子とする点は『選史・勝利の書』に見えるシバン家の系譜に一致する（Anonym., *Tawārīḫ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, f. 71a; 川口「キプチャク草原とロシア」, p. 285)。他の諸史料はヒズルについて断片的にしか伝えていないが、『チンギズ・ナーマ』の記述はヒズルがジョチ・ウルスのハンに即位した状況を具体的に伝えるものであり、バトゥ家からシバン家への権力の移行を窺わせるものとして、大きな注目に値する（cf. 川口「キプチャク草原とロシア」, p. 284-286)。ロシア年代記および貨幣資料によれば、ヒズルの即位は1360年のことである（*Полное собрание русских летописей, т. XI, летописный сборник, именуемый патриаршей или никоновской летписью,* С.-Петербургъ, 1897, p. 232; Г.А. Федоров-Давыдов, “Клады Джучидских монет (основые этапы развития денежного обращения и денежно-весовых норм в Золотой Орде),” *Нумизматика и эпиграфика*, т. 1, Москва, 1960, pp. 133-155; N. Ağat, *Altınordu (Cuçi Oğulları) Paraları Kataloğu 1250-1502*, 1976, p.74-76)。ヒズルの即位についてはH.H. ハワースも『チンギズ・ナーマ』と同様の状況に言及しているが、これは『チンギズ・ナーマ』と共通の情報源を持つ、あるいはこれを参照した可能性の高い『諸情報の要諦』に間接的に依拠したものである（H.H. Howorth, *History of the Mongols: from the 9th to the 19th Century*, part II, the so-called Tartars of Russia and the Central Asia, division I, London, 1880, pp. 195-196)。

位はわれわれのものである」と彼らは言う。この度の話は、ここにおいておおよそのところが語られた。

さて、再び先ほどの話の最初に戻ろう。チンギズ・ハンは息子たちのために天幕を建て、その晩に食料の支給[35]義務を算定すると、翌朝に接見を与えた。十二の円形の宴席が設けられ、ベグたちが順番に座った。［宴が］盛り上がり、食事が行われたあと、サイン・ハンが来て跪き、［チンギズ・ハンに］言うには、「『われわれの父［＝ヨチ・ハン］が亡くなったので、父の代わりにまさにあなた［＝エジェン・ハン］が我が父である。われわれは他所の牧地へ行くので、あなたがハンとなってください』と私は言いました。［エジェン・ハンは］承諾しませんでした。［エジェンが］なぜ承諾できないのか、私には理解できません。この意見をあなた様に申し上げるために私は参りました」と。［チンギス・］ハンが言うには、「サインはヤサクに則った言葉を述べている。なぜそなた［＝エジェン・ハン］は同意しなかったのか」と。エジェンもまた跪いて述べた。「いかにも、我がハンよ、私が年長であることは確かです。しかし、我らの父は彼［＝サイン・ハン］を非常に愛し、大事に育ててきました。これまで、私は彼の立場を尊重してきました。彼は私の立場を尊重しませんでした。もし私がハンとなったら、以前のように彼の立場を尊重できないでしょう。［また、］われわれのあいだに恨みや敵意が生じるでしょう。あなた様に不快な思いをさせます」と言って、「このため、私は同意しないのです。いまや、彼［＝サイン・ハン］こそがハンになるべきです。私は彼の統治に甘んじましょう」と述べると、［チンギス・］ハンはこれらの言葉に心を動かされ、息子のヨチ・ハンを思い出し、目から涙を流し、二人を大いに賞賛した。そして、「明日ベグたちと協議し、そなたたちへの返答を与えよう」と述べた。翌朝、ベグたちと協議して、右

35 suysun. ジョチ・ウルス発行のウイグル文字テュルク語文書、クリミア・ハン国、カザン・ハン国発行のアラビア文字テュルク語文書には“süsün”の形でも現れる。A.M. オズイェトギンは「保存食糧」「食糧」の意味を充てる（A.M. Özyetgin, *Altın Ordu, Kırım ve Kazan sahasına ait yarlık ve bitiklerin dil ve üslûp incelemesi,* 1996, pp. 107, 113, 115, 131, 233）。一方、I. ヴァーシャーリはこの術語について詳細な考察をしており、それによれば、“suysun”の形の最古の事例はメングリ・ギレイのヤルリク（1467年）に見られ、“süsün”よりも新しい形とされる。そして、その前後にしばしば見られる“‘ulūfe”（「飼葉手当て」の意）という術語と二詞一意で「糧食」「口糧」を意味するという（I. Vásáry, “Susun and süsün in the Middle Turkic texts,” *Acta Orientalia Hungarica*, 31, Budapest, 1977, pp. 51-59）。ただし、ここではより正しくは「君主から支給される食糧」を意味するものと思われる。

翼とともに（39b）イディル河の諸地方を、［チンギス・］ハンのヤサクによってサイン・ハンに与えた。左翼とともにシル河流域の諸地方をエジェンに与えた[36]。

さて、［サイン・ハンとエジェン・ハンは］ハンへの謁見から戻り、ハンによって遣わされた諸地方に来た。サイン・ハンはイディル河の岸辺に来るや、軍隊の装備を整え、オロス［＝ルーシ］地方の町マスカウ［＝モスクワ］に遠征した。人々が語るには、［サインは］その遠征においてシバン・ハンに三万人をつけ、先遣隊として送った。自らはその後から進んだ。［シバン・ハンは］三日行程の場所に先に進んだ。マスカウの帝王は知らせを受け、十五万人とともに迎え出た。これらの者たち［＝シバン軍］はマスカウの帝王が迎え出ているという知らせを受けた。シバン・ハンは、「これに対して急行しよう」と言った。どれほどベグたちが止めようとしても、彼は聞かなかった。［シバンは］三日行程の場所から急行して、何も知らずにいた［モスクワ］軍のなかに襲いかかった。オロス［＝ルーシ］の帝王は［シバン軍を］撃退することができず、［シバン軍は］帝王を捕らえた。［モスクワ］軍のうち、殺す者を殺し、生き残った者は捕囚した。数えることも記録することもできないほどの多くの財物や装備品、武具・甲冑が［シバン軍の］手に入った。しかし、シバン・ハンは、「各人が手に入れたあらゆる財物や装備品を奪われないようにせよ。すべてを持って来させよ」と命じた。人々が語るには、各種［の戦利品］から一つずつ山をつくると、数え切れないほどの戦利品の山になったという。

二日後、［サイン・］ハンが到着して、この勝利を見た。［シバン・ハンは］この

36 『チンギズ・ナーマ』の右翼（原文では「右腕（ong qolï）」）と左翼（原文では「左腕（sol qolï）」）に関する記述は、ジョチ・ウルスの分地を考える際に重要となる。1227年のジョチの没後、ジョチ・ウルスは大きくは長男オルダとジョチの後継者となった次男バトゥに分与され、イルティシュ河を中心とした東部にオルダ家が統治する左翼ウルス、ヴォルガ河流域のサライを中心とした西部にバトゥ家が統治する右翼ウルスが形成された。当初、左翼ウルスは独立の地位を保っていたが、次第に疲弊して右翼ウルスへの従属を強め、14世紀初頭には本営をシル河中・下流域に移し（Th.T. Allsen, “The Princes of the Left Hand: An Introduction to the History of the Ulus of Orda in the Thirteenth and Early Fourteeth Centuries,” *Archvum Eurasiae Medii Aevi 5,* Wiesbaden, 1987, pp. 5-26）、スグナクを中心都市とするようになった（長峯「『キプチャク草原の港』スグナク」, pp. 1-8）。14世紀初頭のバヤン以降のオルダ家の統治者については不明な点が多いが、オルダ家はこの頃の混乱のなかで断絶したと考えられる（川口「キプチャク草原とロシア」, pp. 282-284）。『チンギズ・ナーマ』の記述は、まさにこうしたジョチ・ウルスの分地を背景としているのである。また『チンギズ・ナーマ』は、ベルディ・ベグの時代に反乱が起こってキヤト・ジル・クトルの息子テンギズ・ブガが左翼をシル河畔に奪い去ったとしているが、このことはこの頃の左翼ウルスの混乱に関連している可能性がある。

財物や装備品すべてを［サインのもとに］もたらし、差し出した。［サイン・ハンは］非常に喜び、シバン・ハンを大いに褒め称えた。その後、シバン・ハンが来て謁見すると、［サイン・ハンはシバン・ハンに］多くの恩恵と（40a）慈悲を示し、下賜品を与えた。［サイン・ハンは］手に入れた財物や装備品のすべてをシバン・ハンに下賜し、［シバン・ハンは］そのすべてを自身の軍隊へ褒美として与えた。［シバン・ハンは］翌朝に出発し、マスカウ地方に侵入した。数か月そこにおり、その地方の諸事を監督し、地租を徴収し、監督官たちを置き、勝利のうちに自身の領地に戻った。

さて、これらの者たちが戻って来るまでに、エジェン・ハンのノケルたち[37]が主人に対して反乱を起こし、エジェン・ハンをすべてのオグランたちとともに殺害した[38]。この知らせはサイン・ハンのもとに届き、大きな不幸が［サイン・ハンを］襲った。［サイン・ハンは］天幕に入り、［弔いの］食事を振舞ったのち、軍隊の装備を整え、この敵に向かって進軍した。これらの者たちは持ちこたえられず、その主だった者たちは逃げた。［サイン・ハンは］他の民のすべてを移住させ、連れて来て、自身の民に加えた。そして、それぞれの部族をベグ［一人一人に］にコシュンとして与えた。今日まで、反逆者と敵対者は剣の油になるという［掟は］、このために残っているのである。

さて、サイン・ハンはこれらの地方とこれらの民を支配した。その後、すべての兄弟たちに民を与え、牧地を割り当てた。しかし、シバン・ハンに民を与え、領地を与えるときにベグたちと協議すると、ベグたちが述べた。「この方は非常に偉大な

[37] newkärläri. ノケルは本来「仲間」「僚友」という意味のモンゴル語である。モンゴル帝国時代のノケルについては、氏族・部族の指導者に隷属的に仕える身分とする説（護雅夫「Nökür考－「チンギス＝ハン国家」形成期における－」『史学雑誌』61-8, 1952, pp. 1-27; 護雅夫「Nökür考序説－主として主従関係成立の事情について－」『東方学』5, 1952, pp. 56-68）、「チンギス汗一門に仕える御家人」という説（志茂碩敏『モンゴル帝国史研究序説－イル汗国の中核部族－』東京大学出版会, 1995, pp. 451-461）が提示されている。ポスト・モンゴル時代のノケルについては、もはや特定の身分を表わす術語としての意味を失い、単に「従者、家臣、家来」を意味する普通名詞となっていた可能性が指摘されている（間野英二『バーブル・ナーマの研究 IV 研究篇―バーブルとその時代―』松香堂, 2001, p. 252）。また、ティムール帝国期の史料の用例から、ノケルに奴隷的起源を想定する必要性も指摘されている（川口琢司『ティムール帝国支配層の研究』北海道大学出版会, 2007, p. 336）。

[38] ラシードゥッディーンの『集史』などの諸史料はオルダの死については言及していないため、『チンギズ・ナーマ』のオルダの死に関する記述は非常に興味深い。

働きをしました。いまやこの方の心は増長しています。あなたがこの方に民と領地を与え、［この方を］あなたご自身のそばに置くことはよいとは思われません。あなたが彼［＝シバン・ハン］に最近分け与えた三万人に、その［あなたが新しく与える］人員を兵士として加え、征服していない諸地方に派遣してください。いかなる地方であれ、彼が征服したならば、彼のものになるように［するとよいでしょう］」。この言葉はハンを納得させ、その分け与えた三万人にさらに一万のキヤト［部族］とユラルダイ［部族］を加え、クリム［＝クリミア］とケフェ［＝カッファ］の諸地方に派遣した。

シバン・ハンの物語の始まり（40b）

シバン・ハンには驚嘆すべき事柄が多い。そのうちの一つの事柄を、この梗概のなかで言及しておこう。その一つの事柄とはこうである。クリム地方にクルク・イェルという岩でできた堅固な城砦があり、その堅固さは世界に知られている。数年間、［シバン軍はこの城砦を］包囲し、戦ったが、占領することはできなかった。ついに［シバン・ハン］は、「夕方から夜が明けるまで、あらゆる音を出す物を打ち合わせて鳴り響かせよ」と命じた。［兵士たちは］両手に［音を出す物を］取り、打ち合わせて鳴らし始めた。銅の大鍋、皿、水差しを叩き始めた。軍隊の中に、地面と空が揺れ、耳をつんざくほどの轟音や騒音が上がった。砦の人々はすっかりうろたえて、「どうしたのだ」と言って、四方に走り回った。その夜は、夜明けになるまで轟音と騒音が止まなかった。砦の人々は横になり眠ることができなかった。夜明けになると、［シバン軍は轟音と騒音を］止めた。再び夜となり、前日のように再び轟音と騒音を立てた。一週間か十日にわたり、このような状況であった。砦の人々は不眠のため疲れ果てた。ついには、「もし彼らが何かする［つもりがある］ならば、しただろう。おそらく、彼らにはこの時期にこのような慣習があるのだろう」と言って、休息を取った。シバン・ハンは彼らが休息を取ったことを知り、軍隊を集めた。人々が語るところによれば、その砦は剥き出しの岩の上にある。この夜に轟音と騒音をいっそう大きく立てた。砦の四方から穴を掘った。夜明けになるまでに人が通れるくらいの道をつけた。砦の人々は騒音のため、つるはしの音が聞こえず、［地下道には］気づかなかった。地下道が通ると、正門を襲撃した。砦の人々は正

門に駆けつけた。[シバン軍は] 一団の勇者たちをその地下道に割り当てた。[勇者たちは] その地下道から走り (41a) 出るや、砦に急行した。そして砦を占領した。私 [＝筆者] は砦を見た旅行者たちに質問した。「まだその地下道の跡がある」と彼らは言った。

その後、アウラク [＝ワラキア] 地方に向かって進軍し、そこを征服した。それからクラル [＝ポーランド] 地方に向かって進軍した。クラルは非常に大きな地方であり、そこをめぐって多くの戦いがあった。[シバン軍は] ついに征服し、クラルを居所とした。彼はそこで亡くなった。いまもクラルの帝王の子孫 [＝シバン・ハンの子孫] がいる[39]。シャイフ・アフマド・ハンはそこで数年間囚われの身となり、そして無事にそこを去り、自身の領地ハージー・タルハンに来た[40]。彼が語ったところでは、「われわれウズベグ[41]の民のうち、いかなる部族であろうともそのすべてがそこ [＝クラル] にいる。シバン・ハンとともに行き、そこにとどまっているからである」ということだそうである[42]。

---

[39] 他の史料には見られない記述である。『諸情報の要諦』はこの記述を採用しておらず、その代わり、ドイツ皇帝とモスクワのツァーリがポーランド地方を統治したシバンの子孫から王位を奪い、ザクセン公をポーランド王にしたと述べる（'Abd ül-Ġaffār, *'Umdet ül-Aḫbār*, f. 259a)。ザクセン公とはザクセン選帝侯アウグスト3世（ポーランド王としての在位は1733-63年）と思われるが、その記述の信憑性は別に検討しなければならない。

[40] シャイフ・アフマドは、トカ・テムル家のうち、後述のテムル・クトルクの子孫。いわゆる「大オルダ」の君主としてサライを支配したが、1502年にサライがクリミア・ハン国のメングリ・ギレイに征服されると、一時期リトアニア（リトアニア・ポーランド同君連合）に避難し、その後、『チンギズ・ナーマ』が伝えるようにアストラハン［＝ハージー・タルハン］に帰還した（И.В. Зайцев, *Астраханское ханство*, Москва, 2004, pp. 63-65)。「アストラハン・ハン国」と「大オルダ」の関係については、Зайцев, *Астраханское ханство*, pp. 30-62; 赤坂『ジュチ裔諸政権史の研究』, pp. 240-243参照。

[41] 「ウズベグ」の起源については、現在わが国ではジョチ・ウルスのウズ・ベグ・ハンに由来するという説が有力となっている（赤坂『ジュチ裔諸政権史の研究』, pp. 218-230; 小松久男「ウズベグ〔人〕」『中央ユーラシアを知る事典』（小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編）平凡社, 2005)。しかし、その含意や歴史的変遷についてはさらに検討が必要であろう。とりわけ、ウズ・ベグ治下のジョチ・ウルスのイスラーム化と「ウズベグ」の形成を結びつける言説は、モンゴル諸君主の改宗伝承の問題とも絡んで、再検討を要する。ここではひとまず、「ウズベグ」をジョチ・ウルスの支配下にあったキプチャク草原とその民を含意するものとしておきたい。『チンギズ・ナーマ』では随所に「ウズベグ」が登場しており、16世紀においても「ウズベグ」がキプチャク草原とその民を含意していたことがわかる。

[42] 『諸情報の要諦』はシャイフ・アフマドを情報源とする話を伝える際に、「シバン一門の出身であるウズベグのシャイフ・アフマド・ハンは詳細に書いたそうだ」としている（'Abd ül-Ġaffār, *'Umdet ül-Aḫbār*, f. 259a)。シャイフ・アフマドが「シバン一門の出身」というのは誤りであるが、ここからはシャイフ・アフマドが何らかの著述を行

さて、シバン・ハンの物語を終え、再びサイン・ハンの物語に戻ろう。サイン・ハンは草原地方において偉大な帝王となった。数年間、吉兆のうちに統治が続いた。死期に達し、現世から身罷ったが、[彼には] 二人の息子がいた[43]。一人の名はサル・タク、一人の名はトガンであった。サル・タクは彼 [＝サイン・ハン] 自身より先に八歳で亡くなった。トガンもまだ子供であった。ベグたちは一致してフレグ・ハンのもとへ使者を送り、剣のない鞘、襟のない肌着[44]を贈った。それはすなわち、民は帝王もなく残され、女は夫もなく残されたということである。フレグ・ハンはこの知らせを聞くと、進軍してシルワーン地方にやって来て、大軍を整え、[使者に大軍を] 付き従わせ、派遣した。いまこの軍隊 [の話] が出たところで、ベルケ・ハン—彼に神の慈悲と恩寵あれ— [の物語に] 入ろう。

ベルケ・ハンの物語の始まり

件のお方 [＝ベルケ・ハン] —彼に神の慈悲あれ—は、母親から生まれたときからムスリムであったことで有名である。この世に生まれたとき、自分の母の乳も (41b) 他の異教徒の女たちの乳も吸わなかった。このため、[ヨチ・ハンはベルケ・ハンを] 占い師たちと賢者たちにお見せになった。彼らが「この方は賞賛すべきお方です。ムスリムは異教徒の女の乳は飲みません」と言ったので、一人のムスリムの女を見つけ出して、連れて来させた。[ベルケ・ハンは] その女の乳を吸い始めた。

この出来事から数年ののち、彼 [＝ベルケ・ハン] の父ヨチ・ハンが亡くなると、異教徒のあいだにとどまることができずにスグナクの町に来た。[ベルケ・ハンが] その地方に来たとき、諸極の中の極、シャイフ・ナジュムッディーン・クブラー様の後継者の一人である世界のシャイフ、シャイフ・サイフッディーン・バーハルズ

っていたことが窺われる。

[43] 『チンギズ・ナーマ』ではサルタクはバトゥ（＝サイン・ハン）より先に死んだことになっているが、ラシードゥッディーンの『集史』には、バトゥの死後にモンケ・カアンのもとに来たバトゥの長男サルタクがカアンの命により後継者となったこと、そのサルタクも帰国の途上で死亡し、カアンの命でバトゥの四男ウラグチに後継させたこと、そのウラグチもまもなく死亡したことが記されている（Rašīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīḫ*, pp. 736-737)。バトゥの次男トガンはラシードゥッディーンの『集史』ではトゴガン（Tūqūqān）と表記される

[44] yaqasïz könglük. J. Eckmann, *The Dīvān of Gadā'ī*, Uralic & Altaic Series, vol. 113, 1971, p. 327に従って、"könglük"を「肌着」と訳した。

ィーの賞賛すべき資質を聞き、切望して奉仕に来て、数年間大いに努力して、聖者たちの究極の完全さを体得した[45]。[ベルケ・ハンが] シャイフにお仕えしているあいだに、サイン・ハンが亡くなり、彼のベグたちは一致してフレグ・ハンに使者を送った。ある日、シャイフ様がベルケ・ハンに仰るには、「おお、息子よ。至高なる神の御命令は、『そなたが行き、父祖の牧地において統治せよ』とのことである」と。[ベルケ・ハンは、]「私はあなた様にお仕えいたします。行って、この世の統治に[つくことは] 困難に我が身を置くことになります」[と言った]。[しかし、] シャイフが、「もしそなたが混乱に陥ったとしても、そしてもしそなたが困難に陥ったとしても、至高なる神の御定めから逃れる術はない」と仰ると、件のハンは仕方なく同意した。数日間、装備を整え、出発した。シャイフ様は、ブハラからカラ・キョルまで見送りに来た。ハンはシャイフの手綱 [を持って] 歩いて来た。カラ・キョルからシャイフは別れの挨拶をして、戻った。ハンは草原 (42a) 地方に向かった。

ハージー・タルハン地方に、ハージー・ニヤーズ[46]という富裕で知られた人物がいた。彼が言うには、「ハン陛下はカラ・キョルから八人を伴って出発し、草原地方に進軍なされた。この八人のそれぞれは、千の天幕の祖先である」と。ハン—彼に神の慈悲あれ—カラ・キョルを出発してウルゲンチに来て、ウルゲンチからサライチュクに行った。人々が語るには、[ベルケ・ハンが] サライチュクに向かったとき、五百人が集まった。サライチュクを通過し、イディル河の岸辺に到着するまでに、千五百人が集まった。イディル河の岸辺に到着したとき、フレグ・ハンが大軍とともにクルズム海[47]に沿って来ているという知らせを受けた。この [ベルケ・ハンの

---

[45] ナジュムッディーン・クブラーはクブラヴィー教団の名祖である中央アジアの高名なスーフィーであり、モンゴルのホラズム侵攻の際に殉教したとされる。サイフッディーン・バーハルズィーは彼の弟子。ベルケがサイフッディーン・バーハルズィーに師事したことについては、『諸情報の要諦』も伝えている(‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 259b; I. Vásáry, ““History and Legend” in Berke Khan’s Conversion to Islam,” *Aspects of Altaic Civilization III: Proceedings of the Thirtieth Meeting of the Permanent International Altaistic Conference Indiana University, Bloomington, Indiana June 19-25, 1987*, ed. by D. Sinor, Bloomington, 1990, p. 240, 246)。ベルケの改宗にサイフッディーン・バーハルズィーが関与したことをめぐる議論については、矢島洋一「モンゴルのイスラーム改宗とKubrawiyya」『西南アジア研究』53, 2000, pp. 62-65参照。

[46]『チンギズ・ナーマ』の著者ウテミシュ・ハージーの情報源の一人であったハージー・ニヤーズは、『諸情報の要諦』によれば、「著作家 (muwarriḫ)」であったという(‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 259b)。

[47] 一般に「クルズム海」といえば紅海を指すが、文脈から判断して、ここではアブーセイトワが註記するようにカスピ海を意味している。カスピ海は「ハザルの海」と呼ば

もとに] 集められた兵士たちは怖気づき、皆が一致して言うには、「フレグ・ハンは偉大な帝王である。彼には [大] 軍がある。われわれは少数である。そのため、われわれが出陣して戦うのはよろしくない」と。人々が言うには、「当時、ハンの手もとには覆いのない盾が一つあった」と。ある者たちが言うには、「覆いのない兜が一つあった。また、羊の小骨も用意されていた」と。ハンがこれらの者たちに答えて言うには、「私は、自身の判断や考えで出発したのではなかった。おまえたちは私を信用していない。いま、この小骨を盾や兜の丸い部分に私自身の手で置いたとしても、それは立たないだろう。いま、おまえたちと一つの約束をしよう。私はこの小骨をこの盾や兜の丸い部分の上に叩きつけよう。もし、これらの丸い部分の上に小骨が立つならば、私が敵を打ち負かすと知れ。至高なる神が (42b) 私に [勝利を] 与えてくださるのだ。もし小骨が立たなければ、おまえたちが言ったことに私は背かない」と。この一団がまた言うには、「もし小骨が立てば、われわれは命ある限りあなた様に従いましょう」と。ハン—彼に神の慈悲あれ—が小骨を手に取り、至高なる神を想いながら叩きつけると、丸い部分の上に小骨はまっすぐに立った。この状況を見て、心から疑いを取り除き、全員が従順になり、イディル河を渡り、クルズム海岸沿いに行き、フレグ・ハンの軍隊に向かって進軍した。

その途上、入江がクルズム海から枝状、割れ目状の流れとなって出ている。道はそれらの流れの先端を横切って通っている。[そこには] 高い砂丘がある。私めはその場所を見たことがある。[そこは] クル・マチャク[48]と呼ばれている。そこから先には、海から枝状の流れは出ていない。そこに一つの大きな丘がある。ベルケ・ハンの前衛はその丘に登った。シルワーンの方から巨大な砂塵が現れた。ハンに、「敵の砂塵が現れました。[砂塵には] まったく終わりも果てもありません」という知らせがもたらされた。これらのベグたちは再び怖気づき始めた。ハンが語るには、「私がその丘に登ろう。おまえたちはここから見ているがよい。そして、至高なる神の力を見よ。もし敵が来て私を捕らえたならば、ここから直ちに逃げるがよい」と。

れることが多いが、アラビア語地理書などにおいてはしばしば誤って「クルズム海」とも呼ばれた (G. Le Strange, *The Land of the Eastern Caliphate: Mesopotamia, Persia, and Central Asia from the Moslem conquest to the time of Timur*, Cambridge, 1905, p. 458; M. Dunlop, “BAḤR al-KHAZAR,” *Encyclopaedia of Islam, new edition*, 12 vols., Leiden, 1954-2002)。

[48]「クル・マチャク」とは「乾いた入江」の意味。

これらの者たちは同意した。ハンは丘の頂に登った。まもなく、向こうから軍隊が現れた。[敵は] 群れをなし、戦闘隊形になってやって来た。接近すると、対峙して翼を展開し始めた。大きく翼を広げていた。軍隊の最前列と最後尾が到達したが、軍隊の端を見ることができない [ほどの大軍であった]。そのとき、ハン陛下は三度鞭を振るい、敵に向かって馬を走らせた。まだ、丘から下に降りないうちに、至高なる神（43a）の力によって [敵] 軍は混乱し、敗走した。ハンの軍隊はこの状況を見て、ハンに続いて馬を走らせた。数日間追跡し、殺す者を殺し、殺さない者を捕虜にして、帰還した。[敵の] 馬と装備をすべて奪った。その捕らわれた者たちに、「おまえたちはあの丘の上にいた [たった] 一人の人物からどうして逃げたのか」と尋ねた。これらの者たちが言うには、「丘の上に登っていたその人物の両側には、二つの大軍が立っていた。われわれがどれほど眺めても、その二つの軍隊の端も縁も見ることはできなかった。われわれが装備して翼を展開したのは、そのためであった。その丘の上の人物がわれわれに向かって馬を走らせると、その二つの大軍も馬を走らせた。われわれには、天と地がわれわれの上に崩れ落ちてきたかのように思われた。そのため、とどまることができず、われわれは逃げた」と。ハン陛下 [＝ベルケ・ハン] のこの奇跡は、人々のあいだで有名である。

ある者たちが言うには、「フレグ・ハンの [息子] [49]がその軍隊の中にいた。彼はこの軍隊が打ち破られたときに死んだ。誰も彼が死んだことに気づかなかった」と。しかし、ドゥースト・スルターン殿下[50]の史書においては、「この軍隊が打ち破られたとき、彼 [＝フレグ・ハン] は悲しみから病となり、二ヶ月後に亡くなった」と語られている[51]。神はよく知り給う。

---

[49] ユーヂンは原文においてフレグ・ハンに所有格の接尾辞（nïng）が付されていることから、そのあとに「自身（özi）」か「息子（oġlï）」を補足して「フレグ・ハン [自身]」もしくは「フレグ・ハンの [息子]」とすべきであると註記し、ロシア語訳では「フレグ・ハン [自身]」を採用している。しかし、『諸情報の要諦』によれば、ここは「フレグ・ハンの [息子]」とすべきである（訳註51参照）。

[50] 『チンギズ・ナーマ』の著者ウテミシュ・ハージーにその執筆を命じたイシュ・スルターンの兄。ヒヴァ・ハン国の君主としてはじめてヒヴァで即位したが、のちに従兄弟のハージー・ムハンマドによって1558年もしくは967（1559/60）年に殺害された（*Histoire des Mogols et des Tatares*, pp. 234-236; Mūnis and Āġahī, *Firdaws al-Iqbāl*, pp. 118-119）。

[51] 『諸情報の要諦』は「ドゥースト・スルターン殿下の高名な史書」に依拠しながら、この軍隊を率いていたのはフレグの息子であり、フレグは息子の軍隊が壊滅したことが原因となって病になったとしている（ʻAbd ül-Ġaffār, *ʻUmdet ül-Aḫbār*, f. 260b）。ラシ

草原地方がベルケ・ハンのものとなったとき、非常に多くの異教徒たちをムスリムにした。ある者たちが言うには、[彼は] 十三年 [統治した]、ある者たちが言うには、十六年統治したという。それから、神の慈悲のもとに召された。ハン陛下 [＝ベルケ・ハン] から子孫は残らなかった。先に述べたように、サイン・ハンには二人の息子がいた。一人はサル・タク、一人はトガンだった。サル・タクは父より（43b）先に八歳で亡くなった。トガンからは二人の息子が残った。一人の名はトデ・マング、もう一人の名はムング・テムル[52] [であった]。[ベルケ・ハンが亡くなったとき、] このムング・テムルは子供であった。トデ・マングは成年に達していたが、愚かで、極めて思慮分別のない人物であった。サイン・ハンの子孫からこれ以外の人物は見つからなかったので、ベグたちは一致して件の人物 [＝トデ・マング] をハンとした。彼については、不思議な話、そして奇妙な物語が多い。さて、一つ二つの物語をこの梗概において回想しよう。

人々が語るところでは、あるとき、トゥブ・ハン[53]から使者たちが到着した。ベグたちが一致して件のハン [＝トデ・マング] に言うには、「遠方よりの使者が来ております。彼が見ているところで取り乱すようなことをしたり、考えたりしてはなりません。ハンの健康を尋ね、民の安寧をお尋ねください。それ以外のことを尋ねてはなりません」と。さらに、「あなた自身に意思はないのです。あなたの足に紐を結びましょう。そして、玉座の下にある者が入り、その紐を握って座らせます。わ

ードゥッディーンの『集史』はフレグがベルケ軍との戦いの約二年後に病死したと伝えており（Rašīd al-Dīn, *Jāmiʻ al-Tawārīḫ*, pp. 1044-1051）、年月は違うがフレグが病死したという点で『チンギズ・ナーマ』と一致している。

[52] トデ・マングとムング・テムル（『チンギズ・ナーマ』においては「ムンク・テミル（Mung Temir）」という表記も見られる）」は、ラシードゥッディーンの『集史』では「トデ・モンケ（Tūdā Mūngka）」、「モンケ・テムル（Mūngka Tīmūr）」と表記される。『チンギズ・ナーマ』ではトデ・モンケがモンケ・テムルより年長で、先にハンに即位したことになっている。しかし、『集史』やヌワイリーの『学芸の究極の目的』によれば、モンケ・テムルの方が先にハンに即位したことになっている（Rašīd al-Dīn, *Jāmiʻ al-Tawārīḫ*, pp. 740-741; *Сборникъ матеріаровъ, относящихся къ исторіи Золотой Орды В. Тизенгаузена*, т. I, извлеченія изъ сочиненій арабсксихъ, Санктпетербургъ, 1884, p. 132, 134）。ただし、ヌワイリーはトデ・モンケがトレ・ブカなる人物にハン位を譲ったとするが（*Сборникъ матеріаровъ*, т. I, p. 135）、ラシードゥッディーンはトデ・モンケが狂人であるという理由でモンケ・テムルの息子たちと甥たち（その一人がトレ・ブカ）がトデ・モンケを退位させたという（Rašīd al-Dīn, *Jāmiʻ al-Tawārīḫ*, p. 741）。

[53] Tüb Ḫān. ユーヂンは「最高の（？）ハン」と訳している。“tüb”はテュルク語で「根」「基礎」「起源」などを意味しているが、正確にどのように解釈すべきかは不明である。

れわれのこの忠告を忘れて、あなたが取り乱して話し始めたならば、その紐を引かせます。そのときには話すことをおやめください」と言ったところ、彼は同意した。人々が言うには、「彼の長所は、その思慮分別のなさにもかかわらず、何であれベグたちが一致して彼に述べたことをすべて受け入れ、彼らの言葉に背かなかったことである。そのため、[彼は] 十八年間草原地方において統治した」と。

エディギュ・ビー[54]—彼に神の慈悲あれ—が言ったことには、「そなたの敵に災いを願うならば、『唯一の神よ、我が敵を無知にしたまえ。そしてまた、知識ある者の言葉にも従わないようにしたまえ』というように祈るがよい」と。(44a) [また、]「もしその者自身が知らずとも、知識ある者の言葉に従うならば、まさにその者は知っているのである。それに違いはない」と言っていた。

さて、翌日 [トデ・マングは] 使者に接見した。ハンの健康を尋ね、民の安寧を尋ねた。その後、[トデ・マングは、]「そなたのくにに鼠は多いのか」と言った。「[たくさん] います」と [使者は] 答えた。またさらに、「そなたのくにに雨はたくさん降るのか」と [トデ・マングは] 尋ねた。「ええ、たくさん降ります」と [使者は] 答えた。その紐を握って [玉座の下に] 座っていた者は、[トデ・マングが] 脈絡のないことを話し始めたのに気づいた。彼は紐を引いた。ハンは使者に、「そなたにさらに尋ねたいところだが、私の足が [紐で] 引かれている」と言った。ベグたちはただちに使者を引き下がらせて、馬と衣服を与えて、帰らせた。その使者は戻り、自身の帝王の御前に参上した。そのハンが、「我が兄弟のハンをどのようにして見たか、どのような人物であるのか」と尋ねると、使者は、「一度だけ謁見しました。よく分かりませんでした。その謁見において、あなた様の健康を尋ねられました。また、民の安寧を尋ねられました。さらに、『そなたのくにに鼠はたくさんいるのか』と尋ねられたので、『はい、たくさんいます』と私は答えました。そして、『そなたのくにでは雨がたくさん降るのか』と尋ねられましたので、『はい、[たくさん] 降ります』と私は答えました。さらに、『そなたにさらに尋ねたいところだが、私の足が [紐で] 引かれている』と仰いました。それから、ベグたちはただちに立ち上がって引き下がりました。私もまた下がりました。私がハンにお会いしたのは、この

[54] 「ビー (bī)」は「ベグ (beg)」が後代に変化したものと考えられている。『チンギズ・ナーマ』においては、エディギュと後述のヒタイ・ババ・アリーに対して「ビー」が用いられている。

ような次第でした」と。このハンと彼のベグたちはこの言葉の意味をよく考え、言うには、「『雨がたくさん降るのか』と言ったことはよい。なぜならば、すべてのものに雨からの恩恵があるからである。そしてまた、鼠のことを尋ねたことも悪くはない。鼠からすべてのものに害が及ぶからである。しかし、(44b) いくら考えても、彼が『[私の足が] 紐で引かれている』と言ったことは理解できなかった」と。

もう一つの話はこうである。[トデ・マングは] 自らイディル河を渡り、遠征に出かけた。遠征から戻ると、彼に錯乱が生じた。彼はいつも、錯乱が生じると、誰の言葉にも注意を向けなくなった。ある場所に来て、彼は下馬した。十五日間、その場所から出発しなかった。軍隊の糧食が尽きた。[軍隊の] 状況は困窮を極めた。ベグたちが協議して、言うには、「この方はいま自分の妻のことを忘れている。髭のない顔の若者を女装させて、遠くから見せよう。おそらくは、自分の妻を思い出し、出発するだろう」と。そして、ある若者を女装させて見せると、彼は見るなり妻のことを思い出した。思い出して、言うには、「私の住まいにもそのような人がいたぞ」と。ただちに騎乗して、急いで出かけた。ある者たちは、この物語をいくぶん歪めて伝えている。筆者はそれらをこの記録に書き記すことを適切とは思わなかった。

[トデ・マングは] 馬を駆りたて、急いで行くと、二日後にイディル河の岸辺に到着した。彼の側には、二人の下僕がいた。河の近くには、バスグンチャク塩湖[55]のところに高い丘のような山がある。イディル河をバスグンチャクの側からヤイク河 [=ウラル河] の方へ渡ろうとすると、その山は一日行程近くもその者の側から離れずについてくるほど [の大きさ] である。ハンはイディル河を渡って急いだが、山が少しも離れないのに気づいた。一、二度、怒って見て、言うには、「おまえは行け。私は行かない」と。ただちに下馬し、横になった。彼の側にいた下僕たちもまた仕方なく下馬した。その日は、(45a) 夜になるまでそこで横になった。夜に人を見分けられなくなると、その二人の下僕のうちの一人は分別のある人物で、機転を利かして、言うには、「もう遅くなりました。あれ [=山] も休んでいます。あれが眠っているうちに、われわれは騎乗して駆けましょう。あれはわれわれには気づか

[55] 『チンギズ・ナーマ』には「ブスグンチャク (Busğunčaq)」という表記も見られるが、「バスグンチャク (Basğunčaq)」で統一した。ヴォルガ河に平行して流れる支流アフトバ河流域のアフトゥビンスクから東に60～70kmに位置するバスクンチャク湖に比定されよう。

ずに取り残されるでしょう」と言うと、この言葉はハンに大いに受け入れられた。そして、[ハンは]「おまえはよくぞ言った。馬に鞍を置け」と言った。彼[=下僕]は鞍を置いた。いまや[山が]眠ったというときに騎乗した。そして朝になるまで駆けた。朝になると、[山は]どこにも見えず、ハンは非常に喜んだ。人々が語るところでは、ハンは天幕に戻ったのち、多くの下賜を行ったという。このように、[トデ・マングは]奇妙で気がふれた人物であった。

ある者たちが言うには、彼は十八年間ハンであった。またある者たちが言うには、彼は八年間統治した。その後、彼の弟のムング・テムルが成人に達すると、彼[=トデ・マング]自身は公明正大に振る舞い、言うには、「長らく、[ハンになるべき]人物がいなかったためにおまえたちは私をハンとしてきた。おまえたちも苦しんだし、私も苦しんだ。いまや我が弟—神に讃えあれ—は立派に成長した。私の心はおまえたちに満足している。我が弟をハンとせよ」と言って、自らはハン位を退いた。彼のベグたちもこの言葉を喜んだ。彼の弟のムング・テムルをハンに推戴した。

ムング・テムル・ハンの物語の始まり

非常に公正で、思慮深く、聡明な帝王であった。ムング・テムルの時代、民は大いに安寧であった。彼の無類の素晴らしさから、キュリュグ・ハン[56]の名が与えられた。それで、ムング・テムル・キュリュグ・ハンとして知られている。人々が語るには、「彼は十三年間統治した。その後亡くなった」と。彼から二人の息子が残った。一人の名はトクタガ、もう一人の名はトゥグルルである[57]。父の死後、トクタガがハンとなった。

トクタガ・ハンの物語の始まり

[56]「キュリュグ」とはテュルク語で「すばらしい」「名高い」という意味(Doerfer, “külük,” *Türkische und Mongolische Elemente*, Bd. III)。
[57] トクタガとトゥグルルは、ラシードゥッディーンの『集史』では「トクタ(Tūqtāy)」、「トゥグリルチャ(Ṭuġrīlča)」と表記され、モンケ・テムルの十人の息子のうち、トクタが第五子、トゥグリルチャが末子である(Rašīd al-Dīn, *Jāmi‘ al-Tawārīḫ*, pp. 721-722)。

このトクタガ・ハンはきわめて偉大な帝王であった。サイン・ハンの子孫のなかで、彼と比肩しうる帝王はほとんどいなかった。人々が語るには、[トクタガ・ハンの]食卓は(45b)豪勢であった。すなわち、馬、牛、羊、その他の動物のほか、毎日九十頭の猪が彼の食卓に供された。彼にはイル・ビスヤール[58]という名の息子がいた。「私の死後に[誰かが]息子[=イル・ビスヤール]とハン位を争うことになる」と言って、自身の近親や一族のすべてを殺した。彼の弟のトゥグルルも殺したとさえ言われる。しかし、ある者たちが言うには、トゥグルル自身は病で死んだという。ケリン・バヤルン[59]という名のトゥグルルの妻がいた。美しい女性であった。トゥグルルが死んだとき、[彼女には]一人の息子[=ウズ・ベグ]がいた。[ケリン・バヤルンは、]トクタガ・ハンが息子[=イル・ビスヤール]のために近親を殺していることを知った。[彼女は自身の息子を]数名とともに逃がし、チェルケスの山地へ行かせた。有名なウズ・ベグ・ハン—彼に神の慈悲あれ—は、そのオグランのことである。しばらくして、ケリン・バヤルンを[トクタガ・]ハンが娶った。[トクタガ・ハンは]彼女を非常に愛した。この[近親の]死から数年が過ぎた。[トクタガ・]ハンの生涯は九十歳であったと言われている。十歳でハンとなり、八十年間統治した。ある者たちが言うには、二十歳でハンとなり、七十年間統治したという。

死期が近づくと、「自分の死後にハンになるように」と言って庇護していた息子[=イル・ビスヤール]が、結局ハン自身より先に死んだ。そこで、[トクタガ・ハンが思うには、]「私には一人の息子がいた。『私の死後に[誰かが]彼[=イル・ビスヤール]とハン位を争うことになる』と考えて、自分の一族をすべて殺した。もはや、自分は年老いて人生の終わりにさしかかったが、この息子も自分よりも先に

[58] イル・ビスヤールは、『ムイッズルアンサーブ』ではトクタの三人の息子の一人で「イル・バサル(Īl Basār)」と表記される(Anonym., *Mu‘izz al-Ansāb*, 22a)。ユーヂンは「イル・バサル」と読んでいるが、ここでは写本の表記を尊重した。『諸情報の要諦』によれば、イル・バサルの母は「ヒタイのハンの娘」であるという(‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 261b; D. DeWeese, *Islamization and Native Religion in the Golden Horde: Baba Tükles and Conversion to Islam in Historical and Epic Tradition*, Pennsylvania, 1994, p. 151)。
[59]「ケリン」とは「花嫁」の意味であり、『諸情報の要諦』によれば、ケリン・バヤルンはチャガタイ家出身であるという(‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 261b; DeWeese, *Islamization and Native Religion*, p. 151)。

死んでしまった。それがどれほどの災いと後悔であるかは明白である[60]」と。ついには［トクタガ・ハンは］その悲しみのため病となり、病は長引いた。ある日、［トクタガ・ハンは］床に臥し、寝返りを打ち、呻いていた。ケリン・バヤルンは、なぜ［トクタガ・ハンが］衰弱しているのかを知って、言うには、「あなたはいつも苦痛に苛まれていました。今度はなぜ弱りきっているのですか」と。(46a) ハンが言うには、「どうして弱りきらないでいられようか。『［誰かが］唯一の息子イル・ビスヤールとハン位を争うだろう』と思って、私は一族すべてを殺した。私の息子にも、同じようなことが起こった。私自身にも死が近づいた。私の牧地が他人のものとなる。私が弱りきっているのは、そのためである」と言うと、ケリン・バヤルンが言うには、「あなたの御命令に背いて、私はある事をしました。もし、私の罪を許してくれるならば、話しましょう」と。ハンはすぐに起き上がって、座って、「何をしたのだ」と尋ねた。［ケリン・バヤルンが］言うには、「あなたの弟［＝トゥグルル］が亡くなったとき、あなたの弟には一人の息子がいました。『［トクタガ・ハンが］おまえ［＝トゥグルルの息子］を殺すでしょう[61]』と言って、逃がし、チェルケス地方に向かわせました。いまも毎年、彼の無事の知らせが届いています。今年で十四歳になります。もし、あなたがお命じになり、人を向かわせるならば、彼は来るでしょう」と言うと、ハンは喜びのあまり、まるで病ではなくなったかのようになった[62]。［トクタガ・ハンは］万人隊のうちの二千人を［贈って］、ケリン・バヤルンを喜ばせた。翌朝、ベグたちを呼んで、キヤト・イサタイとスィジュト・アラタイ[63]に四万人を与えて、ウズ・ベグ・ハン—彼に神の慈悲あれ—を連れて来るため

---

[60] この会話文は“Basa ma‘lūm turur kim”で始まっているため、われわれは原文を尊重して本文のように「さて、・・・は明白である」と解釈した。ユーヂンはここを“Бәсі мәлул турур кім”と読み、「・・・を彼は非常に嘆いた」と訳している。

[61] Sizni öltürgäy. ユーヂンは誤って文頭の“Sizni”を“Siz”、すなわち主語ととり、「あなた［＝トクタガ・ハン］が［トゥグルルの息子を］殺すでしょう」と訳している。

[62] ユーヂンの訳では、「まるで病ではなくなったかのようになった」の部分が欠落している。

[63] トクタ、ウズ・ベグに仕えたスィジュト部族出身のベグまたはアミール。イブン・バットゥータの旅行記には、アミール・イーサー（＝キヤト・イサタイ）の娘でウズ・ベグの第四ハトゥンとなったオルドチャの妹がアミール・アリーb.アルザンの妻であったと記される（『大旅行記4』, pp. 43-44）。アブーセイトワは訳註においてこのアミール・アリーをアラタイに比定している。この比定が正しければ、アラタイはイサタイの女婿となり、ウルスのこの二人の有力者は互いに強固な姻戚関係で結ばれていたことになる。

に遣わした。これらの者たちが行って［戻って］来るまでに、トクタガ・ハンは亡くなっていた。

バジル・トク・ブガという名のウイグル部族出身の者がいた。彼の氏族・部族は非常に強力な民であった。また、彼はハン［＝トクタガ］の師傅であった。悪魔が［トク・ブガを］誘惑し、カラ・キシ[64]であったのに、彼はハンとなった。彼は、ケリン・バヤルン、そしてハンの他の妻たちをも娶った。ある者たちが言うには、バジルはウイグル［部族の出身］であるが、トク・ブガはヌティン［部族の出身］であるという。この話は誤りであろう。なぜなら、二つの部族出身の［二人の人物が］同意して同じ場所でハンになることは困難だからである。(46b) より正確には、彼の名がバジルで、ラカブがトク・ブガであった[65]。つまりは、このバジル・トク・ブガがハンとなり、［トクタガ・］ハンの妻たちを娶り、民のすべてを服従させたのである。

このあいだに、その［チェルケス地方に］行ったベグたちがウズ・ベグ・ハン陛下を連れて［イディル河の］岸辺まで来た。［彼らは、トクタガ・］ハンが亡くなり、バジル・トク・ブガがハンとなって民のすべてを服従させたという知らせを受けた。彼らはこの知らせに非常に動揺し、悲しみ、どうすればいいのかを協議した。キヤ

---

[64] qara kiši.「黒い人」という意味のテュルク語で、モンゴル語では「ハラチュ」という。チンギス家の出身でない者を指す術語である。カラチまたはハラチュの語義・用法の変化については、В.В. Вельяминов-Зернов, *Исследование о Касимовских царях и царевичах*, II, Труды Восточного отделения Императорского Русского археологического общества, 10, СПБ, 1864, pp. 411-437; ウラヂミルツォフ著, 外務省調査部訳『蒙古社会制度史』原書房, 1980, pp. 160-161, 274-275参照。15〜16世紀の中央アジアの社会状況を詳細に伝える『バーブル・ナーマ』では、「キシ・カラ」「カラチュ・キシ」の形で広く「配下の者」「臣下の者」の意味で使われており（間野英二『バーブル・ナーマの研究　III　訳注』松香堂, 1998, pp. 51, 288, etc）、そこにチンギス家出身者と明確に区別する意図はまったく見られない。この事実はバーブルの属したティムール帝国が非チンギス家の政権であったことと無関係ではなかろう。

[65] バジル・トク・ブガについて、ユーヂンはいくつかの仮説を提示している。まず、カーディル・アリーの『集史』において「バチキル（Bačqir）・トク・ブガ」と記載されていること（Qādir ‘Alī Beg, *Jāmi‘ al-Tawārīḫ*, f. 60a）、そして『チンギズ・ナーマ』においては人物名の前に部族名が付されていることから、バジル・トク・ブガは「バシキル・トク・ブガ」と読むべきであり、すなわちバシキル部のトク・ブガであるとした。また、ウズ・ベグが即位後にトクタの重用したウイグル（すなわち仏僧）や呪い師を殺害したというマムルーク朝史料の『ビルザーリー史』の記述（*Сборникъ матеріаровъ*, т. I, p. 173）に拠りながら、文中に現れる「ウイグル」とは部族ではなく仏教徒を意味し、「ヌティン」とは「仏僧（toyïn）」のことであるとし、トク・ブガを仏教に関連する有力者であったとしている（Юдин, “Переход власти к племенным биям,” pp. 68-69）。

ト・イサタイが言うには、「以前、その［＝トク・ブガの］氏族・部族は非常に強力な民だった。いまは、すべての人々が彼に臣従している。いまここから立ち上がって敵意をあらわにすれば、事はうまくいかないだろう。策略を用いて、彼に近づくように努めよう。その後、心中に望むことを行おう」と言うと、全員がこの言葉に納得して、［トク・ブガに］使者を派遣した。彼らが［トク・ブガに伝えるために］言うには、「私の主人であるハン［＝トクタガ・ハン］は、命じて［われわれを］遣わしました。われわれはその方［＝ウズ・ベグ・ハン］を連れてきております。この方は、父祖からのあなたの主［＝チンギス家］の子孫です。［しかし、］あなたはそのように［チンギス家を主人と］するべきではありません。いまや、［ハン位は］あなた自身にふさわしく、あなたがハンになっておられます。すべての人々があなたに臣従しております。われわれも同様にあなたに臣従いたします。われわれが［あなたに］背くことはありません。背こうにも、われわれの力は及びません。この方は年端もいかぬオグランであります。［この方を］連れてきて、あなたの手に委ねましょう。あなたの心が何を望もうと、それを行ってください」と。「このためにわれわれが天幕や民から離れることはない」と言って、［トク・ブガに使者を］派遣した。

これらの者たちの使者が到着すると、［トク・ブガは］非常に喜び、［使者を］出迎え、歓待した。そしてすぐに人を伴わせて送り（47a）返した。［トク・ブガが］言うには、「『あのお方が来るまでに他の者が頭をもたげハン位を望むだろう』と言って、この［ハンになる］ことを私が行ったのである。［しかし、］私の主人の子孫がいるのに私がハンになることが許されるであろうか。帝王を［ここに］来させるべきである。ハン位であれ、民であれ、そのすべてはあのお方のものである」と言って、［使者を］送り返した。この言葉がこれらの者たちに伝わると、ただちに彼らは出立した。これらの者たちが到着しないうちに、バジル・トク・ブガはベグたちと協議し、一致したことには、「彼らが［トクタガの］未亡人の天幕の入口を入って涙を流し、二度「おーい、おーい」と叫んで涙を流したあと、襲いかかろう」と。

さて、カルマク[66]の慣習は、帝王たちや有力者たちが亡くなったとき、［人々が］

[66] ジュンガル盆地を中心に主にモンゴル高原西部で活動したモンゴル系遊牧部族連合オイラトのことを呼んだテュルク語。バルトリドによれば、この術語はティムール帝国期に書かれたシャラフッディーン・アリー・ヤズディーの史書の序章に初めて現れるという（В.В. Бартольд, “Калмыки,” *Сочинения*, т. V, Москва, 1968, pp. 538）。

集団になって諸氏族とともにやって来て、三度「おーい、おーい」と嘆いて、涙を流すというものである。ウルグ・タグにおいては、彼らのあいだにその慣習がいまもある。

ある日、ウズ・ベグ・ハンはベグたちとともに夜が明けないうちに出かけた。一人のまさに叫んでいる者が彼らの前からやって来て、通り過ぎようとしていた。そしてその者が言うには、「『おーい』と叫べ、『おー』と叫べ」と。一度言うと、去っていった。［彼らはその者の言葉を］気にとめなかった。二度目に言ったとき、キヤト・イサタイが、「おまえは何を言ったのだ」と言った。その人物は、「私の名はサングスン。察せよ、その続きを」[67]と言った。キヤト・イサタイは、「何か話があるのか」と言った。この者を追いかけて、「私にその話を言え。何の話なのだ」と言った。その者が言うには、「バジル・トク・ブガはベグたちと同意して協議した。おまえたちが現れ、天幕の入口に入り、二度『おーい、おーい』と叫んで涙を流したあと、彼らは襲いかかり、おまえたちを殺すだろう。もし、おまえたちが一度だけ『おーい』と叫ぶや、彼［＝トク・ブガ］に向かって突進して襲いかからなければ、おまえたちはみな殺されるだろう。私の話の（47b）内容は、［すべて］おまえに話した」と。イサタイがこの知らせをベグたちに伝えると、彼らは［一度だけ］「おーい」と叫ぶや［トク・ブガに］襲いかかることで一致した。翌朝、彼らは出立して、天幕のある場所に到着した。バジル・トク・ブガは天幕のなかの玉座に座っていた。ベグたちとノケルたちは入口に立って控えていた。これらの者たちが来て、入口で下馬した。そして一度「おーい、おーい」と叫んで涙を流したあと、「おー」と叫ぶやバジル・トク・ブガに向かって襲いかかった。［トク・ブガが］立ち上がるまでに

[67] 「私の名はサングスン。察せよ、その秘密を（Mening atïm Sanggïsun. Anglaġay sen songġusun）」の文は一種の掛詞になっている。すなわち、この人物が名乗っている「サングスン（Sanggïsun）」という名は、「その続きを（songġusun）」とほぼ同音になっている。ユーヂンはこの人物を、アブールガーズィーの『テュルクメン系譜』に現れる、ジャーニー・ベグに仕えたウイグル部族の「サンクル・スン（Sanqlï Sïn）」なる人物に比定している（*Родословная Туркмен: Сочинение Абу-л-Гази хана хивинского*, А.Н. Кононов, Москва-Ленинград, pp. 72-73; Юдин, “Переход власти к племенным биям,” pp. 70-71）。一方、デウィースは、ラシードゥッディーンの『集史』に現れる、トクタガとの戦いでノガイを裏切った「サンクイ」なる人物に比定している（Rašīd al-Dīn, *Jāmi‘ al-Tawārīḫ*, p. 745; DeWeese, *Islamization and Native Religion*, p. 153）。

[68]イサタイが駆け寄り、彼の首をはねた。彼の首は一歩先のところに転がった。アラタイが短刀[69]で［首を］突き刺し、高く持ち上げるや叫ぶには、「ここにおまえたちの主人の首がある。いまいる場所から動くな」と言うと、みな呆然として立ち尽くした。それからその首を部隊ごとにまわし、「カラ・キシがハンになることはこれをもってなくなるように」と叫んだ。バジル・トク・ブガを殺すと、ウズ・ベグ・ハン陛下をハンに推戴し、玉座に座らせた。

ウズ・ベグ・ハンの物語の始まり

ハン陛下が玉座に座し、民が平穏を見い出したのち、［ウズ・ベグ・ハンは］ヨチ・ハンの［息子たちのうち、ウズ・ベグ・ハンの祖先であるサイン・ハンの母とは］別の母から生まれた十七人の息子のオグランたちを呼んで来させて言うには、「おまえたちは祖先［＝ヨチ・ハン］の子孫ではなかったのか。おまえたちはカラ・キシの奴隷やノケルとなりあの者に服従するくらいなら、おまえたちの一人でも［カラ・キシと］ハン位を争うべきではなかったか。おまえたちがカラ・キシの奴隷やノケルであることを認めたのならば、私もおまえたちをカラ・キシにコシュンとして与えよう」と言って、激怒し、ノケルとセウデル[70]と民のすべてをキヤト・イサタイに下賜した。

さて、筆者は先にも以下のように言及していた。シバン・ハンは剣を振るい、敵どもや諸地方を征服したので（48a)、彼のオグランたちや子孫たちをすべての人々が尊敬していた。［ウズ・ベグ・］ハンはこのオグランたちに激怒して、［彼らを］イサタイにコシュンとして与えたが、イサタイもシバン・ハンのオグランたちのために、彼らの祖先［＝シバン］への敬意を表して、ともに配下の民であるボイレク［部族］とカルルク［部族］を取り、これらの者たち［＝シバンのオグランたち］をそのままにしておいた。彼らはサイン・ハンが定めた牧地にいたという。そして

[68] 解釈が難しい文章である。ユーヂンは“Тақдын раст қырғунчә”と読み、「［玉座から］立ち上がるまでに」と訳しているが、ユーヂンの解釈には疑問が残る。“tāq”が“taẖt”の誤写である可能性はないだろうか。われわれは原文を尊重して“tā qaddïn rāst qïlġunča”と読み、本文のように解釈しておいた。

[69] böydä. この語釈については、DeWeese, *Islamization and Native Religion*, p. 154参照。

[70] sewdär. テュルク語で「従者」の意味。『チンギズ・ナーマ』では「ノケル」と同格で並列されており、同様の意味で用いられていると思われる。

アラタイにはミング［部族］[71]の配下の民を分け与えた。［このことは］よく知られている。ウズベグのあいだで、「［ウズ・ベグ・ハンは］イサタイに編成した軍［の一部］を分け与え[72]、アラタイにはミング［部］を分け与えた」と言われるが、その意味は以上述べたとおりである。

さて、件のハン陛下［＝ウズ・ベグ・ハン］―彼に神の慈悲あれ―はきわめて偉大な帝王であった。数年間統治したあと、至高なる神の恩寵に浴し、ムスリムになった。

ウズ・ベグ・ハンのイスラーム［改宗］の理由についての物語

［ウズ・ベグ・ハンの］イスラーム［改宗］の理由は以下のようであった。当時の聖者たちのうちの四人に、至高なる神から、「おまえたちは行き、ウズ・ベグをイスラームのもとに呼び寄せよ」という啓示がくだった。そして至高なる神のご命令により、彼らはウズ・ベグ・ハンの［天幕の］入口に来て、天幕の外に座り、［天幕の方を］向いた[73]。次のような伝承が伝えられている。不信仰の魔術師や占い師たちがハンに次のような奇跡を見せた。ハンが催した集いに壺[74]と［蜂蜜］を持って来させて置いた。小瓶と水差し[75]を準備した。蜂蜜の上澄みが［ひとりでに］水差しを流れ、小瓶に落ちた。そして小瓶自体をその人［＝ウズ・ベグ・ハン］に渡した。すべての魔術師や占い師をハンは彼自身のシャイフとみなし、側に座らせ、大いに尊敬と敬意を払った。

さて、ある日、これらの者たちが来て、［天幕の方を］向いて座った。いつものようにハンは集いを準備した。［ハンは］シャイフたちとともに来て、みな座り、い

[71] Ming. ここでは「ミング」を部族と解釈したが、「千人隊」を意味している可能性もある。

[72] örüm češip. ユーヂンは“өрүм четіб”と読み、「イサタイに［コシュンを］分け与え」と訳している。

[73] mutawajjih boldïlar. ユーヂンは「祈り始めた」と訳している。

[74] sapčaq. 取っ手付きの大きな容器を意味し、本文後段では“paymāna”の語で現れている（DeWeese, *Islamization and Native Religion*, pp. 551-554)。

[75] jorġatï wa dūstġānlarnï. “ jorġatï”は飲み物を注ぐための容器、“dūstġān”は注ぎ口のある容器を意味しており、デウィースはとくに前者を「馬乳酒用の容器」と訳している（DeWeese, *Islamization and Native Religion*, pp. 555-557)。ユーヂンは“ jorġatï”を「管」と訳しているが、これは誤りであろう。

つものように壺と蜂蜜を持って来させた。水差しと小瓶を持って来させて置いた。［しかし、］しばらくたっても、蜂蜜はいつものように水差しを流れず、小瓶に落ちなかった。ハンがシャイフたちに言うには、「どうしてこの蜂蜜は止まって（48b）いるのか」と。シャイフたちが言うには、「おそらく、この近くにムハンマドの民が来ています。これはその印です」と。ハンは、「天幕をまわって探せ。もしムハンマドの民がいるならば、連れて来るように」と命じた。従者たちが天幕をまわって探すと、天幕の外に四人の異なる姿をした者たちが頭を低く垂れて座っていたのを見た。従者たちは、「あなた方はどなたですか」と尋ねた。これらの者たちは、「われわれをハンの前に連れて行きなさい」と答えた。［従者たちはこれらの者たちをハンの前に連れて］来た。ハンの目はこれらの者たちに止まった。教導の光で至高なる神がハンの心を照らしたので、［ハンは］これらの者たちを見ると、好意と愛着が心に生じた。ハンは、「おまえたちは誰か。どんな用件で来ているのか。どんな用件で行くのか」と尋ねた。これらの者たちが答えるには、「われわれはムハンマドの民です。至高なる神の命令によりあなたをムスリムにするために来ました」。このあいだに、ハンのシャイフたちが叫んで言うには、「これらは悪い者たちです。これらの者たちと話してはなりません。殺すべきです」と。ハンが言うには、「なぜ殺すのだ。私は帝王である。おまえたちの誰も恐れはしない。おまえたちのどちらかの信仰が正しければ、それに頼ることにしよう。もしこれらの者たちの信仰が正しくなければ、おまえたちの今日の仕事はどうしてうまくいかず、［蜂蜜は］止まったままなのか。論議せよ。おまえたちのどちらかの信仰が正しければ、私はそれに従おう」と。この二つの集団は互いに論争を始め、大いに騒ぎたて、言い争った。ついには、次のように決まった。すなわち、二つの炉を掘り、それぞれに十台の荷馬車分のタマリスクを燃やして熱する。一つの炉には魔術師の一人が入り、もう一つの炉にはこれらの者たち［＝ムスリム］の一人が入る。燃えずに出て来る者の信仰が正しい、ということに決めた。翌朝、二つの大きな炉を掘った。タマリスクの薪を集めて火をつけた。一つを魔術師たちに割り当て、もう一つをムスリムたちに割り当てた。この聖者たちは、「われわれの誰が［炉に］入るのか」と互いに遠慮しあった。

これらの者たちの一人は、ババ・テュクレス[76]と呼ばれた。（49a）［彼は］体全

[76] ウズ・ベグがイスラームに改宗するうえで大きな役割を果たしたとされる伝説的な聖

体が毛で覆われていた。彼が言うには、「私に許しを下され。私が入りましょう。あなた方は私をお守りくだされ」と。これらの聖者たちは彼のために［『クルアーン』の］開扉章を唱えた[77]。そのババは、「私に鎧を用意してくだされ」と言った。彼らが鎧を用意すると、彼［＝ババ・テュクレス］は裸の体に鎧を着た。そして至高なる神への想いを唱え始め、炉の方に向かった。ババの毛が逆立ち、鎧の隙間からはみ出ていたという。この状況を皆が見ていた。この人物［＝ババ・テュクレス］は歩いて炉に入った。一頭の羊の肉を持って来させて炉に吊るし、［炉の］蓋を閉めた。さて、占い師たちの物語に移ろう。占い師たちはやむなく一人を選び出し、炉に投げ入れた。［その者が炉に］落ちるや否や、彼の灰は蒼色や碧色[78]となり、炎が炉の蓋から出てきた。この状況を、ハンをはじめとしたすべての者たちが見ると、彼らの心は異教の信仰から転向し、ムスリムの信仰に傾いた。そして、ババの［神への想いを］唱える声が炉から絶え間なく聞こえていた。羊の肉が焼けた頃に、炉の蓋を開けた。ババは祝福された顔の汗を拭うや、「どうして急いで［蓋を開け］たのだ。もうしばらく待ってくれるならば、仕事［＝神への想いを唱えること］をやり終えたのに」と言って、炉から出た。人々は、鎧が炭のように赤くなっているのを見た。しかし、至高なる神のお力により、ババの一本の毛も燃えずに［ババ・テュクレスは炉から］出たのである。この状況を、ハンをはじめとしたすべての者たちが見ると、ただちにシャイフたちの裾にすがって[79]ムスリムになった。イスラームの信仰に神の賞賛あれ。

ところで、ベルケ・ハンの時代にウズベグの民はムスリムになっていた。その後、

者。カーディル・アリーの『集史』によれば、この聖者は初代正統カリフ、アブー・バクルの子マフムードの子孫で、ジョチ・ウルスの有力者エディギュ（マンギト部族出身）の祖先であるという（Qādir ‘Alī Beg, *Jāmi‘ al-Tawārīḫ*, f. 62b）。ほぼ同様の記述が『諸情報の要諦』にもみられる（ただし、アブー・バクルの子はムハンマドとなっている）（‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 322b）。明らかに、これは、この聖者が由緒正しいイスラームの系譜の流れを汲む者であると創作することでエディギュの権力をイスラーム的な要素で正統化しようとしたものであろう。なお、デウィースは、『チンギズ・ナーマ』やこれら諸史料の情報も含め、この聖者に関して諸史料に残された情報を網羅的に考察しており、詳しくはそちらを参照されたい（DeWeese, *Islamization and Native Religion*, pp. 533-565）。

[77] Fātiḥa oqudïlar. ユーヂンは「祝福した」と訳している。

[78] küli kökli yäšilli. ユーヂンは「虹色」と訳している。

[79] etäklärini tutup.「裾にすがる」とは、その人の庇護の下に入ることを意味している（『デデ・コルクトの書』菅原睦・太田かおり訳, 東洋文庫 720, 2003, p. 323）。

また信仰を捨て、(49b) 異教徒になった。こうして、ウズ・ベグ・ハンはムスリムになった。それ以来、ウズベグの民のイスラーム［への信仰］は揺らぐことはなかった[80]。人々が言うには、ウズ・ベグ・ハンは二十年間統治した。またある者たちが言うには、十八年間統治した。それから神の慈悲のもとに召された。「まことにわれわれは神のもの。われわれはやがて神のお傍に還らせて戴ける身」[81]。

ジャーン・ベグ・ハンの物語の始まり

高名なジャーン・ベグ・ハン陛下―彼に神の慈悲あれ―が父の玉座においてハンとなったとき、かのお方の公正さ、敬虔さ、寛大さはよく知られている。草原地方でかのお方のように公正、敬虔、強力な帝王が現れたことはない。父［＝ウズ・ベグ・ハン］の国のすべてを統治していた。その後、マリク・アシュラフ[82]というタブリーズの長官がいたが、悪魔が彼を正道から逸れさせ、彼は自身の娘を娶った。その物語とは以下のようであった。彼には一人の美しい娘がいた。この呪われた者［＝マリク・アシュラフ］は娘を愛してしまい、［彼は］まったく平静を失ってしまった。彼はタブリーズのウラマーたちに、「ある人物が木を植えてその果実が実ったならば、［その人物］自身で食べるのがよいか、それとも誰かに与えるのがよいか」と尋ねた。ウラマーたちが言うには、「自身で食べてもよいですし、誰かに与えてもよいです」と。この呪われた者の目的は自身の娘であったのである。この言葉に従

[80] 『チンギズ・ナーマ』では、ベルケやウズ・ベグのイスラームへの改宗におけるサイフッディーン・バーハルズィーやババ・テュクレスなどのスーフィー聖者の役割が強調されているが、こうした改宗伝承はスーフィー教団の成立と拡大に緊密に結びついており（濱田正美『世界史リブレット　70　中央アジアのイスラーム』山川出版社, 2008, pp. 73-74)、その史実性については慎重に検討すべきである。

[81] Q 2: 156.

[82] スルドゥズ部族の出身。祖父はイル・ハン朝アブー・サイード・ハンの治世（1316-35年）の前半にイル・ハン朝随一の実力者となったチョバン、父は同時期にルームの支配者となったテムルタシュ。アブー・サイードの死後、兄弟の小ハサンがイル・ハン朝の権力を握ったが、小ハサンの死後、十二年にわたって西北イランを支配した（志茂碩敏『モンゴル帝国史研究序説』, pp. 150-155)。『シャイフ・ウワイス史』では、『チンギズ・ナーマ』の物語と異なり、アシュラフはフレグ・ウルスを征服するために遠征を敢行したジャーニー・ベグ・ハンに抵抗したために殺されたことになっている（*Ta'rīkh-i Shaikh Uwais (History of Shaikh Uwais): An Important source for the History of Adharbaijān in the Fourteenth Century*, persian text, ed. by J.B. Van Loon, 's-Gravenhage, 1921, pp. 176-179)。

って、［彼は自身の］娘を娶った。

そこで、タブリーズのウラマーたちが［ジャーン・ベグ・］ハンに嘆願するには、「この人物は詭弁を弄してわれわれにある問題について尋ねました。われわれは彼の目的を知らずに、額面どおりに［受け取って］裁定してしまいました。この人物の目的は自身の娘にあったのです。いまや彼は娘を娶りました。この人物自身は異教徒となりました。われわれもまた異教徒の奴隷となっております。今日、あなた様がイスラームの帝王です。いまや、あなた様はムスリムたちの前からこの異教徒を駆逐すべきです」と。人々が言うには、嘆願が届いたとき、［ジャーン・ベグ・］ハンは午後の礼拝［の文句を］唱え、モスクに座っていた。(50a) ただちにウラマーたちを集めて尋ねるには、「おまえたちはこの言葉に対して何と答えるか」と。彼らが言うには、「はい、あなた様はこの異教徒をムスリムたちの前から駆逐すべきです」と。［ジャーン・ベグ・ハン］はこの言葉を聞くと、モスクからもはや［自身の］天幕には戻らなかった。三日間、そのモスクに留まり、装備を整えて出立した。そして［タブリーズに］行き、マリク・アシュラフを殺し、タブリーズとイラクの諸地方を征服した。三十年間統治した。それから、至高なる神の慈悲のもとに召された。「まことにわれわれは神のもの。われわれはやがて神のお傍に還らせて戴ける身」[83]。

ベルディ・ベグ・ハンの物語の始まり

彼［＝ジャーン・ベグ・ハン］の息子、ベルディ・ベグが父の玉座においてハンとなった。このベルディ・ベグは非常に愚かで無分別な人物であった。自身の親族たちと息子たちを、「自分とハン位を争う」と言って殺した。人々が語るには、カンクリ・トゥルバイ[84]という人物がおり、彼の部族や親族は非常に強力であった。この人物はハンの師傅であった。［カンクリ・トゥルバイが］何を言おうとも、［ハン

[83] Q 2: 156.

[84] その名前から明らかなように、カンクリ部族の出身。『ムイーン史選』には「トゥグル・バイ（Ṭuġlū Bāy)」の表記で現れ、彼はジャーニー・ベグの重臣だったが、ジャーニー・ベグを暗殺し、その息子ベルディ・ベグをハンに即位させたという（Anonym, *Muntaḫab al-Tawārīḫ-i Mu'īnī*, MS., Bibliothèque Nationale, Supplément Persan 1651, ff. 308b-309a)。しかしながら、『シャイフ・ウワイス史』にはそのような記述はまったく見えない。

は］彼の言葉に背かなかった。彼［＝カンクリ・トゥルバイ］には、スマイという名の一人の息子がいた。勇敢な射手であった。そのスマイはジャーン・ベグ・ハンの時代に盗みを働いた。そのため、［ジャーン・ベグ・］ハン—彼に神の慈悲あれ—は彼を殺した。トゥルバイはその息子の恨みから、［ベルディ・ベグに］次のような忠告を与えて言うには、「あなたはいまは若い。［しかし、］いま生まれたあなたの息子は、あなたが日々年老いていくのと同じように成長する。その息子は若者になります。この先、あなたが年老いたのちにあなたのハン位を争い、奪うでしょう。いまこれらの者たちを殺しておくべきです。あなたが年老いても、その後は［平穏で］いられるように」と。その不幸な者［＝ベルディ・ベグ］は、この言葉に従い、［息子たちを］殺した。このため、彼はケレキン・キュテン・ハン[85]と呼ばれている。

彼の時代には反乱が多かった。右翼をキヤト・ママイが奪い、民とともにクリムへ去った[86]。左翼を（50b）キヤト・ジル・クトルの息子テンギズ・ブガがシル河畔に奪い去った。［ベルディ・ベグ・］ハンは、自身の廷臣たちとともにサライにいた。三年間、サライの町において帝王であった。その後、亡くなった。

有名なタイ・トゥグル・ベギムは、ウズ・ベグ・ハンの妻であり、ジャーン・ベグ・ハンの母であった。当時、彼女は生きていた。サイン・ハンの子孫のうち誰一人残っていなかった。件のベギムが言うには、「いまや、ハン位と牧地はシバン・ハンの子孫のものである」と。当時、シバン・ハンの子孫のうちマングタイの息子でヒズル・オグランと呼ばれる者がいた。サイン・ハンの定めたマングタイの牧地は、アク・キョルという場所にあった。［マングタイが］他の［ヨチ家の］オグランたちから離れて、その牧地にいた理由については、私は先に述べておいた。こうして、件のベギムはヒズル・オグランを呼びよせ、連れて行って、サイン・ハンの玉座のあるサライ地方においてハンとした。この話はここで中断しよう。われわれは、キヤト・ジル・クトルの息子テンギズ・ブガの宮廷にいたオグランたちの話と、テン

---

[85]「ケレキン・キュテン」とは、「必要なものを護る」という意味に解釈できよう。ここでは、ベルディ・ベグが我が身の保身に執着する様を指していると思われる。

[86] キヤト・ママイはその名が示すようにキヤト部族出身であり、『諸情報の要諦』によれば、前述のキヤト・イサタイの甥とされる（‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 264b）。ママイは、ベルディ・ベグ・ハン死後のジョチ・ウルスの混乱のなかでジョチ家のアブドゥッラーなる人物をハンに擁立して一時期はサライを掌握し、クリミア（クリム）地方を含むジョチ・ウルス西部は「ママイ・オルダ（Мамаев Орда）」と呼ばれた（Сафаргалиев, *Распад Золотой Орды*, pp. 116-117）。

ギズ・ブガを殺してカラ・ノガイ[87]がハンになった物語に移ろう。

ところで、ウズ・ベグ・ハン—彼に神の慈悲あれ—は激怒して、ヨチ・ハンの［サイン・ハンの母とは］別の妻から生まれた十七人の息子の子孫たちを、民とともにキヤト・イサタイにコシュンとして与えていた。件のイサタイの死後、［彼らのすべては］息子のテンギズ・（51a）ブガに残された[88]。このテンギズ・ブガは非常に粗野で残虐な人物であった。このオグランたちは彼の主君の一門の者たちであったが、彼はこの者たちを非常に虐待し、侮辱した。たとえば、彼の父ジル・クトルのために廟を建てたとき、「彼らを人夫にせよ」と言って、他の者たちを加えず、廟［の建設］にかかわるすべての仕事をこれらの者たちに命じた。水を運んだ者、煉瓦を積んだ者、そして煉瓦を運んだ者たちも、これらの者たちであった。ある者は背中に傷を負い、ある者は胸に傷を負い、ある者は足に怪我をして苦しんだという。神はよく知り給う。

さて、このオグランたちは毎朝来て、［テンギズ・ブガの天幕の］入口に立って控えていた[89]。宴を催すときには、自らの手に酒杯が来ると、楽師たちがオタク・キュイ[90]を奏でた。まさに天幕の中でオタク・キュイを奏で始めたとき、ベグの手もとに酒杯が届いたことを［オグランたちは］知るのである。このオグランたちは、［テンギズ・ブガが］酒杯を飲み干し、オタク［・キュイ］の演奏が止むまで、帽子を取って跪いていた。そのあと、彼らは帽子をかぶった。

---

[87] カラ・ノガイ、および後述の弟トゥグル・テムルは、それぞれシャーミーの『勝利の書』に掲げられるジョチ・ウルスの歴代のハンのうち、第十六代、第十七代として名前があがっている（ただし、カラ・ノガイは「サシ・ノガイ（Sāsī Nuqāy）」、トゥグル・テムルは「トゥグルク・テムル（Tūġlūq Tīmūr）」と表記され、後者は前者の甥とされている）（*Histoire des conquêtes de Tamerlan intitulée Ẓafarnāma par Niẓāmuddīn Šāmī: avec des additions empruntée au Zubdat-t-Tawārīḫ-i Bāysunġurī de Ḥāfiẓ Abrū*, ed. by F. Tauer, tome I, text persan du Ẓafarnāma, Praha, 1937, p. 13）。カラ・ノガイ、トゥグル・テムル、そして後述のボグリ・ホージャ・アフマドの三者は、ハン扱いはされていないが、『ムイッズルアンサーブ』、『選史・勝利の書』においてトカ・テムル家のサシの息子としてそれぞれその名を確認できる（ボグリ・ホージャ・アフマドは「ボグル・クトルク・ホージャ（Būkr Qutluq Ḫ^{w}āja）」と表記されている）（Anonym., *Tawārīḫ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, f. 75a; Anonym., *Mu‘izz al-Ansāb*, f. 25b; Юдин, “Переход власти к племенным биям,” pp. 72-74）。

[88] ここではテンギズ・ブガはイサタイの息子となっているが、実際はイサタイの息子ジル・クトルの息子である。

[89] qorlar erdi. ユーヂンは「車座になっていた」と訳している。

[90] ötäk küy. ユーヂンは「賛美のキュイ」と訳している。テュルク語で“küy”は「歌」であるが、“ötäk”の解釈は難しい。“ötük küy”と読むならば、「祈願の歌」と解釈できよう（Doerfer, “ȫtük,” *Türkische und Mongolische Elemente*, Bd. II）。

人々が語るには、あるとき、冬の極寒の日に、この不幸な者［＝テンギズ・ブガ］は宴を催した。不意にオタク［・キュイ］の音が聞こえた。このオグランたちはいつもどおりに帽子を脱ぎ、跪いた。その日は寒かった。フサイン・オグランという、テムル・クトル・ハンとオロス・ハンの祖先の親族の者がいた。耳が凍傷になり、その半分以上が剥れ落ちた。その後、彼をチョナク[91]・フサインと呼ぶようになった。

こうして、ベルディ・ベグ・ハンの即位から三年が過ぎると、四年目の秋の（51b）初めにハンは病にかかった。ハンの病は長引いた。冬が訪れた。件のテンギズ・ブガの冬営地は常にシル河畔にあった。

さて、これから述べるこれらの物語は[92]、亡きハン陛下―神よ彼の墓を芳しくしたまえ、楽園が彼の住処とされますように―イル・バルス・ハン陛下から聞いている。かのお方は古い話をよくご存知であった。

ベルディ・ベグ・ハンの即位から三年が過ぎた。四年目の冬、ハンは秋の初めから病にかかっていた。テンギズ・ブガはシル河畔に冬営していた。ハンの病の知らせが絶え間なく届いた。ある日の朝のことだった。これらのオグランたちはベグ［＝テンギズ・ブガ］の［天幕の］入口に立って控えていた。テンギズ・ブガはその日の早朝から起きて、宴を催していた。彼の楽師たちが曲を奏で、歌い手たちが歌い、賑やかであった。その朝は寒かった。一頭の灰褐色の馬に乗り、狼の毛皮の服を巻きつけるように着て、馬に服をきつく結びつけていた人物が、天幕の近くに来て、下馬した。そして馬を馬車に繋ぎ、矢の入った箙を馬車の上において、天幕に入った。演奏していた楽師たち、歌っていた歌い手たちのすべてが静かになった。しばらくのあいだ、この集いにいる人々は［誰も天幕から］出てこなかった[93]。その後、再び楽師たちが演奏し始め、宴は活気づいた。外にいたこれらのオグランたちがこの状況を見て考えるには、「いったい、このやって来た人物は何者であろうか。人々が集いの最中に[94]このように驚くとは」と。

---

[91] 「チョナク」とは「片耳」の意味。
[92] bu ḥikāyatlär bu sözlär ki emdi ẕikr qïlġum. ユーヂンは「いま述べているこれらの物語」と訳しており、前段までの話を指しているように解釈している。
[93] bu el [ki] majlisda dur čïqmadï. ユーヂンは“бу эл-мәжлісдә дүр чықмады”と読み、「その天幕からはいかなる音も聞こえてこなかった」と訳している。
[94] bu el majlisda. ユーヂンは“бу эл-мәжлісдә ”と読んだため、主語の「人々」を訳してい

さて、これらのオグランたちのなかに二人の人物がいた。一人は聡明で分別があり、その名をボグリ・ホージャ・アフマドといった。サグシュ・アルトゥク・サユチュ・オグラン[95]（52a）とも呼ばれていた。またもう一人は、当時彼に並ぶ者はいないほどの勇敢な射手、勇者であった。彼の名をカラ・ノガイといった。のちに宴が活気づき、しばらくしてカラ・ノガイのもとに伝令が来て、「ベグがあなたを呼んでいる」と言った。彼［＝カラ・ノガイ］は立ち上がり、ベグの御前に赴いた。しばらくのあいだ、［彼らは］静まった。その後また、宴は賑やかになった。

件のボグリ・ホージャ・アフマドがこれらのオグランたちに言うには、「見たか。ベルディ・ベグ・ハンは死んだのだ。あのやって来た者は、ハンが死んだという知らせをもたらしたのだ。これらの者たちが、一度の料理ほどのあいだ沈黙し、驚いていたのは、そういう訳だったのだ。カラ・ノガイを呼び寄せたのは、彼をハンに推戴し、そして明日の謁見でわれわれすべてを殺すためだ。われわれの状況は厳しい。今夜手を打てば、うまくいく。さもなければ、明日の朝、われわれすべては死ぬことになるだろう」と。彼らは、彼の考えが変わらないことを常々知っていたので[96]、彼らのすべてが、「あなたがどのような策を考えようとも、そのようにしましょう」と言った。件のホージャ・アフマドが言うには、「策はこうである。ノガイはここから遅くに出て行く。家路に着いたところを捕らえ、馬から引きずり倒し、きつく縛り、短刀を喉元に突きつけ、この知らせについて問いただそう。もし真実を語ってわれわれに同調するならば、われわれもまた彼をハンに推戴しよう。もし真実を語らなければ、その場で［彼を］殺し、どこへなりと逃げよう」と言うと、皆がこの言葉に同意し、誓いをたてた。

夜の礼拝が近づくと、ノガイはベグ［＝テンギズ・ブガ］の集いを辞して出かけた。これらのオグランたちもまたともに出発した。彼らは、いつものような彼の表情ではなかったことに気づいた。いつもは、謁見から戻って［自身の］天幕に向かうとき、彼は陽気に振舞っていた。［ところが］今日は誰にも言葉をかけず、気を許さない様子で進んだ。彼らが家路に着くと、暗くなった。すかさず彼らは［カラ・

ない。
[95] 「サグシュ・アルトゥク・サユチュ」とは、「賢明で、思慮深く、先見の明のある」という意味に解釈できよう。
[96] čūn bular dāyim sïnap erdilär, munung kengäši özgä bolmas erdi. ユーヂンは、「彼らがどれほど彼をいさめても、彼の考えは変わらなかった」と訳している。

ノガイの］馬の手綱をつかみ、［カラ・ノガイを］馬から引きずり倒し、きつく縛った。件のノガイが言うには、「私がどんな罪を犯したというのだ。［どうして］このようなことをするのだ」。ホージャ・アフマドが言うには、「おまえに一つ尋ねよう。もし真実を語り、われわれに（52b）同意するならば、おまえをハンに推戴しよう。そして、忠誠の誓いをたてよう。［われわれは］おまえのノケルであることに背かないだろう。もし真実を語らなければ、われわれがおまえをこの場で殺すことを思い知れ」。［カラ・ノガイは、］「何を尋ねるというのだ。尋ねよ」と言った。ホージャ・アフマドが言うには、「真実を語れ。あのやって来た者は何を言ったのか。そしておまえを呼んでベグは何を言ったのか」と。［カラ・ノガイが、］「あのやって来た者が何を言ったのか、私は知らない。［テンギズ・ブガは］私を呼んだが、何も言わなかった」と言うと、件のホージャ・アフマドが言うには、「おお、なんということだ。おまえが言わなければ、私が言おう。あのやって来た者はハンが死んだことを伝えに来たのだ。そして［テンギズ・ブガは］おまえを呼んで、『あなたをハンに推戴しましょう。しかし、あなたの兄弟たちを殺すことに同意しなさい。もし殺さなければ、彼らはあなたより年長であるから、あなたのハン位には従わないでしょう』と言った。そして、おまえはそのことに同意したのだ。いまとなっては、そのようなことをするな。この者［＝テンギズ・ブガ］からわれわれがどれほどの侮辱を受けたことか。おまえがわれわれのなかでハンとなり、われわれの長となるならば、彼を殺し、彼への恨みを晴らすのはたやすいことである。私のこの話に同意しろ」と。

［さらに、ホージャ・アフマドが、］「おまえをハンに推戴しよう。推戴して、われわれがおまえのノケルとなることにどれほどの条件を出そうとも、［それを］われわれは飲もう。われわれの死の原因となって、最後の審判の日まで汚名を背負うな」と言うと、彼［＝カラ・ノガイ］は、「それならば、私の手足をほどけ。おまえたちに真実を話そう」と言った。彼らが手足をほどくと、［カラ・ノガイは］体を起こし、座って、件のホージャ・アフマドを大いに褒め称えた。［カラ・ノガイが］言うには、「おまえの話は的を射ており、何の誤りもない。そして、すべて正しい。いまや、おまえが私の即位に賛同の誓いをたてるならば、私はおまえの策略には背くまい」と。彼らは（53a）誓いをたてた。ノガイが言うには、「翌朝われわれが謁見にのぞむとき、彼［＝テンギズ・ブガ］は私を呼び寄せる。その後、［彼は］おまえたちを呼ばせる。おまえたちは天幕に入ったらすぐに彼の周りにいる者たちに対峙しろ。

私は彼自身に対峙する」と。

翌朝、彼らが謁見にのぞむと、彼［＝カラ・ノガイ］が言ったとおりに［テンギズ・ブガは］ノガイを呼び寄せた。しばらくして、彼らを呼びに人が来た。彼らも武装して来ていた。みなが勇敢に進み、［天幕の］入口から入るとすぐに［武器を持った］腕を振り上げた[97]。ノガイはテンギズ・ブガといっしょに上座に並んで座っていた。即座に［テンギズ・ブガを］押さえつけるや、首をはねた。［首を］短刀で突き刺し、［天幕の］外に運び出して、「他の者を殺すことはない。その場から動くな」と触れまわった[98]。人々がその場で動きを止めたのち、ノガイを白いフェルトに乗せ、みなの同意をもってハンにした[99]。

こうして、マングタイの息子ヒズル・ハンとカラ・ノガイの二人は、ひと月のうちにハンとなった。しかし、ヒズル・ハンはサライにある玉座においてハンとなり、カラ・ノガイはシル河畔の左［翼］においてハンとなった。さて、ヒズル・ハンの物語に移ろう。

タイ・トゥグリ・ベギムはヒズル・ハンを呼び寄せ、［ヒズル・ハンを］サライの玉座においてハンとすると、ウズ・ベグ・ハンとジャーン・ベグ・ハンから残された金色の天幕を建てた。人々が語るには、ベギムは髪を黒く染め、ハンに嫁ぐことを望んだ。ハンにもまた［ベギムを］娶る意思があった。しかし、ナイマン部族

---

[97] qol tebrätdilär. ユーヂンは、「武器を振るった」と訳している。

[98] カーディル・アリーの『集史』は、ここに見えるカラ・ノガイらによるテンギズ・ブガ殺害を、同じくトカ・テムル家のオロスによるジル・クトル（テンギズ・ブガの父）殺害として伝えている（Qādir ʻAlī Beg, *Jāmiʻ al-Tawārīḫ*, f. 68b）。両者の記述の相違について、ユーヂンは、カーディル・アリーの『集史』はオロスの子孫であるオラズ・ムハンマドに献呈されたものであり、オロスとその子孫の統治の正統性を強調している、と説明している（Юдин, “Переход власти к племенным биям,” p. 72）。

[99] 白いフェルトによる即位儀礼は、中央ユーラシアの遊牧君主の即位儀礼としてよく知られている。護雅夫はこの儀礼で使われるフェルトの意味について、「地上の人間にとっては、神霊・精霊をわが身に招ぎくだしてそれをわが身にいれ、それとおなじ力を体得して、おのれみずから神霊・精霊そのものになりうるための、つまり人間から神霊へ転化するための聖なる場であり、神霊・精霊にとっては、降臨して地上の人間に憑るための、つまり神霊から人間に転化するための聖具にほかならないのです」と述べている（護雅夫『遊牧騎馬民族国家』講談社現代新書116, 1967, pp. 105-106）。R. セラによれば、14世紀初頭までの記録ではテュルク・モンゴルのあいだでハンを持ち上げるために使われたフェルトの色は黒だったが、以後の記録は、いくつかの例外を除いて、フェルトの色は白だったとし、さらにモンゴルが白をより幸運な色であるとみなした広範な証拠があるという（R. Sela, “Ritual and Authority in Central Asia: The Khan’s Inauguration Ceremony,” *Papers on Inner Asia*, No.37, Bloomington, 2003, p. 38）。

出身のクトゥルグ・ブガという名のベグがいた。彼は［この結婚に］賛同しなかった。彼が言うには、「彼女は、ウズ・ベグとジャーン・ベグに従ってきた者です。あなたは反対の境遇［＝チンギズ家］で育った方です。［分不相応の結婚を望んだために］あなたに懲らしめられるべきです。娶ってはなりません」と。［ヒズル・ハンは］彼の言葉に従い、［ベギムを］娶らなかった。ベギムは、［クトゥルグ・ブガがヒズルに自身を］娶らせないことを知ると、以前ほど（53b）には［ヒズル・ハンに］敬意を示さなくなった。ハンもまたベギムに対抗し、金色の天幕を壊し、カザクたち[100]に分け与えようとすると、ベギムはそれを知ってハンのもとに人を送り、言うには、「そのようなことをしてはなりません。ハンとなった人にとって、［天幕は］金銀が得られない場所ではありません[101]。それなのに、昔の立派な方々が建てた建物を壊してはなりません」と。［ヒズル・ハンは、］彼女の言葉に従おうとはせず、［金色の天幕を］壊して［カザクたちに］分け与えた。ベギムも彼に怒り、ベグたちのなかの腹心を集め、ハンを追い払った。ハンは戻り、再びアク・キョルに来た。

件のベギムは、ある人物を「ケルディ・ベグである」と言ってハンに推戴した。ウズベグたち[102]は、彼を偽ケルディ・ベグと呼ぶ。すべての人々が言うには、「ケルディ・ベグをベルディ・ベグが殺した。彼はどうして生き返ったのだ」と[103]。

---

100 「カザク」という術語は、13～14世紀頃から「逃亡者」、「放浪者」の意味で用いられるようになり、15～16世紀の中央アジアの諸史料にもそのような意味での使用例が見受けられる（В.П. Юдин, *Центральная Азия в XIV-XVIII веках: глазами востоковеда*, Алматы, 2001, pp. 151-156）。『チンギズ・ナーマ』においては、動詞化した形（「放浪・掠奪を行い（qazaqlap）」）でも現れている。のちに、とくにオロスの子孫が「カザク」という呼称を帯びるようになり、その政権は「カザク・ハン国」と呼ばれる。

101 altun kümüš tapulmas yer dägül dur. 解釈しづらい文章である。ユーヂンは“Хан борған кішігə алтун-кумуш та бормас йəрдə гүл дур”と読み、「金銀がないとき、ハンとなった人物にとって、［金色の天幕は］財宝です」と訳している。

102 写本では“özgä beglär”となっており、ユーヂンはこれを採用して「他のベグたち」と訳している。しかし、ここは「ウズベグたち（Özbeglär）」の誤りであろう。『チンギズ・ナーマ』においては、「ウズベグたちは○○と言う」とか「ウズベグたちが言うには」という言い回しがしばしば見られる。

103 シャーミーの『勝利の書』のジョチ・ウルスの歴代ハンのリストに、第九代ベルディ・ベグ・ハンに続いて、第十代ケルディ・ベグ・ハンの名前が見える（*Histoire des conquêtes de Tamerlan*, p. 13）。ヒジュラ暦761（1359/60）年、762（1360/61）年に新サライで、762（1360/61）年、763（1361/62）年にアザクで、彼の名前で鋳造された銀貨が現存していることから（S. Lane-Poole, *Catalogue of Oriental Coins in the British Museum, vol. VI, The Coins of the Mongols in the British Museum*, London, 1881, pp. 153-154; Федоров-Давыдов, “Клады Джучидских монет,” pp. 133-155; Ağat, *Altınordu (Cuçi Oğulları) Paraları*, p. 77）、その実在はあきらかである。『チンギズ・ナーマ』ではベルディ・ベグがケルディ・ベグを殺したことになっているが、シ

民が彼［＝偽ケルディ・ベグ］に従わなかったので、［ベギムは］ボアウルの子孫[104]である、バザルチという名の者をハンに推戴した。当時、大ベグたちのなかに、スィジュト・アリー・ベグがいた。彼が「バザルチには従わない」と言ったので、［ベギムは］彼［＝アリー・ベグ］を呼び出させて、殺した。アリー・ベグにはハサンという名の息子がいた[105]。彼は、コングラト・ナガダイの息子で、ホラズム地方の総督であった、アク・フサイン［のもとへ］逃れた[106]。このハサンは彼の甥であった。［ハサンが］彼［＝アク・フサイン］のもとに来ると、［アク・フサインは］ベギムのこのよからぬ行為を嫌悪して、ベギムを見放した[107]。

このとき、アク・フサインがヒズル・ハンのもとに使者を送って、言うには、「あの女は悪魔の道に踏み込み、このような行為をしております。われわれも（54a）あの女を見放しました。あなたがもし先頭に立って大望を抱くのでしたら、われわれはあの女に対して行動を起こしましょう」と。彼［＝ヒズル・ハン］もまた［ベギムへの］怒りを抱く人物であった。［彼に神の］大いなる恩恵あれ。アク・フサインはホラズムの軍をすべて集結させ、アク・キョルへ行き、件の［ヒズル・］ハンをハンに推戴し、サライ地方に進軍した。サライで戦いが起こり、バザルチとベギム

ャーミーの記述では、ベルディ・ベグのあとにケルディ・ベグが即位したことになっており、両者の記述はたがいに矛盾していることになる。

104 『選史・勝利の書』では、バザルチはジョチの息子のなかでもボアル（ボアウル）の子孫ではなく、タングトの子孫となっている（Anonym., *Tawārīḫ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, f. 122b）。シャーミーの『勝利の書』のジョチ・ウルスの歴代ハンのリストには、第十五代ハンとしてバザルチの名前が挙がっている（*Histoire des conquêtes de Tamerlan*, p. 13）。

105 スィジュト・アリー・ベグおよび息子ハサンについては不詳であるが、興味深いのは、『チンギズ・ナーマ』がハサンをコングラト・ナガダイの息子アク・フサインの甥としていることである。すなわち、ハサンの母がコングラト・ナガダイの娘であると推定される。この推定が正しければ、スィジュト・アリー・ベグはコングラト・ナガダイの娘婿ということになる。また、スィジュト部族出身ということから、前述のスィジュト・アラタイの近親者である可能も大きい。

106 コングラト・ナガダイはその名が示すようにコングラト部族の出身で、シャーミーの『勝利の書』では「ナンカダイ（Nankqadāy）」と表記される（*Histoire des conquêtes de Tamerlan*, p. 67）。ナガダイの息子アク・フサインはティムール帝国史料に現れるフサイン・スーフィーを指すものと思われる。フサイン・スーフィーは1365年までにホラズム地方に「スーフィー朝」と通称される地方政権を樹立していた。ナンカダイとスーフィー朝については、川口「ジョチ・ウルスにおけるコンクラト部族」，pp. 81-82, 85, 90参照。

107 oray gardān boldïlar. “oray gardān”という表現はもう一箇所54aにも見られるが、その解釈には不明な点が残る。ここでは、ユーヂンの訳も参照して本文のように訳した。

は捕らわれた。ベギムを一台の幌馬車に乗せ、その口を［轡で］きつくふさいだ[108]。そして、凶暴な暴れ馬[109]を繋ぎ、［馬を］走り回らせた[110]。この凶暴な暴れ馬は、ベギムが死ぬまで、［幌馬車を］四方に引き回して、穴や窪地に打ちつけた。ウズベグたちは、「タイ・トゥグル・ベギムをヒズル・ハンが殺した」と言うが、その事情は以上のようである。

彼女［＝ベギム］を殺し、ヒズル・ハンは再びハンとなり、一年半統治した。彼にはブルト[111]という名の悪辣な息子がいた。彼は父のハン位に我慢できず、不意に［ヒズルを］刺し殺し、自身がハンとなった。二、三日もしないうちに彼もまた殺された。その後、争乱が生じた。あらゆる者が方々で頭をもたげた。サライの町は荒廃した。民の多くはクリム地方のキヤト・ママイのもとに去った。この話はここで終わりにして、再びカラ・ノガイの物語に戻ろう。

カラ・ノガイはシル河岸において三年間統治し、トルキスタン地方[112]を支配していた。三年後に亡くなった。彼の弟のトゥグル・テムルという者が（54b）ハンとなった。スルターンたちの誉れ、ドゥースト・スルターン殿下のもとにある書冊においては、「このトゥグル・テムルは偉大な帝王となり、サマルカンド、ブハラを統治した」と述べられている[113]。しかし、その統治期間は知られていない。

---

[108] aġzïnï mażbūṭ qïldïlar. ユーヂンは「ひざかけをしっかりと結んだ」と訳しているが、これは誤りであろう。

[109] ämläg ayġïr. 原義では、「飼いならされていない、去勢されていない馬」の意味である。

[110] baš salïġġa qoya berdilär. ユーヂンは“baš”を“beš”と読み、「四方に解き放った」と訳している。

[111] シャーミーの『勝利の書』のジョチ・ウルスの歴代ハンのリストに、第十三代ヒズルに続いて、第十四代ハンとして名前が挙がる「ムルド（Murūd）」を指すものと思われる（*Histoire des conquêtes de Tamerlan*, p. 13）。『選史・勝利の書』では、ムルド（ブルト）はヒズルの息子ではなく兄弟とされている（Anonym., *Tawārīḫ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, f. 71a）。ヒジュラ暦762（1360/61）、763（1361/62）、764（1362/63）年、いずれもグリスタン（アフトバ河左岸、新サライの近くに位置した）で、「ムリード（Murīd）」の名前で鋳造された銀貨が現存する（Lane-Poole, *Catalogue of Oriental Coins*, pp. 154-155; Федоров-Давыдов, Клады Джучидских монет, pp. 133-155; Ağat, *Altınordu (Cuçi Oğulları) Paraları*, p. 79）。

[112] 一般に中央アジアを意味するトルキスタンとは異なり、ここでのトルキスタン地方とは、スグナク、サイラム、ヤス、オトラルなどのオアシス諸都市が点在するシル河中流域を指している（К.А. Пищулина, “Присырдарьинские города и значение в истории Казахских ханств в XV-XVII веков,” *Казахстан в X-XVIII веков*, Алма-Ата, 1969, pp. 11-12）。

[113] 『諸情報の要諦』は「ドゥースト・スルターン殿下の史書」に依拠しながら、トゥグル・テムルの統治はチャガタイの諸王の国々、ウルグ・オルダのカラ・クムの諸地方にまでおよんだとしている（‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 266a）。

その後、バディク・オグランの息子オロスがハンとなった。このオロス・ハンは偉大な帝王となり、全トルキスタン地方を統治した。トクタミシュ・ハンとテムル・クトルク・ハンには、当時ハン位はまわってこなかった。彼らはこの件のハンに仕えていた。［神の］永遠なる恩寵により帝王の栄誉がトクタミシュ・オグランのものとなって現れたため、［オロス・］ハンのノケルたちとその他の人々は進んでこの件のオグランのもとにおもむいた。このため、件の［オロス・］ハンは悪意を抱き、トクタミシュ・オグランを殺害しようとした。

さて、ヒタイ・ババ・アリー・ビー[114]という、ハージー・タルハンのアブドゥルカリーム・ハン[115]の大ベグにしてナーイブの人物がいた。件のハンの死後、彼はマッカでタワーフ[116]を行い、ハージーになって戻って来た。その後、スルターン・ガーズィー・スルターン[117]に仕えた。スルターン殿下が昔の話に大いに関心を抱き、［彼に］尋ねた。「トクタミシュ・ハンはオロスの宮廷から逃れたと言われている。それはどのようにして起こったのか」と聞くと、件のハージーは以下のように語った。私めはかのお方[118]から聞いたのである。かのお方は仰った。［すなわち、］オロス・ハンがトクタミシュ・オグランを殺そうとしたとき、その直前にケネゲス・クガンの息子ダルウィシャク・ムルザ[119]をチャガタイ［・ウルス］の帝王のもとに（55a）使者として送った。シリン・・・[120]送った。これらの者たちがおもむき、・・・[121]の

---

[114] アストラハン・ハン国の大ベグであり、ジョチ・ウルスの歴史に通暁していたと思われるこの人物は、『諸情報の要諦』によれば、「エジュデルハン［＝アストラハン／ハージー・タルハン］のダルガ・ベグ」であり、「高名な知の遍歴者（affāq）」であった。また、史書を編纂し、そこで後述のガーズィー・スルターンから求められたことを語ったという（‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 266b）。

[115] アブドゥルカリーム・ハンはトカ・テムル家のテムル・クトルクの子孫で、15世紀初頭のアストラハン・ハン国の君主（cf. Зайцев, *Астраханское ханство*, pp. 63-72）。

[116] ṭawāf. マッカのカアバ神殿を黒石の地点から左方向に七周回る儀式のこと。

[117] シバン家の人物で、ヒヴァ・ハン国の君主イルバルスの長男。『繁栄の楽園』によれば、1530年代半ばにホラズム地方のヴェズィール（アブールガーズィーの『テュルク系譜』によれば、ウルゲンチ）において、同じくシバン家のアワナシュによって殺害された（Mūnis and Āġahī, *Firdaws al-Iqbāl*, pp. 111-112; *Histoire des Mogols et des Tatares*, p. 195; Зайцев, *Астраханское ханство*, p. 67）。

[118] olar. ユーヂンは、この「かのお方」はヒタイ・ババ・アリーを指していると解釈している。しかし、そうではなく、チンギス家の人物を指している可能性もある。

[119] ケネゲスはこの父子の所属部族名と思われる。おそらくは『元朝秘史』にみえるゲニゲス（格泥格思）、ラシードゥッディーンの『集史』にみえるキンキトのことであろう。ミールザー（ムルザ）はアミールザーデ（「アミールの子」の意）の短縮形で、ティムール帝国やノガイ・オルダなどにみられる王族身分を示す称号である。

[120] 写本の55a左上部（表）と55b右上部（裏）が失われているため、表裏ともに四行に

本営はシル河岸に置かれていた。・・・［シル河に］沿って行き、ハンの本営にやって来た。寒い日であった。シル河の・・・氷が浮いていた。ウルク・テムルがムルザのあとにやって来た。不意に彼がシル河の岸辺に目をやると、葦の茂みの根元に、薄い服一枚しか着ていない若者[122]が水から出て、顔を伏せ、体を折り曲げて、震えながら横たわっていたのを見た。［ウルク・テムルは］心中で、「あの者に何か起こったのだ」と思って、急いでムルザに追いついた。そして言うには、「我がムルザよ、慈悲を下さい。私は［オロス・］ハンの命令によりあなたにお仕えするために参りました。あなたは無事に［チャガタイ・ウルスの］民のなかに入り、本営の近くまで来ました。ハンに謁見する者は私ではありません。私を苦しめ、連れて行ってどうするのですか。私はここから私の天幕を探しに行ってもよいでしょうか」と言うと、そのムルザは許可を与えた。彼［＝ウルク・テムル］は戻り、さきほどの場所に来た。馬を遠くに繋ぎ、自身は徒歩となって来た。その人物のもとに来て見ると、［その人物は］顔を伏せ、震えながら横たわっており、足にひどい怪我をしていた。彼［＝ウルク・テムルは、］「おまえは何者だ」と聞いた。［その人物は、］「何を聞くのだ。私は苦しむ奴隷だ」と言った。彼［＝ウルク・テムル］は「おまえが苦しんでいるのは見て［分かって］いる。名を名乗れ」と言った。［その人物が］言うには、「私はトクタミシュ・オグランである。以前にも［こうなると］思っていた。明け方だったが、［オロス・］ハンの手の者たちが来て、私の天幕を襲った。矢を射合いながら［天幕から］出たが、敵が多勢であるのを見た。河が近かったので、河に身

わたって部分的な欠落がある。ただし、『諸情報の要諦』に類似の記述があるので、内容を推測することはある程度可能である。この欠落部分の内容について、『諸情報の要諦』には「シリン部族の有力者たちのうち著名なダンギ・バイ（Dānggī Bāy）という名の人物の聡明・勇敢なルク・テムル（Ruk Temür）という名の息子をもダルヴィシャク・ムルザ（ミールザー）の供をさせた」とある（‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 266b）。ここに現れるルク・テムルはウテミシュ・ハージーが記すウルク・テムルのことである。シャーミーの『勝利の書』では、“Ūrūk Tīmūr”あるいは“Ūrunk Tīmūr”と表記される。トクタミシュの「代理にして、掣肘なき権能者」であり、バリン部族のアク・ブガやコングラト部族のアリー・ベグとともに、ティムールによる恩寵と庇護への見返りとして、たえずティムールへの忠誠をトクタミシュに説いていたという（川口「ジョチ・ウルスにおけるコンクラト部族」, pp. 84, 90）。

121 この欠落部分と次の欠落部分の内容について、『諸情報の要諦』には「（使者たちがチャガタイ・ウルスから）戻って来るあいだ、オロス・ハンの本営もまた冬に近づくにつれシル河畔に置かれたことを聞いて」とある（‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 266b）。

122 bir yalang terlik keygän yigit. ユーヂンは「ある裸の、馬用の鞍褥を身に着けた人物」と訳しているが、“bir yalang terlik”で「薄い服一枚」と解釈することができる。

を投げた。水に入ったとき、矢を射られた。この傷は（55b）・・・[123]体を動かすこともできなかった・・・[124]と言った。ウルク・テムルが言うには、「私が探して・・・でした。私の首はあなたのものであり、あなたに預けましょう[125]。・・・[126]至高なる［神が］あなたに幸運をお与えになるならば、私を忘れないでください」と言った。［トクタミシュが］言うには、「至高なる神が私に幸運をお与えになるときには、おまえを私の幸運にあずからせ、おまえの言葉、考え[127]、望みを軽んじることはない」と誓った。ウルク・テムルはすぐに肩にまとった上着を脱ぎ、［トクタミシュを］しっかりとくるみ、携帯していた食糧を彼［＝トクタミシュ］の前に置いた。そして、「私が『来ない』と言って気を悪くしないでください。私は生きて、必ずあなたのもとに［戻って］来て、あなたをこの場所で見つけましょう」と言って、出発した。そして、天幕に着いた。そして、同族のうちの数人と同意して、馬と装備を整え、戻って来た。そして、件のオグランをテムル・ベグ［＝ティムール］のもとに連れて行った。テムル・ベグは当時、新たに頭角をあらわし、ブハラとサマルカンドを占領した。これらの者たちが到着すると、［テムル・ベグは］非常に快く出迎えた。［テムル・ベグは］外科医たちを呼んで来させ、彼の足の鏃を取り出させ、さまざま薬を処方させた。［トクタミシュは］一ヶ月後には快復した。

その冬、彼らは［テムル・］ベグに仕えて過ごした。春になると、ベグは［トクタミシュに］数人を付き従わせた。［オロス・］ハンが夏営地に向かうと、［トクタミシュは］民のあとからやって来て、家畜を追い立てた。追いつき、戦い、これらの者たちを打ち破った。再び、［テムル・］ベグのもとに戻って来た。つまり、トクタミシュ・オグランは放浪・略奪を行い、ハンの民の家畜を追い、民を襲撃した。

さて、シリン、バリン、アルグン、そしてキプチャクはトクタミシュ・オグラン

123 『諸情報の要諦』によれば、「この私の傷は川の中でできた。私はなんとか泳いでこちら側に出た」とある（‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 267a）。

124 この欠落部分と次の欠落部分の内容について、『諸情報の要諦』には「もっとも慈悲深き神がそなたを私にお遣わしになった。そのあとのことはそなたが知っている」とある（‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 267a）。

125 bašïm mālïng, sening yolïngda qoyayïn. 解釈しづらい文章である。“mālïng”が“mālïm”の誤りである可能性はないだろうか。もしそうならば、「私の命も財産もあなたに差し出そう」と訳すことができるだろう。

126 『諸情報の要諦』によれば、「私と私の一門全員が滅ぶまで、あなたの［進むべき］道に［奉仕するよう］努めましょう。神は全能にして自立自存です」とある（‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 267a）。

127 oyungnï. この「考え」の部分は、ユーヂンの訳には欠落している。

の父祖の代からの古い民であった[128]。この件のオグランは放浪・略奪を行い、このような（56a）こと［＝オロス・ハンの民への襲撃］を行い始めた。これらの民のうち向こう見ずな若者たちは［トクタミシュのもとに］行き、彼のノケルとなり、［彼を］支援し始めた。そして、オロス・ハンはこれらの民を大いに迫害し始めた。彼らもまたトクタミシュ・オグランに人を遣わし、「あなたのためにハンはわれわれに対してお怒りになり、われわれの家畜を掠奪している。われわれの首もまた危ない。あなたが少しでもわれわれに配慮してくださらなければ、最後の審判の日にあなたの襟をわれわれの手がつかむことになるでしょう」と言った。［トクタミシュ・］オグランはこの言葉を聞くと、心を痛め、やって来た者に言うには、「今年、おまえたちが夏営地に行くときに、［オロスの］民のあとを追って移動せよ。ある河の岸辺で夏営し、そして装備を整えておけ。神がお望みになり、私が死ななければ、必ずやおまえたちのもとに行こう」と。

春になり、［オロス・］ハンは夏営地に移動した。この［トクタミシュに人を遣わした］民もまた［オロスの］民のあとから移動した。夏営地に着くと、それぞれの民はある河の岸辺に向かった。これらの民は合流することになっていた河の岸辺に来て、夏営した。［オロスに従う］人々は馬乳酒を飲み、享楽に耽った。このあいだに、トクタミシュ・オグランがこの民に加わってきた。合流したときには［約束どおりに］装備を整えていたので、それぞれの家長は一台の荷馬車に二頭の馬を繋ぎ、子供たちを乗せ、ただちにイディル河の方へ逃げた。

二日後、［オロス・］ハンのもとに、「トクタミシュ・オグランが来て、シリン、バリン、アルグン、キプチャク、（56b）そしてその他の民を引き連れてイディル河へ近づいた」という知らせが届いた。［オロス・］ハンは［そばに］いた民とともにただちに出立するや、四方に人を走らせ、彼自身はこの［逃げた］民の後を追った。

---

[128] 『諸情報の要諦』はこの四部族をトクタミシュの「特別なノケル」あるいは「ケシク」と呼び、四部族がトクタミシュ配下の中核的集団であったことを示唆する（‘Abd ül-Ġaffār, *‘Umdet ül-Aḫbār*, f. 267b）。この点については、Uli Shamiloglu, “The *Umdet ül-Ahbar* and the Turkic Narrative Sources for the Golden Horde and the Later Golden Horde,” *Central Asian Monuments*, ed. by H.B. Paksoy, Istanbul, 1992, p. 92; 川口「キプチャク草原とロシア」, p. 292; D. DeWeese, “TOḲTAMISH,” *Encyclopaedia of Islam, new edition*なども参照。このうち、シャミルオグルは、ジョチ・ウルスとその後継諸国家においては最有力の四つの部族の各指導者、すなわち四人のベイが国家の組織と統治を指導したとし、これを「四ベイ制度（four-bey system）」と呼んでいる。

［オロス・］ハンの民は夏営地に分散していた。馬が肥えたときだった。ハンは猛烈な勢いで進軍した。遠くにいた民の軍隊はハンに追いつくことができなかった。近くにいた民の馬は肥えていた。［オロス・ハンが］これら［逃げた民］の近くに到達したとき、ハンのもとにはわずかな者しかおらず、二百人、多くても三百人であった。日が沈もうとしていたときに、この逃げた民の歩哨がハンの［軍隊が巻き上げた］砂塵を見て、戻ってきた。彼らは協議して、「彼らは馬の首を並べて来ている[129]。多かれ少なかれ、追いついたならば、［彼らは］われわれに襲いかかるだろう。われわれは死ぬ運命にある者だ。われわれは民や家族のために死のう。せめて、われわれの一族が絶えないように。馬に慣れたオグランたちとともにジャラールッディーン・スルターンとヤフシ・ホージャ[130]を選び出して、道を知る者二人[131]を彼らに割り当てよう。［オグランたちをわれわれの］声の聞こえるほどの範囲で［われわれの］軍勢のそばを進ませよ。もし敵をわれわれが打ち負かしたならば、われわれの鬨の声を聞いて、彼らはわれわれのあとから来るだろう。もし敵がわれわれを打ち負かしたならば、敵の鬨の声を聞くだろう。［そうしたら］立ち止まらずに逃げるように」と言って、同意した。ジャラール（57a）ッディーン・スルターンをはじめとして、ウルク・テムルの長男であったヤフシ・ホージャ、および数人の馬に慣れたオグランたちを選び出した。ジャラールッディーン・スルターンは当時十二歳であった。ヤフシ・ホージャもそのくらいの年であった。

彼らはこの夜、軍勢のそばを声の聞こえるほどの範囲のところを進んだ。夜の帳が下りたとき、［オロス・］ハンは彼らの後方から追いついてきた。彼ら［＝ウルク・テムルたち］は妻子たち[132]を前において、そのあとから［隊列を］整えながら進んだ。［オロス・］ハンが言うには、「この者たちはわれわれより多勢である。じきに

---

[129] olarnïng aṭlarïnïng boynï qatïp kelä turur. ユーヂンは「彼らは疲れ果てた馬に乗ってきている」と訳している。

[130] ジャラールッディーン・スルターンはトクタミシュの息子で、1410年代初頭、ジョチ・ウルスのハンとなった。ヤフシ・ホージャは、後述されるように、シリン部族のウルク・テムルの息子。ヤズディーの『勝利の書』によれば、1395年のテレク河畔でのトクタミシュ軍とティムール軍との決戦においてトクタミシュ軍の左翼の側面援護部隊の指揮官として名前が見えている（Šaraf al-Dīn ‘Alī Yazdī, *Ẓafar-nāma*, facsimile texts, ed. by A. Урунбаев, Ташкент, 1972, f. 275a）。

[131] iki yol bilür kiši.「二つの道を知る者」とも訳せるが、文脈から本文のように訳した。ユーヂンは単に「道中を知る者」と訳している。

[132] köčlärin. ユーヂンは「馬車」と訳しているが、文脈から本文のように解釈した。

夜が明けて、われわれが少数であることを見られるのはまずい。夜のうちに雄叫びをあげて襲いかかろう。彼らはわれわれが多勢か無勢か知らずに逃げるだろう」と。そして、鬨の声をあげて襲いかかった。ひとたび入り乱れて戦い、［ウルク・テムルの軍勢が］後退したとき、ウルク・テムルの馬は倒れ、彼は叫んだ。彼が言うには、「おお、卑怯なトクタミシュよ。われわれの約束はこういうことだったのか。［皆は］後退したが、私は取り残されてしまった」と。そのとき、［離れて進んでいた］そのオグランたちは［手綱で馬の］頭を引き、ある場所に立ち、耳を澄ませていた。ヤフシ・ホージャは彼の父の声を聞いて、ジャラールッディーン・スルターンに言うには、「見たか。あれは私の父だ。私の父が捕らわれた。いまにおまえの父も捕らわれるだろう。父から離れて、われわれのような未熟なオグランがどのような日々を過ごせるだろうか。われわれも一緒に死ぬほうがよいのではないか」と言うと、至高なる神のご加護によりジャラールッディーン・スルターンとこのオグランたちは本隊の方へ来て、それぞれが勇敢な若者のように鬨の声を上げ、一気に馬を走らせた。［オロス・］ハンの配下の者たちは恐れて、手綱を引いて［逃げようとした］。トクタミシュ・オグランは急いで戻って、［戦場に］駆けつけ、［ウルク・テムルを自分の馬に］抱え上げるや、立ち去った。［トクタミシュたちはオロス・］ハンの配下の者たちの（57b）馬の首を並べ[133]、多くの者たちをその場で捕らえた。しかし、「背後に［オロス・ハンの］本隊がいる」と言って、恐れて追跡しなかった。捕らえた者をその場で矢で射殺し、馬と装備を奪い、軍勢の跡を追いかけて進んだ。

捕らわれなかった［オロス・］ハンの配下の者たちは遠くへ逃げ、集結した。どこにもハンがいないことに気づいて、彼らのうちの一人が言うには、「私はハンのおそばにいた。二人の者が来てハンを捕らえるのを見た。そのあと、［ハンが］どうなったかは知らない」と。［オロスの配下の者たちは］戻って、戦場まで来た。ハンの遺体を見つけた。ただちにハンの遺体を担いで、天幕に急いで戻った。彼ら［＝トクタミシュたち］もまた、「背後からハンが追ってくる」と言って、その方［＝自身の軍勢の方］へ逃げたのである。オロス・ハンの死の状況はこのようであった[134]。

---

133 aṭlarïnïng boyïnï qatïp. ユーヂンは「馬を疲れさせ」と訳している。

134 シャーミー、ヤズディーの『勝利の書』はオロスの死についてとくにふれていない。『ムイーン史選』はオロスの死を病死としている（Anonym., *Muntaḫab al-Tawārīḫ-i Mu'īnī*, f. 312a）。また、カーディル・アリーの『集史』は北方のキシュティムという場所で死んだと伝える（Qādir 'Alī Beg, *Jāmi' al-Tawārīḫ*, f. 60b）。これらと異なり、『チンギズ・ナーマ』はトクタミシュとの戦いにおいて、その息子ジャラールッディーン・スルターンがオロスを戦死させたと伝えるものであり、この記述に注目したユーヂンが詳細に紹介している（Юдин, “Неизвестная версия гибели Урус-хана (из политической истории Восточного Дашт-и Кыпчака XIV в.),” *Чингиз-наме*, pp. 76-82）。一方、『チンギズ・ナーマ』と他の諸史料の記述を比較検討したK.Z. ウスケンバイは、『ムイーン史選』の病死説を採用している（К.З. Ускенбай, “Некоторые моменты политической деятельности Урус-хана (анализ средневековой и современной историографии),” *Отан тарихы-отечественнаяистория*, No. 3, Алматы, 1999, pp. 105-106）。

ウズベグたちが言うには、「ジャラールッディーン・ハンがオグランだったとき、一団のオグランたちを率いて彼の父［＝トクタミシュ］とオロス・ハンが戦ったときに、側面から馬を走らせ、オロス・ハンを襲って、殺した」という。その理由はこのようである。

トクタミシュ・オグランはオロス・ハンが死んだことを知らずに逃げ、コカダイ・イスブガという素晴らしい草と水の豊かな場所があったが、その場所に向かった。当時、シバン・ハンの子孫のうち、イルファク・ハンの息子カン・バイ[135]が自身の民のなかでハンとなり、コカダイを夏営地としていたが、［トクタミシュは］彼のもとに来た。彼は［トクタミシュに］不遜な態度をとり、彼［＝トクタミシュ］に（58a）タング河［＝ドン河］が入江のようになっているところ[136]の土地を与えた。数日過ぎたのち、［トクタミシュが］イナクたち[137]を通じて［カン・バイに］言うには、「玉

---

135 イルファク・ハンは、『ムイッズルアンサーブ』では「イルベグ（Īlbeg）」、『選史・勝利の書』では「イルパク（Īlpāk）」と表記されており（Anonym., *Mu'izz al-Ansāb*, f. 23a; Anonym., *Tawārīḫ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, f. 69b）、ヒジュラ暦775（1373/74）年にサライチュク、776（1374/75）年に新サライで貨幣を発行している（Сафаргалиев, *Распад Золотой Орды*, p. 127; Ağat, *Altınordu (Cuçi Oğulları) Paraları*, p. 91）。イブン・ハルドゥーンの『イバルの書』にはアイベグ・ハンの名で現れ、ある期間サライを統治し、その死後には息子のカリ・ハン［＝カン・バイ］がサライを統治したが、オロスに敗れ、逃げたという（*Сборникъ матеріаровъ*, т. I, p. 391; Сафаргалиев, *Распад Золотой Орды*, p. 128）。カン・バイは、『ムイッズルアンサーブ』では「カアン・ベグ（Qā'ān Bag）」、『選史・勝利の書』では「カアン・バイ（Qā'ān Bay）」と表記されており（Anonym., *Mu'izz al-Ansāb*, f. 23a; Anonym., *Tawārīḫ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, f. 69b）、ヒジュラ暦777（1375/76）年にカガン・ベグ・ハンの名で新サライで貨幣を発行している（Сафаргалиев, *Распад Золотой Орды*, p. 128; Федоров-Давыдов, “Клады Джучидских монет,” pp. 155-166; Ağat, *Altınordu (Cuçi Oğulları) Paraları*, p. 93）。

136 Tang kalïda. ユーヂンは「河口」と訳しているが、“kal”とは河岸が陸に向かって入り込んだ部分を指す。

137 『チンギズ・ナーマ』にみえるイナクの用例はこの場所以外には見当たらないが、この場合のイナクも、小野浩がかつてアク・コユンルにおけるイナクの事例研究で示したように、「君主の信任する親臣として傍近く仕えていたこと、さらには戦時も君主直属軍を形成したと考えられる」存在であったとひとまず考えておきたい（小野浩「'Arż nāmaにみえるīnāqとbōy nawkar」『アジア・アフリカ言語文化研究』35, 1988, pp. 8-13; Yu. Bregel, “İNAḲ,” *Encyclopaedia of Islam, new edition*）。

座の人物であるハンは、私の父であり、私の兄です。彼らのために剣を振るうことを私は怠りません[138]。カラ・キシであるママイがくにの民のすべてを奪っています。［カン・バイが］われわれを率いてくれるならば、彼［＝ママイ］に対して進軍しましょう。至高なる神[139]が彼［＝ママイ］をわれわれに引き渡すならば、［カン・バイは］偉大な大ハンとなるでしょう。われわれも馬と衣服を持てる身となるでしょう」と。カン・バイもまたこの言葉を聞いて、初めは遠征に賛同した。のちに改めて協議し、遠征を中止した。「シバン［家］の後戻りの協議」という諺がこの言葉から生じた。

トクタミシュ・オグランは件の人物［＝カン・バイ］に失望し、許しを求めて立ち去った。当時、アラブ・オグランという、ヤードガール・ハン陛下の三世代前[140]のアガで、カン・バイとは従兄弟[141]である、非常に富裕な人物がいたが、彼はトクタミシュ・オグランを呼び寄せ、天幕に住まわせた。［アラブ・オグランは］多くの馬と羊を屠って歓待したのちに言った。「いままでアガであり、われわれの民の長となっていた人物はカン・バイであった。彼が率いて『進軍しよう』と言うことを期待していた。［しかし、］この呪われた人物は考えを翻して、進軍しなかった。これほどの名声を保っているあいだは、彼［＝カン・バイ］の敵［＝ママイ］を倒しに

---

138 men olarnïng qïlïčïn čaparġa yupanman. “yupanman”とは、動詞“yuban-/yupan-”「怠る」「困難から逃れる」の否定形と考えられる（Clauson, “yuban-,” *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*; M. Erdal, “yupan-,” *Old Turkic Word Formation Vol. II*, Wiesbaden, 1991）。

139 Tengri ta‘ālā.『チンギズ・ナーマ』には、「至高なる神」を示す言葉として、“Allāhu ta‘ālā”、“Ḫudā-yi ta‘ālā”、“ Tengri ta‘ālā”が用いられている。とくに最後の“ Tengri ta‘ālā”は、遊牧社会のテングリ信仰を反映していると思われ、非常に興味深い。

140 写本の欄外に、「アラブ・ハン、ハージーム・ハン、アガタイ・ハン、アラシュ・ハン、ヤードガール・ハン」と補足されているが、アラブ・オグランの系譜としては不正確である。アラブ・オグランの系譜については、訳註141参照。

141 『ムイッズルアンサーブ』や『選史・勝利の書』では「アラブシャー（‘Arabšāh）」と呼ばれ、ヤードガールの曽祖父にあたる（Anonym., *Mu‘izz al-Ansāb*, f. 23a; Anonym., *Tawārīḫ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, f. 69b）。彼の兄弟イブラーヒームの孫がアブールハイルである。アブールガーズィーの『テュルク系譜』によれば、アラブシャーの父フラド（プラド）の死後、アラブシャーとイブラヒームの兄弟はヤイク（ウラル）河の上流に夏営し、シル河の下流に冬営したという（*Histoire des Mogols et des Tatares*, pp. 183-184）。ヒジュラ暦775（1373/74）年に新サライ、776（1374/75）年にサライチュク、779（1377/78）年、782（1380/81）年に再び新サライで貨幣を発行している（Федоров-Давыдов, “Клады Джучидских монет,” pp. 155-166; С.А. Янина, “Общий образ джучидских монет из раскопок и сборов Куйбышевской экспедиции в Болгарах (1946-1958 гг.),” *Материалы и исследования по археологии СССР*, No. 111, Москва, 1962, p. 161; Ağat, *Altınordu (Cuçi Oğulları) Paraları*, p. 90）。

行くことは、私自身にはできない。あなたは将来有望で素晴らしい人物になるように見える[142]。（58b）至高なる神が、あなたの所業を正しく導きますように。このように、私からあなたへの支援は、私の馬を駆り立て［あなたの］前に差し出すことである。私には、搾乳用の雌馬が残っていれば十分だ。雄馬と雌馬のうち、あなたの目的に役立つほどのものがあれば、取って行きなさい」と言って、彼の馬を連れて来て、彼［＝トクタミシュ］の前に差し出した。人々が語るには、［トクタミシュは］四、五歳の雄馬と雌馬のほか、六十四頭の子馬を手に入れたという。

それから遠征して、イディル河に到着した。サライの町にはハンもスルターンもいなかった。［そこに］やって来て、サライを占領した。そして、金曜モスクで［人々は］一致して、フトバを読み、［トクタミシュは］ハンとなった。遠征して、キヤト・ママイに向かって進軍した。ママイもまた大軍とともに迎え撃った。激戦が起こった。ママイの軍隊は敗れた。彼自身も捕らわれた。［トクタミシュはママイを］殺した。［トクタミシュは］彼［＝ママイ］の民を移動させ、イディル河岸にやって来た。今度は、トクタミシュ・ハンがサライの町でサイン・ハンの玉座において偉大なる帝王となった[143]。

ジャーン・ベグ・ハンから残ったノケルや民の多くがママイのもとにいた。［トクタミシュが］ママイを殺し、その民とノケル、セウデルを奪ってサライ地方にやって来ると、草原地方のいたるところで（59a）反抗して頭をもたげていた者たちは、なす術もなく自ら［トクタミシュのもとに］やって来て、服従し、ノケルとなった。件のカン・バイもまた［トクタミシュのもとに］やって来た。［トクタミシュは］彼に、「あなた自身が［私に］与えた土地である」と言って、タング河が入江のようになっているところの土地を与えた。しかし、［トクタミシュは］アラブ・オグランのもとに行って、会った。［トクタミシュはアラブ・オグランに］右翼を委ね、彼自身

---

142 Sen ilgärü umēdlïg yaḫšï kiši körüp turur men. ユーヂンは、「以前、あなたは将来有望で素晴らしい人物であろう［と私は思った］」というように過去形で訳している。

143 トクタミシュはジョチ・ウルス右翼の都サライを占領してジョチ・ウルスの左翼と右翼を統合する共通の君主となった。貨幣資料によれば、このサライにおけるトクタミシュの即位はヒジュラ暦781（1379/80）年のことと推定される（Федоров-Давыдов, Клады Джучидских монет, pp. 155-166; Ağat, *Altınordu (Cuçi Oğulları) Paraları*, p. 94）。一方、サライ占領後におこなわれたトクタミシュと宿敵ママク（ママイ）との決戦は1380年9月のクリコヴォの戦いの直後のこととされる。

のそばに座らせ、競馬を催した。その集いにおいて、ジャトバ[144]が詠われたという。

> おまえはコカダイにおいてハンとなった　おまえは多くのおまえのドゥルマンを惑わした[145]
>
> おまえは小さな胸を膨らませた　われわれはおまえに何度も平伏して頭をたれた
>
> どうしてわれわれの尻を追いかけて来たのだ、カン・バイ[146]

つまり、［トクタミシュは］アラブ・オグランにさまざまな恩寵と下賜を与えて、命じた。「シバン・ハンに属していた民のすべてをあなたのもとに集めよう。そして、どこであれ主人から逃れた奴隷、ヤサク[147]から逃れた民がいれば・・・[148]」

---

[144] ジャトバは歌謡のジャンルの一つと思われる。『諸情報の要諦』によれば、この詩をケマルベクザーデ・ジャハン・バイ・ムルザなる人物が、カン・バイを風刺してネヴァ調で詠ったという（'Abd ül-Ġaffār, *'Umdet ül-Aḫbār*, f. 269b）。

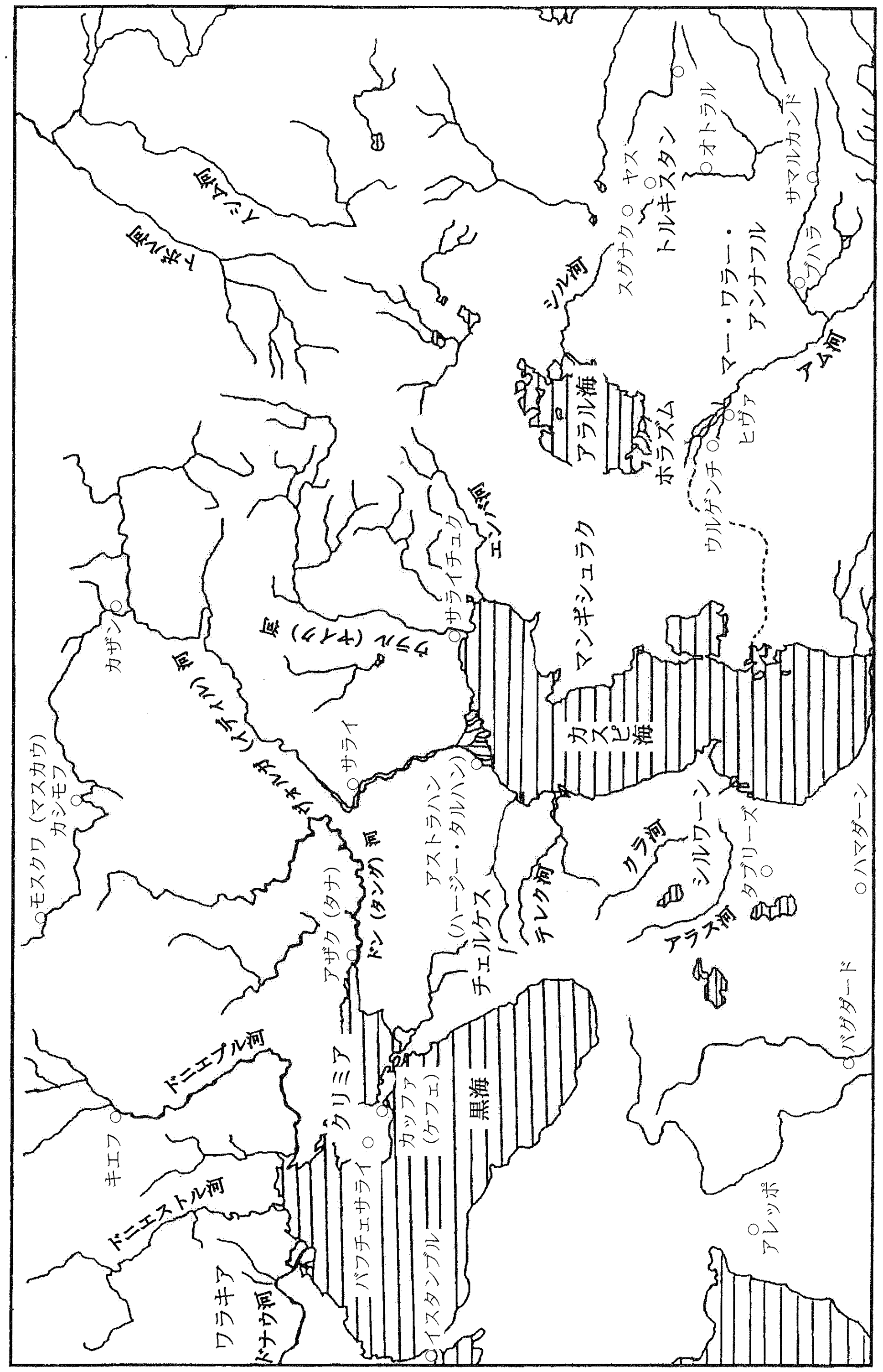
[145] köp Durmang ayartdïng. 訳註146で示しているように、「ドゥルマン（Durman）」は部族名であり、『サングラーフ』もこれをウズベグの部族名としている（*Sanglax, A Persian Guide to the Turkish Language by Muhammad Mahdī Xān*, Facsimile Text with an Introduction and Indices by G. Clauson, "E.J.W. Gibb Memorial" Series, vol. XX, London, 1960, f. 225r）。しかし、ユーヂンが訳しているように、「尊大になるな、［おまえは民を］惑わした」とも解釈でき、この文は一種の掛詞になっている。

[146] 『諸情報の要諦』では、この詩の各単語の文字ごとに発音記号が付されており、それによりコカダイ、ドゥルマンと読むべきことが判明する。さらに続けて、著者アブデュルガッファールはオスマン語で次のようにこの詩を解釈している。「おまえは昔コカダイと呼ばれた場所でハンとなり、とどまった。おまえはドゥルメンという名の多くのおまえのノケルをある悪行のために四散させた。おまえはすっかり自惚れて胸を張って強がり、大威張りで歩いた。そのとき、われわれはおまえのもとに行き、助けを求め、立ち寄り、かがんで、何度も平伏した。しかし、おまえはわれわれの懇願を聞き入れなかった。いまや、おまえはわれわれを追いかけて、なぜ恥とも思わずに来たのだ。おまえ、カンバイよ」（'Abd ül-Ġaffār, *'Umdet ül-Aḫbār*, f. 269b）。

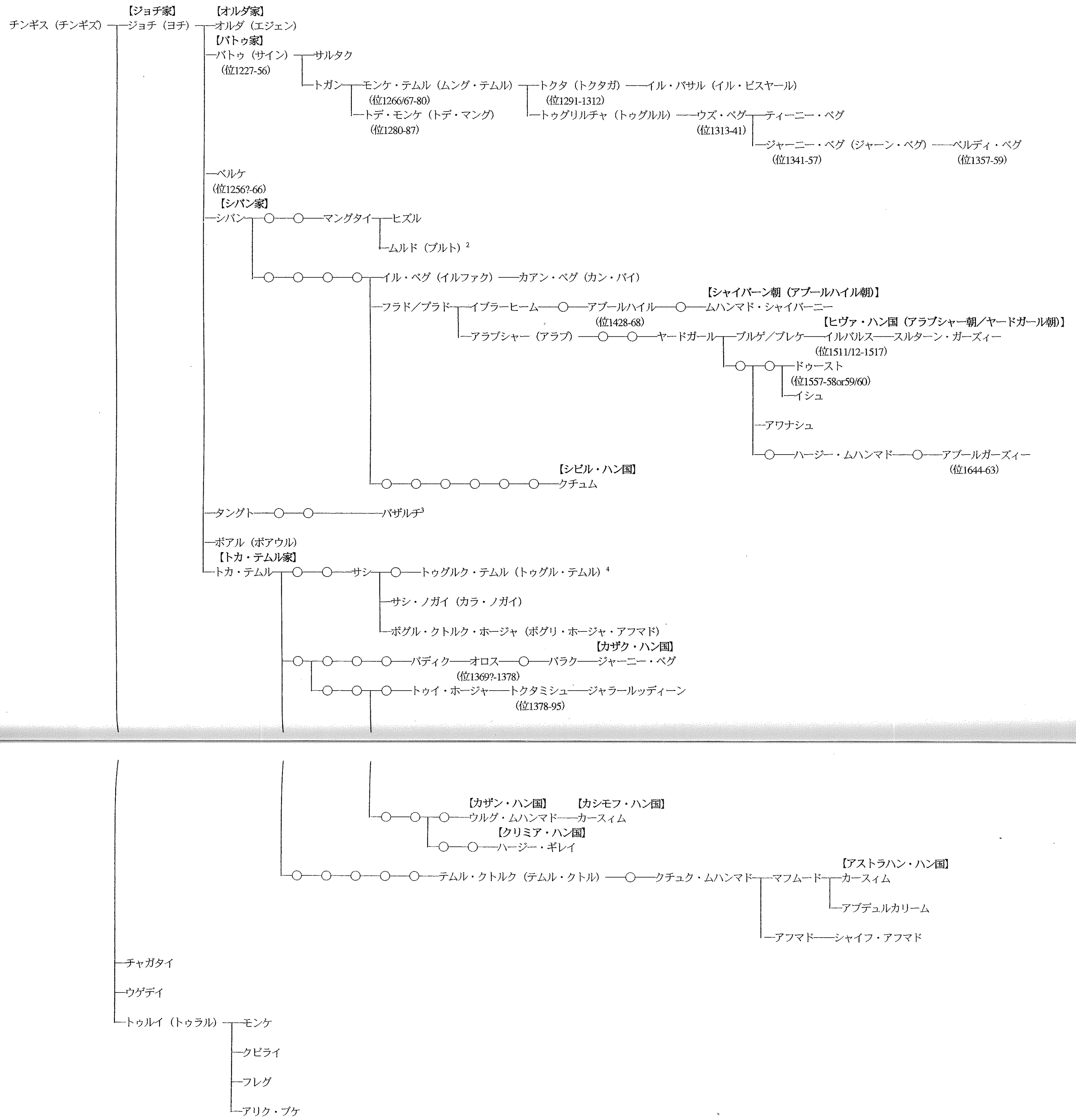
[147] ここでの「ヤサク」は、チンギス・カンによって制定されたといわれる法律の意味ではなく、税の意味。

[148] 原文は途中で切れているが、『諸情報の要諦』により、欠落している部分をある程度推測することができる。それによれば、「『どこから、誰かから逃げる者、ヤサクから逃げる者があれば、要するに、そなたのノケル、民とするように』と厳命が下された。現在、集まった民たちに『アラブ・ウランの話』と呼ばれていることは、ウズベグのあいだでは有名である」（'Abd ül-Ġaffār, *'Umdet ül-Aḫbār*, f. 269b）とある。

関係地図



関係系図[1]



1 『チンギズ・ナーマ』に現れる人名表記が他の諸史料の表記と異なる場合、（ ）で『チンギズ・ナーマ』の表記を付した。
2 『チンギズ・ナーマ』によれば、ムルド（ブルト）はヒズルの息子。訳註111参照。
3 『チンギズ・ナーマ』によれば、バザルチはボアル（ボアウル）の子孫。訳註104参照。
4 『チンギズ・ナーマ』によれば、トゥグルク・テムル（トゥグル・テムル）はサシ・ノガイ（カラ・ノガイ）の弟。訳註87参照。

索引

人名索引

地名索引

部族・集団名索引

『チンギズ・ナーマ（*Čingīz-nāma*）』

ウテミシュ・ハージー（Ötämiš Ḥājī）著

転写（Transcription）

(36a)[1] **Čingīz-nāma**

Bismi Allāhi al-raḥmāni al-raḥīmi. Ḥamd-i nā-maḥdūd wa s̱anā'-yi [nā]-ma'dūd ol pādšāh-i ma'būdġa kim 'ālamnï wa ādamnï yoqdïn bar qïldï wa 'adamdïn wujūdġa keltürdi wa ādam, 'alayhi al-salām, nï barča maḫlūqātdïn 'azīz wa mukarram qïlïp mujhad-i malā'ika wa ḫalīfa-yi rōy-i zamīn qïldï. Andaġ ki kalām-i qadīmda yarïlïqadï. "Iẕ qāla rabbuka li-l-malā'ikati innī jā'ilu fī al-arżi ḫalīfatan" ki āyat tep, barča 'ālamnï 'adamdïn bar qïlġan bir wa bar sen, barčanïng 'aybïnï yapqan ṣāni' [wa] sattār sen. Taqï ādam oġlanlarïndïn ba'żïsïnï anbiyā' wa mursallar qïldï, tā anïng birligini wa barlïġïnï ḫalāyiqġa bildürüp aḥkāmnï yürütgäy wa yenä bir gurōhnï pādšāhlar wa ḥākimlar qïldï. Tā rāstlïq bilä ḫalāyiqlar arasïnda ḥukm qïlïp mīl-i mudāhana qïlmaġaylar wa birbiringä ẓulm ziyādalïq qïlmaqġa qoymaġaylar, qāla Allāhu ta'ālā, "Innā ja'alnāka ḫalīfatan fī al-arżi fa-uḥkum bayna al-nāsi bi-al-ḥaqqi wa lā tattabi' al-hawā fa-yużillaka 'an sabīli Allāhi" āyat [tep].

Wa ṣalawāt-i zākiyāt wa taslīmāt-i ṭāhirāt ol maqṣūd wa maḥbūb-i lam-yazal Muḥammad rasūl Allāhi, ṣallā Allāhu 'alayhi wa ṣallama, üzrä bolsun, kim 'ālam wa ādamnï yaratmaqdïn maqṣūd anïng ẕāt-i šarīf wa 'unṣur-i laṭīfï erdi. Kamā qāla Allāhu ta'ālā, "Law lāka la-mā-ḫalaqtu al-aflāka [tebän sözin iki jahān čirāġï ḥabīb sen" tedi. "Bu dunyā ham ol dunyā sening dōstluqung üčün yaratdïm"]# wa taqï anïng ālïna wa aṣḥāb-i maḫṣūṣlarïna ki har birisi hidāyat yolïda sitāra-yi burhān wa šam'-i rōšan erdilär. Kamā qāla al-nabīyu, 'alayhi al-salām, "Aṣhābī ka-al-nujūmi bi-aynahum iqtadamatum ihtadayatum" wa 'alā sāyiri al-muhājirīni wa al-anṣāri wa al-tābi'īni al-abrāri wa al-aḫyāri ilā yawmi al-qarāri.

Ammā ba'd-i ḥamd-i Ḫudā wa darūd-i rasūl-i arbāb-i ẕawī al-'uqūl (36b)

---

[1] ユーヂンによるキリル文字転写は36bから始まっており、36aの転写は欠落している。

ḫiẕmatlarïda ma'lūm bolġay kim bu faqīr-i ḥaqīr Ötämiš Ḫājī ibn Mawlānā Muḥammad Dōstī ḥażrat-i ḫāqān-i maġfūr-i maḫdūm Yādgār Ḫān ḫānzādasïnïng ḫānazād bandazādalarï wa qadīm ḫiẕmatkārlarïndïn[2] turur. Ol maḥallda ḥażrat-i sulṭān al-a'ẓam wa al-ḫān al-mukarram al-maġfūr bi-'ināyati al-maliki al-mannāni[3] Abū al-Manṣūr Il Bārs Bahātïr Ḫān, la-ṭayyaba[4] Allāhu ṣarāhu wa ju'ila al-jannatu maṣwāhu, ḫiẕmatlarïnda bolur erdim. Čūn bular Čingiz Ḫān nabīralarï [5] erdi wa men bu ḫānadānnïng ni'matï birlä farwarda bolup erdim [tilär erdim]# ki kamā huwa ḥaqquhu[6] bilsäm, Čingiz Ḫān oġlanlarïdïn ol Dašt wilāyatïnda kim ḫān bolġandïn song kim ḫān boldï wa andïn song nä waqtġa tegrü nä tartīb birlä kimlär ḫān bola keldilär wa bularnïng arasïnda nä türlig uruš wa nä türlig mājarālar kečti, bularnïng barčasïn kamā huwa ḥaqquhu[7] bilsäm. Tawārīḫlar ki kördim, bularnïng bir azraqïnïng atlarï bitiglig erdi. Wa basa[8], nä iš birlä wa nä kayfīyat birlä ḫān bolġanlarï maẕkūr ermäs erdi wa köpräkining atlarï ham maẕkūr ermäs erdi. Čūn manga dā'iya ol erdi kim bularnïng aḥwālïdïn kamā huwa ḥaqquhu[9] bilsäm, bu jihatdïn ötrü kim fulān kiši qarï sözni yaḫšï bilür tesälär, al-batta andïn barïp taḥqīq wa taftīš qïlur erdim wa 'aql tarāzūsïġa muwāzana qïlïp ma'qūlïn ḫāṭirïmda kizläp nā-ma'qūlnï bar-ṭaraf qïlur erdim. Andaġ boldï kim har majlisda qadīm pādšāhlar sözindin söz kečip muškilē wāqi' bolsa, biz faqīrdin kelip taftīš wa taḥqīq qïlur boldïlar wa men bu suḥbat birlä mašhūr boldïm.

Basa[10], bu as̱nāda ḥażrat-i 'ālī ḫān-i (37a) mamlakat-panāh, ẓillu Allāhi, sarwar-i salāṭīn-i īmān[11] wa rahbar-i ma'raka-yi maydān, ḫilāfat taḫtïnïng Kay

[2] хізмəткарларыдын
[3] мінан
[4] табə
[5] болуб
[6] кəмаhəққ
[7] кəмаhəққə
[8] бəс. "Basa"に関して、ユーヂンは、40aに現れる二箇所を除いて、この単語を前文の文末につくものとしている。
[9] кəмаhəққ
[10] Бəс
[11] айман

Ḫusrawï[12] wa šajā'at maydānïnïng Rustamï ol ki maydān ičrä har[13] kün Rustam-i Dastān erür, Sïr Daryāsïča salāṭīn panāh, Iš Sulṭān erür tā jahān barïnča bolġay ol šarīf-i ẕātī aning ma'dan-i jūd wa karam ham manba'-i iḥsān erür, ḫallada Allāhu ta'ālā mulkahu wa ayyada salṭanatahuġa[14] dā'iya boldï kim Yöči Ḫān oġlanlarïnïng aḥwālāt wa kayfīyātlarï wa tartīb birlä kimdin song kim ḫān bolġanlarï tā bu waqtġa tegrü nä iš bilä wa nä kayfīyat birlä aralarïnda nä türlig urušlar nä türlig mājarālar bolġanïn barčasïn ma'lūm qïlïp ḫāṭirlarïnda saqlarġa raġbat qïlïp, ol jihatdïn bu faqīr-i ḥaqīrnï čarlatïp keltürüp andaġ 'ināyat šafqatlar qïlïp bular aḥwāl kayfīyātlarïndïn sorar erdi. Čūn ḥikāyat köp erdi, kördilär kim ešitmäk bilä ẓabṭ qïlmaq bolmas, āḫir ḥukm qïldïlar kim "Manga bu ḥikāyatlarnï kitābat qïlïp beringiz" tep. Čūn faqīr alarnïng bandazādalarï erdim, ḥukmlarïnï özgä qïla almay bē-iḫtiyār bu amr-i ḫaṭṭnï iḫtiyār qïldïm, al-ma'mūr ma'ẕūr.

Basa, ġaraż bu muqaddimātdïn ol turur kim bu nusḫanï ḥaqīrdin oquġan wa ešitkän 'azīzlardïn wa uluġ küčükdin yārānlardïn iltimās ol dur kim bu sözlär bu ḥikāyat ki bu nusḫa bitildi, hēč daftarda wa hēč tawārīḫda yoq turur barčasïn išitmäk birlä bitip turur men, (37b) mašhūr turur kim qulaq ešitkän sözning köpräki yalġan terlär. Nāgāh agar ḫaṭāsï yā ġalaṭï wāqi' bolmïš bolsa, ġalaṭnï čïqarïp ḫaṭāsïnï rāst qïlsalar. Taqï faqīrnï bu išim ma'mūr ma'ẕūr bilsälär, 'inda Allāhida żāyi' bolmaġay, "Innā Allāha lā yużī'u ajra al-muḥsinīna".

Āġāz-i dāstān-i Čingiz Ḫān

Čūn Čingiz Ḫān wilāyatlarnï fatḥ qïldïlar, bir[15] ṭarafï Baġdād wa bir ṭarafï Hindūstān wa bir ṭarafï Dašt-i Qipčāq, Daryā-yi 'Idil erdi. [16]Bu wilāyatlarnï tört

[12] кі хусрəві
[13] бір
[14] сəлтанəтəм-ғə
[15] бу
[16] Вə

[beš]# oġlïġa baḫšïš qïldï. ʻIrāq wilāyatïnï Hülägü Ḫānġa berdi. Ögädäy Ḫānnï öz wilāyatïnda qoydï. Tulï Ḫānnï öz qašïnda saqlar erdi. Čaġatay Ḫānġa Buḫārā wa Samarqand wa Ḫurāsān wa Ḥiṣār wilāyatlarïnï berdi. Ammā Yöji Ḫān barča oġlanlarïndïn uluġraq erdi. ʻAẓīm laškar qošup Dašt-i[17] Qipčāq wilāyatïnġa salġap yibärdi. Aṭlarïnggä yem bolsun tep, Ḫ^{w}ārazm wilāyatïnï berdi. Čūn Yöči Ḫān Dašt-i Qipčāq wilāyatïnġa ki mutawajjih boldï, Uluġ Taġ ki mašhūr turur, anga yetišdilär. Bir gün taġ arasïnda aw awlayï čïqïp erdi. Bir böläk maral keyiklär yoluqdï. Anï qowalap aṭarda aṭdïn yïqïlïp boynï sïnïp wafāt boldï.

[Āġāz-i dāstān-i] Ejän Ḫān [wa] Ṣayïn Ḫān

Ejän Ḫān bilä Ṣāyïn Ḫān mašhūr turur. Turalï [Ḫān qïzï]# żaʻīfasïndïn toġġan[18] erdi. Yenä on yetti oġul [bar erdi] kim özgä żaʻīfalarïndïn bolup erdi. Bu Ejän birlä Ṣayïn (38a) ḫānlïqnï bir-birising muraʻāt qïldïlar. Ṣayïn Ḫān küčük erdi, aġasï Ejängä aydï, "Atam ornuġa aġam sen. Hamān atam turur sen. Yat yurutġa bara turur biz. Ḫān bolġïl" tedi. Ejän aydï, "Mening sendin yašġa uluġ ekänim rāst. Ammā atamïz seni bisyār sewip[19] erkä östürüp erdi. Bu čaqġa tegrü sening erkälikingni wa maḥälllarïngnï čekip turur men. Šāyad ki ḫān bolsam burunqï teg maḥälllarïngnï čekä almaġay men. Taqï aramïzda uruš ʻadāwat bolġay. Sen oq ḫān bolġïl. Sening ḫānlïqïngġa men čïdar men. Ammā mening ḫānlïqïmġa sen čïdamas sen" tedi. "Ol tegän nä söz bolur. Yosaqlï aġam turġanda manga nä oḫšar ki ḫān bolġay men", tep, aġasïġa köp taklīf qïldï. Qabūl qïlmadï ersä, aydï, "Bolmasa bir iš qïlalï. Uluġ babamïz Čingiz Ḫān qašïġa baralï. Men ham sözümni ʻarż qïlayïn, siz ham sözüngizni ʻarż qïlïngïz. Har nä babamïz yarlïġï bolsa, anïng birlä bolalï", tedi ersä, bu sözni maʻqūl körüp qabūl qïldï. Bir anadïn toġġan iki oġul wa özgä anadïn toġġan on yetti oġul barčasï qošulup uluġ ḫān körünišigä bardïlar. Bular ki ḫānnïng ḫiẓmatïġa

[17] Дәштә
[18] туған
[19] сүйіп

yetišdilär, ḫān bularġa üč örgä saldï. altun busaġalï aq örgäni Ṣayïn Ḫānġa saldï, kümüš busaġalï (38b) kök ordanï Ejängä saldï, bolat busaġalï boz ordanï Šïbanġa[20] saldï.

Basa, üč yerdä Šïban Ḫān oġlanlarï Toḫtamïš Ḫān bilä Temür Qutlï wa Oros Ḫān oġlanlarïġa faḫr qïlïp maqtanurlar. "Biz sizlärdin artuq turur biz" tep. Ol biri örgä turur. Ayturlar, "Atamïz Yöči Ḫān ölgändin song uluġ babamïz Čingiz Ḫān qašïnġa atalarmïz bardïlar ersä, Ejän birlä Ṣayïndïn song bizning atamïz Šïban Ḫānġa örgä saldï. Sizlärning atalarïngïzġa telägän ham salmadï", teyürlär. Taqï ikinči ol kim "Öz Beg Ḫān qahr qïlïp Qïyat Īsatayġa örüm češip[21] barča oġlanlarïnï el-günläri bilä qošun berdi ersä, ol taqï bizni ʻizzat wa ḥurmat qïlïp, "qïlïč čapġan yurt ačġan är Šïbannïng oġlanlarï dur", tep, iki baġlïġ elni bizgä berdi. Biri Qarlïq, biri Böyräk turur. Ol iki elni alïp Ṣayïn [Ḫān] salġaġan yurtumïzda öz ḥālmïzġa qoyġandur. Biz ol Jïr Qutlïnïng kāšānasïġa taš kerpič qoyġanda wa taqï oġlï Tengiz Buġanïng ešikindä qurlap ötäkinä yüküngändä ol išlärdä biz yoq turur biz" teyürlär. Ol kim Ṣayïn Ḫān oġlanlarï Berdi Beg Ḫānda tamām boldï ersä, Jān Beg Ḫānnïng anasï Tay Dualï Begim, "Emdi yurït taqï ḫānlïq Šïban Ḫān oġlanlarïġa tegär", tep, Manggtay oġlï Ḫiżr Ḫānnï ündätip eltip Sarāy wilāyatïnda ḫān qïldï. "Ṣayïn Ḫān oġlan(39a)larïndïn song ol ḫān taḫtïnda ḫānlïq bizgä teggän dur", terlär. Bu bir dafʻa söz munda taqrīb birlä aytïldï.

Emdi keldük[22] yenä awwalqï[23] sözning bašïġa. Čūn Čingiz Ḫān oġlanlarïġa örgälär salïp ol aḫšam suysun qonalġanï ḥisāb saldï[24], tanglasï körünüš berdi. On iki qorï tüzüldi wa begläri bir yak[25] birlä olturdïlar. Jawalān čekip aš ṭaʻām yeyilgändin song Ṣayïn Ḫān qaytïp yükündi, taqï aydï, "Atamïz öldi ersä, ornïġa

[20] Шәйбанға. 以下、"Šïban"に関しては同様。
[21] четіб
[22] кәлдік
[23] ユーヂンの転写には欠落。
[24] йасады
[25] бәрйак

hamān atam sen. Yat yurtġa bara turur biz tep ḫān bolġïl" tedim. Qabūl qïlmadïlar. Nä jihatdïn qabūl qïla almaġanlarïn bilä almay men. Bu 'arżïmnï sizgä aytayïn tep keldim" tedi. Ḫān aydï, "Ṣayïn yosaqlï söz ayta turur. Nä üčün qabūl qïlmadïng" tedi. Ejän ham yükünip aydï, "Balē ḫānïm, yašġa uluġ ekänim rāst. Wa lēkin atamïz anï bisyār sewip[26] ergä östürüp erdi. Tā bu čaqġa tegrü men anïng maḥālllarïn čekkän erdim. Ol mening maḥāllïmnï čekkän[27] emäs erdi. Ḫān bolsam, burunqï teg anïng maḥāllïnï čekä almaġay men. Aramïzda kīna wa 'adāwat bolġay. Sizning közingizgä yaman körinür men tep, bu jihatdïn qabūl qïlmay men. Emdi ol oq ḫān bolsun. Men anïng ḫānlïqïnġa čïdar men" tedi ersä, ḫānnïng bu sözlärgä köngli buzulup oġlï Yöči Ḫān yādïġa tüšüp közlärindin yašlar aqïtïp ikisigä taqï köp du'ā' alqïšlar qïldï. Taqï aydï, "Tangla beglär birlä kengäšip sizlärgä jawāb beräli" tedi. Tanglasï beglär birlä kengäš qïlïp ong qolï birlä (39b) 'Idil Daryāsïdaġï wilāyatlarïnï ḫān yosuqïna Ṣayïn Ḫānġa berdi. Sol qolï birlän Sïr Daryāsï boynundaqï wilāyatlarnï Ejängä berdilär.

Basa, Ḫān körünüšindin qaytïp ḫān salġaġan wilāyatlarïnġa ki keldilär. Ṣayïn Ḫān 'Idil Daryāsï boynunġa kelgäč čerig yaraġïn qïlïp Oros wilāyatïnïng šahrï Maskawgä yüridi. Ayturlar, ol yürüšdä Šïban Ḫānġa otuz ming kiši qošup qarawïl yibärdi. Özi songïnča yürür erdi. Üč künlük yer[gä]# ilgärü yüriyür erdi. Maskaw pādšāhï ḫabar tapdï, yüz ellik ming kiši bilrä qaršu čïqdï. Bular ḫabar tapdïlar, Maskaw pādšāhï qaršu kelä turur tep. Šïban Ḫān, "Munïng üstüngä ïlġar men" tep aydï. Har nečä beglär man' qïldïlar, qabūl qïlmadï. Üč künlük yerdin ïlġar[28] salïp, bē-ḫabar yatġan laškarïnïng ičingä enip keldi. Oros pādšāhï basa almay, pādšāhïnï tutdïlar. Laškarïnïng öltürgänin öltürdilär, qalġanïn yesir qïldïlar. Čandān māl wa yaraġ jība jawšan tüšüp edi, hēč ḥisābï wa kitābï yoq erdi. Ammā Šïban Ḫān ḥukm qïldï ki "Har māl wa yaraġ ki har

[26] сүйіп
[27] ユーヂンの転写には欠落。
[28] ылғал

kišigä tüšüp dur dast-yābī alïp qalmasunlar. Barčasïn keltürsünlär". Ayturlar, har jinsdin bir ḫarman qïldïlar, bē-ḥisāb ḫarman bolup erdi.

Iki kündin song [Ḫān]# yetüšdi, bu fatḥ nuṣratnï kördi. Bu māl yaraġlarnï barčasïnï keltürüp čekdilär. Bisyār ḫʷaš ḥāl bolup, Šïban Ḫānġa köp āfarīn qïldïlar. Andïn song Šïban Ḫān ki kelip körünüšlär qïldï ersä, köp türlig 'ināyat (40a) šafaqatlar qïlïp, soyurġallar etdi. Tüškän māl wa yaraġnïng barusïnï Šïban Ḫānġa soyurġal qïlïp, barusïn öz laškarigä baḫšiš qïldï. Tanglasï köčüp Maskaw wilāyatïġa barïp kirdilär. Bir nečä ay anda bolup, wilāyatnïng išin güčin żabṭ rabṭ qïlïp, māl ḫarājïn qabūl qïldurup, daruġa ḥākimlar qoyup, muẓaffar wa manṣūr öz wilāyatïnġa qaytdïlar.

Basa, bular qaytïp kelgünčä, Ejän Ḫännïng[29] newkärläri iyäsigä 'āṣī bolup Ejän Ḫānnï tamām oġlanlarï birlä öltürüp erdi. Bu ḫabar ki Ṣayïn Ḫānġa keldi, uluġ muṣībat tutdï. Ewigä tüšüp āb āš bergändin song čerig yaraġïn[30] qïlïp bu yaġï üstüngä[31] yüridi. Bular ham turuš bermäy uluġlarï qačtï. Özgä el-günning barčasïn köčürüp alïp kelip öz eligä qošdï. Wa taqï har aymaqnï bir beggä qošun berdi. Tā bu čaqġa tegrü 'āṣī bilä yaġïnïng[32] qïlïč yalï bolmaqlïqï ol jihatdïn qalïp turur.

Basa, Ṣayïn Ḫān bu wilāyatlar bilä bu ellärni ki żabṭ ki qïldï. Andïn song barča qarïndašlarïnġa el-gün berip yer yurïtlar ta'yīn qïldï. Ammā Šïban Ḫānġa el-gün berür wilāyatlar berür čaqïda begläri birlä kengäšdi ersä, begläri aydï, "Bu kiši bisyār uluġ iš qïldï. Ḥālā munung köngli ösüp turur. Munga el-gün [wa] wilāyat berip öz qašïngda saqlamaġïng oḫšamaġay. Ol otuz ming kišigä, anga yaqïn ayïrdïng, ol kišini yenä laškar qošup baqmaġan wilāyatlarġa yibärgil. Har nä wilāyat ki baqdursa, anïng bolsun" tedi. Bu söz ḫānġa ma'qūl

[29] Ежән-ханны
[30] йарағыны
[31] үстүнінгә
[32] тәма білә йалуң

kelip, ol tabun qïlġan otuz ming kišigä yenä on ming Qïyat Yuraldaynï qošup Qïrïm Kefäwilāyatlarïġa salġap yibärdi.

Āġāz-i dāstān-i Šïban (40b) Ḫān

Šïban Ḫānnïng ʻajāyib wa ġarāyib išläri bisyār turur. Ol jumla[dïn] bir išni bu muḫtaṣarda yād qïlduq. Ol bir iši ol erdi kim Qïrïm wilāyatïnda Qïrq Yer tegän ḫārā āfarīn berk qalqa bar turur[33] kim anïng berkliki wa mażbūṭlïqï ʻālamda mašhūr turur. Nečä yïllar qabap uruš saldïlar, ala bilmädilär. Āḫir ḥukm qïldï kim aḫšamdïn[34] tang atqunča har nä kim āwāz qïlur anï bir-biringä urušdurung. Iki qollarïġa alïp bir-birigä čaqïšdura bašladïlar. Wa baqïr qazanlarïnï wa ṭabaqlarïnï wa čanaqlarïnï ura bašladïlar. Qolnïng ičindä bu ṣadāyï wa ʻalāmatï qopdï ki yer kök zilzilagä keldi, qulaqlar tondï. Qalqa ḫalāyiqlarï sarāsar ang tang bolup har sarï yügürüšürlär, "Nä ḥāl boldï" tep, ol aḫšam tang atqunča ol ṣadā wa ol ġawġā tïnmadï. Qalqa ḫalāyiqlarï ham yatïp uqlamadïlar. Tang[35] ki atdï, bas qïldïlar. Yenä aḫšam ki boldï, bayaqï teg yenä ʻalāmatï wa ġawġā qopardïlar. Tā bir hafta on küngä tegrü iš güčläri bu boldï. Qalqa ḫalāyiqlarï uyqusïzlïqdïn ḫarāb bolur erdi. Bu ġāyatġa tegrü ayturlar kim, "Agar bir iš qïlïr bolsa, qïlur erdilär. Šāyada bularnïng bu aylarda wa bu künlärdä rasmï wa ʻādatï bu ṭarīqa bar bolġay" tep, farāġat boldïlar. Čūn Šïban Ḫān bildi ki bular farāġat boldïlar, laškarïn yïġdurdï. Ayturlar ki ol qalqa bir yalang qayanïng üstündä tururlar. Bu aḫšam ġawġā wa ṣadānï köpräk qïldï. Qalʻanïng törüt yanïdïn čaqurlar saldï. Tā tang atqunča bir kiši čïqar čaqlï yol qïldïlar. Qalʻa ḫalāyiqlarï ġawġā wa ṣadā jihatïdïn mītīn āwāzïn maʻlūm qïlïp ḫabar-dār bola almadïlar[36]. Yol ki[37] ṭayyār bolġač darwāzaġa uruš saldïlar. Qalqa ḫalāyiqlarï yügürüp darwāzaġa keldilär. Bir jamāʻat bahādïrlarïnï ol yolġa taʻyīn qïlïp tururlar. Ol

[33] турар
[34] ахшамдын соң
[35] Та таң
[36] бормадылар
[37] Йөлөк

yoldïn yügürüp (41a) čïqġač qalʻagä özin saldïlar. Taqï qalʻanï aldïlar. Ol qalʻanï körgän rawandalardïn soraduq. Hanūz ol yolnïng ḥudūdï bar turur" tedilär.

Andïn song Awlaq[38] wilāyatï üstüngä yüridilär, Anï fatḥ qïldï. Andïn Kural wilāyatï üstüngä yüridi. Kural ʻaẓīm uluġ wilāyat turur. Anïng köp urušlarï boldï. ʻĀqibat fatḥ qïlïp Kuralnï pāytaḫt qïldï. Anda wafāt boldï. Taqï ḥālā Kural pādšāhïnïng awlādï turur. Šayḫ Aḥmad Ḫān nečä yïl anda tutqun bolup yenä andïn salāmat čïqïp öz wilāyatï Ḥājī Tarḫānġa keldi. Ol aytur ekän dur, "Bizning Özbeg ṭāʼifasïnda har ki omaqlï el ki bar turur, barčasïndïn anda bar turur. Šïban Ḫān birlä barïp anda qalïp tururlar" ter.

Basa, Šïban Ḫān ḥikāyatïn ki tamām qïlduq, yenä keldük Ṣayïn Ḫān ḥikāyatïnġa. Ṣayïn Ḫān Dašt wilāyatïda uluġ pādšāh boldï. Nečä yïllar dawlat saʻādat bilä pādšāhlïq sürdi. Čūn ajal yetišip dunyādïn naql qïldï ersä, iki oġlï bar erdi. Birining atï Sarï Taq, birining atï Toġan erdi. Sarï Taq özindin burun sekiz yašda ölüp erdi. Toġan taqï yaš qaldï. Beglär ittifāqï birlä Hülägü Ḫānġa elči yibärdilär, qïlïčsïz [ġïn]#[39] yaqasïz köngläk yibärdilär, yaʻnī el qaldï pādšāhlarï yoq żaʻīfalarï qaldï ärläri yoq. Hülägü Ḫān bu ḫabarnï ešitdi ersä, aṭlanïp Širwān wilāyatïnġa keldi. Taqï ʻaẓīm laškar yaraġïn qïlïp, qošup[40], yibärdi. Bu laškar hanūz kelmäkdä biz keldük Berkä Ḫān, ʻalayhi al-raḥmat wa al-riżwān.

Āġāz-i dāstān-i Berkä Ḫān

Maẕkūr, ʻalayhi al-raḥma, mašhūr turur, anasïndïn toġġandïn bärü musulmān erdi. Ol maḥallda dunyāgä keldi, öz anasï süti (41b) taqï özgä kāfir żaʻīfalarnïng

[38] Улак
[39] ғылаф
[40] қошун

sütini emmädi. Bu jihatdïn kāhinlar birlä bilgälärini baqturdïlar. Olar aydïlar, "Bu Muḥammad turur. Muḥammadīya kāfir ża'īfa sütini emmäz" tedilär ersä, bir musulmān ża'īfa faydā qïlïp keltürdilär. Anïng sütini emmä bašladï.

Bu wāqi'adïn nečä yïldïn song atasï Yöči Ḫān öldi ersä, kāfirlar arasïnda yüriy bilmäy Sïġnāq šahrïnġa kelip erdilär. Ol wilāyatġa kim keldilär, šayḫ al-'ālam Šayḫ[41] Sayf al-Dīn Bāḫarzī ki ḥażrat-i quṭb al-aqṭāb Šayḫ Najm al-Dīn Kubrānïng ḫalīfalarïndïn turur, olarnïng awṣāf-i ḥamīdalarïnï ešitip ištiyāq wa raġbat bilän ḫiẕmatlarïġa kelip nečä yïllar riyāżatlar čekip awliyālar[42] kamālïnïng nihāyatïnï ḥāṣil qïlïp erdi. Hanūz šayḫnïng ḫiẕmatlarïda erdilär, bu aṣnāda ki Ṣayïn Ḫān öldi, begläri ittifāq qïlïp Hülägü Ḫānġa elči yibärdilär. Bir kün Ḥażrat-i Šayḫ Berkä Ḫānġa aydï kim "Ey farzanda, Ḫudā-yi ta'ālānïng amrï andaġ boldï kim sen barïp atalarnïng yurtïnda pādšāhlïġïnï [qïlġïl" tedi]#. "Sizning ḫiẕmatda tapġay men. Taqï barïp dunyānïng pādšāhlïġġa taqï mašaqqatġa[43] özümni salġay men". Šayḫ aydï, "Agar tafarruqġa[44] tüšär sen, agar mašaqqatġa[45] tüšär sen, Ḫudā-yi ta'ālānïng taqdīrïnġa čāra yoq turur" tedi ersä, Ḫān-i maẕkūr ham bē-čāra bolup qabūl qïldï. Bir nečä kün yaraġ qïlïp čïqdïlar. Ḥażrat-i Šayḫ Buḫārādïn Qara Kölgä tegrü uzata keldi. Ḫān Šayḫnïng jilāwïda fiyāda keldilär. Qara Köldin Šayḫ du'ā qïlïp qaytdïlar. Ḫān Dašt (42a) wilāyatïnġa mutawajjih boldïlar.

Ḥājī Tarḫān wilāyatïnda Ḥājī Niyāz tegän dawlatï mašhūr kiši bar erdi. Ol aytur erdi, "Ḥażrat-i Ḫān Qara Köldin sekiz kiši [birlä] čïqïp Dašt wilāyatïnġa yüridilär. Ol sekiz kišining har birisi ming ewigä[46] atam turur" ter erdi. Čūn Ḫān, 'alayhi al-raḥma, Qara Köldin čïqïp Örgänč[gä] keldi, Örgänčdin

41 ユーヂンの転写には欠落。
42 әвлійаларда
43 мәшәққәтінә
44 тәфәррукінә
45 мәшәққәтінә
46 「天幕（ew/öy）」をユーヂンは"өй"と読んでいるが、本書においてこの単語は او と書かれることが多く、"ew"と読むべきと思われる。以下、"ew"に関しては同様。

Sarāyčuq[ġa] bardï. Ayturlar, Sarāyčuqġa barġanda beš yüz kiši jam' boldïlar. Sarāyčuqdïn ki ötdilär, 'Idil Daryāsïnïng yaqasïnġa teggünčä ming beš yuz kiši jam' boldïlar. Čūn 'Idil Daryāsïnïng yaqasïnġa kim keldilär, ḫabar tapdïlar kim Hülägü Ḫān 'aẓīm laškarï bilän Qulzum Daryāsïnï yaqalap kelä turur, tep. Bu yïġïlġan laškarlarï bē-dil bolup barčasï ittifāq qïlïp aydïlar kim "Hülägü Ḫān uluġ 'aẓīm pādšāh turur. Laškarï bar. Biz az kiši turur biz. Anga utru čïqïp urušmaqïmïz maṣlaḥat bolmaġay" tedilär. Ayturlar, "Ol ḥālda Ḫānnïng elindä bir qapsïz qalqan turur erdi. Ba'żïlar aytur erdi, "Bir qapsïz tolġa turur erdi. Bir qoynïng ašuqï ham ḥāżir erdi". Ḫān bularnïng jawābïnda aydï kim "Men öz rāyïm öz fikrïm bilän yürigän kiši emäs erdim. Sizlär manga ïnanmay turur siz. Ḥālā bu ašuqïnï qalqannïng yā tolġanïng qubbasïnġa öz qolïmïz bilän[47] qoysaq, ḫʷad toḫtamas. Emdi sizlär birlä bir šarṭ qïlalï. Men bu ašuqnï bu qalqannïng yā tolġanïng qubbasï üzä urayïn. Agar bularnïng qubbasï üzä omqa tursa ḫʷad biling ki men bu yaġïnï[48] basar men. Ḫudā-yi (42b) ta'ālā manga berür. Agar omqa turmasa, har nä sizning aytġanïngïzdïn čïqmayïn" tedi. Bu jamā'at ham aydïlar, "Agar omqa tursa, biz ham sizgä yak-jihat bolalï, tā jānïmïz barïnča" tedilär. Ḫān, 'alayhi al-raḥma, ašuqnï qolïġa alïp Allāhu ta'ālā yād qïlïp ki urdï, qubbanïng üstündä rāst omqa turdï. Bu ḥālatnï kördilär ersä, köngüllärindin šakk šubhanï ketärip barčasï muṭī' wa farmān-bardār bolup, 'Idil Daryāsïnï kečip Qulzum Daryāsïnï yaqalap Hülägü Ḫān laškaringä utru yüridilär.

Ol yolda mačaqlar Qulzum Daryāsïdïn šāḫča šaqqča sular čïqar. Yol ol sularnïng bašlarïn kesä kitär. Qumlï beyik tepäläri bolur. Faqīr ol yerlärni körgän turur men. Qïr Mačaq terlär. Andïn naru daryādïn šāḫča su čïqmas turur. Anïng bir uluġ tefäsi bar. Berkä Ḫānnïng qarawïllarï ol tefägä čïqdïlar. Šīrwān ṭarafïdïn'aẓīm gard faydā boldï. Ḫānġa ḫabar keltürdilär kim, "Yaġïnïng gardï faydā boldï. Hēč učï qïraqï yoq turur" tep. Bu beglär yenä bē-dillik qïla bašladïlar. Ḫān aydïlar, "Men ol tefägä čïqayïn. Sizlär mundïn qarap turung.

47 омқа
48 мән

Taqï Ḫudā-yi ta'ālānïng qudratïnï körüngüz. Agar yaġï kelip meni alur bolsa, sizlär mundïn oq qačġay sizlär" tedi. Bular ham qabūl qïlïp turdïlar. Ḫān tepä bašïnġa čïqdï. Az zamāndïn song ol ṭarafdïn laškar faydā boldï. Gurōh gurōh qol qol bolup kelür erdilär. Hamīn ki yaqïn keldilär, taqï muqābalasïnda yasal čekä bašladïlar. Čandān yasal čekip turdïlar. Laškarnïng ongï songï yetüšdi, laškarïnïng qïrïġïn körsä bolmas erdi. Ol asnāda Ḥażrat-i Ḫān üč karrat qamčïsïn sildädi, taqï yaġïġa utru aṭ saldï. Hanūz tepädin ašaq enmäyin, Ḫudā-yi ta'ālā(43a)nïng qudratï birlä [yaġï] laškarï buzuldï, taqï qačtï. Ḫānnïng laškarï bu ḥālatïnï kördi ersä, Ḫān songïndïn aṭ saldïlar. Nečä kün qowïp, öltürgänin öltürüp, öltürmägänin asīr qïlïp, qaytdïlar. Aṭlarïn yaraġlarïn tamām aldïlar. Ol tüškän kišilärdin sorar erdilär, "Siz ol tepä bašïndaqï bir kišidin nečük qačtïngïz". Olar aytur erdilär, "Ol bir kiši kim tepäning üstündä čïqïp turur erdi, anïng iki yanïnda iki uluġ laškar-i bisyār turur erdi. Har nečälär kim qaralar erdük, ol iki laškarnïng učïnï taqï qïraġïnï körä bilmäs erdük. Yaraq yasal čekip turġanïmïz ol jihatdïn erdi. Čūn ol tepädäki kiši bizgä aṭ saldï, ol iki 'aẓīm laškar ham aṭ saldïlar. Ḫayāl qïlduq kim yer kök üstümüzgä yïqïlïp kelä turġan teg boldï. Ol jihatdïn tura bilmäy qačduq" tedilär. Ḥażrat-i Ḫānnïng bu karāmatï ḫalq arasïnda mašhūr turur.

Ba'żïlar ayturlar, "Hülägü Ḫānnïng [oġlï][49] bu laškarnïng ičindä erdi. Bu laškar basïlġanda öldi. Hēč kiši anïng ölgänidin ḫabardār bolmadï". Ammā Ḥażrat-i Dōst Sulṭānnïng tawārīḫlarïda aytup tururlar, "Bu laškar ki basïlïp bardï, ġuṣṣasïndïn ḫasta bolup, iki aydïn song öldi" dep tururlar. Wa Allāh a'lam.

Čūn Dašt wilāyatï ki Berkä Ḫānġa musallam boldï, akṣarï köp kāfirlarnï musulmān qïldï. Ba'żïlar, on üč yïl, ba'żïlar, on altï yïl pādšāhlïq qïldï, tep tururlar. Andïn Ḥaqq raḥmatïġa wāṣil boldï. Ḥażrat-i Ḫāndïn nasl qalmadï. Yuqarïda maẕkūr bolup erdi, Ṣayïn Ḫānnïng iki oġlï bar erdi. Biri Sarï Taqï, biri

[49] һүләгү-хан

Toġan erdi. Sarï Taqï atasïdïn (43b) burun sekiz yašarïda öldi. Toġandïn iki oġul qalïp erdi. Birining atï Tödä Mangï, yenä birining atï Mung Temür. Bu Mung Temür yaš erdi. Ammā Tödä Mangï agarči yigit[50] yetilip erdi, walē bē-'aql bisyār dēwāna kiši erdi. Ṣayïn Ḫān naslïdïn mundïn[51] özgä kiši tapmayïn, beglär ittifāq qïlïp mušār ilayhinï ḫān qïldïlar. Mundïn 'ajāyib wa ġarāyib sözlär, ṭurfa ḥikāyatlar bisyār turur. Ammā bir iki ḥikāyat bu muḫtaṣarda yād qïlïndï.

Ayturlar, bir waqtda Tüb Ḫāndïn elčilär keldi. Begläri ittifāq qïlïp Ḫān-i maẕkūrgä aydïlar, "Bu ïraqdïn kelgän elči kelip turur. Munung közünčä farēšān [qïlmaġïl]# körmägil. Ḫānnïng salāmatlïqïnï sorġïl, taqï elning rafāhīyatlïqïnï sorġïl. Özgä söz sormaġïl" tedilär. Yenä aydïlar, "Sizning özüngizgä iḫtiyārïngïz yoq turur. Sizning ayaqïngïzġa bir yip taqalï. Taqï taḫtnïng astïnġa bir kiši kirip ol yipni tutup oltursun. Har gāh ki bizning bu naṣīḥatïmïznï unutup farēšān sözläy bašlasangïz, ol yipni tartsun. Ol ḥālda sözlämäkni bas qïlġay siz" tedilär ersä, ol ham qabūl qïldï. Ayturlar, "Anïng bir yaḫšï iši ol erdi. Bā wujūd-i ol dēwānalïq bilä ham[52] har išni ki beglär ittifāq qïlïp [anga]# tesälär, anï qabūl qïlïp olarnïng sözindin čïqmas erdi. Ol jihatdïn on sekiz yïl Dašt wilāyatïnda pādšāhlïq qïldï" terlär.

Edigü Bī, rahmatu Allāhi 'alayhi, aytur ekän dur, "Dušmanïngïzġa yaman du'ā qïlur bolsangïz, bu ṭarīqa du'ā qïlïngïz kim, "Bir ḫudāya, mening dušmanïmnï biligsiz qïlġïl, wa taqï bilgänlärning ham tilingä enmäs qïlġïl" tep, du'ā qïlïngïz" ter ekän dur. (44a) "Agar kiši özi bilmägäy, bilgänlärning sözigä engäy, ol hamān biliglig turur, anïng tafāwutï yoq turur" der ekän dur.

Al-qiṣṣa, tanglasï elčigä körnüš berdilär. Ḫānnïng salāmatlïqïnï sordï, el-

[50] ユーヂンの転写には欠落。
[51] ундын
[52] бәдһәм

günning rafāhīyatïnï sordï. Andïn song aydï, "Sizning eldä sïčqan köp bolur mu". Aydï, "Bolur". Andïn yenä sordï kim, "Sizning eldä yaġmur köp bolur mu". Aydïlar, "Balē, köp yaġar". Ol yipni tutup olturġan kiši kördi ki farēšān sözläy bašladï. Ol yipni tartdï. Ḫān elčigä aydï, "Sendin yenä söz sorar erdim, walēkin ayaqïmdïn tarta tururlar" tedi. Beglär fī al-ḥāl elčini alïp qaytdïlar, taqï aṭ ton berip uzatdïlar. Ol elči qaytïp öz pādšāhï ḫiẕmatïġa keldi. Ol Ḫān sordï kim, "Qarïndašïmïz Ḫānnï nečük kördüng wa nä türlig kiši turur" tedi ersä, elči aydï, "Bir karrat oq körnüš qïldïm. Äẕgü bilmädim. Ol körnüšdä sizning salāmatlïqïngïznï sordï. Taqï el-günnüng rafāhīyatlïqïnï sordï. Yenä sordï kim, "Sizning eldä sïčqan köp bolur mu". Men aydïm, "Balē, köp bolur". Yenä sordï kim, "Sizning eldä yaġmur köp yaġar mu". Men aydïm, "Balē, yaġar". Yenä aydï kim, "Sendin yenä söz sorar erdim, walēkin [ayaqïmdïn]# tarta tururlar" tedi. Andïn beglär fī al-ḥāl turup qaytdïlar. Men ham qaytdïm. Ḫānnï körgänim ošal boldï" tedi. Bu ḫān taqï begläri bu sözgä tafakkur qïldïlar, aydïlar, "Yaġmur köp yaġar mu tegäni yaḫšï, anïng üčün kim barča ḫalāyiqġa yaġmurdïn rafāhīyat bolur. Wa taqï sïčqannï ham sorġanï yaman ermäs. Andïn barčaġa ziyān tegär. Ammā (44b) har nečä fikr qïldïlar, yipni tarta tururlar tegänini bilä almadïlar" tep tururlar.

Yenä bir ḥikāyat kim, Özi ʻIdil Daryāsïnï kečä čerig aṭlanïp erdi. Čerigdin kim, qaytdï, dēwānalïqï ġālib [boldï]. Anïng ʻādatï ol erdi, har gāh ki dēwānalïqï ġālib bolsa, hēč kišining sözingä iltifāt qïlmas erdi. Bir yergä kelip tüšdilär. On beš kün ol yerdin [aṭlanmadï]. Čerigning azuqï tükändi. Aḥwāllarï ḫarāb boldï. Begläri kengäš qïldïlar wa taqï aydïlar, "Bu ḥālā żaʻīfasïnï unutup turur. Bir yalang yüzli yigitni żaʻīfa ṣūratïġa yasap ïraqdïn körsätäli. Bolġay kim, żaʻīfasï ḫāṭirïnġa tüšüp aṭlanġay" tedilär. Taqï bir oġlan yigitni żaʻīfa ṣūratïġa yasap körsätdilär ersä, körgäč żaʻīfasï ḫāṭirïnġa keldi. Tüšüp aydï, "Bizning ewdä hammunung teg kiši bar erdi" tep. Fī al-ḥāl aṭlanïp ïlġadï. Baʻżīlar bu ḥikāyatnï bir türlig qabīḥraq ayturlar. Munāsib körmädük bu daftarda bitilgäy.

Čūn ïlġalïp ki, saldï, iki kündin song ʻIdil Daryāsïnïng qïraġïġa keldi. Qatïnda iki jurasï qalïp erdi. Daryā[nïng yanïnda] Basġunčaq Tuzlaqïnïng [yanïnda] beyik tepä teg taġï bar turur. Har kiši ki, ʻIdil Daryāsïnï Busġunčaq yanïndïn[53] kečip Yayïq Daryāsïnġa ki, ärtülür, ol taġ bir künlükkä yaqïn bir kišining yanïndïn qalmas turur. Ḫān ki ʻIdil Daryāsïnï ki, kečip ïlġadï, kördi ki, bir taġ hēč qalmas. Bir iki karrat ġażab birlä baqdï, taqï aydï, "Sen oq bar. Men barman[54]" tep. Aṭdïn fī al-ḥāl tüšdi, yatdï. Qatïndaqï juralarï ham čārasïz bolup tüšdilär. Ol kün (45a) tā aḫšam bolġunča anda yatdïlar. Čūn aḫšam kiši tanïmas bigin ki boldï, ol iki jurasïnïng birisining idrākï bar erdi, faḥmlig kiši erdi, ol aydï, "Ḥālā keč boldï. Ol ham tüšüp turur. Dam ba-dam dur ki uqlaġanda biz aṭlanïp ïlġasaq, ol bizni tuymayïn qalur" tedi ersä, bu söz ḫānġa bisyār maʻqūl keldi. Taqï aydï, "Yaḫšï aydïng. Aṭ eyärläng". Eyärlädi. Emdi uqladï tegän waqtda aṭlandï. Taqï ïlġadïlar, tang atġunča. Tang ki atdï, hēč yerdä körmädi, tā Ḫān bisyār ḫʷaš ḥāl boldï. Ayturlar, ordasïġa barġandïn song köp soyïrġallar qïldï, terlär. Bu yanglïġ ṭurfa dēwāna kiši bolġan dur.

Baʻżīlar ayturlar, on sekiz yïl ḫān boldï. Baʻżīlar ayturlar, sekiz yïl ḫānlïq qïldï. Andïn song inisi Mung Temür yigit yetildi ersä, özi oq inṣāf etdi, aydï, "Munčadïn berü kiši yoqdïn meni ḫān qïlïp erdingiz. Sizlär ham qïnaldïngïz, men ham qïnaldïm. Emdi inim, šukr, bu čaqlï [ösdi]#. Mening könglüm sizlärgä ḫʷaš turur. Inimni ḫān qïlïngïz" tep, özni ḫānlïqdïn ʻazl qïldï. Begläri ham bu sözni[55] ḫʷaš ḥāl boldïlar. Inisi Mung Temürni ḫān kötärdilär.

Āġāz-i dāstān-i Mung Temür Ḫān

Bisyār ʻādil wa żābiṭ ʻāqil pādšāh erdi. Mung Temür zamānïnda el-gün bisyār

---

[53] йакындын
[54] бармаймэн
[55] сөздін

rafāhīyatda boldïlar. Anïng ġāyat yaḫšïlïqïndïn Külüg Ḫān at berdilär. Andaġ Mung Temür Külük Ḫān mašhūr turur. Ayturlar, "On üč yïl ḫānlïq qïldï. Andïn song wafāt tapdï". Andïn iki oġul qaldï. Birining atï Toqtaġa, birining atï Tuġrul. Atasï ölgändin song Toqtaġa ḫān boldï.

Āġāz-i dāstān-i Toqtaġa Ḫān

Bu Toqtaġa Ḫān bisyār uluġ pādšāh erdi. Ṣayïn Ḫān oġlanlarïda munung muqābalasïnda pādšāh az boldï. Ayturlar, ol ṭarīqa (45b) mu'aẓẓam šulanï bar erdi, aṭdïn sïġïrdïn qoydïn özgä jānwārlardïn bašġa har kündä toqsan qaban šulanïda bišär erdi. Munung bir oġlï bar erdi, Il Bisyār[56] atlïġ. "Men ölgändin song anga ḫānlïq talašur" tep, öz qarïndašlarïn taqï öz naslïn barčasïn qïrdï. Ḥattā ki inisi Tuġrulnï öltürdi terlär. Ammā ba'żīlar ayturlar, Tuġrul özi ḫastalïqdïn öldi. Kelin Bayalïn atlïġ Tuġrulnung żaʻīfasï bar erdi. Körlük erdi. Tuġrul ölgän maḥallda bir farzandï boldï. Kördi ki Toqtaġa Ḫān oġlï jihatdïn qarïndašlarïn qïra turur, bir nečä kiši birlä qačïrïp Čerkäs taġïġa yibärdilär. Öz Beg Ḫān-i mašhūr, 'alayhi al-raḥma, ol oġlan turur. Az furṣatdïn song Kelin Bayalïnnï Ḫān aldï. Anï bisyār sewär erdi. Bu qāżiyalardïn nečä yïllar kečti. Ayturlar, Ḫānnïng 'umri toqsan yašar erdi. On yašïda ḫān bolup erdi, seksän yïl ḫānlïq qïldï. Ba'żīlar ayturlar, "Yigirmi yašïda ḫān boldï, yetmiš yïl ḫānlïq qïldï" teyürlär.

Čūn āḫir-i 'umringä yaqïn keldi, al-qiṣṣa, "Özümdin song ḫān bolsun" tep, saqlaġan oġlï özüdin burun öldi. Basa, "Ma'lūm[57] turur kim bizdin bir oġlï bolġay, "Mendin song anga ḫānlïq talašur" tep, öz uruġïn tamām qïrġan bolġay. Yenä özi ham fīrlik birlä āḫir-i 'umringä yetmiš bolġay. Bu oġul taqï özidin burun ölgäy. Anïng nä türlig muṣībatï wa nadāmatï bolġay". 'Āqibat bu ġuṣṣadïn ḫasta bolup ḫastalïqï uzaqġa čekdi. Bir kün tösäkdä yatïp ol yan bu

[56] Әл-Басар
[57] Бәсі мәлул

yan aġnap āh urar erdi. Kelin Bayalïn bildi ki nä jihatdïn bē-ṭāqat bola turur, aytdï, "Siz dāyim ḫasta bolur erdingiz. Bu yol nečük bē-ṭāqat bola turur siz" tedi. (46a) Ḫān aydï, "Nečük bē-ṭāqat bolmayïn. "Yalġuz oġlum Il Bisyār[58]ġa ḫānlïq talašur" tep, öz uruġumnï tamām qïrdïm. Oġlumnïng ham iši ol ṭarīqa boldï. Özümgä ham ölüm yaqïn keldi. Yurutum yat kišigä tüšär. Bē-ṭāqatlïġïm ol jihatdïn turur" tedi ersä, Kelin Bayalïn aydï, "Sizning yarlïġïngïzdïn taš [men bir] iš qïlïp turur men. Agar gunāhïmnï baġïšlasangïz aytayïn" tedi. Ḫān fī al-ḥāl qopup olturup sordï kim, "Nä iš qïlïp erding". Aydï, "Ol maḥallda ki iningiz öldi, iningizdin bir oġul bolup erdi. "Sizni öltürgäy" tep, qačïrïp Čerkäs wilāyatïnġa yibärip erdim. Ḥālā har yïlda anïng salāmatlïq ḫabarï kelä turur. Bu yïl on tört yašïnda turur. Agar yarlïq qïlïp kiši yibärsängiz, ol kelür edi bolġay" tedi ersä, Ḫān ḫʷaš ḥālatdïn andaġ boldï, gōyā ki ḫasta bolmaġan teg boldï. Iki ming tümän el Kelin Bayalïnġa sewinčä etdi. Tanglasï beglärni čarlap Qïyat Īsatay bilä Sïjut Alatayġa qïrq ming kiši qošup Öz Beg Ḫān, 'alayhi al-raḥma, nï keltürmäkkä yibärdi. Bular barïp kelgünčä Toqtaġa Ḫān wafāt boldï.

Bājïr Toq Buġa tegän Uyġur omaqlï bolur erdi. Qawmï qabīlasï köp küčlüg el erdi. Wa taqï Ḫānnïng atalïqï erdi. Šayṭān waswasa berip, qara kiši ekän, ol ḫān boldï. Kelin Bayalïnnï taqï Ḫānnïng özgä żaʻīfalarïnï ham aldï. Ba'żīlar ayturlar, Bājïr Uyġur erdi, Toq Buġa Nutïn erdi. Bu söz ġalaṭ oḫšar anïng üčün kim iki qawmdïn iki ittifāq birlä bir yerdä ḫān bolmaqï muškil turur. Durust(46b)raqï ol turur, atï Bājïr erdi, laqabï Toq Buġa erdi. Al-qiṣṣa, bu Bājïr Toq Buġa ḫān bolup Ḫānnïng żaʻīfalarïn alïp el-günning tamāmïn özigä musaḫḫar qïlïp erdi.

Bu aṡnāda ol barġan beglär Ḥażrat-i Öz Beg Ḫānnï alïp ['Idil daryāsïnïng] qïraġïġa keldilär. Ḫabar tapdïlar ki ḫān öldi, taqï Bājïr Toq Buġa ḫān boldï, barča el-günni özigä musaḫḫar qïldï, tep. Bu ḫabardïn bisyār parīšān wa ġamnāk

[58] Әл-Басар

bolup kengäš qïldïlar kim nä iš qïlsaq bolur. Qïyat Ïsatay aydï, "Burunda qawmï qabīlasï köp küčlüg kiši erdi. Ḥālā ḫ^{w}ad tamām ḫalāyiq anga yüz keltürüp turur. Ḥālā bu yerdin turup dušmanlïq ẓāhir qïlsaq išimiz rāst kelmägäy. Bir ḥïla birlä özümüzni anga yetkürä köräli. Andïn song har iš ḫāṭirïmïzġa tiläsä[59] qïlur biz" tedi ersä, barčalarï bu sözni ma'qūl körüp elči yibärdilär. Aydïlar, "Iyämiz ḫān yumušïġa yibärip erdi. Ol kišini alïp kelä turur. Bu kiši ham ata atadïn[60] iyäläringiz oġlï erdi. Keräk erdi, andaġ qïlmasangïz. Emdi özingizgä oḫšatïp ḫān bolup turur siz. Barča ḫalāyiq sizgä muṭī' wa farmān-bardār bolup turur. Bizlär ham sizgä ušandaġ muṭī' farmān-bardār turur biz. Sarkaš qïlurïmïz yoq turur. Qïlalï tesäk ham küčümiz yetmäs. Bu bir yaš oġlan dur. Eltip qolungïzġa beräli. Könglüngiz nä tiläsä, anï qïlur siz bolġay" tedilär. "Munïng üčün ew elimizdin jalā'-i waṭan bolurïmïz yoq turur" tep, yibärdilär.

Bularnïng elčisi ki keldi, bisyār šādmān bolup körä alïp sïladï. Taqï fī al-ḥāl kiši qošup qaytarïp (47a) yibärdi. Aydï ki, ""Olar kelgünčä özgä kiši baš kötärip ḫānlïq tilägäy" tep, bu išni qïldïm. Rawā bolġay mu kim öz iyäm oġlï turġanda men ḫān bolayïn tegäy men. Pādšāh kelsünlär. Ošta[61] ḫānlïq ošta el-gün barčasï olarnïng turur" tep, yibärdi. Bu söz ki olarġa yetüšdi fī al-ḥāl köčdilär. Bular kelmäsdin burunraq Bājïr Toq Buġa begläri [birlä] kengäšip ittifāq qïldïlar, olar ki ṭul ordanïng ešikingä tüšüp yas tutarlar iki karrāt "Jaw jaw" tep yas tutġandïn song qol tebrätäli" terlär.

Basa, Qalmaqnïng qā'idasï[62] ol turur kim pādšāhlarï yā uluġlarï ötkändä gurōh gurōh qawmlarï birlä kelip üč karrat "Jaw jaw" tep faryād qïlïp yas tutarlar erdilär. Uluġ Taġda olarnïng arasïnda ol rasm ham hanūz bar erdi.

Bir kün Öz Beg Ḫān begläri birlä tang atmasdïn burunraq köčüp erdilär. Bir

[59] кәлсә
[60] ата-анадын
[61] Әвшәт
[62] қағыдәсі

oq suran kiši bularnïng alnïndïn kelip ötär erdi. Taqï aytur kim, ""Jaw" tegil, taqï "Ja" tegil" tep, bir karrāt aytïp ötdi. Parwāy qïlmadïlar. Ikinči karrāt yenä aytïp Qïyat Ïsatay aydï kim, "Ol nä tegäning bolur". Ol kiši aydï, "Mening atïm Sangġïsun. Anglaġay sen, songġusun" tedi. Qïyat Ïsatay aydï, "Bir söz bar" tep. Bu kišining artïnča bardï taqï aydï kim, "Mengä bu sözni aytġïl. Nä söz turur". Ol aydï kim, "Bājïr Toq Buġa begläri birlä ittifāq qïlïp kengäšdilär kim sizlär barïp ordalar ešikigä tüšüp iki karrāt "Jaw jaw" tep yaslaġandïn song olar qol tebrätip sizlärni qïrmaq boldïlar. Agar sizlär bir karrāt "Jaw" tegäč[63] üstigä yürüp qol tebrätmäsängiz, [64] barča halāk boldïngïzlar. Bu sözümning (47b) kayfīyatï bu erdi ki sengä aytdïm" tedi. Ïsatay bu ḫabarnï beglärigä aydïlar ersä, ittifāq qïldïlar ki "Jaw" tegäč qol tebrätmäk boldïlar. Tanglasï yürüp orda olturġan yergä yetdilär. Bājïr Toq Buġa orda [ičindä]# taḫt üstündä olturup erdi. Begläri wa newkärläri ešikidä qorlap erdilär. Bular kelip ešikdä tüšdilär. Taqï bir karrāt "Jaw jaw" tep yaslaġandïn song "Ja" tegäč Bājïr Toq Buġanïng üstigä qoyuldïlar. Tā qaddïn[65] rāst qïlġunča Ïsatay yetip boynunġa čapdï. Bašï bir qadam yergä barïp tüšdi. Alaṭay böydä bilä sančïp yoqaru kötärgäč faryād qïldï [66]kim, "Muna iyängizning bašï. Yerlig yeringizdin tebränmängiz" tedilär ersä, barčasï sust bolup oltura qaldïlar. Andïn song bu bašnï qor qorġa kezdürüp faryād qïlur erdilär[67], "Qara kiši ḫān bolmaq mundïn kesilsün" tep. Čūn Bājïr Toq Buġanï ki öltürdilär Ḥażrat-i Öz Beg Ḫānnï ḫān kötärip taḫtda olturdïlar.

Āġāz-i dāstān-i Öz Beg Ḫān

Ḥażrat-i Ḫān ki taḫtda olturdï wa el-gün qarār tapġandïn song Yöči Ḫännïng özgä anadïn toġġan on yetti oġulïnïng oġlanlarïnï čarlatïp keltürüp aydï ki "Sizlär ata oġlï emäs mi erdingiz. Qara kišigä qul-newkär bolup anga muṭī'

[63] тегәні
[64] бардыңызлар
[65] Тақдын
[66] ユーヂンの転写には欠落。
[67] қылура бардылар

bolġanča sizlärdin biringiz ḫānlïq talašsangïz mï[68]. Čūn sizlär qara kišining qulluqïnï newkärlikini qabūl qïldïngïz ersä, men ham sizlärni qara kišigä qošun beräyin" dep, qahr qïlïp newkär sewdärni wa el-günläri barčasïn Qïyat Ïsatayġa soyïrġal qïldï.

Basa, yoqarïda ham taġrīb bilä ẕikr qïlïp erdük. Čūn Šïban Ḫān qïlïčlar čapïp yaġïlar wilāyatlar ačïp erdi, ol jihatdïn (48a) anïng oġlanlarïnï wa nabīralarïnï barča ḫalāyiqlar 'izzat wa ḥurmat qïlurlar erdilär. Ḫān ki bu oġlanlarġa qahr qïlïp Ïsatayġa qošun ki berdi, Ïsatay taqï Šïban Ḫān oġlanlarïġa atalarï ḥurmatïn qïlïp Böyräk bilä Qarlïq ki iki baġlï el turur anï alïp[69] bularnï öz ḥālïġa qoydïlar. Ṣayïn Ḫān salġaġan yurtlarïda bolur erdi tep tururlar. Wa taqï Alaṭayġa Ming baġlï el ayïrdï. Ol mašhūr turur. Özbeglär arasïnda ayturlar, "Ïsatayġa örüm češip[70] Alaṭayġa Ming berdi" derlär ma'nāsï bu turur.

Basa, Ḥażrat-i Ḫān-i maẕkūr, 'alayhi al-raḥma, 'aẓamat uluġ pādšāh erdi. Bir neča yïl pādšāhlïq qïlġandïn song Allāhu ta'ālānïng 'ināyatï bolup musulmān boldïlar.

Ḥikāyat-i sabab-i Islām-i Öz Beg Ḫān

Sabab-i Islāmï ol erdi kim ol zamānnïng walīlarïdïn [71] tört walīgä Allāh-i ta'ālādïn ilhām boldï kim "Sizlär barïp Öz Begni Islāmġa da'wat qïlïngïzlar". Taqï Allāhu ta'ālānïng amrï bilä Öz Beg Ḫānnïng ešikigä kelip qorunïng tašïda olturup mutawajjih boldïlar. Andaġ riwāyat qïlurlar, kāfir sāḥirlar birlä kāfir kāhinlar Ḫānġa andaġ karāmat körsätip erdilär ki Ḫānnïng majlisïġa sapčaqï bilä [bal] keltürüp qoyar erdilär. Jorġatï wa dūstġānlarnï ṭayyār qïlur erdilär. Bal özi jorġatïġa quyulur erdi wa dūstġānġa süzülür erdi. Wa dūstġān özi ol kišigä

[68] әрдi
[69] берiб
[70] четiб
[71] турур

barur erdi. Barča bu sāḥir kāhinlarïnï Ḫān özlärigä šayḫ bilip yanlarïda yanaša olturup bisyār i'zāz wa ikrām qïlur erdi.

Ammā bir kün ki bular kelip mutawajjih bolup olturdïlar. Kündäki teg Ḫān majlis ārāsta qïldï. Šayḫlarï birlä kelip barï olturdïlar kündäki teg paymānasï bilä bal keltürdilär. Jorġatï wa dūstġānnï keltürüp qoydïlar. Bir ḫaylī muddat ötdi kim nä bal kündäki teg jorġatïġa quyulur nä dūstġānġa süzülür erdi. Ḫān bu šayḫlarïnġa aydï, "Nä jihatdïn bu bal mu'aṭṭal qalïp (48b) turur". Šayḫlarï aydïlar, "Ġālib bu yaqïn Muḥammadī kelip turur. Bu anïng 'alāmatï turur" tedilär. Ḫān ḥukm qïldï kim "Qor-qordïn yürüp istängizlär taqï Muḥammadī bolsa, alïp kelingizlär". Mulāzimlar čïqïp qor-qordïn taftīš qïldïlar ersä, kördilär qornïng tašïnda tört özgä ṣūratlïġ kišilär bašlarïnï quyu salïp olturur erdi. Mulāzimlar aydïlar kim "Sizlär nä kišilär turur siz". Bular aydïlar, "Bizlärni Ḫān qašïġa alïp [barïngïz]". Keldilär. Ḫānnïng közi bularġa tüšdi. Čūn nūr-i hidāyat bilä Allāhu ta'ālā Ḫānnïng könglini munawwar qïlïp erdi, bularnï ki kördi, mayl wa maḥabbatï könglündä paydā boldï, sordïlar ki "Sizlär nä kišilär turur, nä iškä yüriyür siz, nä iškä barur siz". Bular aydïlar, "Bizlär Muḥammadī turur biz. Ḫudā-yi ta'ālānïng [amrï birlä] kelip turur biz kim sizlärni musulmān qïlġaymïz". Bu aṯnāda Ḫānnïng šayḫlarï faryād qïlïp aydïlar, "Bular yaman kišilär bolur. Bularnï söylämäk [keräkmäz] öltürmäk keräk" tedilär. Ḫān aydïlar, "Nečün öltürä dur men. Pādšāh men. Sizlärning hēč qaysïngïzdïn farwāyïm yoq turur. Qaysïngïznïng dīnïngïz bar-ḥaqq bolsa, anïng birlä bolur men. Agar bularnïng dīnï nā-ḥaqq bolsa, sizlärning bu kündäki išläringiz nečük bāṭil bolup mu'aṭṭal qaldï wa sözläšingiz, qaysïngïznïng dīnïngïz ḥaqq bolsa, anga tābi' bolur men" tedi. Bu iki jamā'at biri-birisi birlä baḥṣkä tüšdilär, köp ġawġā wa jadal qïlïšdïlar. 'Āqibat anga qarār berdilär kim iki tanūr qazġaylar, har birisini on araba süksük bilä qïzdurġaylar. Bir tanūrġa sāḥirlardïn bir kiši kirgäy, yenä bir tanūrġa bulardïn bir kiši kirgäy. Har qaysï küymäy čïqsa, anïng dīnï ḥaqq bolġay, tep qarār berdilär. Tanglasï iki uluġ tanūr qazdïlar. Süksük otunlardïn yïġïp qïzdurdïlar. Birisini sāḥirlarġa ta'yīn qïldïlar. Yenä birisini

musulmānlarġa ta'yīn qïldïlar. Bu 'azīzlar biri-birisi birlä murā'at qïlïšdïlar, "Qaysïmïz kirär biz".

Bularnïng birisigä Baba Tükläs der edilär. (49a) Tamām a'żālarïnï tük basïp erdi. Ol aydï, "Mengä ijāzat beringiz. Men kiräyin. Siz mengä himmat tutungïz" tedi. Bu 'azīzlar anïng ḥaqqïna Fātiḥa oqudïlar. Ol Baba aydï, "Mengä jebä ḥāżir qïlïngïz". Jebäni ḥāżir qïldïlar ersä, jebä keydi yalang etkä. Taqï Allāh-i ta'ālā yādï ṭalqīn bašlap tanūr ṭarafïġa mutawajjih boldï. Aytur, Babanïng tükläri örä qopup jebäning közläridin čïqïp erdi. Bu ḥālātnï barča körär erdilär. Bular yürüp tanūrġa kirdi. Bir qoy etini keltürüp tanūrġa asdïlar, aġzïnï berkittilär. Emdi keldük kāhinlar qiṣṣasïnġa. Kāhinlar żarūratdïn birisini čïqarïp tanūrġa saldï. Hamīn ki tüškäč küli kökli yäšilli bolup yalnï tanūrnïng aġzïndïn čïqar erdi[72]. Bu ḥālatnï Ḫān bašlïġ barča ḫalāyiqlar kördilär ersä, köngülläri kāfir dīnïdïn ewrülüp musulmānlïqġa mayl qïldïlar. Wa taqï Babanïng talqīn aytqan āwāzï tanūrdïn muttaṣil kelür erdi. Qoy eti bišdi tegän maḥallda tanūrnïng aġzïn ačdïlar. Baba mubārak yüzlärindin terlärini sürtkäč, "Nä ašuqdïngïz. Agar bir zamān tawaqquf qïlsangïz erdi, išim tamām bolup erdi" tep, tanūrdïn čïqdï. Kördilär ki jebä joġ bigin qïzïl bolup erdi. Ammā Ḫudā-yi ta'ālānïng qudratï birlä Babanïng bir tügi küymäyin čïqdï. Bu ḥālnï Ḫān bašlïġ barča ḫalāyiqlar kördilär ersä, fī al-ḥāl šayḫlarnïng etäklärini tutup musulmān boldïlar. Al-ḥamdu li-llāhi 'alā dīni al-Islāmi.

Basa, Berkä Ḫān zamānïnda Özbeg ṭā'ifasï musulmān bolup erdilär. Olardïn song yenä murtadd (49b) bolup kāfir bolup erdilär[73]. Bu yol ki Öz Beg Ḫān musulmān boldï. Andïn bärü Özbeg ṭā'ifasïnïng Islāmï taġayyur tapmadï. Ayturlar, Öz Beg Ḫān yigirmi yïl pādšāhlïq qïldï. Wa ba'żïlar ayturlar, on sekiz yïl pādšāhlïq qïldï. Andïn Ḥaqq raḥmatigä wāṣil boldï. "Innā li-llāhi wa innā ilayhi rāji'ūna".

---
[72] чықара барды
[73] болдылар әрді

Āġāz-i dāstān-i Jān Beg Ḫān

Čūn Ḥażrat-i Jān Beg Ḫān-i mašhūr, 'alayhi al-raḥma, atasï taḫtïnda ḫān boldï, olarnïng 'adālatï, wilāyatï, karāmatï mašhūr turur. Dašt wilāyatïnda olar bigin 'ādil wa 'ābid wa żābiṭ pādšāh kečkäni yoq turur. Atasïnïng tamām dawlatïnï ḥukm qïlïr erdi. Andïn song Malik Ašraf tegän Tabrīz ḥākimï erdi, šayṭān anï yoldïn čïqarïp öz qïzïnï aldï. Anïng qiṣṣasï ol ṭarīqa erdi kim bir ṣāhib-i jamāl qïzï bar erdi. Bu bad-baḫt anga 'āšiq boldï, hēč türlig ārāmï qarārï qalmadï. Tabrīz 'ulamālarïndïn sordï ki, "Bir kim ersä diraḫt tiksä taqï anïng mēwasï yetilsä, özi mü yesün yā özgägä mü bersün". 'Ulamālar aydïlar, "Özi ham yesä bolur yā özgä kišigä ham bersä bolur" tedilär. Bu bad-baḫt ḫ^{w}ad maqṣūdï öz qïzï bolġan dur. Bu söz birlä turur taqï qïzïnï alur.

Basa, Tabrīz 'ulamālarï Ḫānġa 'arż-dāšt qïldïlar kim, "Bu kiši bizdin bir maġlaṭ birlän bir mas'ala ešitdi. Biz anïng ġarazïnï bilmäyin ẓāhirïna ḥukm qïlduq. Munïng ġarazï ḫ^{w}ad qïzïnda bolġandur. Ḥālā qïzïnï aldï. Bu ḫ^{w}ad kāfir boldï. Bizlär ham kāfirġa banda bolup turur biz. Bu kün Pādšāh-i Islām turur siz. Emdi sizgä wājib turur kim musulmānlarnïng bašïndïn [bu kāfirnï] daf' qïlġay siz". Ayturlar, Ḫān ikindü namāzïn oqup masjidda olturup erdi (50a) kim 'arż-dāšt keldi. Fī al-ḥāl 'ālimlarnï yïġïp sordï ki "Sizlär bu sözgä nä aytur siz". Olar ham aydïlar, "Balē, sizgä wājib turur bu kāfirnï musulmānlar bašïndïn daf' qïlġay siz". Bu sözni ešitdi ki masjiddïn yenä ewigä barmadï. Üč kün ol masjidda olturup yaraġïn qïlïp aṭlandï. Taqï barïp Malik Ašrafnï öltürüp Tabrīz wa 'Irāq wilāyatlarïnï aldï. Muddat-i otuz yïl pādšāhlïq sürdi. Andïn song Allāhu ta'ālā raḥmatingä wāṣil boldï. "Innā li-llāhi wa innā ilayhi rāji'ūna".

Āġāz-i dāstān-i Berdi Beg Ḫān

Oġlï Berdi Beg atasï taḫtïnda ḫān boldï. Bu Berdi Beg basē bē-'aql wa bē-

mulāḥaẓa kiši erdi. Özining qarïndašlarïnï taqï öz oġlanlarïnï mengä ḫānlïq talašur dep öltürür erdi. Ayturlar, Qanglï Tulubay tegän qawmï qarïndašï köp küčlüg kiši erdi. Bu Ḫānnïng atalïġï erdi. Har nä aytsa anïng sözindin čïqmaz erdi. Anïng bir oġlï bar erdi Ṣumay atlïġ. Alp atġučï erdi. Ol Ṣumay Jānī Beg Ḫān zamānïnda qaraqčïlïq qïlur erdi. Anïng jihatïdïn Ḫān, 'alayhi al-raḥma, anï öltürüp erdi. Tulubay ol oġlïnïng ačïġïdïn bu kengäšnï ol berür, aytur erdi, "Sen ḥālā yigit turur sen. Bu maḥalldaqï toġġan oġlung teng ösär sen kündin küngä qarïr sen. Ol yigit bolur. Tangla sen qarïġandïn song ḫānlïġïngnï talašïp alġay. Ḥālā bularnï öltürä turġïl. Qačan qarïy bašlasang andïn song qoyġay sen" ter edi. Ol bē-dawlat ham munung sözigä kirip öltürür erdi. Bu sababdïn anga Keräkin Kütän Ḫān terlär.

Anïng zamānïnda tafrīqalïq bisyār boldï. Ong qolnï Qïyat Mamay alïp el-gün birlä Qïrïmġa ketdi. Sol qolnï (50b) Qïyat Jïr Qutlï oġlï Tengiz Buġa Sïr Daryāsï boynïġa alïp ketdi. Ḫān öz ički[läri] birlä Sarāyda boldï. Üč yïl Sarāy šahrïnda pādšāh boldï. Andïn song wafāt boldï.

Tay Tuġlï Begim ki mašhūr turur, Öz Beg Ḫānnïng żaʻīfasï Jānī Beg Ḫānnïng anasï erdi. Ol maḥallda ol ḥayāt[ta] erdi. Ṣayïn Ḫān naslïdïn hēč kiši qalmadï. Begim-i maẕkūr aydï kim "Emdi ḫānlïq bilä yurït Šïban Ḫān naslïġa tegär" tedi. Ol maḥallda Šïban Ḫān neslidin Mangġutay oġlï Ḫiżr Oġlan terlär erdi. Ṣayïn Ḫān salġaġan Mangġutaynïng yurtï Aq Köl tegändä bolur erdi. Özgä oġlanlarïndïn ayrïlïp yurtïnda bolmaqïnïng jihatï yoqarïda ẕikr qïlïp turur biz. Al-qiṣṣa Begim-i maẕkūr Ḫiżr Oġlannï ündätip eltip Ṣayïn Ḫān taḫtïnda Sarāy wilāyatïnda ḫān qïldï. Bu söz munda mawqūf bolsun. Biz keldük Qïyat Jïr Qutlï oġlï Tengiz Buġanïng ešikindäki oġlanlarnïng ḥikāyatlarïġa wa Tengiz Buġanï öltürüp Qara Noġay ḫān bolġan ḥikāyatlarïġa.

Ol maḥallda ki Öz Beg Ḫān, 'alayhi al-raḥmat, ġażab qïlïp[74] Yöči Ḫānnïng özgä żaʻīfasïndïn bolġan on yetti oġulnïng nabīralarïn el-günläri bilän Qïyat Īsatayġa ki qošun berdi. Īsatay-i maẕkūr ölgändin song oġlï Tengiz (51a) Buġaġa qaldï. Bu Tengiz Buġa basē bē-adab ẓālim kiši erdi. Bu oġlanlarï ki anïng pādšāhlïġï naslïndïn erdi[75] bularġa bisyār jafālar wa bē-adablik qïlurlar erdi. Netäk ki atasï Jïr Qutlï üstingä 'imārat salur boldï, "Ustād qalsun" tep, özgä kišini aralašdurmay 'imāratnïng tamām išin bularġa buyurdï. Ḥattā ki su tašïġan kerpič qoyġan wa kerpič tašïġan bular erdi. Gāhīsïnïng arqasï yaġïr bolup erdi, gāhīsïnïng töši yaġïr bolup erdi, gāhīsïnïng ayaqï toġrulup jafālar yetišip erdi, terlär. Wa Allāhu a'lam.

Wa taqï har ṣabāḥ kelip bu oġlanlar ešikdä qorlar erdi. Har gāh ki ṣuḥbat tutsalar, öz qolïġa ki ayaq kelür erdi, sāzandalar ötäk küyin qopsalar erdi. Hamīn ki orda ičindä ki ötäk küyin qopsay bašlasa, bilür erdi, [76] ki beg qolïġa ayaq keldi. Bu oġlanlar börüklärin salïp yükünüp tururlar erdi, ol zamānġa tegrü ki ayaqnï ičkäy taqï ötäk qopsamaq bas bolġay. Andïn song börüklärin keyär erdi.

Ayturlar bir maḥallda qïš čillasï erdi, bu bad-baḫt ṣuḥbat tutup erdi. Nāgāh ötäk āwāzï keldi. Bu oġlanlar kündäki dastūrča börüklärin salïp yükündilär. Kün sowïq erdi. Ḥusayn Oġlan tegän Temür Qutluq Ḫān Oros Ḫān atalarïnïng qarïndašlarïndïn bolur erdi. Qulaqï üšüdi, taqï yarusïndïn köpräki tüšdi. Andïn song anga Čonaq Ḥusayn terlär erdi.

Al-qiṣṣa, čūn Berdi Beg Ḫānnïng pādšāhlïqïdïn üč yïl kečti, törtünči yïl küznüng (51b) bašïnda Ḫān ḫasta boldï. Ḫānnïng zaḥmatï uzaq čekdi. Qïš tüšdi. Tengiz Buġa-yi maẕkūrnïng qïšlaqï dāyim Sïr boyïda bolur erdi.

---

[74] ユーヂンは誤って、前段落の"Ол мәһәлдә Шайбан-хан нәслідін Маңк[ут]ай оғлы Хызр-"という文章をここで繰り返している。
[75] айырды
[76] ол зәман

Basa, bu ḥikāyatlar bu sözlär ki emdi ẕikr qïlġum[77] turur, Ḥażrat-i Ḫān-i maġfūr wa marḥūm, ṭayyaba[78] Allāhu ṡarāhu wa ju'ila al-jannatu maṡwāhu, Ḥażrat-i Il Bars Ḫāndïn ešitip turur men. Olar qarï sözini yaḫšï bilür erdi.

Berdi Beg Ḫānnïng pādšāhlïqïdïn üč yïl ötdi. Törtünči yïl qïš küz bašïndïn Ḫān ḫasta bolup erdi. Tengiz Buġa Sïr boyïn qïšlap erdi. Ḫānnïng ḫastalïq ḫabarï muttaṣil kelür erdi. Kün ṣabāḥ waqtï erdi. Bu oġlanlar Beg ešikidä qorlap erdilär. Tengiz Buġa ol kün saḥar waqtïdïn qopup ṣuḥbat tutup erdi. Sāzandalarï yaba' qopsap yïrawlarï yïrlar erdilär, wa ġawġā wa našāṭlarï bar erdi. Ṣabāḥï künläri sowïq erdi. Bir güräng aṭ mingän böri terisi tonnï jora keygän aṭï ṭonï boġa ġutġan kiši ordaġa yaqïn kelip tüšdi. Taqï aṭïn küymä[79] arabasïnġa bagladï, oq ṣadaqïnï araba üstigä qoyup ordaġa endi. Qopsay turġan sāzandalarï yïrlay turġan yïrawlar barčasï bas boldï. Muddat-i madīd bu el [ki] majlisda[80] dur čïqmadï. Andïn song yenä sāzandalar qopsay bašladïlar wa ṣuḥbat darkard boldï. Bu tašġarïġï oġlanlar bu ḥālatnï mulāḥaża qïlïp fikr qïlurlar erdi kim, "Āyā, bu kelgän kiši nä kiši bolġay ekän, bu el majlisda[81] bu ṭarīqa mutaḥayyir boldïlar" teyü.

Basa, bu oġlanlar arasïnda iki kiši bar erdi. Birisi 'āqil wa dānā erdi, anïng atïn Bögri Ḫʷāja Aḥmad terlär erdi. Ba'żïlar ayturlar, Saġïšï Artuq Sayïčï Oġlan (52a) terlär erdi. Yenä birisi alp atġučï bahādur erdi, andaġ kim ol zamānda hamġasï yoq erdi. Anïng atïn Qara Noġay terlär erdi. Songqïda ṣuḥbat darkard boldï, az furṣatdïn song Qara Noġayġa ündäkči keldi kim, "Beg sizni čarlay dur" tep. Bu qopup Beg qašïġa endi. Biraz furṣat yenä ḫāmōš boldïlar. Andïn song yenä ṣuḥbat darkard boldï.

---

[77] қылум
[78] таба
[79] кәрім
[80] бу әл-мәжлісдә
[81] бу әл-мәжлісдә

Bögri Ḫʷāja Aḥmad-i maẕkūr bu oġlanlarġa aydï kim, "Kördingiz mü. Berdi Beg Ḫān ölüp turur. Ol kelgän kiši Ḫānnïng ölgän ḫabarïn keltürdi. Bularnïng bir aš bïšïm ḫāmōš bolup mutaḥayyir bolġanï ol sababdïn erdi. Qara Noġaynï čarlap alġanï ol turur, anï ḫān kötärürlär, taqï tanglaqï körnüšdä barčamïznï qïrarlar. Bizning išimiz muškil boldï. Bu kün aḫšam birlä bir iš qïla alsaq, alduq, qïla almasaq, tangla barča ölümgä barġu turur biz". Čūn bular dāyim sïnap erdilär, munung kengäši özgä bolmas erdi, Barčasï aydïlar, "Siz ham nä türlig maslaḥat körsängiz, andaġ qïlalï" tedilär. Ḫʷāja Aḥmad-i maẕkūr aydïlar, "Maṣlaḥat ol turur. Noġay mundïn keč aṭlanur. Ewining yarï yolïġa yetkändä tutup aṭdïn yïqïp mażbūṭ baġlap bïčaqnï boġzïnġa qoyup bu ḫabarnï soralï. Agar rāstïn aytïp bizning birlä ittifāq qïlur bolsa, biz ham anï ḫān kötärāli. Wa agar rāstïn aytmasa, andaġoq öltürāli, tegmämiz bir yanġa qačalï" tedi ersä, barčasï bu sözni ma'qūl körüp 'ahd wa šarṭ qïldïlar.

Čūn namāz-i šām yaqïn boldï ersä, Noġay Beg majlisïnda qaytïp aṭlandï. Bu oġlanlar ham birgä aṭlandïlar. Kördilär kim kündäki teg čihrasï ṭawrï ṭarīqasï özgäčä bolup erdi. Kündä körnüšdin qaytïp ewgä barġunča oynay külä barur erdi. Bu kün hēč kišigä söz ün qatmay bē-ittifāq barur erdi. Ewlärining yaru yolïġa yetdilär ersä, qaranggu boldï. Fī al-ḥāl jïlawlap aṭdïn yïqïp mażbūṭ bagladïlar. Noġay-i maẕkūr aydï, "Menim gunāhïm nä turur, mundaġ qïla turur siz". Ḫʷāja Aḥmad aydï, "Sendin bu söz sorar biz. Agar rāstïn aytsang, bizning [birlä] (52b) ittifāq qïlsang, seni ḫān kötärāli, taqï 'ahd-i wafā wa šarṭ qïlalï. Sening newkärčilikingdin boyun tolġamaġay biz. Agar rāstïn aytmasang, taḥqīq bilgil ki seni bu yerdä öltürä biz". Aydï, "Nä sora siz[82]. Sorung". Ḫʷāja Aḥmad aydï, "Rāstïn aytġïl, ol kelgän kiši nä aytdï. Wa taqï seni čarlap Beg nä aytdï". Aydï, "Ol kelgän kiši nä aytġanïn bilmän. Meni čarlap hēč söz aytmadï" tedi ersä, Ḫʷāja Aḥmad-i maẕkūr aydï, "Ey bad-baḫt, sen aytmasang, men aytayïn. Ol kiši ki keldi, Ḫānnïng ölgänin ayta keldi. Taqï seni čarlap alġanï ol erdi kim,

---

[82] Нә сорар сіз

sanga aydï kim, "Seni ḫān kötäräli. Walē rāżī bolġïl kim, qarïndašlarïngnï öltüräli. Agar öltürmäsäng, olar sendin uluġ turur, sening ḫānlïqïngġa boyun sunmas dur" tedi. Ham ol iškä rāżī boldung. Emdi andaġ qïlmaġïl. Bu kišidin nä ḫorluqlar körmädük erdi. Sen bizning ičimizdä ḫān bolup bizgä baš bolsang, anï öltürüp andïn ačïġïmïznï almaq āsān turur. Mening bu sözümni qabūl qïlġïl" tedi. "Seni ḫān kötäräli. Kötärip sanga newkär bolurġa nä čaqlï 'ahd wa šarṭ tesäng, ičäli. Bizning ölärimizgä sabab bolup qiyāmatġa tegrü yaman atnï betingä alma" tedi ersä, ol taqï aydï, "Andaġ bolsa, qolum ayaqïmnï bošatïngïz. Sizgä rāstïn aytayïn" tedi. Qol ayaqïn bošatdïlar ersä, qopup olturup Ḫʷāja Aḥmad-i maẕkūrgä köp taḥsīnlar qïldï. Aydï, "Bu sözlär firāsat birlä aydïng, hēč ḫilāfï yoq turur. Wa barčasï rāst erdi. Emdi siz meni ḫānlaturġa[83] yaḫšï 'ahd wa šarṭ qïlsangïz, maṣlaḥatïngïzdïn čïqmayïn" tedi. Bular (53a) taqï 'ahd wa šarṭ qïldïlar. Nogay aydï, "Tangla ki körnüškä barur biz, ol meni čarlap almaq turur. Andïn song sizlärni čarlatur. Sizlär ewgä kirgäč qatïndaqï kišilär [birlä] bolung, men özi birlä bolayïn" tedi.

Tanglasï körnüškä ki[84] bardïlar, ol aytġanča Noġaynï čarlap aldïlar. Bir zamāndïn song bularnï čarlay kiši keldi. Bular ham yaraġlanïp kelip edilär. Barčasï köngli yürüp ešikdin kirgäč qol tebrätdilär. Noġay Tengiz Buġa bilä tördä yanaša olturup erdi. Fī al-ḥāl basa alġač bašïn kesdilär. Böydä birlä sančïp tašġaru alïp čïqdïlar, taqï čarlatdïlar, "Özgä kišigä ölüm yoq turur. Yerlig yeringizdin tebränmängiz" teyü. Ḫalq yerlig yeridä qarār tapġandïn song Noġaynï aq kizgä salïp barča ittifāq birlä ḫān qïldïlar.

Basa, Mangġtay oġlï Ḫiżr Ḫān birlä Qara Noġay ikisi bir ay ičindä ḫān boldïlar. Walē Ḫiżr Ḫān Sarāy ičindä taḫtïnda ḫān boldï, Qara Noġay Sïr boyunda sol ičindä ḫān boldï. Emdi keldik Ḫiżr Ḫān ḥikāyatigä.

[83] ханланурғә
[84] ユーヂンの転写には欠落。

Ol maḥallda ki Tay Duġlï Begim Ḫiżr Ḫānnï čarlap eltip Sarāy taḫtïnda ki ḫān qïldï, Öz Beg Ḫān birlä Jānī Beg Ḫāndïn qalġan altun termäni örgä saldï. Ayturlar, Begim sačïnï qaraġa boyadï, ḫānġa tegärgä mayl qïldï. Ḫānnïng ham alurġa maylï bar erdi. Walē Naymandïn Qutluġ Buġa atlïġ begi bar erdi. Ol rāżī bolmadï. Aydï, "Ol Öz Beggä Jānī Begkä iḫtiyār bola kelgän kiši turur. Sen bir turï öskän kiši turur sen. Sendin sïn tapar. Almaġïl". Anïng sözigä kirip almadï. Čūn Begim almasun tuydï ersä, burunqï(53b)dïn 'izzat wa ḥurmatnï kam [qïla] bašladï. Ḫān ham anga öčäšip altun termäni buzup qazaqlarïnġa üläšdürür boldï ersä, ešitip Ḫānġa Begim kiši yibärdi, aydï, "[Andaġ] qïlmasunlar. Ḫān bolġan kišigä altun kümüš tapulmas yer dägül dur[85]. Ammā burunqï yaḫšïlar yasaġan 'imāratnï buzmasun" tedi. Anïng sözingä kirmäyin buzup üläštürdi. Begim taqï anga ačïġ qïlïp beglärining ičkisini yïġïp Ḫānnï qowaladï. Ḫān qaytïp yenä Aq Kölgä keldi.

Begim-i maẕkūr bir kišini Keldi Beg dur tep ḫān kötärdi. Özbeglär anga yalġan Keldi Beg terlär. Barča ḫalāyiqlar aydïlar, "Keldi Begni Berdi Beg öltürüp erdi. Ol nečük tirildi" tep.

El anga boyun sunmadïlar ersä, Boawul naslïdïn bolur erdi, Bazarčï atlïġ, anï ḫān kötärdilär. Ol maḥallda uluġ beglärdin Sïjud 'Alī Beg bar erdi. Bu "Bazarčïġa boyun sunman[86]" tep, anï čarlatïp keltürüp öltürdi. 'Alī Begning bir Ḥasan atlïġ oġlï bar erdi[87]. Ol qačïp Qongrat Naġaday oġlï Aq Ḥusayn ki Ḫʷārazm wilāyatïnïng ḥākimï erdi, bu Ḥasan anga yegän bolur erdi. Anïng qašïġa keldi ersä, Begimning bu nāšāyasta ḥarakātlarïdïn harāsān bolup Begimdin oray gardān boldïlar.

Bu aṡnāda Aq Ḥusayn Ḫiżr Ḫānġa elči yibärdi aydï, "Ol ża'īfa šayṭān yolïġa

[85] алтун-кумуш та болмас йәрдә гүл дур
[86] сунмаз
[87] Әлі-бәгнің Барчын оғлы бар әрді

kirip munung teg ḥarakātlar qïla turur. Biz ḫʷad (54a) andïn oray gardān bolduq. Siz agar baš bolup himmat tutsangïz üstüngä yürür biz" tedi. Ol ham ačïġlïġ kiši erdi. Minnat 'aẓīm. Aq Ḥusayn Ḫʷārazm laškarïn tamām ittifāq qïlïp Aq Kölgä barïp Ḫān-i mazkūrnï ḫān kötärip Sarāy wilāyatï üstüngä yüridi. Sarāy üstündä uruš boldï. Bazarčï Begim qolġa tüšdi. Begimni bir qar küymägä mindürüp aġzïnï mażbūṭ qïldïlar. Taqï bir emläg ayġïr aṭnï yekip baš[88] salïġġa qoya berdilär. Bu emläg aṭ arabanï alïp qačïp yablarġa qačularġa urur erdi, tā Begim halāk boldï. Özbeglär, "Tay Duġlï Begimni Ḫiżr Ḫān öltürüp turur" terlär kayfīyatï bu turur.

Anï öltürüp Ḫiżr Ḫān ikinči nawbat ki ḫān boldï. Bir yïl yarïm pādšāhlïq qïlïp erdi. Burut atlïġ bir yaman oġlï bar erdi. Atasïnïng ḫānlïqïġa čïdamay ġāfillïqda sančïp öltürüp özi ḫān boldï. Iki üč kün kečmäy anï ham öltürdilär. Andïn song buzuqluq wāqi' boldï. Har kiši ṭarafġa baš kötärdi. Sarāy šahrï buzuldï. Elning köpi Qïrïm wilāyatigä Qïyat Mamay qašïġa ketdi. Bu söz munda tamām boldï, yenä keldik Qara Noġay ḥikāyatigä.

Qara Noġay Sïr boyïnda üč yïl pādšāhlïq qïldï. Turkistān wilāyatlarïnġa ḥukm qïlur erdi. Üč yïldïn song wafāt tapdï. Inisi Tuġlï Temür tegän (54b) ḫān boldï. Faḫr-i Salāṭīn Ḥażrat-i Dōst Sulṭāndaqï daftarda aytïp erdi, "Bu Tuġrï Temür uluġ pādšāh boldï. Samarqand[89] Buḫārāġa ḥukm qïlur erdi". Ammā muddat-i pādšāhlïqï ma'lūm ermäs.

Andïn song Badïq Oġlan oġlï Oros ḫān boldï. Bu Oros Ḫān uluġ pādšāh boldï. Tamāmī-yi Turkistān wilāyatlarïġa ḥukm qïlur erdi. Toḫtamïš Ḫān bilä Temür Qutlï Ḫānġa ol maḥallda ḫānlïq tegmäy dur erdi. Bu Ḫān-i mazkūrnïng ḫizmatïnda bolur erdilär. Čūn 'ināyat-i azalī birlä farr-i pādšāhī Toḫtamïš Oġlannïng ẕātïnda paydā erdi, Ḫānnïng newkärläri taqï özgä ḫalāyiqlarï iḫtiyār

[88] бәш
[89] Сәмәркандә

bu Oġlan-i mazkūrgä paydā[90] erdilär. Bu bašdïn Ḫān-i mazkūr yaman aylanïp Toḫtamïš Oġlanġa qaṣd qïlur boldï.

Basa, Ḫïṭay Baba 'Alī Bī tegän Ḥājī Tarḫānlï 'Abd al-Karīm Ḫānnïng uluġ begi wa nā'ib kišisi erdi. Ḫān-i mazkūr ölgändin song Makka ṭawāf qïlïp ḥājī bolup keldi. Andïn song Sulṭān Ġāzī Sulṭān ḫizmatlarïnġa keldi. Čūn Ḥażrat-i Sulṭān ki qarï sözgä bisyār mā'il erdilär, olar sordïlar ki "Toqtamïš Ḫānnï Oros [Ḫānnïng] ešikidin čïqġandur terlär. Ol nä ṭarīqa bolġandur" tep sordï ersä, Ḥājī-yi mazkūr ham bu ṭarīqa ḥikāyat qïldïlar. Faqīr olardïn ešitip turur men. Olar aydï, ol maḥallda Oros Ḫān Toḫtamïš Oġlanġa qaṣd qïlur boldï, andïn burunraq Kenägäs Quġan oġlï Darwišak Mïrzanï Čaġatay pādšāhlarïnġa (55a) elči yibärip erdi. Širin... yibärip erdi. Bular barïp ki ... nïng ordasï Sïr boyunġa inip erdi bu[91]... yaqalap Ḫān ordasïnġa kelür erdilär. Kün sowïq erdi. Sïrnïng ... kömäl turup erdi. Urïk Temür Mïrzadïn songïraq kelür erdi. Nāgāh Sïrnïng yaqasïnġa közi tüšdi. Qamïšnïng tübindä kördi, bir yalang terlik keygän yigit sudïn čïqïp yüz töbän tüšüp iki bükülüp qaltïray yatïp erdi. Könglidä aydï kim, "Munga ḫʷad bir iš tüškän kiši turur" tep, yortup Mïrzanïng songïdïn yetdi. Taqï aydï, "Mïrzam, 'ināyatïng bolsa. Ḫān yarlïqï birlä ḫizmatïng qïlïp kelip erdim. Esän amān el ičingä endingiz. Orda[ġa] yaqïn keldingiz. Ḫānġa körünüš qïlur kiši men emäs men. Meni emgätip eltip netkäy siz. Men mundïn oq ewimni istäsäm bolġay mu" tedi ersä, ol Mïrza ham ijāzat berdi. Qaytïp bayaqï yergä keldi. Aṭïn yïraġda baġlap özi yayaġ bolup keldi. Ol kišining qašïnġa keldi, kördi ki yüz töbän tüšüp qaltïray yatur erdi, ayaqïda yaman yarasï bar. Bu sordï ki, "Nä kiši sen". Aydï, "Nä sorar sen. Men bir emgäklig qul men" tedi. Bu aydï, "Men emgäklig ekäningni körä turur men. Atïng aytġïl". Aydï, "Men Toḫtamïš Oġlan men. Burun ham bolsa sezip yürür erdim. Saḥar waqtï erdi. Ḫānnïng kišiläri kelip ewimni bastïlar. Atqïlaša čïqdum, kördüm ki kiši köp dur. Daryā yaqïn erdi. Özümni daryāġa saldïm. Suġa tüškändä atdïlar. Bu yaramïz

[90] ма'іда
[91] 写本が破損しており、この単語の全体は見えないため、正確な読みは不明である。

ham (55b) ... tebränür čaqlï majālïm yoq ...tedi. Urïk Temür aydï, "Mening istä ...i erdi. Bašïm mālïng, sening yolïngda qoyayïn. ... [Ḫudā-yi] ta'ālā sanga dawlat bersä, meni unutmaġïl" tedi. Aydï, "Har qačan Ḫudā-yi ta'ālā dawlat bersä, seni dawlatimgä šarīk qïlïp sening sözingni wa oyungnï wa ötüningni özgä qïlmaġay men" tep, anṭ ičdi. Urïk Temür fī al-ḥāl enginindäki körpä tonïn čïqarïp mażbūṭ čulġadï taqï alïp yürigän azuqïndïn alnïnda qoydï. Taqï, "Meni "Kelmäs" tep könglüngni yaman qïlmaġïl. Men ki tirig dur men, al-batta sanga kelür men. Seni ušbu yerdin tapayïn" tep, aṭlandï. Taqï ewigä keldi. Taqï öz uruġlarïndïn bir nečä kišilär bilän ittifāq qïlïp aṭ wa yaraġ alïp keldilär. Taqï Oġlan-i mazkūrnï Temür Beg qašïnga alïp qačdïlar. Temür Beg ol maḥallda yangï ḫurūj qïlïp Buḫārā[92] wa Samarqandnï alïp erdi. Bular ki keldilär bisyār yaḫšï körä aldï. Jarrāḥlar keltürdilär, ayaqïndaqï bašaqnï aldurup köp türlüg dārūlar qïldurdï. Tā bir aydïn song yaḫšï boldï.

Ol qïš Beg ḫizmatïda boldïlar. Yaz ki ačïldï, Beg bir nečä kiši qošdï. Ḫān yaylaġġa čïqïp bara turġanda el songïdïn kelip yïlqï qowdïlar. Qowġïn yetip urušup bularnï basdïlar. Yenä Beg qašïġa qaytïp keldilär. Al-qiṣṣa Toḫtamïš Oġlan qazaqlap yürüp Ḫānnïng elidin yïlqï sürär erdilär wa el čapar erdi.

Wa Širin Barïn Arġun Qïpčaq Toḫtamïš Oġlannïng ata atalarïndïn[93] bayrï elläri erdi. Bu Oġlan-i mazkūr qazaqlap yürüp bu ṭarīqa (56a) išlär qïla bašladï. Bu ellärdin da'wālig yigitlär barïp anga newkär bolup madat berä bašladïlar. Wa Oros Ḫān ham bu ellärgä bisyār jafā qïla bašladïlar. Bular ham Toḫtamïš Oġlanġa kiši yibärdilär, "Sendin sabab Ḫān bizgä ġażab qïlïp mālïmïznï ala turur. Bašïmïznïng ham ḫaṭarï bar. Bir türlig bizning fikrimizni qïlmasang, sening yaqang bizning elimiz[dä] turur, qiyāmat kün bolsa" tedilär. Oġlan bu sözni ešitdi ersä, köngli farēšān bolup kelgän kišigä aydï, "Bu yïl yaylaġ[ġa] čïqar siz[94], elning songïnï ala köčüng. Fulān sunung boyïda yaylangïz, taqï

[92] Бухар
[93] ата-аналарындын

yaraġïngïznï qïlïp turungïz. Inšā'a Allāh, ölmäsäm, özümni yetkürgüm turur sizlärgä" tedi.

Yaz ki boldï, Ḫān yaylaġġa köčdi. Bu el taqï el songïdïn köčär erdilär. Yaylaġġa ki yetdilär, har el bir sunïng boyïnga ketdilär. Bu ellär boljal qïlġan sunïng boyïġa kelip yayladïlar. Ḫalāyïqlar qïmïz ičip 'ayš 'išratġa mašġūl erdilär. Bu asnāda Toḫtamïš Oġlan bu elning ičingä kirip keldi. Čūn boljal birlä yaraġlarïn qïlïp erdilär, har katḫudāy bir telägängä iki aṭ yekip oġul qïzlarïn mindürgäč qačdïlar 'Idil Daryāsï ṭarafïġa.

Iki kündin song Ḫānġa ḫabar keldi, Toqtaqmïš Oġlan kelip Širin Barïn Arġun Qïpčaq (56b) wa taqï sāyir ellärini alïp 'Idil Daryāsïġa yawušdï, tep. Ḫān qašïndaqï kišilär bilän fī al-ḥāl aṭlanġač ṭaraf jānibġa kiši čapdurup özi bu ellär songïn qowġïn saldï. Ḫānnïng elläri yaylaġġa tarqap erdi. Aṭnïng semirgän maḥāllï erdi. Ḫān qatïġ ïlġadï. Yïraqdaqï ellärning čerigi Ḫānġa yetüšä almadï. Yaqïndaqï ellär ham aṭlarï semizläp qaldï. Bularġa yaqïn yetkän maḥallda Ḫānnïng qašïnda kiši az qaldï, iki yüz kiši köp bolsa üč yüz kiši bolġay erdi. Kün uyaġïp bara turġanda bu qačqan elning qarawulï Ḫānnïng čangïnï körüp keldilär. Bular kengäš qïldïlar, "Olarnïng aṭlarïnïng boynï qatïp kelä turur. Az köp yetmäs har qačan yetsä, bizgä tegär. Biz ḫ^{w}ad ölüm kišisi turur biz. El wa 'ayālïmïz üstidä ölär biz. Bolmasa, toḫmïmïz qurumasun. Aṭġa barur teg oġlanlar bilä Jalāl al-Dīn Sulṭānnï taqï Yaḫšï Ḫ^{w}ājanï saylap čïqarïp iki yol bilür kiši olarġa ta'yīn qïlalï. Ün ešitilür čaqlï yerdä örkünning yanïnda alïp yürüsünlär. Agar yaġïnï biz bassaq, süränimizdin bilip bizning artïmïzdïn kelgäylär. Agar yaġï bizni bassa, süränidin ma'lūm bolġusï turur. Turmay qača körsünlär" tep, ittifāq qïldïlar. Jalāl (57a) al-Dīn Sulṭān bašlïġ Yaḫšï Ḫ^{w}ājanï, Urïk Temürning uluġ oġlï erdi, yenä bir nečä aṭġa barur teg oġlanlarnï saylap čïqardïlar. Jalāl al-Dīn Sulṭān ol maḥallda on iki yašïnda erdi. Yaḫšï Ḫwāja ham ol qadar erdilär.

[94] чыкарбіз

Bular bu kečä örkünning yanïnda ün ešitilür čaqlï yerdä barur erdilär. Tünnüng bir baḫšï ötkändä Ḫān bularnïng songïdïn qowïp yetdi. Köčlärin alnïġa salïp songïdïn yasap barur erdilär. Ḫān aydï, "Bu kiši bizdin köp turur. Nāgāh tang atïp bizning azlïqïmïznï körsä, yaman turur. Kečä birlä oq šawqun salïp tegäli. Azlï köplükimizni bilmäs qačar" tedi. Taqï sürän salïp tegdilär. Bir tolġašïp ki čïqdïlar, Urïk Temürning aṭï yïqïldï, faryād qïldï. Aytur, "Ey nā-mard Toḫtamïš. Sözimiz andaġ mu erdi. Qaytïp tolġansa, men qaldïm" ter erdi. Ol asnāda ol oġlanlar aṭlarïnïng bašïn tartïp bir yerdä turup qulaq salur erdilär. Yaḫšï Ḫʷāja atasïnïng ünin tanïdï taqï Jalāl al-Dīn Sulṭānġa aydï, "Kördüng mü. Ol mening atam turur. Anï tüšürdilär. Dam ba-dam sening atangnï ham tüšürürlär. Atalarïmïzdïn ayrulïp biz yaš oġlanlar nä kün körgäymiz. Biz ham birgä ölgänimiz yaḫšïraq dägül mu" tedi ersä, Allāhu ta'ālānïng nuṣratï birlä Jalāl al-Dīn Sulṭān taqï bu oġlanlar qolġa tafa kelip har birisi bir šēr-mard[95] yigit bigin sürän salïp bir yol[96] aṭ saldïlar. Ḫān kišiläri qorqup tizginlärini tartdïlar. Toḫtamïš Oġlan qayta salġač kelip ki tegdilär, kötärip alġač ketdilär. Ḫān kišisining aṭlarï(57b)nïng boynï qatïp kelip erdi, köp kišisini šundaq oq aldïlar. Walē songïnda qolï bar tep ḫawf qowa almadïlar. Tüškän kišini šol yerdä oqlaš qïldïlar, aṭ yaraġïn alïp örkinlärining songïnča yüriy bardïlar.

Ḫānnïng qolġa tüšmägän kišiläri awlaq čïqïp yïġïldïlar. Körärlär hēč yerdä Ḫān yoq. Bularnïng birisi aydï, "Men Ḫān qašïnda erdim. Ḫānnï iki kiši kelip tutġanïn kördüm. Andïn song nä bolġanïn bilmädim" tedi. Qaytïp uruš yeringä keldilär. Ḫānnïng ölügin tapdïlar. Fī al-ḥāl ḫānnïng mayyitïn alïp qayta ewlärigä qačdïlar. Olar ham songïmïzdïn Ḫān yetär tep ol yanġa qačtïlar. Oros Ḫānnïng ölgän[ning]# kayfiyatï bu erdi. Özbeglär ayturlar, "Jalāl al-Dīn Ḫān oġlan ekänindä bir böläk oġlanlarnï bašlap atasï birlä Oros Ḫān urušа turġanda kündäländin aṭ salïp Oros Ḫānnï basïp öltürdi" teyürlär. Jihatï bu turur.

---

[95] шірә-мәрд
[96] йола

Toḫtamïš Oġlan Oros Ḫānnïng ölgänin bilmäy qačïp Kokaday Yïsbuġa tegän yaḫšï otlaġlï sulaġlï yerlär bolur, ol yergä bardïlar. Ol asnāda Šïban Ḫān nabiralarïndïn Ilfäk [Ḫānnïng] oġlï Qan Bay öz elining ičindä ḫān bolup Kokadaynï yaylap erdi, anïng qašïġa keldi. Ol taqï bē-ḥurmatlik qïlïp anga (58a) Tang kalïda orun berdi. Bir nečä kün yürigändin song īnāqlarïndïn ayturdï, "Erklig kiši Ḫān öz atam aġam turur. Men olarnïng qïlïčïn čaparġa yupanman[97]. Qara kiši Mamay ḫalq ulusnïng tamāmïdïn alïp turur. Bizgä baš bola bersälär, anïng üstigä yürisäk. Tengri ta'ālā anï bizgä bersä ḫʷad 'aẓīmat uluġ ḫān bolur erdilär. Bizlär ham aṭlï tonlï bolur erdük" tedi. Qan Bay ham bu sözni išitip bašda aṭlanurnï oḫšatïp erdi. Songïġa qayta kengäš etip aṭlanurnï bar-ṭaraf qïldï. "Šïbannïng keri kengäš" tep bu sözdin laqab qaldï.

Čün Toḫtamïš Oġlan bay-i maẕkūrdïn nā-umēd boldï ersä, ijāzat tiläp ketär boldï. Ol maḥallda ki 'Arab Oġlan Ḥażrat-i Yādgār Ḫānnïng üčünči aqasï turur[98], Qan Bay bilän iki uya oġlanlarï erdilär, bisyār mun'im mālwār erdi, Toḫtamïš Oġlannï čarlap ewgä tüšürdi. Aṭlar qoylar köp öltürüp yaḫšï mihmāndārlïqlar qïlġandïn song aydï, "Ḥālā aġa bolup elimizgä baš bolup turġan kišimiz Qan Bay erdi. Bu bašlap aṭlanġay tep umēdwār erdük. Bu bad-baḫt keri bardï, aṭlanmadï. Bu čaqlï at atanïp turġanda munung yaġïsïnï buzup ketmäkni özümgä oḫšata almay men. Sen[99] ilgärü umēdlig yaḫšï kiši körüp turur men[100]. (58b) Tengri ta'ālā išingni ongdur qïlġay. Bu yolï mendin sanga himmat madat ol turur, yïlqïmnï sürüp alïnġa salayïn. Saġar biyälärim manga qalsa yetär. Aṭdïn baytaldïn har nä yolungġa yarar čaqlï bolsa, alïp ketgil" tep, yïlqïsïn keltürüp alnï[101]ġa saldï. Ayturlar, dönän bešlik aṭdïn wa baytaldïn bašġa altmïš tört ṭanalïġ aṭ tutdïlar.

---

[97] йубан мән
[98] ['Arab Ḫān, Ḥājīm Ḫān, Āġaṭāy Ḫān, Araš Ḫān, Yādgār Ḫān]#
[99] Сені
[100] көрнә турур сән
[101] анлығә

Andïn aṭlanïp 'Idil Daryāsïġa keldi. Sarāy šahrïnda ḫān sulṭān yoq erdi. Kelip Sarāynï aldï. Taqï ādīna masjidïnda ittifāq qïlïp ḫuṭba oqup ḫān boldï. Aṭlanïp Qïyat Maḥmay üstüngä yüridi. Mamay ham 'aẓīm laškar bilä qaršu keldi. Qatïġ uruš boldï. Mamaynïng laškarï basïldï. Özi ham qolġa tüšdi. Öltürdilär. El-günin köčürüp 'Idil Daryāsïnïng boyïnġa keltürdilär. Bu karrat Toḫtamïš Ḫān Sarāy šahrïnda Ṣayïn Ḫān taḫtïnda uluġ pādšāh boldï.

Jānī Beg Ḫāndïn qalġan newkär [ellär]ning köpi Mamayda erdi. Mamaynï öltürüp el-günin wa newkär sewdärin alïp Sarāy wilāyatïnġa ki keldi, Dašt wilāyatïndaqï har qayda (59a) sarkaš bolup baš kötärip yürgän kišilär čārasiz bolup özläri kelip muṭī' bolup newkär boldïlar. Qan Bay-i maẕkūr ham keldi. Anga "Özüng bergän ornung dur" tep, Tang Kalïda orun berdi. Ammā 'Arab Oġlanġa turup körüšdi. Ong qoldïn yürütip özingä yanaša olturtup yarïš sundurdï. Ol majlisda jatba yïrlar ayturlar.

"Sen Kokadayda ḫān boldïng Köp Durmang ayartdïng
Kökräčiking köpdürding Biz sanga köp tungqayïp baš urduq
Kötimizdän netä kelding Qan Bay"

tep, yïrlar erdi. Al-qiṣṣa köp türlig 'ināyatlar wa soyïrġallar 'Arab Oġlanġa qïlïp ḥukm qïldï kim "Šïban Ḫānġa ta'alluq el-gün barï sanga yïġïlsunlar. Wa har qayda ḫ^{w}ājasïdïn qačġan qul wa yasaġdïn qačġan el bolsa..."

Studia Culturae Islamicae No.94
イスラム文化研究第94集
MEIS Series No.10
中東イスラーム研究教育プロジェクトシリーズ第10集

『チンギズ・ナーマ(*Čingīz-nāma*)』
ウテミシュ・ハージー(Ötämiš Ḥājī)著
解題・訳註・転写・校訂テクスト
川口琢司・長峰博之編　菅原睦校閲
2008(平成20)年11月30日
発行　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 府中市朝日町3-11-1
Tel. 042-330-5600
印刷　藤原印刷株式会社

ISBN 978-4-86337-017-3

سن کوکادیدا خان بولدینک   کوب دورمانک ایارتدنک
کوکراجکنک کوبدوردنک   بز سنکا کوب تونک قایب بش اوردوق
کوتیمز دان نتا کلدنک قان بای

تیب یر لار ایردی القصه کوب تورلیک عنایت لار و سویرغال لار عرب اوغلانغه قلَیب حکم قلدی*[346] کم شیبان خانغه تعلق ایل کون باری سنکا یغلسونلار و هر قیدا خواجه سیدین قجغان قول و یساغدین قجغان ایل بولسه...

[346] حکم قلیب قلدی

اولار هم سونکی مز دین خان یتار تیب اول یانغه قجتی لار اوروس خان نک اولکان [نک]# کیفیتی بو ایردی اوزبک لار ایتورلار*[329] جلال الدین خان اوغلان ایکانینده بر بولاک اوغلانلار نی باشلاب آتا سی برلا اوروس خان اوروشا تورغانده کوندالاندین اط سلیب اوروس خان نی بسیب اولتوردی تیورلار جهتی بو ترور

تختمش اوغلان اوروس خان نک اولکانین بلمای قجیب کوکادای یسبوغا تکان یخشی اوتلاغلی سولاغلی یر لار بولور اول یر کا بردیلار اول اثناده شیبان خان نبیره لاریندین*[330] ایلفاک [خان نک]#*[331] اوغلی قان بای اوز ایلی نک ایجنده خان بولوب کوکداینی یایلاب ایردی انک قشیغه کلدی اول تقی بی حرمت لیک قلیب انکا (58a) تنک کالیده اورون بردی بر نجه کون یوریکاندین سونک ایناق لاریندین ایتوردی ارکلیک کشی خان اوز آتام آغام ترور من اولار نک قلجین جبار غه یوبان من قرا کشی ممای خلق اولوس نک تمامی[332] دین الیب ترور بز کا بش*[333] بولا برسالار انک اوستکا یوریساک تنکری تعالی انی بز کا برسا خود عظیمت اولوغ خان بولور ایردی لار بز لار هم اطلی تونلی بولور ایردوک تیدی قان بای هم بو سوز نی اشتیب بشدا اط لانور نی اوخشاتیب ایردی سونک یغه قیته کنکاش ایتب اط لانور نی بر طرف قلدی شیبان نک کری کنکاش تیب بو سوز دین لقب قالدی

جون تختمش اوغلان بای مذکور دین نا امید[334] بولدی ایرسا ایجازت تلاب کتار بولدی اول محلدا که عرب اوغلان حضرت یادکار خان نک اوجونجی آقا سی ترور[335] قان بای بلان ایکی اویا اوغلان لاری ایردیلار بسیار منعم مال وار ایردی تختمش اوغلان نی جرلاب او کا توشوردی اط لار قویلار کوب اولتوروب یخشی مهمان دار لیق لار قلغاندین سونک ایدی حالا آغا بولوب ایل میز کا*[336] بش بولوب تورغان کشیمز قان بای ایردی بو بشلاب اط لانغای تیب امید وار ایردوک بو بد

329 ایتولار
330 نبر لاریندین؛ نبره لاریندین [Юдин]
331 اوغلان نک
332 تمام
333 بیش
334 اومید
335 [عرب خان حاجی م خان آغ طای خان اراش خان یادکار خان]#
336 ایا میز کا

بخت کری بردی اط لانمادی بو جقلی آت آتانیب تورغانده*[337] مونونک یغیسی نی بوزوب کتماکنی اوزمکا اوخشاتا المای من سن[338] ایلکارو امید لیک یخشی کشی کوروب ترور من*[339] (58b) تنکری تعالی ایشکنی اونکدور قلغای*[340] بو یولی من دین سنکا همت مدت اولتورور یلقمنی سوروب النغه سلاین سغار بیا لاریم منکا قالسا یتار اط دین[341] بیتلدین هر نه یولنک غه یرار جقلی بولسا الیب کتکل تیب یلقی سین کلتوروب النیغه[342] سلدی ایتورلار دونان بش لیک اط دین و بیتالدین باشغا التمش تورت طانا لیغ اط توتدیلار

اندین اط لانیب عدیل دریا سیغه کلدی سرای شهرینده خان سلطان یوق ایردی کلیب سراینی الدی تقی آدینه مسجدینده اتفاق قلیب خطبه اوقوب خان بولدی اط لانیب قیات ممای اوستونکا یوریدی ممای هم عظیم لشکر بیلا قرشو کلدی قتیغ اوروش بولدی ممای نک لشکری بسلدی اوزی هم قولغه توشدی اولتوردیلار ایل کونین کوجوروب عدیل دریا سی نک بوینغه کلتوردیلار بو کرت تختمش خان سرای شهرنده صاین خان تختنده اولوغ پادشاه بولدی

جانی بک خان دین قالغان نوکر [ایللار]# نک کوبی مامایده ایردی ماماینی اولتوروب ایل کونین*[343] و نوکار سودارین الیب سرای ولایتنغه که کلدی دشت ولایتنده قی هر قیدا (59a) سرکش بولوب بش کوتاریب یورکان کشی لار جاره سز*[344] بولوب اوزلاری کلیب مطیع بولوب نوکار بولدیلار قان بای مذکور هم کلدی انکا اوزونک برکان اورنونک دور تیب تانک کالیده اورون بردی اما عرب اوغلانغه توروب کوروشدی اونک قولدین یوروتیب اوزینکا یاناشا اولتورتوب*[345] یارش سوندوردی اول مجلسده جاتبا یرلار ایتورلار

337 تورغاندین
338 سنی
339 کورونا ترور سن
340 اونکدور بولغای
341 اط ین
342 انلیغه
343 کوندین
344 جار سز
345 اولتوروب

قلیب ترونکز انشاء الله اولماسام اوزومنی یتکورکوم ترور سز لار کا تیدی

یاز که بولدی خان یایلاغغه کوجدی بو ایل تقی ایل سونکی دین کوجار ایردیلار یایلاغغا که یتدیلار هر ایل بر سو نک بوینغه کتدیلار بو ایل لار بولجال قلغان سو نک بویغه کلیب یایلادیلار[321] خلایق لار قمز ایجب عیش عشرتغه مشغول ایردیلار بو اثناده توختمش اوغلان بو ایل نک ایجنکا کریب کلدی جون بولجال برلا یراغلارین قلیب ایردیلار هر کتخدای بر تلاکان کا ایکی اط یکیب اوغول قیز لارین مندورکاج قجدیلار عیدیل دریا سی طرفیغه

ایکی کوندین سونک خان غه خبر کلدی توقتمش اوغلان کلیب شرین بارین ارغون قبجاق (56b) و تقی سایر ایل لارینی الیب عیدیل دریا سی غه یوشدی تیب خان [قاشن]داقی کشی لار بلان فی الحال اطلانغاج طرف[322] جانب غه کشی جابدوروب اوزی بو ایل لار سونکین قوغین سلدی خان نک ایل لاری یایلاغ غه ترقاب ایردی اط نک سمرکان[323] محالی ایردی خان قتغ ایلغادی یراق داقی ایل لار نک جریکی خانغه یتوشا المادی یقین داقی ایل لار هم اط لاری سمزلاب قالدی بولار غه یقین یتکان محلدا خان نک قشندا کشی آز قالدی ایکی یوز کشی کوب بولسا اوج یوز کشی بولغای ایردی کون اویاغیب برا تورغانده بو قجقان ایل نک قراولی خان نک جانکنی کوروب کلدیلار بولار کنکاش قلدیلار اولار نک اط لاری نک بوینی قتب کلا ترور آز کوب یتماس هر قجان یتسا بز کا تکار بز خود اولوم کشی سی ترور بز ایل و عیالیمز اوستیده اولار بز بولماسا توخمیمز قوروماسون اط غه برور تک اوغلان لار بیلا جلال الدین سلطان نی تقی یخشی خواجه نی سیلاب جقاریب ایکی یول بیلور کشی اولار غه تعین قیلالی اون ایشتلور جقلی یر ده اورکون نک یانینده الیب یوروسون لار اکر یغینی*[324] بز بسساق سورانمز دین بلیب بز نک آرتمز دین کلکای لار اکر یغی بز نی بسا سورانیدین معلوم بولغو سی ترور تورمای قجا کورسون لار تیب اتفاق قلدیلار جلال (57a) الدین سلطان بشلیغ یخشی خواجه نی اورک تمور نک اولوغ اوغلی ایردی ینه بر نجه اط غه برور تک

---

[321] یایلادیلاری
[322] طراف
[323] سمررکان
[324] یغیغنی

اوغلان لار نی سیلاب جیقاردیلار جلال الدین سلطان اول محلده اون ایکی یاشنده ایردی یخشی خواجه هم اول قدر ایردیلار

بولار بو کجه اورکون نک یانینده اون ایشتلور[325] جاقلی یر ده برور ایردیلار تونونک بر بخشی اوتکانده خان بولار نک سونکی دین قویب یتدی کوجلارین آلنیغه سلیب سونکی دین یساب برور ایردی لار خان ایدی بو کشی بز دین کوب ترور ناکاه تنک اتیب بز نک آزلقیمز نی کورسا یمان ترور کجه برلا اوق شوقون سلیب تکالی آزلی کوبلوکمز نی بلماس قجار تیدی تقی سوران سلیب تکدیلار بر تولغاشیب که جیقدیلار اورک تمور نک اطی یقلدی فریاد قیلدی ایتور ای نا مرد توختمش سوزیمز انداغ مو ایردی قیتب تولغانسا من قالدیم تیر ایردی اول اثناده اول اوغلانلار اط لاری نک بشین ترتیب بر یر ده توروب قولاق سلور ایردیلار یخشی خواجه اتا سی نک اونین تنیدی تقی جلال الدین سلطانغه ایدی کوردنک مو اول منک اتام ترور انی تشوردیلار دمبدم سنک آتا نک نی هم توشورورلار آتا لاریمز دین ایرولیب بز یاش اوغلان لار نه کون کورکایمز بز هم برکا اولکانمز یخشی راق دکل مو تیدی ایرسا الله تعالی نک نصرتی برلا جلال الدین سلطان تقی بو اوغلانلار قولغه تفا کلیب هر بر سی بر شر[326] مرد یکیت بکین سوران سلیب بر یول[327] اط سلدیلار خان کشی لاری قورقوب تیزکین لاری نی[328] ترتدیلار تختمش اوغلان قیتا سلغاج کلیب که تکدیلار کوتاریب الغاج کتدیلار خان کشی سی نک اط لاری (57b) نک بوینی قتیب کلیب ایردی کوب کشی سی نی شونداق اوق الدیلار ولی سونکین دا قولی بار تیب خوف قوا المادیلار توشکان کشی نی شول یر ده اوقلاش قلدیلار اط یراغین الیب اورکین لاری نک سونکین جه یوری بردیلار

خان نک قولغه توشماکان کشی لاری اولاق جقیب یغلدیلار کورار لار هیج یر ده خان یوق بولار نک بر سی ایدی من خان قشینده ایردیم خان نی ایکی کشی کلیب توتغانین کوردوم اندین سونک نه بولغانین بلمادیم تیدی قیتب اوروش یرینکا کلدیلار خان نک اولوکین تبدیلار فی الحال خان نک میتین الیب قیته او لاریکا قجدیلار

---

[325] ایشتور
[326] شره
[327] یولا
[328] تیزکین لاری ن

كلدى اندين سونک سلطان غازى سلطان خذمت لارينغه كلدى جون حضرت سلطان كه قرى سوز كا بسيار مايل*[309] ايرديلار اولار سوردى لار كه توقتمش خان نى اوروس [خان نک] ايشكيدين جقغاندور تيرلار اول نه طريقه بولغاندور تيب سوردى ايرسا حاجى مذكور هم بو طريقه حكايت قلديلار فقير اولار دين ايشتب تورور من اولار ايدى اول محلده اوروس خان تختمش اوغلان غه قصد قلور بولدى اندين بورونراق كنه كاس قوغان اوغلى دروشک مرزا نى جغاتاى پادشاه لارينغه (55a) ايلجى يباريب ايردى شرين... يباريب ايردى بولار باريب كه... نک اوردا سى سر بويونغه اينب ايردى بو... يقلاب خان اوردا سنغه كلور ايرديلار كون سويق ايردى سر نک... كومال توروب ايردى اورک تمور مرزا دين[310] سونكى راق كلور ايردى ناكاه سر نک يقا سنغه كوزى توشدى قميش نک توبينده كوردى بر يلانک ترليک كيكان يكت سو دين جقيب يوز توبان توشوب ايكى بوكولوب قالتراى يتب ايردى كونكلى ده ايدى كم مونكا خود بر ايش توشكان كشى ترور تيب يورتوب مرزا نک سونكى دين يتدى تقى ايدى مرزام عنايتينک بولسا خان ير ليقى برلا خذمتنک قليب كليب ايرديم اسان امان ايل ايجنكا ايندينكز اوردا [غه]* يقين كلدينكز خانغه كورنوش قلور كشى من ايماس من منى ايمكاتيب ايلتب نيتكاى سز من موندين اوق اويمنى ايستاسام*[311] بولغايمو تيدى ايرسا اول مرزا هم ايجازت بردى قيتب بياقى ير كا كلدى اطين يراغدا باغلاب اوزى يياغ بولوب كلدى اول كشى نک قشينغه كلدى كورديكه يوز توبان توشوب قلتراى يتور ايردى اياقيدا يمان يرا سى بار بو سوردى كه نه كشى سن ايدى نه سورار سن من بر امكاک ليك قل من تيدى بو ايدى من امكاک ليک ايكانک نى[312] كورا ترور من آتنک ايتغل ايدى من تختمش اوغلان من بورون هم بولسا سزب يورور ايرديم سحر وقتى ايردى خان نک كشى لارى كليب اويمنى بستى لار آتقى لاشا جقدوم كوردوم كه كشى كوب دور دريا يقين ايردى اوزومنى دريا غه سلديم سو غا توشكانده اتديلار*[313] بو يارامز[314] هم (55b) ...تبرانور جقلى مجاليم يوق ...تيدى اورک تمور ايدى منک استا ...ى ايردى بشم مالنک سنک يولينك ده قويابن ... [خدا]ى تعالى سنكا دولت برسا منى

---

309 قابل
310 اورک تمور يا دين
311 استام
312 انكانک نى
313 اتيديلار
314 يارماز

اونوتماغيل تيدى ايدى هر قجان خداى تعالى دولت برسا سنى دولتيمكا شريک قليب سنک سوزنكنى و اوينكنى و اوتونكنى اوزكا قلماغايمن تيب انط ايجدى اورک تمور فى الحال انكنندا كى كوربه طونين جقاريب مضبوط جولغادى تقى اليب يوريكان ازوقيندين آلننده قويدى تقى منى كلماس تيب كونكلونكنى يمان قلماغيل من كه تريک دور من البته سنكا كلور من سنى اوشبو ير دين تباين تيب اطلاندى تقى اويكا كلدى تقى اوز اوروغلاريندين بر نجه كشى لار بلان اتفاق قليب اط و يراغ اليب كلديلار تقى اوغلان مذكور نى تمور بک قاشينغه اليب قجديلار تمور بک اول محلده ينكى خروج قليب بخارا و سمرقند نى[315] اليب ايردى بولار كه كلديلار بسيار يخشى كوره الدى جراحلار كلتوردى لار اياقنده قى بشاقنى الدوروب كوب تورلوک دارو لار قلدوردى تا بر آيدين سونک يخشى بولدى

اول قيش بيک خذمتيده[316] بولديلار ياز كه اجيلدى بيک بر نجه كشى قوشدى خان يايلاغ غه جقيب برا تورغانده ايل سونكى دين كليب يلقى قوديلار قوغين يتيب اورشوب بولار نى بسديلار ينه بيک قشيغه قيتب كلديلار القصه توختمش اوغلان قزاقلاب يوروب خان نک ايلى دين يلقى سورار ايرديلار و ايل جبار*[317] ايردى

و شرين بارين ارغون قبجاق تختمش اوغلان نک آتا آتا لاريندين[318] بايرى ايل لارى ايردى بو اوغلان مذكور قزاق لاب يوروب بو طريقه (56a) ايشلار قلا بشلادى بو ايل لار دين دعوى ليک يكيت لار باريب انكا نوكار بولوب مدت برا بشلاديلار و اروس خان هم بو ايل لار كا بسيار جفا قلا بشلاديلار بولار هم توختمش اوغلانغه كشى يبارديلار سندين سبب خان بزكا غضب قليب ماليمز نى[319] الا ترور بشمز نک هم خطرى بار بر تورليک بز نک فكرمز نى قلماسانک سنک يقانک بز نک اليمز [ده] ترور قيامة كون بولسا تيديلار اوغلان بو سوز نى اشتدى ايرسا كونكلى فريشان بولوب كلكان كشى كا ايدى بو يل يايلاغ [غه]* جقار سز*[320] ايل نک سونكنى الا كوجونک فلان سونک بويدا يايلانكز تقى يراغنكز نى

---

315 بُخَارُ و شمرقند نى
316 خزمتيده
317 جيار
318 آتا انا لاريندين
319 مالينمز نى
320 بز

بورونقى يخشى لار يساغان عمارتنى بوزماسون تيدى انک سوزينكا كيرماين بوزوب اولاشتوردى بكم تقى انكا آجيغ قليب بيک لارى نک*[297] ايجكيسى نى يغيب خان نى قوالادى خان قيتيب ينه آق كولكا كلدى

بيكم مذكور بير كشى نى كلدى بک دور تيب خان كوتاردى اوزبيک لار*[298] انكا يلغان كلدى بک تيرلار برجه خلايق لار ايديلار كلدى بكنى بردى بک*[299] اولتوروب ايردى اول نجوک تيريلدى تيب

ايل انكا بويون سونماديلار ايرسا بواول نسلى دين بولور ايردى بازرجى آتليغ انى خان كوتارديلار اول محلده اولوغ بيک لار دين سيجود على بک بار ايردى بو بازرجى غه بويون سونمان[300] تيب انى جرلاتيب*[301] كلتوروب اولتوردى على بک نک بر حسن آتليغ اوغلى بار ايردى اول قجيب قونكرات ناغاداى اوغلى آق حسين كه خوارزم[302] ولايتى نک حاكمى ايردى بو حسن انكا يكن بولور ايردى انک قاشيغه كلدى ايرسا بكم نک بو ناشائسته حركات لاريدين هراسان بولوب بيكم دين اوراى كردان بولديلار

بو اثناده[303] آق حسين خضر خانغه ايلجى يباردى ايدى اول ضعيفه شيطان يوليغه كيريب مونونک تک حركاتلار قيلا ترور بز خود (54a) اندين اوراى كردان بولدوق سز اكر بش بولوب همت توتسانكز اوستونكا يورور بز تيدى اول هم آجيغ ليغ كشى ايردى منت عظيم آق حسين خوارزم[304] لشكرين تمام اتفاق قليب آق كولكا باريب خان مذكور نى خان كوتاريب سراى ولايتى اوستونكا يوريدى سراى اوستوندا*[305] اوروش بولدى بازرجى بيكم قولغه توشدى بيكم نى بر قار كويمه كا مندوروب اغزينى مضبوط قلديلار تقى بر املك ايغر اطنى يكيب بش ساليغغه قويا

297 بيک لارنى نک
298 اوزكا بيک لار
299 بردى ر بک
300 سونماى ز؛ سونماز [Юдин]
301 جرلاب تيب
302 خورازم
303 آثناده
304 خورازم
305 اوستوند

برديلار بو املك اط اربا نى اليب قجيب يابلار غه قاجولار غه اورور ايردى تا بيكم هلاک بولدى اوزبک لار تاى دوغلى بيكم نى خضر خان اولتوروب ترور تيرلار كيفيتى بو تورور

انى اولتوروب خضر خان ايكنجى نوبت كه خان بولدى بر يل ياريم پادشاه ليق قليب ايردى بوروت آتلغ بر يمان اوغلى بار ايردى آتا سى نک خان ليقى غه جداماى غافل ليقدا سنجيب اولتورب اوزى خان بولدى ايكى اوچ كون كجماى انى هم اولتورديلار اندين سونک بوزوقلوق واقع بولدى هر كشى طرفغه باش كوتاردى سراى شهرى بوزولدى ايل نک كوبى قريم ولايتى كا قيات مماى قاشيغه كتدى بو سوز مونده تمام بولدى ينه كلديک قرا نوغاى حكايتى كا

قرا نوغاى سر بوينده اوچ يل پادشاه ليق قلدى تركستان ولايت لارنغه حكم قلور ايردى اوچ يل دين سونک وفات تبدى اينسى توغلى تمور تيكان (54b) خان بولدى فخر سلاطين حضرت دوست سلطان داقى دفتر ده ايتيب ايردى بو توغلى تمور اولوغ پادشاه بولدى سمرقند[306] بخارا غه حكم قلور ايردى اما مدّت پادشاه ليقى معلوم ايرماس

اندين سونک باديق اوغلان اوغلى اوروس خان بولدى بو اوروس خان اولوغ پادشاه بولدى تمامى تركستان ولايت لاريغه حكم قيلور ايردى تختمش خان بلا تمور قتلى خان غه اول محلده خانليق تكمايدور ايردى بو خان مذكور نک خذمتنده بولور ايردى لار جون عنايت ازلى برلا فر پادشاهى تختمش اوغلان نک ذاتينده پيدا ايردى خان نک نوكار لارى تقى اوزكا خلايق لارى اختيار بو اوغلان مذكور كا پيدا[307] ايرديلار بو بش دين خان مذكور يمان*[308] ايلنيب تختمش اوغلان غه قصد قلور بولدى

بسه خطاى بابا على بى تيكان حاجى ترخانلى عبد الكريم خان نک اولوغ بكى و نائب كشى سى ايردى خان مذكور اولكاندين سونک مكه طواف قليب حاجى بولوب

306 سمرقنده
307 مائدا
308 تيمان

ایردی بو کون هیج کشی کا سوز اون قتمای بی اتفاق برور ایردی اولاری نک یارو یولیغه یتدیلار ایرسا قرانکغو[283] بولدی فی الحال جلاولاب اط دین یقیب مضبوط باغلادیلار نوغای مذکور ایدی منم[284] کناهم نا ترور مونداغ قلا ترور سز خواجه احمد ایدی سندین بو سوز سورار بز اکر راستین ایتسانک بز نک [برلا]* (52b) اتفاق قلسانک سنی خان *[285] کوترالی تقی عحد وفا و شرط قلالی سنک نوکار جی لکنک دین بویون تولغاماغای بز اکر راستین ایتماسانک تحقیق بیل کل که سنی بو یر ده اولتورا بز[286] ایدی نا سورا سز[287] سورونک خواجه احمد ایدی راستین ایتغل اول کلکان کشی نا ایتدی و تقی سنی جرلاب بیک نا ایتدی ایدی اول کلکان کشی نه ایتغانین بلمان منی جرلاب هیج سوز ایتمادی تیدی ایرسا خواجه احمد مذکور ایدی ای بد بخت سن ایتماسانک من ایتاین اول کشی که کلدی خان نک اولکانین ایتا کلدی تقی سنی جرلاب الغانی*[288] اول ایردی کم سنکا ایدی کم سنی خان کوترالی ولی راضی بولغل کم قریندااش لارنک نی*[289] اولتورالی اکر اولتوروماسانک اولار سندین اولوغ ترور سنک خان لقنک غه بویون سونماس دور تیدی هم اول ایشکا راضی بولدونک ایمدی انداغ قلماغیل بو کشی دین نا خور لوق لار کورمادوک ایردی سن بز نک ایجی مز ده خان بولوب بز کا بش بولسانک انی اولتوروب آندین آجیغمز نی الماق آسان ترور منک بو سوزومنی قبول قل غیل تیدی سنی خان کوترالی کوتاریب سنکا نوکار بولور غه نا جقلی عهد و شرط تسانک ایجالی بز نک اولاریمز کا سبب بولوب قیامة غه تکرو یمان آتنی بتنکا*[290] الما تیدی ایرسا اول تقی ایدی انداغ بولسا قولوم اباقیمنی بوشاتنکز سز کا راستین ایتاین تیدی قول اباقین بوشاتدیلار ایرسا قوبوب اولتوروب خواجه احمد مذکور کا کوب تحسین لار قلدی ایدی بو سوز لار فراست برلا ایدینک هیج خلافی یوق ترور و بارجا سی راست ایردی ایمدی سز منی خان لاتور*[291] غه یخشی عهد وشرط قلسانکز مصلحت نکز دین جقماین تیدی بولار (53a) تقی عهد و شرط قلدیلار نوغای ایدی تانکلا که

---

[283] قرانکقو
[284] منک [Юдин]
[285] خان مذکور
[286] اولتور بز
[287] سورار سز [Юдин]
[288] ایغانی
[289] قرایندااش لارنک نی
[290] بشنکا
[291] خان لانور

کورنوش کا برور بز اول منی جرلاب الماق ترور اندین سونک سز لار نی جرلاتور سز لار او کا کیرکاج قتنداقی کشی لار [برلا]# بولونک من اوزی برلا بولاین تیدی

تانکلا سی کورنوش کا که بردیلار اول ایتغانجه نوغای نی جرلاب الدیلار بر زماندین سونک بولار نی جرلای*[292] کشی کلدی بولار هم یراغ لانیب کلیب ایدیلار بارجا سی کونکلی یوروب ایشکدین کیرکاج قول تبراتدیلار نوغای تنکز بوغا بیلا تور ده یاناشا اولتوروب ایردی فی الحال بسا الغاج بشین کسدیلار بویدا برلا سنجیب تاشغارو الیب جیقدیلار تقی جرلاتدیلار اوزکا کشی کا اولوم یوق ترور یر لیک یرنکز دین تبرانمانکز تیو خلق یر لیک یریده قرار تبغاندین سونک نوغای نی آق کیز کا سلیب بارجا اتفاق برلا خان قلدیلار

بسه مانکغتای اوغلی خضر خان برلا قرا نوغای ایکی سی بر آی ایجنده خان بولدیلار ولی خضر خان سرای ایجنده تختنده خان بولدی قرا نوغای سر بویونده سول ایجنده خان بولدی ایمدی کلدیک خضر خان حکایتی کا

اول محلده که تای دوغلی بیکم خضر خان نی جرلاب ایلتب سرای تختنده که خان قلدی اوز بک خان برلا جانی بک خاندین قالغان التون ترمه نی اورکا سلدی ایتورلار *[293] بیکم ساجینی قرا غا بویادی خانغه تیکارکا میل قلدی خان نک هم الور غه میلی بار ایردی ولی نیمان دین*[294] قوتلوغ بوغا آتلیغ بکی بار ایردی اول راضی بولمادی ایدی اول اوز بک کا جانی بک کا اختیار بولا کلکان کشی ترور سن بر توری اوسکان کشی ترور سن سندین سین تبار الماغیل انک سوزیکا کیریب المادی جون بیکم الماسون تویدی ایرسا بورونقی (53b) دین عزت و حرمة نی کم [قلا]* بشلادی خان هم انکا اوجاشب التون تیرمه نی بوزوب قزاق لارینغه اولاشدورور *[295] بولدی ایرسا اشتب خانغه بیکم کشی بیاردی ایدی [انداغ]# قلماسون لار خان بولغان کشی کا التون کموش تابولماس یر دکولدور[296] اما

---

[292] جرلادی
[293] ایتورلا
[294] نیما دین
[295] اولاشدور
[296] یرده کولدور [Юдин]

القصه جون بردی بک خان نک پادشاه لیقی دین اوج یل کجتی تورتنجی یل کوز نونك (51b) باشینده*[268] خان خسته بولدی خان نک زحمتی اوزاق جکدی قیش توشدی تنکز بوغا مذکور نک قیش لاقی دایم سر بویدا بولور ایردی

بسه بو حکایت لار بو سوز لار که ایمدی ذکر قلغوم ترور[269] حضرت خان مغفور[270] و مرحوم طیب[271] الله ثراه و جعل الجنة مثواه حضرت ایل بارس خان دین اشتب ترور من اولار قری سوزینی یخشی بیلور ایردی

بردی بک خان نک پادشاه لیقی دین اوج یل اوتدی تورتنجی یل قیش کوز*[272] باشندین خان خسته بولوب ایردی تنکز بوغا سر بوین[273] قیش لاب ایردی خان نک خسته لیق خبری متصل کلور ایردی کون صباح وقتی ایردی بو اوغلان لار بیک ایشکدا قورلاب ایردیلار تنکز بوغا اول کون سحر وقتیدین قوبوب صحبت توتوب ایردی سازنده لاری بیاء قوبساب یراو لاری یرلار ایردیلار و غوغا و نشاط لاری بار ایردی صباحی کون لاری سویق ایردی بر کورانک اط مینکان بوری ترسی توننی جورا کیکان اطی طونی بوغا غوتغان کشی اورده غه یقین کلیب توشدی تقی اطین کویمه ارابه سینغه باغلادی اوق صداقینی ارابه اوستیکا قویوب اوردا غه ایندی قوبسای تورغان سازنده لاری یرلای تورغان یراو لار بارجا سی بس بولدی مدّت مدید[274] بو ایل [که] مجلسدا دور جیقمادی اندین سونک ینه سازنده لار قوبسای باشلادیلار و صحبت در کرد بولدی بو تشغاری غی اوغلان لار بو حالتنی ملاحضه قلیب فکر قلورلار ایردی کم ایا بو کلکان کشی نه کشی بولغای ایکان بو ایل مجلسدا بو طریقه متحیر بولدیلار تیو[275]

بسه بو اوغلان لار اراسنده ایکی کشی بار ایردی بری سی عاقل و دانا ایردی

268 باشیند
269 قلوم ترور
270 مغفورم
271 طاب
272 کویز
273 بوینن
274 مدّ مریدوم؛ مدّ مدید [Юдин]
275 تیورلار [Юдин]

انک آتین بوکری خواجه احمد تیرلار ایردی بعضی لار ایتورلار ساغشی ارتوق سایجی اوغلان (52a) تیرلار ایردی ینه برسی آلب اتغوجی بهادر ایردی انداغ کم اول زمانده همغا سی یوق ایردی انک آتین قرا نوغای تیرلار ایردی سونکقی ده صحبت در کرد[276] بولدی آز فرصت دین سونک قرا نوغای غه*[277] اونداکجی کلدی کم بک سز نی جرلای در تیب بو قوبوب بک قاشیغه ایندی برآز فرصت ینه خاموش بولدیلار اندین سونک ینه صحبت در کرد بولدی

بوکری خواجه احمد مذکور بو اوغلان لار غه ایدی کم کوردینکز مو بردی بک خان اولوب ترور اول کلکان کشی خان نک اولکان خبرین کلتوردی بولار نک بر آش بشیم خاموش بولوب متحیر بولغانی اول سببدین ایردی قرا نوغای نی جرلاب الغانی اول تورور انی خان کوترورلار تقی تنکلاقی کورنوشده بارجا مز نی قرارلار بز نک ایشیمز موشکل[278] بولدی بو کون اخشام برلا بر ایش قیلا الساق الدوق قلا الماساق تنکلا برجا اولوم کا برغو ترور بز جون بولار دایم سیناب ایردی لار مونونک کنکاشی اوزکا بولماس ایردی بارجا سی ایدیلار سز هم نه تورلیک مسلحت کورسانکز انداغ قلالی تیدیلار خواجه احمد مذکور ایدیلار مصلحت اول تورور نوغای موندین کج اط لانور اوی نک[279] یاری یولیغه یتکانده توتوب اط دین یقیب مضبوط باغلاب بجاق نی بوغزینغه قویوب بو خبر نی سورالی اکر راستین ایتب بز نک برلا اتفاق قلور بولسا بز هم انی خان کوترالی و اکر راستین ایتماسا انداغوق اولتورالی تکمامز بر یانغه قجالی تیدی ایرسا*[280] برجا سی بو سوز نی معقول کوروب عهد و شرط قلدیلار*[281]

جون نماز شام یقین بولدی ایرسا نوغای بک مجلسنده قیتب اط لاندی بو اوغلان لار هم برکا اط لاندیلار کوردیلار کم کونداکی تک جهر[282] سی طوری طریقه سی اوزکا جه بولوب ایردی کوندا کورنوشدین قیتب او کا برغونجه اوینای کولا برور

276 دوکرد
277 قرا نوغای یغه
278 موشکیل
279 اویی نک
280 تید ایرسا
281 قلدیلا
282 جهره [Юдин]

کنکاشنی اول برور ایتور ایردی سن حالا یکت ترور*[247] سن بو محلداقی توغغان اوغلنک تنک اوسار سن کوندین کونکا قریر سن اول یکت بولور تانکلا سن. قریغاندین سونک خان لغینک نی تالاشب الغای حالا بولار نی اولتورا تورغیل قجان قری بشلاسانک اندین سونک قویغای سن تیر ایدی اول بی دولت هم مونونک سوزیکا کیریب اولتورور*[248] ایردی بوسببدین[249] انکا کرکین کوتان خان تیرلار

انک زمانینده تفریقه لیق بسیار بولدی اونک قولنی قیات مامای الیب ایل کون برلا قریم غه کتدی سول قولنی (50b) قیات جر قوتلی اوغلی تنکز بوغا سر دریا سی بوینغه الیب کتدی خان اوز ایجکی[250] [لاری]* برلا سرایده بولدی اوج یل سرای شهریندا پادشاه بولدی اندین سونک وفات بولدی

تای توغلی بکیم که مشهور*[251] ترور اوز بک خان نک ضعیفه سی جانی بک خان*[252] نک انا سی ایردی اول محلدا اول*[253] حیات [ته] ایردی صاین خان نسلی دین هیج کشی قالمادی بکم مذکور ایدی کم ایمدی خانلیق بلا یوریت شیبان خان نسلی غه تکار تیدی اول محلده شیبان خان نسلی دین مانکغتای*[254] اوغلی خضر اوغلان تیرلار ایردی صاین خان سلغاغان مانکغتای نک یورتی*[255] آق کول تیکانده بولور ایردی اوزکا اوغلانلاریندین*[256] ایریلب یورتنده بولماقی نك جهتی یوقاری ده ذکر قلیب ترور بز القصه بکم مذکور خضر اوغلان نی*[257] اونداتیب التیب صاین خان تختنده سرای ولایتنده خان قلدی بو سوز موندا موقوف بولسون بز کلدوک قیات جر قوتلی اوغلی تنکز بوغا نک ایشکنداکی اوغلان لار نک حکایت لاریغه و تنکز بوغا نی اولتوروب قرا نوغای خان بولغان حکایت لاری غه

247 ترو
248 اولتور
249 سبدین
250 ایجکتی
251 مشهو
252 خانی
253 محلد اول
254 مانکقای
255 یورتی مانکغتای نک
256 اوغلاریندین
257 خضر اوغلانلاری نی

اول محلده که اوز بک خان علیه الرحمة غضب قلیب یوجی خان نک اوزکا ضعیفه سیندین بولغان اون یتی اوغول نک نبیره لارین[258] ایل کون لاری بلان قیات استایغه که قوشون بردی استای مذکور اولکاندین سونک اوغلی تنکز (51a) بوغا غه قالدی بو تنکز بوغا بسی بی ادب ظالم*[259] کشی ایردی بو اوغلان لاری که انک پادشاه لیغی نسلین دین ایردی بولار غا بسیار جفا لار و بی ادب لیک قلورلار ایردی نتاک که اتا سی جر قوتلی اوستنکا عمارت سلور بولدی اوستاد قالسون تیب اوزکا کشی نی ارالاشدورمای عمارت نک تمام ایشین بولار غه بویوردی حتی که سو تاشیغان کربیج قویغان و کربیج تاشیغان بولار ایردی کاهی سنک ارقا سی یغر بولوب ایردی کاهی سنک توشی یغر بولوب ایردی کاهی سنک ایاقی توغرولوب جفا لار یتشب ایردی تیرلار و الله اعلم

و تقی هر صباح کلیب بو اوغلان لار ایشکده قورلار ایردی هر کاه که صحبت توتسالار اوز قولیغه که ایاق کلور ایردی سازنده لار اوتاک کویین*[260] قوبسالار ایردی همین که اوردا ایجنده که اوتاک کویین*[261] قوبسای بشلاسا بلور ایردی [262] که بک قولیغه ایاق کلدی بو اوغلان لار بوروک لارین سلیب یوکونوب ترورلار ایردی اول زمان غه تکرو که[263] ایاق نی ایجکای تقی اوتاک قوبساماق بس بولغای اندین سونک بوروکلارین کیار ایردی

ایتورلار*[264] بر محلده قیش جله سی ایردی بو بد بخت صحبت توتوب ایردی ناکاه اوتاک اوازی کلدی بو اوغلانلار کونداکی دستور جا بوروکلارین سلیب یوکوندیلار کون سویق ایردی حسین*[265] اوغلان تیکان تمور*[266] قوتلوق خان اورس خان اتا لاری نک قریندااش لاری ندین*[267] بولور ایردی قولاقی اوشودی تقی یارو سندین کوبراکی توشدی اندین سونک انکا جوناق حسین تیرلار ایردی

258 نبره لارین
259 ظلم
260 قویین
261 کوبی
262 اول زما؛ اول زمان [Юдин]
263 اکه
264 ایتولار
265 حسن
266 تمو
267 قرایداش لاری ندین

کوردیلار که جیبه جوغ بکین قزیل بولوب ایردی اما خدای تعالی نک قدرتی برلا بابا نک بر توکی کویماین جقدی بو حالنی خان بشلیغ برجا خلایق لار کوردیلار ایرسا فی الحال شیخ لار نک اتاکلارینی توتوب مسلمان بولدیلار الحمد لله علی دین الاسلام

بسه برکه[229] خان زمانینده اوزبک طائفه سی مسلمان بولوب ایردیلار اولار دین سونک ینه مرتد (49b) بولوب کافر بولوب ایردیلار*[230] بو یول که اوز بک خان مسلمان بولدی اندین بارو اوزبک طائفه سی نک اسلامی تغیر تبمادی ایتورلار اوز بک خان یکرمی یل پادشاه لیق قلدی و بعضی لار ایتورلار اون سکز یل پادشاه لیق قلدی اندین حق رحمتکا واصل بولدی*[231] انا لله و انا الیه راجعون

آغاز داستان[232] جان بک خان

جون حضرت جان بک خان مشهور علیه الرحمه آتا سی[233] تختنده خان بولدی اولار نک عدالتی ولایتی کرامتی مشهور ترور دشت ولایتنده اولار بکین عادل و عابد و ضابط پادشاه کجکانی یوق ترور آتا سی[234] نک تمام دولتینی*[235] حکم قلور ایردی اندین سونک ملك اشرف تیکان تبریز حاکمی ایردی شیطان انی یولدین جقاریب اوز قیز نی الدی انک قصه سی اول طریقه ایردی کم بر صاحب جمال قیزی بار ایردی بو بد بخت انکا عاشق بولدی هیج تورلیک ارامی قراری قالمادی تبریز علما لارندین سوردی که بر کم ایرسا درخت تکسا*[236] تقی انک میوه سی یتلسا اوزیمو یسون یا اوزکا کا مو برسون علما لار ایدیلار اوزی*[237] هم یسه بولور یا اوزکا کشی کا هم برسا بولور تیدیلار بو بد بخت خود مقصودی اوز قیزی بولغاندور بو سوز برلا ترور تقی قیزی نی الور

229 برک
230 بولدیلار ایردی؛ بولوب ایردی [Юдин]
231 بولوب
232 دستان
233 آنا سی
234 آنا سی
235 رویی
236 تک
237 اوز

بسه تبریز علما لاری خانغه عرض داشت قلدیلار کم بو کشی بز دین بر مغلط برلان بر مسئله ایشتدی بز انک غرضینی بلماین ظاهرینه حکم قلدوق مونونک غرضی خود قیزینده بولغاندور حالا قیزی نی*[238] الدی بو خود کافر بولدی بز لار هم کافر غه بنده بولوب ترور بز بو کون پادشاه اسلام ترور سز ایمدی سز کا*[239] واجب ترور کم مسلمان لار نک بشندین [بو کافر نی]* دفع قلغای سز ایتورلار*[240] خان ایکندو نمازین اوقوب مسجد ده اولتوروب ایردی (50a) کم عرض داشت کلدی فی الحال عالم لار نی یغیب سوردی که سزلار بو سوز کا نه ایتور سز اولار هم ایدیلار بلی سز کا واجب ترور بو کافر نی مسلمان لار*[241] بشیندین دفع قلغای سز بو سوز نی اشتدی که مسجد دین*[242] ینه اویکا برمادی اوج کون اول مسجد ده اولتوروب یراغن قلیب اطلاندی تقی بریب ملك اشرف نی[243] اولتوروب تبریز و عراق ولایت لارینی الدی مدت اوتوز یل پادشاه لیق سوردی اندین سونک الله تعالی رحمتنکا واصل بولدی انا لله و انا الیه راجعون

اغاز داستان بردی بک خان

اوغلی بردی بک آتا سی تختینده خان بولدی بو بردی بک بسی بی عقل و بی ملاحظه[244] کشی ایردی اوزی نک قریندا ش*[245] لاری نی تقی اوز اوغلانلارینی منکا خانلیق تالاشور دیب اولتورور ایردی ایتورلار قانکلی تولوبای تیکان قومی قریندا شی[246] کوب کوجلوک کشی ایردی بو خان نک آتا لیغی ایردی هر نه ایتسه انک سوزیندین جقماز ایردی انک بر اوغلی بار ایردی صُمای آتلیغ الپ اتغوجی ایردی اول صُمای جانی بک خان زمانینده قراق جیلق قلور ایردی انک جهتدین خان علیه الرحمه انی اولتوروب ایردی تولوبای اول اوغلی نک آجغیدین بو

238 قیزی م
239 بز کا
240 ایتورلا
241 مسلمان لا
242 مسجدین
243 اشرق نی
244 ملاحضه
245 قرایندا ش
246 قریندا ش

دوستغان[212] اوزی اول کشی کا برور ایردی برجا بو ساحر کاهن لاری نی خان اوز لاری کا شیخ بلیب یان لاریده یانشا اولتورتوب بسیار اعزاز و اکرام قلور ایردی

اما بر کون که بولار کلیب متوجه بولوب اولتوردیلار کونداکی*[213] تک خان مجلس اراسته*[214] قلدی شیخ لاری برلا کلیب باری اولتوردیلار کونداکی تک بیمانه سی بلا بال کلتوردیلار جورغاتی و دوستغاننی[215] کلتوروب قویدیلار*[216] بر خیلی مدت اوتدی کم نه بال کونداکی تک جورغاتیغه قویولور نه دوستغانغه سوزولور ایردی خان بو شیخ لارینغه ایدی نه جهتدین بو بال معطل قالب (48b) ترور شیخ لاری ایدیلار غالب بو یقین محمدی کلیب ترور بو انک علامتی*[217] ترور تیدیلار خان حکم قلدی کم قور قور دین یوروب ایستانکزلار تقی محمدی*[218] بولسا الیب کلنکز لار ملازم لار جقیب قور قور دین تفتیش قلدیلار ایرسا کوردیلار قور نک تاشینده تورت اوزکا صورتلیغ کشی لار باش لار نی قویو سالیب اولتورور*[219] ایردی ملازم لار ایدیلار کم سز لار نه کشی لار ترور*[220] سز بولار ایدیلار بز لار نی خان قاشیغه الیب [برنکز]# کلدیلار خان نک کوزی*[221] بولار غه توشدی جون نور هدایت بلا الله تعالی خان نک کونکلی نی منور قلیب ایردی بولار نی که کوردی میل و محبتی کونکلونده بیدا بولدی سوردیلار که سزلار نه[222] کشی لار ترور نه ایشکا یوریور سز نه ایشکا برور سز بولار ایدی لار بز لار محمدی ترور بز خدای تعالی نک [امری برلا]# کلیب ترور بز کم سز لار نی مسلمان قلغای مز بو اثناده*[223] خان نک شیخ لاری فریاد قلیب ایدیلار بولار یمان کشی لار بولور بولار نی سویلاماک [کراک ماز]#*[224] اولتورماک کراک تیدیلار

---

212 دوستیغان
213 کوندا
214 اراسنده سته
215 دوستغانغه
216 قویدیلا
217 علی متی
218 محمد
219 اولتور
220 ترو
221 کوزوی
222 نی
223 انثاده
224 کا [رکماز]

خان ایدیلار نیجون اولتورا در من پادشاه من سز لار نک هیج قیسی نکز دین فروایم یوق ترور قیسی نکز نک دینی نکز بر حق بولسه انک برلا بولور من اکر بولار نک دینی نا حق بولسا سز لار نک بو کونداکی ایش لارنکز نجوک باطل بولوب معطل قالدی و سوزلاشکز قیسنکز نک دینکز حق بولسا انکا تابع بولور من تیدی بو ایکی جماعت بری برسی برلا بحث کا توشدی لار کوب غوغا و جدل قلشدیلار عاقبت انکا قرار بردیلار کم ایکی تنور قازغایلار هر بریسنی اون اربا سوکسوک بلا قیزدورغایلار بر تنور غا ساحر لار دین بر کشی کیرکای ینه بر تنور غه بولار دین بر کشی کیرکای هر قیسی کویمای جقسا انک دینی حق بولغای تیب قرار بردیلار تانکلا سی ایکی اولوغ تنور قازدیلار سوکسوک اوتون لار دین یغیب قیزدوردیلار برسنی ساحر لار غه تعین قلدیلار ینه برسنی مسلمانلار غه تعین قلدیلار بو عزیز لار بری برسی برلا مراعت قلشدیلار قیسمز کیرار بز

بولار نک بریسی کا بابا توکلاس دیر ایدیلار (49a) تمام اعضالارینی توك بسیب[225] ایردی اول ایدی منکا اجازت[226] برینکز[227] من کراین سز منکا همت توتونکز تیدی بو عزیز لار انک حقی نه فاتحه اوقودیلار اول بابا ایدی منکا جیبه حاضر قیلنکز جیبه نی حاضر قلدیلار ایرسا جیبه کیدی یلانک اتکا تقی الله تعالی یادی طلقین بشلاب تنور طرفیغه*[228] متوجه بولدی ایتور بابا نک توکلاری اورا قوبوب جیبه نک کوزلاریدین جقیب ایردی بو حالات نی بارجا کورار ایردی لار بولار یوروب تنور غه کیردی بر قوی اتنی کلتوروب تنور غه اسدیلار اغزینی برکتی لار ایمدی کلدوک کاهن لار قصه سینغه کاهن لار ضرورتدین برسنی جقاریب تنور غه سلدی همین که توشکاج کولی کوکلی یاشل لی بولوب یالنی تنور نک اغزیندین جقار ایردی بو حالتنی خان بشلیغ بارجا خلایق لار کوردیلار ایرسا کونکول لاری کافر دینی دین اورولوب مسلمان لیق غه میل قلدیلار و تقی بابا نک تلقین ایتقان اوازی تنور دین متصل کلور ایردی قوی اتی بشدی تیکان محلده تنور نک اغزین اجدیلار بابا مبارک یوزلاریندین تیرلارینی سورتکاج نا آشوقدینکز اکر بر زمان توقف قلسانکز ایردی ایشم تمام بولوب ایردی تیب تنور دین جقدی

---

225 توك بیبب [DeWeese]
226 ایجازت
227 بزینکز
228 طرفه غه

کشی نک آرتنجا بردی تقی ایدی کم منکا بو سوز نی ایتغل نا سوز ترور اول ایدی کم باجر توق بوغا بک لاری برلا اتفاق قلیب کنکاشدیلار کم سز لار باریب اوردا لار ایشکیکا توشوب ایکی کرات جو جو تیب یاسلاغاندین سونک اولار قول تبراتیب سز لار نی قیرماق بولدیلار اکر سز لار بر کرات جو تیکاج اوستیکا یوروب قول تبراتماسانکز [199] بارجا هلاک بولدینکزلار بو سوزوم نک (47b) کیفیتی بو ایردی که سنکا ایتدیم تیدی استای بو خبر نی بک لاری کا ایدیلار ایرسا اتفاق قلدیلار که جو تیکاج قول تبراتماک بولدیلار تانکلا سی یوروب اوردا اولتورغان یر کا یتدیلار باجر توق بوغا اوردا [ایجنده]# تخت اوستونده اولتوروب ایردی بک لاری و نوکر لاری ایشکیدا قورلاب ایردیلار بولار کلیب ایشکدا توشدیلار تقی بر کرات جو جو تیب یاسلاغاندین سونک جه تیکاج باجر توق بوغا نک اوستکا قویولدیلار تا قدین راست قلغونجه استای یتیب بوینونغه جبدی باشی بر قدم یر کا بریب توشدی آلاطای بویده بلا سانجیب یوقارو کوتارکاج فریاد قلدی کم مونا ایاکیز نک بشی یرلیک یرنکز دین تبرانمانکز تیدیلار ایرسا بارجا سی سوست بولوب اولتورا قالدیلار اندین سونک بو باشنی قور قور غه کزدوروب فریاد قلور ایردیلار قرا کشی خان بولماق موندین کسلسون تیب جون باجر توق بوغا نی که اولتوردیلار حضرت اوز بک خان نی خان کوتاریب تختدا[200] اولتوردیلار

آغاز داستان اوز بک خان

حضرت خان که تختدا اولتوردی[201] و ایل کون قرار تبغاندین سونک یوجی خان نک اوزکا آنا دین توغ غان اون یتی اوغول نک اوغلانلاری نی جرلاتیب کلتوروب ایدی که سز لار اتا اوغلی ایماس می ایردینکز قرا کشی کا قول نوکر بولوب انکا مطیع بولغانجه سز لار دین بری نکز خانلیق تالاش سانکز می[202] جون سز لار قرا کشی نک قول لوقینی نوکار لیکنی قبول قلدینکز[203] ایرسا من هم سز لار نی قرا کشی کا قوشون براین دیب قهر قلیب نوکر سودر نی و ایل کون لاری بارجا سین قیات استای غه سویرغال قلدی

[199] تبراتماسانکز باردینکزلار
[200] تختدا ولتوردیلار
[201] تختدا ولتوردی
[202] تالاش ساننداى کز می؛ تالاش سانکز ایردی [Юдин]
[203] قلدینک ز

بسه یوقاریده هم تغریب بلا ذکرقلیب ایردوک جون شیبان خان قلج لار جابیب یاغی لار ولایت لار اجیب اردی اول جهتدین (48a) انک اوغلانلارینی و نبیره لارینی[204] بارجا خلایق لار عزت و حرمت قلورلار ایردیلار خان که بو اوغلان لار غه قهر قلیب استای غه قوشون که بردی استای *[205] تقی شیبان خان اوغلان لاریغه آتا لاری حرمتین قلیب بیراک بلا قرلیق که ایکی باغلی ایل ترور انی الیب[206] بولار نی اوز حالیغه قویدیلار صاین خان سلغاغان یورتلاریده بولور ایردی تیب ترورلار و تقی آلاطای غه منک باغلی ایل ایردی اول[207] مشهور ترور اوزبک لار *[208] اراسنده ایتورلار استای غه اوروم جشیب آلاطای غه منک بردی دیرلار معنی سی بو تورور

بسه حضرت خان مذکور علیه الرحمه عظمت اولوغ پادشاه ایردی بر نجه یل پادشاه لیق قلغاندین سونک الله تعالی نک عنایتی بولوب مسلمان بولدیلار

حکایت سبب اسلام اوز بک خان

سبب اسلامی اول ایردی کم اول زمان نک ولی لاری دین [209] تورت ولی کا الله تعالی دین الهام بولدی کم سز لار باریب اوز بک نی اسلام غه دعوت قلنکز لار تقی الله تعالی نک امری بلا اوز بک خان نک ایشکیکا کلیب قورو نك تاشیده اولتوروب متوجه بولدی لار انداغ روایت قلور لار کافر*[210] ساحر لار برلا کافر کاهن لار خانغه انداغ کرامت کورساتیب ایردیلار که خان نک مجلسی غه سبجاقی بلا [بال]* کلتوروب قویار ایردی لار جورغاتی و دوستغان لار نی*[211] طیار قلور ایردی لار بال اوزی جورغاتیغه قویولور ایردی و دوستغانغه سوزولور ایردی و

[204] نبره لارینی
[205] استای غه
[206] بریب [Юдин]
[207] اول که [Юдин]
[208] اوز بک خان
[209] ترور
[210] کافر لار
[211] دوستیغا لار نی

ایردیم حالا هر یلدا انک[187] سلامت لیق خبری کلا ترور بو یل اون تورت یاشینده ترور اکر یارلیق*[188] قلیب کشی ییارسانکز*[189] اول کلور ایدی بولغای تیدی ایرسا خان خوش حالتدین انداغ بولدی کویا که خسته بولماغان تک بولدی ایکی منک تومن ایل کلین بیالین غه سونجه ایتدی تانکلا سی بک لار نی جرلاب قیات استای بیلا سیجوت الاتای غه قرق منک کشی قوشوب اوز بک خان علیه الرحمه نی کلتورماک کا ییاردی بولار بریب کلکونجه توقتاغه خان وفات بولدی

باجر توق بوغا تیکان اویغور اوماقلی بولور ایردی قومی قبیلهَ سیِ*[190] کوب کوجلوک ایل ایردی و تقی خان نک اتا لیقی ایردی شیطان وسوسه بریب قرا کشی ایکان اول خان بولدی کلین بیالین نی تقی خان نک اوزکا ضعیفه لارینی هم الدی بعضی لار ایتورلار باجر اویغور ایردی توق بوغا نوتین ایردی بو سوز غلط اوخشار انک اوجون کم ایکی قومدین ایکی اتفاق برلا بر یر ده خان بولماقی*[191] مشکل ترور دورست (46b) راقی اول ترور آتی باجر ایردی لقبی توق بوغا ایردی القصه بو باجر توق بوغا خان بولوب خان نک ضعیفه لارین الیب ایل کون نک تمامین اوزیکا مسخر قلیب ایردی

بو اثناده*[192] اول برغان بک لار حضرت اوز بک خان نی الیب [عدیل دریا سی نک]* قراغیغه کلدیلار خبر تبدیلار که خان اولدی تقی باجر توق بوغا خان بولدی بارجا ایل کون نی اوزیکا مسخر قلدی تیب بو خبر دین بسیار پریشان و غم ناک بولوب کنکاش قلدیلار کم نه ایش قلساق بولور قیات استای ایدی بورون ده قومی قبیله سی کوب کوجلوک کشی ایردی حالا خود تمام خلایق انکا یوز کلتوروب ترور حالا بو یر دین توروب دوشمان لیق ظاهر قلساق ایشمز راست کلماکای بر حیله برلا اوزومز نی انکا یتکورا کورالی اندین سونک هر ایش خاطریمز غه تیلاسا[193] قلور بز تیدی ایرسا بارجا لاری بو سوز نی معقول کوروب ایلجی

---

[187] یلد انک
[188] یاریلیق
[189] ییارسزنکز
[190] قبلسِی
[191] بورلماقی
[192] انثاده
[193] تیلا بورور؛ کلسا [Юдин]

ییاردیلار ایدیلار ایامز خان یوموشیغه ییاریب ایردی اول کشی نی الیب کلا ترور بو کشی هم آتا آتا دین ایالارنکز اوغلی ایردی کراک ایردی انداغ قلماسانکز ایمدی اوزینکز کا اوخشاتیب خان بولوب ترور سز برجا خلایق سز کا مطیع و فرمان بردار بولوب ترور بز لار هم سز کا اوشانداغ مطیع فرمان بردار ترور بز سرکش قلور مز[194] یوق ترور قیلالی تیساک هم کوجومز یتماس*[195] بو بر یاش اوغلان دور ایلتب قولونکز غه برالی کونکلونکز نه تیلاسا انی قلور سز بولغای تیدیلار مونک اوجوناو ایلمز دین جلاء وطن بولوریمز یوق ترور تیب ییاردیلار

بولار نک ایلجی سی که کلدی بسیار شادمان بولوب کورا الیب سیلادی تقی فی الحال کشی قوشوب قیتاریب (47a) ییاردی ایدی که اولار کلکونجه اوزکا کشی باش کوتاریب خان لیق تیلاکای تیب بو ایشنی قلدیم روا بولغایمو کم اوز ایام اوغلی تورغانده من خان بولاین تیکای من پادشاه کلسون لار اوشته خانلق اوُشْتهَ ایل کون بارجا سی اولار نک ترور تیب ییاردی بو سوز که اولار غه یتوشدی فی الحال کوجدیلار بولار کلماسدین بورون راق باجر توق بوغا بک لاری [برلا]* کنکاشیب اتفاق قلدیلار اولار که طول اوردا نک ایشکنکا توشوب یاس توتارلار*[196] ایکی کرات جو جو تیب یاس توتغاندین سونک قولِ تبراتالی تیرلار

بسه قلماق نک قاعده سی*[197] اول ترور[198] کم پادشاه لاری یا اولوغ لاری اوتکانده کوروه کوروه قوم لاری برلا کلیب اوج کرت جَوْ جَوْ تیب فریاد قلیب یاس توتارلار ایردی لار اولوغ تاغده اولار نک اراسینده اول رسم هم هنوز بار ایردی

بر کون اوز بک خان بک لاری برلا تانک اتماسدین بورون راق کوجوب ایردیلار بر اوق سوران کشی بولار نک آلنیندین کلیب اوتار ایردی تقی ایتور کم جو تیکل تقی جه تیکیل تیب بر کرات ایتب اوتدی پروای قلمادیلار ایکنجی کرات ینه ایتب قیات استای ایدی کم اول نه تیکانک بولور اول کشی ایدی منک آتم سانکغسون انکلاغای سن سونکغوسون تیدی قیات استای ایدی بر سوز بار تیب بو

---

[194] قلور منم
[195] نیماتر
[196] توتارلا
[197] قغده سی
[198] تروور

بعضی لار[175] ایتورلار اون سکز یل خان بولدی بعضی لار ایتورلار سکز یل خانلیق قلدی اندین سونک اینسی مونک تمور[176] یکیت یتلدی ایرسا اوزی اوق انصاف اتدی ایدی مونجه دین بارو کشی یوق دین منی خان قلیب ایردینکز سز لار هم قینالدینکز من هم قینالدیم ایمدی اینم شکر بو جاقلی [اوسدی]# *[177] منک کونکلوم سز لار کا خوش ترور اینم نی خان قلنکز تیب اوز نی خانلقدین عزل قلدی بک لاری هم بو سوز نی[178] خوش حال بولدی لار اینسی مونک تمور نی خان کوتاردیلار

آغاز داستان*[179] مونک تمور خان

بسیار عادل[180] و ضابط عاقل پادشاه ایردی مونک تمور زمانینده ایل کون بسیار رفاهیت ده بولدیلار انک غایت یخشی لیقیندین کولوک خان آت بردیلار*[181] انداغ مونک تمور کولوک خان مشهور ترور ایتورلار اون اوج یل خانلیق قیلدی اندین سونک وفات تابدی اندین ایکی اوغول قالدی بری نک آتی توقتاغه بری نک آتی توغرول آتا سی اولکاندین سونک توقتاغه خان بولدی

آغاز داستان توقتاغه خان

بو توقتاغه خان بسیار اولوغ پادشاه ایردی صاین خان اوغلانلاری ده مونونک مقابله سینده پادشاه آز بولدی ایتورلار اول طریقه (45b) معظم شولانی بار ایردی اط دین سغر دین قویدین اوزکا جانوار لار دین بشغه هر کونده توقسان قبان شولانیدا*[182] بشار ایردی مونونک بر اوغلی بار ایردی ایل بسیار[183] آتلیغ من

175 بعضی لاری
176 تمر
177 اوغدی
178 سوز دین [Юдин]
179 داستا
180 عادیل
181 بردیلا
182 شولانیدی
183 ایل بسار [Юдин]

اولکاندین سونک انکا خان لیق تلاشور تیب اوز قریndاش لارین تقی اوز نسلین برجا سین قیردی حتی که اینسی توغرولنی اولتوردی تیرلار اما بعضی لار ایتورلار توغرول اوزی خسته لیق دین اولدی کلین بیالین آتلیغ توغرول نک ضعیفه سی بار ایردی کورلوک ایردی توغرول اولکان محلده بر فرزندی بولدی کوردی که توقتاغه خان اوغلی جهتدین قریndاش لارین قرا ترور بر نجه کشی برلا قاجریب جرکس تاغی غه ییاردیلار اوز بک خان مشهور علیه الرحمه اول اوغلان ترور آز فرصتدین سونک کلین بیالین نی خان الدی انی بسیار سوار ایردی بو قاضیه لاردین نجه یل لار کجتی ایتورلار خان نک عمری توقسان یاشار ایردی اون یاشیده خان بولوب ایردی سکسان یل خان لیق قلدی بعضی لار ایتورلار یکرمی یاشیده خان بولدی یتمیش یل خان لیق قلدی تیورلار

جون آخر عمرینکا یقین کلدی القصه اوزومدین سونک خان بولسون تیب سقلاغان اوغلی اوزودین بورون اولدی بسه معلوم[184] ترور کم بز دین بر اوغلی بولغای مندین سونک انکا خانلیق تالاشور تیب اوز اوروغین تمام قیرغان بولغای ینه اوزی هم فیرلیک برلا آخر عمرینکا یتمش بولغای بو اوغول تقی اوزیدین بورون اولکای انک نه تورلیک مصیبتی و ندامتی بولغای عاقبت بو غصه دین خسته بولوب خسته لیقی اوزاقغه جکدی بر کون توشاکده یاتیب اول یان بو یان آغناب اه اورار ایردی کلین بیالین بلدی که نه جهتدین بی طاقت بولا ترور ایتدی سز دایم خسته بولور ایردینکز بو یول نجوک بی طاقت بولا ترور سز تیدی (46a) خان ایدی نجوک بی طاقت بولماین یلغوز اوغلوم ایل بسیار[185] غه خان لیق تلاشور تیب اوز اوروغوم نی تمام قیردیم اوغلوم نک هم ایشی اول طریقه بولدی اوزومکا هم اولوم یقین کلدی یوروتوم یات کشی کا توشار بی طاقت لیغیم اول جهتدین ترور تیدی ایرسا کلین بیالین ایدی سز نک یرلیغی نکز دین تاش [من بر]# ایش قلیب ترور من اکر کناهمنی بغشلاسانکز*[186] ایتاین تیدی خان فی الحال قبوب اولتوروب سوردی کم نه ایش قلیب ایردنک ایدی اول محلدا که اینی نکز اولدی اینکز دین بر اوغول بولوب ایردی سز نی اولتورکای تیب قاجیریب جرکس ولایتنغه ییاریب

184 بسی معلول [Юдин]
185 ایل بسار [Юдин]
186 بغلاشانک

اوزی بلماکای بلکان لار نک سوزیکا اینکای اول همان بلک لیک ترور انک تفاوتی یوق ترور دیر ایکاندور*[161]

القصه تانکلا سی*[162] ایلجی کا کورنوش بردی لار خان نک سلامت لیقنی سوردی ایل کون نک رفاهیتنی سوردی اندین سونک ایدی سز نک ایلده سجقان کوب بولور مو ایدی بولور اندین ینه سوردی کم سز نک ایلدا یغمور کوب بولور مو ایدیلار بلی کوب یغار اول یبنی توتوب اولتورغان کشی کوردیکه فریشان سوزلای بشلادی اول یبنی ترتدی خان ایلجی کا ایدی سندین ینه سوز سورار ایردیم و لیکین ایاقیم دین ترتا ترورلار تیدی بک لار فی الحال ایلجی نی الیب قیتدیلار تقی اط تون بریب اوزاتدیلار اول ایلجی قیتب اوز پادشاهی خذمتی غه کلدی اول خان سوردی کم قرینداشمیز خان نی نجوک کوردونک و نه تورلیک کشی ترور تیدی ایرسا ایلجی ایدی بر کرت اوق کورنوش قیلدیم اذکو بلمادیم اول کورنوشده سز نک سلامت لیقکز[163] نی سوردی تقی ایل کون نک رفاهیت لیقنی سوردی ینه سوردی کم سز نک ایلده سجقان کوب بولور مو من ایدیم بلی کوب بولور ینه سوردی کم سز نک ایلده یغمور کوب یغار مو من ایدیم بلی یغار ینه ایدی کم سندین ینه سوز سورار ایردیم و لیکین [ایاقیم دین]# ترتا ترورلار تیدی اندین بک لار فی الحال توروب قیتدیلار من هم قیتدیم خان نی کورکانم اوشال بولدی تیدی بو خان تقی بک لاری بو سوز کا تفکر قیلدیلار ایدیلار یغمور کوب یغار مو تیکانی یخشی انک اوجون کم بارجا خلایق غه یغمور دین رفاهیت بولور و تقی سجقانی هم سورغانی یمان ایرماس اندین بارجا غه زیان تکار امّا (44b) هر نجه فکر قلدیلار یبنی ترتا ترورلار تیکاننی بلا المادیلار تیب ترورلار

ینه بر حکایت کم اوزی عیدیل دریا سی نی کچه جریک اطلانیب ایردی جریکدین کم قیتدی دیوانه لیقی غالب [بولدی]* انک عادتی اول ایردی هر کاه که دیوانه لیقی غالب بولسا هیچ کشی نک سوزینکا التفات قلماس ایردی بر یر کا کلیب توشدیلار اون بش کون اول یر دین [اطلانمادی]# جریک نک آزوقی توکاندی احوال لاری خراب بولدی بک لاری کنکاش قلدیلار و تقی ایدیلار بو حالا ضعیفه

161 انکاندور
162 تانکدایسی
163 سلامت لتکز

سنی اونوتوب ترور بر یلانک یوزلی یکیت نی ضعیفه صورتی غه یساب یراق دین کورساتلی بولغای کم ضعیفه سی خاطرینغه توشوب اط لانغای تیدیلار تقی بر اوغلان یکت نی ضعیفه صورتی غه یساب کورساتدیلار ایرسا کورکاج ضعیفه سی خاطرینغه کلدی توشوب[164] ایدی بز نک او دا[165] هم مونونک تک کشی بار ایردی تیب فی الحال اط لانیب ایلغادی بعضی لار بو حکایت نی بر تورلیک قبیح راق*[166] ایتورلار*[167] مناسب کورمادوک بو دفتر ده*[168] بتلکای

جون ایلغالب که سلدی ایکی کوندین سونک عیدیل دریا سی نک قراغیغه کلدی قتنده ایکی جوره سی قالیب ایردی دریا [نک یانیندا][169] بسغونجاق توزلاقی نک [یانیندا] بیک تبا تک تاغی بار ترور هر کشی که عیدیل دریا سی نی بوسغونجاق یانندین[170] کجیب یایق دریا سینغه که آرتولور اول تاغ بر کونلوک کا یقین بر کشی نک یانیندین قالماس ترور خان که عیدیل دریا سی نی که کجیب ایلغادی کوردی که بر تاغ هیچ قالماس بر ایکی کرت غضب برلا بقدی تقی ایدی سن اوق بار من برمن[171] تیب اطدین فی الحال توشدی یتدی قتنده قی جوره لاری هم جاره سز*[172] بولوب توشدیلار اول کون (45a) تا اخشام بولغونجه اندا یتدیلار جون اخشام کشی تانیماس بکین که بولدی اول ایکی جورا سی نک بری سی نک ادراکی بار ایردی فهم لیک کشی ایردی اول ایدی حالا کیج بولدی اول هم توشوب ترور دم بدم دور که اوقلاغاندا*[173] بز اطلانیب ایلغاساق اول بز نی تویماین*[174] قالور تیدی ایرسا بو سوز خان غه بسیار معقول کلدی تقی ایدی یخشی ایدنک اط ایارلانک ایارلادی ایمدی اوقلادی تیکان وقتدا اط لاندی تقی ایلغادی لار تانک اتغونجه تانک که اتدی هیچ یر ده کورمادی تا خان بسیار خوش حال بولدی ایتورلار اوردا سیغه برغاندین سونک کوب سویرغال لار قیلدی تیرلار بو یانکلیغ طرفه دیوانه کشی بولغاندور

164 خاطرینغه توشوب [Юдин]
165 اویدا [Юдин]
166 قلح راق
167 اینورلا
168 دفتر دی
169 نی
170 یاقندین
171 من برمایمن [Юдин]
172 جار سز
173 اقلار اولاقلاندا
174 تویمانی

لشکری نک*[144] قریغین کورسا بولماس ایردی اول اثناده[145] حضرت خان اوج کرت قمجی سین سلدادی تقی یاغی غه اوترو اط سلدی هنوز تبا دین اشاق اینماین خدای تعالی (43a) نک قدرتی برلا [یاغی]* لشکری بوزولدی تقی قجتی خان نک لشکری بو حالتی نی کوردی*[146] ایرسا خان سونکیندین اط سلدی لار نجه کون قویب اولتورکانین اولتوروب اولتورماکانین اسیر قلیب قیتدیلار آطلارین یراغلارین تمام الدیلار اول توشکان کشی لاردین سورار ایردیلار سز اول تبا بشینده قی بر کشی دین نجوک قجتنکز اولار ایتور ایردیلار*[147] اول بر کشی کم تبا نک اوستوندا جقیب ترور ایردی انک ایکی یانیندا ایکی اولوغ لشکری بسیار ترور ایردی هر نجا لار کم قرا لار ایردوک اول ایکی لشکر نک اوجنی تقی قراغینی کورا بلماس ایردوک یراق یسال جکیب تورغانمز اول جهتدین ایردی جون اول تبا داکی کشی بز کا اط سلدی اول ایکی عظیم لشکر هم اط سلدی لار خیال قلدوق کم یر کوک اوستومز کا یقلیب کلا تورغان تک بولدی اول جهتدین تورا بلمای قاجدوق تیدیلار حضرت خان نک بو کرامتی خلق اراسیندا مشهور ترور

بعضی لار ایتورلار هلاکو خان نک [اوغلی] بو لشکر نک ایجندا ایردی بو لشکر بسلغانده اولدی هیج کشی انک اولکانیدین خبر دار بولمادی اما حضرت دوست سلطان نک تواریخ لاریده ایتوب ترورلار بو لشکر که بسلیب*[148] باردی غصه سندین خسته بولوب ایکی آیدین سونک اولدی دیب ترورلار و الله اعلم

جون دشت ولایتی*[149] که برکه[150] خان غه مسلم بولدی اکثری کوب کافر لار نی مسلمان قلدی بعضی لار اون اوج یل بعضی لار[151] اون التی یل پادشاه لیق قلدی تیب ترورلار اندین حق رحمتی غه واصل بولدی حضرت خاندین نسل قالمادی یوقاریده مذکور بولوب ایردی صاین خان نک ایکی اوغلی بار ایردی بری ساری

---

[144] تک
[145] اسناده
[146] کودی
[147] ایردیلا
[148] بیلیب
[149] ولایت
[150] برک
[151] بعضی لا

تقی بیری توغان ایردی ساری تقی آتا[152] سی دین (43b) بورون سکز یاشاریده اولدی توغاندین ایکی اوغول قالیب ایردی بری نک آتی توده منکی ینه بری[153] نک آتی مونک تمر بو مونک تمور یاش ایردی اما توده منکی اکرجه یکیت یتلیب ایردی ولی بی عقل بسیار دیوانه کشی ایردی صاین خان نسلی دین موندین اوزکا کشی تبماین بیک لار اتفاق قلیب مشار الیه[154] نی خان قلدیلار موندین عجایب و غرایب سوز لار طرفه*[155] حکایت لار بسیار ترور اما بر ایکی حکایت بو مختصر ده یاد قلندی

ایتورلار بر وقت ده توب خاندین ایلجی لار کلدی بک لاری اتفاق قلیب خان مذکور کا ایدیلار بو ایراق دین کلکان ایلجی کلیب ترور مونونک کوزونجه فریشان [قلماغل]#[156] کورماکل خان نک سلامة لیقینی سورغیل تقی ایل نک رفاهیت[157] لیقینی سورغیل اوزکا سوز سورماغیل تیدیلار ینه ایدیلار سز نک اوزونکز کا اختیارنکز یوق ترور سز نک ایاقنکز غه بر یب تقالی تقی تخت نک استنغه بر کشی کیریب اول یبنی توتوب اولتورسن هر کاه که بز نک بو نصیحت یمز نی اونوتوب فریشان سوزلای بشلاسانکز اول یبنی تارتسون اول حالده سوزلاماکنی بس قلغای سز*[158] تیدیلار ایرسا اول هم قبول قلدی ایتورلار انک بر یخشی ایشی اول ایردی با وجود اول دیوانه لیقی بله هم هر ایشنی که بک لار اتفاق قلیب [انکا]# تیسالار انی قبول قلیب اولار نک سوزیندین جقماس ایردی اول جهتدین اون سکز یل دشت ولایتندا پادشاه لیق قلدی تیرلار

ادکو بی رحمت الله علیه ایتور ایکاندور دوشمانکز غه یمان دعا قلور بولسانکز بو طریقه*[159] دعا قلنکز کم بر خدایه منک دوشمانمنی بیلکسز قلغل و تقی بیلکان لار نک هم تیلنکا اینماس قلغل تیب دعا قلنکز تیر ایکاندور*[160] (44a) اکر کشی

---

[152] آنا
[153] یر
[154] الله
[155] طرف
[156] قلماقل
[157] زفاهیت
[158] قلماغای سز
[159] طرفه
[160] انکاندور

تبغایمن تقی بریب دونیا نک پادشاه لیغغه تقی مشقتغه اوزمنی سلغایمن شیخ ایدی اکر تفرقغه[121] توشار سن اکر مشقتغه توشار سن خدای تعالی نک تقدیرینغه جاره*[122] یوق ترور تیدی ایرسا خان مذکور هم بیجاره بولوب قبول قلدی بر نجه کون یراغ قلیب جقدیلار حضرت شیخ بخارا دین قرا کولکا تکرو اوزاته*[123] کلدی خان شیخ نک جلاویده فیاده کلدیلار قرا کولدین شیخ دعا قلیب قیتدیلار خان دشت (42a) ولایتنغه متوجه بولدیلار

حاجی ترخان ولایتنده حاجی نیاز تیکان دولتی[124] مشهور کشی بار ایردی اول ایتور ایردی حضرت خان قرا کولدین*[125] سکز کشی [برلا]* جقیب دشت ولایتنغه یوریدیلار اول سکز کشی نک هر بر سی منک اویکا آتام ترور تیر ایردی جون خان علیه الرحمه قرا کولدین جقیب اورکنج [کا] کلدی اورکنج دین سرای جوق [غه] بردی ایتورلار سرایجوق غه برغانده بش یوز کشی جمع بولدیلار سرایجوق دین که اوتدی لار عیدیل دریا سی نک یقا سنغه تکونجه*[126] منک بش یوز کشی جمع بولدی لار جون عیدیل دریا سی نک یقا سنغه کم کلدیلار خبر تبدیلار کم هلاکو خان عظیم لشکری بیلان قولزوم[127] دریا سنی یقالاب کلا ترور تیب بو یغلغان لشکر لاری بی دل*[128] بولوب برجا سی اتفاق قلیب ایدیلار کم هلاکو خان اولوغ عظیم پادشاه ترور لشکری بار بز آز کشی ترور بز انکا اوترو جقیب اوروش ماقیمز مصلحت بولماغای تیدیلار ایتورلار اول حالده خان نک الینده بر قابسیز قلقان ترور ایردی بعضی لار ایتور ایردی بر قابسیز تولغه ترور ایردی بر قوی نک اشوقی هم حاضر ایردی خان بولار نک جوابینده*[129] ایدی کم من اوز رایم اوز فکریم بیلان یوریکان کشی ایماس ایردیم سزلار منکا اینان مای ترور سز حالا بو اشوقی نی قلقان نک یا تولغا نک قبه سنغه اوز قولیمز بلان اومقا قویساق خود توختاماس ایمدی سز لار برلا بر شرط قلالی من بو آشوقنی بو[130] قلقان نک یا تولغا

---

121 تفرفغه
122 جار
123 اوازاته
124 دولق
125 قرا کولدی ن
126 تکرُنجه
127 قولذوم؛ [قورزوم]#
128 بی قل
129 حوانینده
130 بر

نک قبه سی اوزا اوراین اکر بولار نک قبه سی اوزا اومقه تورسا خود بلنک که من بو یاغینی بسر من*[131] خدای (42b) تعالی منکا برور اکر اومقا تورماسا هر نه سز نک ایتغانکز دین جقماین تیدی بو جماعت هم ایدیلار اکر اومقا تورسا بز هم سز کا یک جهت بولالی تا*[132] جانمز بارنجه تیدیلار خان علیه الرحمه اشوقنی قولیغه الیب الله تعالی یاد قلیب که اوردی*[133] قبه نک اوستوندا راست اومقه توردی بو حالتنی کوردیلار ایرسا کونکول لاریندین*[134] شک شبهه نی کتاریب برجا سی مطیع و فرمان بردار بولوب عیدیل دریا سنی کجیب قولزوم[135] دریا سنی یقالاب هلاکو خان لشکرینکا اوترو یوریدیلار[136]

اول یولدا مجاق لار قولزوم[137] دریا سی دین شاخجه شاقجه سولار جیقار یول اول سولار نک بش لارین کسا کیتار قوملی بیک تبا لاری بولور فقیر اول یرلارنی کورکان ترور من قیر مجاق تیرلار اندین نارو دریا دین شاخجه سو جیقماس ترور انک بر اولوغ تفا سی بار برکا خان نک قراویل لاری اول تفا کا جیقدیلار شیروان طرفیدین عظیم کرد فیدا بولدی خان غه خبر کلتوردیلار[138] کم یغی نک کردی*[139] فیدا بولدی هیج اوجی قراقی یوق ترور تیب بو بک لار ینه بی دل لیک قلا بشلادیلار خان ایدیلار*[140] من اول تفا کا جیقاین سز لار موندین قراب تورونک تقی خدای تعالی نک قدرتینی*[141] کورونکز اکر یاغی کلیب منی الور بولسا سز لار موندین اوق قجغای سز لار تیدی بولار هم قبول قلیب توردیلار خان تبا بشینغه جقدی آز زماندین سونک اول طرفدین لشکر فیدا بولدی کروه کروه قول قول بولوب*[142] کلور ایردیلار همین که یقین کلدیلار تقی مقابله سیندا یسال جکا بشلادیلار*[143] جندان یسال جکیب توردیلار لشکر نک اونکی سونکی یتوشدی

---

131 من بو یاغینی من بسر من
132 نا
133 اویردی
134 کونکول لاریند
135 قولذوم
136 یوردیلا؛ یوردیلار [Юдин]
137 قولذوم
138 کلتووردیلار
139 کرد
140 ایدیلا
141 قدرتننی
142 بولور
143 بشلادیلا

ياتيب اوقلامادی لار تانک که اتدی بيس قلديلار ينه اخشام که بولدی بياقی تک ينه علامتی و غوغا قوبارديلار تا بر هفته اون کونکا تکرو ايش کوج لاری بو بولدی قلقه خلايق لاری اويقو سز ليقدين خراب بولور ايردی بو غايت غه تکرو ايتورلار کم اکر بر ايش قلور بولسا قلور ايردی لار شايده بولارنک بو آيلار ده و بو کون لار ده رسمی و عادتی بو طريقه بار بولغای تيب فراغت بولديلار جون شيبان خان بيلدی که بولار فراغت بولديلار لشکرين يغدوردی ايتورلار که اول قلقه بر يالنک قيا نک اوستوندا ترورلار بو اخشام غوغا و صدا نی*[108] کوبراک قلدی قلعه نک توروت يانی دين جاقورلار سالدی تا تنک اتقونجه بر کشی جيقار جاقلی يول قلديلار قلعه خلايق لاری غوغا و صدا[109] جهتيدين ميتين اوازين معلوم قليب خبردار بولا الماديلار يول که طيار بولغاج دروازه غه اوروش سلديلار قلقه خلايق لاری يوکوروب دروازه غه کلديلار بر جماعت بهادر لار نی اول يولغا تعين قليب ترورلار اول يولدين يوکوروب (41a) جقغاج قلعه کا اوزين سلديلار تقی قلعه نی الديلار اول قلعه نی کورکان رونده لاردين سورادوق هنوز اول يول نک حدودی بار ترور تيديلار

اندين سونک اَولاق*[110] ولايتی اوستونکا يوريدی لار انی فتح قلدی اندين کورال ولايتی اوستونکا يوريدی کورال عظيم اولوغ ولايت ترور انک کوب اوروش لاری بولدی عاقبت فتح قليب کورالنی پای تخت قلدی اندا وفات بولدی تقی حالا کورال پادشاهی نک اولادی ترور شيخ احمد خان نجه يل اندا توتقون بولوب ينه اندين سلامت جقيب اوز ولايتی حاجی ترخان غه کلدی اول ايتور ايکاندور بز نک اوزبک طائفه سينده هر که اوماقلی ايل که بار ترور بارجا سيندين اندا بار ترور شيبان خان برلا باريب اندا قاليب ترورلار تير

بسه شيبان خان حکايتين که تمام قلدوق ينه کلدوک صاين خان حکايتنغه صاين خان دشت ولايتيده اولوغ پادشاه[111] بولدی نجه يل لار دولت سعادت بلا پادشاه ليق سوردی جون اجل[112] يتيشب دونيا دين نقل قلدی ايرسا ايکی اوغلی بار ايردی بری

[108] و غوغا و سورا نی
[109] سدا
[110] اُولاق
[111] بادشاه
[112] احل

نک آتی ساری تق بری نک آتی توغان ايردی ساری تق اوزيندين بورون سکز ياشدا اولوب ايردی توغان تقی ياش قالدی بک لار اتفاقی برلا هلاکو خان غه ايلجی يبارديلار*[113] قليج سز [غين]#[114] يقا سز کونکلاک يبارديلار يعنی ايل قالدی پادشاه لاری يوق ضعيفه لاری قالدی آرلاری يوق هلاکو خان بو خبر نی ايشتدی ايرسا اط لانيب شروان*[115] ولايتنغه کلدی تقی عظيم لشکر يراغين قليب قوشوب يباردی بو لشکر هنوز کلماکدا بز کلدوک برکا خان عليه الرحمة و الرضوان*[116]

آغاز داستان برکا خان

مذکور عليه الرحمه مشهور ترور انا سيندين توغ غاندين بارو مسلمان ايردی اول محلدا دونيا کا کلدی اوز انا سی سوتی (41b) تقی اوزکا کافر ضعيفه لار نک سوتينی اَمّادی بو جهتدين کاهن لار برلا بيلکا لارينی بقتورديلار اولار ايديلار بو محمد ترور محمديه کافر ضعيفه سوتينی ام ماز تيديلار ايرسا بر مسلمان ضعيفه فيدا قليب کلتورديلار انک سوتينی اما بشلادی

بو واقعه دين نجه يل دين سونک آتا سی يوجی خان اولدی ايرسا کافر لار اراسنده يوری بلمای سيغناق شهرينغه کليب ايرديلار اول ولايت غه کم کلدی لار شيخ العالم شيخ سيف الدين باخرزی*[117] که حضرت قطب الاقطاب شيخ نجم الدين کبرا*[118] نک خليفه لاريندين ترور اولار نک اوصاف حميده لارينی اشتب اشتياق و رغبت*[119] بيلان خذمت لاريغه کليب نجه يل لار رياضت لار جکيب اوليا لار کمالی نک نهايتنی حاصل قليب ايردی هنوز شيخ نک خذمتلاريدا ايرديلار بو اثناده که صاين خان اولدی بک لاری اتفاق قليب هلاکو خانغه ايلجی يبارديلار بر کون حضرت شيخ برکه خانغه ايدی کم ای فرزنده خدای تعالی نک امری انداغ بولدی کم سن بريب آتا لار نک يورتنده پادشاه ليغينی [قلغل تيدی]# سز نک خذمت ده*[120]

[113] يبارديلا
[114] غيف
[115] نشروان
[116] عليه الرحمة و الرضوان عليه رحمة
[117] باخردی
[118] قطب الاقطا شيخ نجم الدين کمرو
[119] رعيت
[120] خذمته

پادشاهی[89] بسه المای پادشاهی نی توتدیلار لشکری نک اولتورکانین اولتوردیلار قالغانین یسر قلدیلار جندان مال و یراغ جیبه جوشن توشوب ایدی هیج حسابی و کتابی یوق ایردی اما شیبان خان حکم قلدی که هر مال و یراغ که هر کشی کا توشوب در دست یابی*[90] الیب قالماسون لار بارجا سین کلتورسونلار ایتورلار هر جنس دین بر خرمن قیلدیلار بی حساب خرمن بولوب ایردی

ایکی کوندین سونک [خان]# یتوشدی بو فتح نصرتنی کوردی بو مال یراغ لارنی بارجا سینی کلتوروب جکدیلار بسیار خوش حال بولوب شیبان خان غه کوب آفرین قلدیلار اندین سونک شیبان خان که کلیب کورنوش لار قیلدی ایرسا کوب تورلیک عنایت (40a) شفقت لار قلیب سویورغال لار اتدی توشکان*[91] مال و یراغ نک بارو سینی شیبان خانغه سویورغال قلیب بارو سین اوز لشکری کا بخشش قیلدی تنکلا سی کوجوب ماسکاو ولایتی غه بریب کیردیلار بر نجه آی اندا بولوب ولایت نک ایشین کوجین ضبط ربط*[92] قلیب مال خراجن*[93] قبول قلدورب داروغه حاکم لار قویوب مظفر و منصور اوز ولایتنغه قیتدیلار

بسه بولار قیتب کلکونجه ایجان خان نک[94] نوکرلاری ایا سیکا عاصی بولوب ایجان خان نی تمام اوغلانلاری برلا اولتوروب ایردی بو خبر که صاین خانغه کلدی اولوغ مصیبت توتدی اویکا توشوب آب آش برکاندین سونک جریک یراغینی قلیب بو یاغی اوستونکا[95] یوریدی بولار هم توروش برمای اولوغ لاری قجتی اوزکا ایل کون نک بارجا سین کوجروب الیب کلیب اوز ایلکا قوشدی و تقی هر ایماقنی بر بیک کا قوشون بردی تا بو جاق غه تکرو عاصی بیلا یاغی*[96] نک قلج یالی بولماق لیقی اول جهتدین قالیب ترور

[89] پادشاه
[90] دسته تابی
[91] توتوشکان
[92] ریط
[93] خراج ن
[94] نی
[95] اوستوتنکا؛ اوستوننکا [Юдин]
[96] اتما بیلا یالو

بسه صاین*[97] خان بو ولایت لار بلا بو ایل لار نی که ضبط که قلدی اندین سونک بارجا قریندااش لارینغه ایل کون بریب یر یوریت لار تعین قلدی اما شیبان خان غه ایل کون برور[98] ولایت لار برور جاقی ده بک لاری برلا کنکاشدی ایرسا بک لاری ایدی بو کشی بسیار اولوغ ایش قلدی حالا مونونک کونکلی اوسوب ترور مونکا ایل کون [و] ولایت بریب اوز قشنکدا سقلاماغنک اوخشاماغای اول اوتوز منک کشی کا انکا یقین ایردیک اول کشی نی ینه لشکر قوشوب باقماغان ولایت لار غه یبارکل هر نه ولایت که بقدورسا انک بولسون تیدی بو سوز خانغه معقول کلیب اول تابون قلغان اوتوز منک کشی کا ینه اون منک قیات یورالدای نی قوشوب قریم کیفه ولایت لاریغه سلغاب یباردی

آغاز داستان شیبان[99] (40b) خان

شیبان خان نک عجایب و غرایب ایشلاری بسیار ترور اول جمله [دین]* بر ایش نی بو مختصر ده یاد قلدوق اول بر ایشی اول ایردی کم قریم ولایتنده قیرق یر*[100] تیکان خارا[101] آفرین برک قلقه بار ترور کم انک برک لیکی و مضبوط[102] لیقی عالم ده مشهور ترور نجه یل*[103] لار قاباب اوروش سلدیلار الا بلمادیلار آخر حکم قلدی کم اخشام دین تنک اتقونجه هر نا کم اواز قلور انی بر برینکا اوروشدورنک ایکی قول لاریغه الیب بر بریکا جاقیشدورا بشلادیلار*[104] و بقر قازان لاری نی و طباق لارنی و جانق لارینی اورا بشلادیلار قول نک ایجندا بو صدایی*[105] و علامتی قوبدی که یر کوك زلزله کا کلدی قولاق لار توندی قلقه خلایق لاری سراسر انک تانک بولوب[106] هر سارو یوکروشورلار نه حال بولدی تیب اول اخشام تانک اتقونجه اول صدا[107] و اول غوغا تنمادی قلقه خلایق لاری هم

[97] صاصین
[98] بور
[99] شینان
[100] قیر یری
[101] خرا
[102] مضوط
[103] ایل
[104] یشلادیلار
[105] سدانی
[106] انک مانک بولوب
[107] سبدا

خذمتی غه یتشدیلار خان بولارغه اوج اورکا سالدی التون بوسغالی آق اورکا نی صاین خان غه سلدی کموش بوسغالی (38b) کوک اوردا نی ایجان کا سلدی بولات بوسغلی بوز اوردا نی شیبان غه سلدی

بسه اوج یر ده شیبان خان اوغلانلاری توختمش خان بلا تمور قتلی*[76] و اوروس خان اوغلانلاری غه فخر قلیب مقتانورلار بز سزلار دین ارتوق ترور بز تیب اول بری اورکا ترور ایتورلار آتامز یوجی خان اولکاندین سونک اولوغ بابامز جنکز خان قشنغه آتالاریمز بردیلار ایرسا ایجان برلا صاین دین سونک بز نک آتامز شیبان خانغه اورکا سلدی سزلار نک آتالارینکز غه تلاکان هم سلمادی تیورلار تقی ایکنجی اول کم اوز بک خان قهر قلیب قیات*[77] استای غه اوروم جشیب بارجا اوغلانلارینی ایل کون لاری بلا قوشون بردی ایرسا اول تقی بز نی عزت و حرمت قلیب قلج جبغان یورت اجغان آر شیبان نک اوغلانلاری دور تیب ایکی باغ لیغ ایلنی*[78] بز کا بردی بری قرلیق بری بیرک ترور اول ایکی ایلنی الیب صاین [خان]# سلغاغان*[79] یورتومز*[80] ده اوز حالمیز غه قویغاندور بز اول جر قوتلی نک کاشانه سیغه تاش کربج قویغانده و تقی اوغلی تنکز بوغا نک ایشکیندا قورلاب اوتاکینه یوکونکانده اول ایش لار ده بز یوق ترور*[81] بز تیورلار اول کم صاین خان اوغلانلاری بردی بک خانده تمام بولدی ایرسا جان بک خان نک آنا سی تای دوالی بیکم ایمدی یوریت تقی خان لیق شیبان خان اوغلان لاری غه تکار تیب منکغتای[82] اوغلی خضر خان نی اونداتیب ایلتب سرای ولایتنده خان قلدی صاین خان اوغلان (39a) لاریندین سونک اول خان تختنده خانلیق بز کا تک کان دور تیرلار بو بر دفع[83] سوز موندا تقریب برلا ایتلدی

ایمدی کلدوک[84] ینه اولقی سوز نک باشیغه جون جنکز خان اوغلانلاری غه

[76] غور قتای [Бартольд]
[77] قات
[78] ایلی
[79] سلغان
[80] یورترورمز
[81] ترو
[82] منکقتای
[83] دفعه
[84] کلدیک

اورکا لار سلیب اول اخشام سوُیْسوُن قونالغه نی حساب سلدی*[85] تنکلا سی کورنوش بردی اون ایکی قوری توزولدی و بک لاری بر یاک برلا اولتوردیلار*[86] جولان جکیب اش طعام بیلکاندین سونک صاین خان قیتب یوکوندی تقی ایدی آتامز اولدی ایرسا اورنیغه همان آتام سن یات یورتغه برا ترور بز تیب خان بولغل تیدیم قبول قلمادی لار نه جهتدین قبول قیلا الماغان لارین بلا المایمن بو عرضیم نی سز کا ایتاین تیب کلدیم تیدی خان ایدی صاین یوسقلی سوز ایتا ترور نا اوجون قبول قلمادنک تیدی ایجان هم یوکونیب ایدی بلی خانم یاشغه اولوغ ایکانم راست و لیکن آتامز انی بسیار سویب ارکا اوستوروب ایردی تا بو جاق غه تکرو من انک محال لارین جککان ایردیم اول منک محالم نی جککان ایماس ایردی خان بولسام بورونقی تك انک محالنی جکا الماغای من آرامز ده کینه و عداوت بولغای سز نک کوزینکز کا یمان کورینور من تیب بو جهتدین قبول قلمای من ایمدی اول اوق خان بولسون من انک خان لقین غه جیدار من تیدی ایرسا خان نک بو سوزلار کا کونکلی بوزولوب اوغلی یوجی خان یادیغه توشوب کوز لاریندین یاش لار اقیتب ایکی سی کا تقی کوب دعاء القیش لار قلدی تقی ایدی تنکلا بک لار برلا کنکاشیب سزلار کا جواب برالی تیدی تنکلا سی بک لار برلا کنکاش قلیب اونک قولی برلا (39b) عدیل دریا سی داغی ولایت لارینی خان یوسوقنا صاین خانغه بردی سول قولی برلان سر دریا سی بوینونداقی ولایت لارنی ایجان کا بردیلار

بسه خان کورنوشندین قیتب خان سلغاغان ولایت لارینغه که کلدیلار صاین خان عیدیل دریا سی بوینونغه کلکاج جریک یراغین قلیب اوروس ولایتی نک شهری مَاسْکَاوْ گَا یوریدی ایتورلار اول یوروشدا شیبان خانغه اوتوز منک کشی قوشوب قراویل یباردی اوزی سونکنجه یورور ایردی اوج کون لوک یر [کا]# ایلکارو یوریور ایردی مَاسْکَاوْ پادشاهی*[87] خبر تبدی یوز الیک منک کشی برلا قرشو جقدی بولار خبر تبدیلار مَاسْکَاوْ پادشاهی قرشو کلا ترور تیب شیبان خان مونک اوستونکا ایلغار من تیب ایدی هر نجه بیک لار منع قلدیلار قبول قلمادی اوج کون لوک یر دین ایلغار[88] سلیب بی خبر یتغان لشکری نک ایجینکا اینیب کلدی اوروس

[85] ساردی
[86] اولتوردیلا
[87] پادشاه
[88] ایلغال

بسه غرض بو مقدمات دین اول ترور کم بو نسخه نی حقیر دین اوقوغان و اشتکان عزیز لار دین و اولوغ کجکدین یاران لار دین التماس اول دور کم بو سوز لار بو حکایت که بو نسخه بتلدی هیج دفتر ده و هیج تواریخ ده یوق ترور بارجا سین ایشتماک برلا بتیب ترور من (37b) مشهور ترور کم قولاق اشتکان سوز نک کوبراکی یلغان تیرلار ناکاه اکر خطاسی یا غلطی واقع بولماس[49] بولسا غلطنی جقاریب خطاسنی راست قلسالار تقی فقیر نی بو ایشم ماءمور معذور بلسالار عند الله ده ضایع بولماغای ان الله لا یضیع اجرا المحسنین

آغاز*[50] داستان*[51] جنکز خان

جون جنکز خان ولایت لار نی فتح*[52] قلدیلار بر طرفی بغداد*[53] و بر طرفی هندوستان و بر طرفی دشت قبجاق دریای عیدیل ایردی بو ولایت لار نی تورت [بش]# اوغلی غه بخشیش[54] قلدی عراق ولایتینی هلاکو خانغه بردی اوکادای[55] خان نی اوز ولایتنده قویدی تولی خان نی اوز قشیندا سقلار ایردی جغتای[56] خان غه بخارا و سمرقند*[57] و خوراسان و حصار ولایت لارینی بردی اما یوجی خان بارجا اوغلان لاریندین*[58] اولوغ راق ایردی عظیم لشکر قوشوب دشت*[59] قبجاق ولایتنغه سلغاب یباردی اطلارینک کا یم بولسون تیب خوارزم*[60] ولایتنی بردی جون یوجی خان دشت قبجاق ولایتنغه که متوجه بولدی اولوغ تاغ که مشهور ترور انکا یتشدیلار بر کون تاغ اراسنده آو اولایی جقیب ایردی بر بولاک مرال[61] کیک

49 بولماش
50 کتاز
51 دواستوان
52 قتح
53 بغداده
54 بخشیق
55 ادکادای
56 جقتای
57 سیمرقند
58 اوغلاریندین
59 دشته
60 خورازم
61 مرار

لار یولوقدی انی قوالاب اطارده اطدین یقلیب بوینی سینیب[62] وفات بولدی

[آغاز داستان] ایجان خان [و] صاین خان

ایجان خان بلا صاین خان مشهور ترور تورالی [خان قیزی]# ضعیفه سندین*[63] توغغان[64] ایردی ینه اون یتی اوغول [بار ایردی]* کم اوزکا ضعیفه لاریندین بولوب ایردی بو ایجان برلا صاین (38a) خان لیق نی بر بری سنکا مراعات*[65] قلدیلار صاین خان کجک ایردی اغا سی ایجان*[66] کا ایدی آتام اورنو غا اغام سن همان آتام ترور سن یاة یوروتغه برا ترور بز خان بولغل تیدی ایجان ایدی منک سندین یاشغه اولوغ ایکانم راست اما آتامز سنی بسیار سویب ارکا اوستوروب ایردی بو جاق غه تکرو سنک ارکا لیکینکنی*[67] و محال لارینک نی جکیب ترور من شاید که خان بولسام بورونقی تک محال لارینک نی جکا الماغای من تقی آرامز ده اوروش عداوت بولغای سن اوق خان بولغل سنک خان لیقنکغه من جیدار من اما منک خان لیقم غه سن جداماس سن*[68] تیدی اول تیکان نه سوز بولور یوساقلی آغام تورغانده منکا نا اوخشار که*[69] خان بولغای من تیب آغا سیغه کوب تکلیف قلدی قبول قلمادی ایرسا ایدی بولماسا بر ایش*[70] قلالی اولوغ بابامز جنکز خان قشیغه برالی من هم سوزومنی عرض قلاین سز هم سوزونکز نی عرض قلنکز هر نه بابامز یرلغی بولسا انک برلا بولالی تیدی ایرسا بو سوز نی معقول کوروب قبول قلدی بر*[71] آنا دین توغ غان ایکی اوغول و اوزکا*[72] آنا دین توغغان[73] اون یتی اوغول بارجا سی قوشولوب*[74] اولوغ خان کورنشیکا بردیلار بولار که خان نک[75]

62 سی نب
63 ضعیفه ستدین
64 توغان
65 مراعت
66 ایجانی
67 ارکالیکنی
68 جداماسن
69 ک
70 براویش
71 بو
72 ازکا
73 توغان
74 خوشولوب
75 خانی

سنک دوستلق[18] نک اوجون يراتديم]# و تقی انک آلينه و اصحاب محصوص لارينه هر برسی هدايت يوليده ستارۀ برهان*[19] و شمع روشن ايردی لار كما قال النبی عليه السلام*[20] اصحابی كالنجوم باينهم اقتدمتم اهتديتم و علی سائر المهاجرين و الانصار و التابعين الابرار و الاخيار*[21] الی يوم القرار

اما بعد حمد خدا*[22] و درود رسول ارباب ذوی العقول (36b) خذمت لاريدا معلوم بولغای كم بو فقير حقير اوتميش حاجی ابن مولانا*[23] محمد دوستی حضرت خاقان مغفور مخدوم يادكار خان خان زاده سی نک خانه زاد*[24] بنده زاده لاری*[25] و قديم خذمت كارلاريندين ترور اول محلده حضرت سلطان الاعظم و الخان المكرم المغفور بعنايت الملك المنان ابو المنصور ايل بارس*[26] بهاتير خان لطيب[27] الله ثراه[28] و جعل الجنة مثواه خذمة لارينده بولور ايرديم جون بولار جنكز خان نبيره[29] لاری ايردی و من بو خاندان نک نعمتی برلا فرورده بولوب ايرديم [تلار ايرديم]# كه كما هوا حقه*[30] بلسام جنكز خان اوغلان لاريدين اول دشت ولايتنده كم خان بولغاندين سونک كم خان بولدی و اندين سونک نا وقت غه تكرو نا ترتيب برلا كم لار خان بولا كلدی لار و بولارنک اراسنده نه تورليک اوروش و نه تورليك ماجرالار كجتی بولار نک برجه سين كما هوا حقه*[31] بلسام تواريخ لار كه كورديم بولارنک بر ازراقی نک آتلاری بتک ليک ايردی و بسه[32] نه ايش برلا و نه كيفيت*[33] برلا خان بولغان لاری مذكور ايرماس ايردی و كوبراكی نک آتلاری هم مذكور ايرماس ايردی جون منكا داعيه اول ايردی كم بولار نک احواليدين كما هوا

[18] دوسلق
[19] برهين؛ پرهيز/برهان [Юдин]
[20] لا كمار قال عه م
[21] الاخياار
[22] حمد و خدا
[23] مولانه
[24] خان ذات
[25] بنده ودالاری
[26] يل بارس
[27] لطاب
[28] ئراه
[29] نبره
[30] كما حق
[31] كما حقه
[32] بس
[33] كيفت

حقه*[34] بلسام بو جهتدين اوترو كم فلان كشی قری سوزنی يخشی بلور تسه لار البته اندين باريب تحقيق و تفتيش قلور ايرديم و عقل ترازوسيغه موازنه[35] قليب معقولين خاطريمدا كيزلاب نا معقولنی بر طرف قلور ايرديم انداغ بولدی كم هر مجلسدا قديم پادشاه لار سوزيندين سوز كجيب موشكلی واقع بولسا بز فقيردين كليب تفتيش و تحقيق قلور بولديلار و من بو صحبت برلا مشهور بولديم

بسه[36] بو اثناده[37] حضرت عالی خان (37a) مملكت پناه ظل الله[38] سرور سلاطين ايمان*[39] و رهبر*[40] معركه ميدان خلافت تختی نک كی[41] خسروی و شجاعت ميدانی نک رستمی اول كه ميدان ايجرا هر*[42] كون رستمی دستان ايرور سر دريا سيجه سلاطين پناه*[43] ايش سلطان ايرور تا جهان بارينجه بولغای اول شريف ذاتی آنک معدن جود و كرم هم منبع*[44] احسان ايرور خلد الله تعالی ملكه[45] و ايد سلطنته[46] غه داعيه بولدی كم يوجی خان اوغلان لاری نک احوالات و كيفيات لاری و ترتيب برلا كم دين سونک كم خان بولغانلاری تا بو وقت غه تكرو نه ايش بلا و نه كيفيت*[47] برلا آرالاريندا نه تورليک اوروش لار نه تورليك ماجرا لار بولغانين بارجا سين معلوم قليب خاطر لارينده سقلار غه رغبت قليب اول جهتدين بو فقير حقير نی جرلاتيب كلتوروب انداغ عنايت شفقت لار قليب بولار احوال كيفيات لاريندين سورار ايردی جون حكايت كوب ايردی كورديلار كم ايشتماک بلا ضبط*[48] قلماق بولماس آخر حكم قلديلار كم منكا بو حكايت لار نی كتابت قليب برينكز تيب جون فقير الار نک بنده زاده لاری ايرديم حكم لارينی اوزكا قلا الماى بی اختيار بو امر خط نی اختيار قلديم المأمور معذور

[34] كما حق
[35] مرازنه
[36] بس
[37] اسناده
[38] آله
[39] امان
[40] هربر
[41] كه
[42] ايجراه بر
[43] شاه
[44] منيع
[45] ملك
[46] سلطان تم
[47] كيفت
[48] ظبط

(36a) جنكيز نامه

بسم الله الرحمن الرحيم حمد نا محدود و ثناء [نا]* معدود اول پادشاه معبود غه كم عالمنى و آدمنى يوقدين بار قلدى و عدمدين وجودغه كلتوردى و آدم عليه السلام نى*[1] برجا مخلوقاتدين عزيز و مكرم قليب مجهد ملائك و خليفهٔ روى زمين قلدى انداغ كه كلام قديمده*[2] يريلقادى اذ قال ربك للملائكة[3] انى جاعل فى الارض خليفة[4] كه[5] آية[6] تيب بارجا عالمنى عدمدين بار قلغان بير و بار سن بارجا نک[7] عيبنى يبقان صانع [و]* ستار سن تقى آدم اوغلان لاريندين بعضى سنى انبياء و مرسل لار قلدى تا انک بيرلكنى و بارليغى نى خلايق غه بلدورب احكامنى يوروتكاى*[8] و ينه بر كروهنى پادشاه لار و حاكم لار قلدى تا راست لق بلا خلايق لار[9] اراسنده حكم قليب ميل مداهنه*[10] قلماغايلار و بربرينكا ظلم زياده لق قلماق غه قويماغايلار قال الله تعالى انا خعلناك خليفة فى الارض فاحكم بين الناس بالحق و لا تتبع الحوى فيضلك عن[11] سبيل[12] الله آية [تيب]*

و صلوات زاكيات و تسليمات*[13] طاهرات اول مقصود[14] و محبوب لم يزل محمد رسول الله صلى الله عليه و سلم اوزرا بولسون كم عالم و آدم نى يراتماقدين مقصود انک ذاتى شريف و عنصر*[15] لطيفى[16] ايردى كما قال الله تعالى لو لاک لما خلقت الافلاک [تيبان سوزين ايكى جهان جراغى حبيب[17] سن تيدى بو دنيا هم اول دنيا

---

1 آدم غه علم نى
2 قديمد
3 ملائكه
4 خليفه
5 ک
6 آيه
7 بارجنک
8 يوروتكان
9 خلايق غه؛ خلايق لار غه [Юдин]
10 مذاهنه
11 من
12 بسبيل [Юдин]
13 تسليما
14 مقصو د انه لى ؟
15 عفصر
16 لطفى؛ لطيف [Юдин]
17 جيب [Юдин]

『チンギズ・ナーマ（*Čingīz-nāma*）』

ウテミシュ・ハージー（Ötämiš Ḥājī）著

校訂テクスト（Critical Text）

جنکیز نامه

اوتمیش حاجی

مقدمه، ترجمه، علمی تنقیدی متن

تاکوشی کاواگوچی، هیرویوکی ناگامینی

نظارت: موتسومی سوگاهارا

۲۰۰۸

اسلام مدنيتى تتقيقات مجموعه سى ٩۴
اورته شرق و اسلام تتقيقات مجموعه سى ١٠

جنكيز نامه

اوتميش حاجى

مقدمه، ترجمه، علمى تنقيدى متن

تاكوشى كاواگوچى، هيرويوكى ناگامينى
نظارت: موتسومى سوگاهارا

آسيا و افريقا تيل – مدنيتى تتقيقات اينستيتوتى
توكيو چيت تيل لار اونيويرسيتيتى